

トコロチャシ跡遺跡群 (史跡常呂遺跡)

整備に伴う発掘調査報告書

東京大学大学院人文社会系研究科
考古学研究室・常呂実習施設編

2015

東京大学大学院人文社会系研究科
北見市教育委員会

トコロチャシ跡遺跡群 (史跡常呂遺跡)

整備に伴う発掘調査報告書

東京大学大学院人文社会系研究科
考古学研究室・常呂実習施設編

2015

東京大学大学院人文社会系研究科
北見市教育委員会

執 筆 者

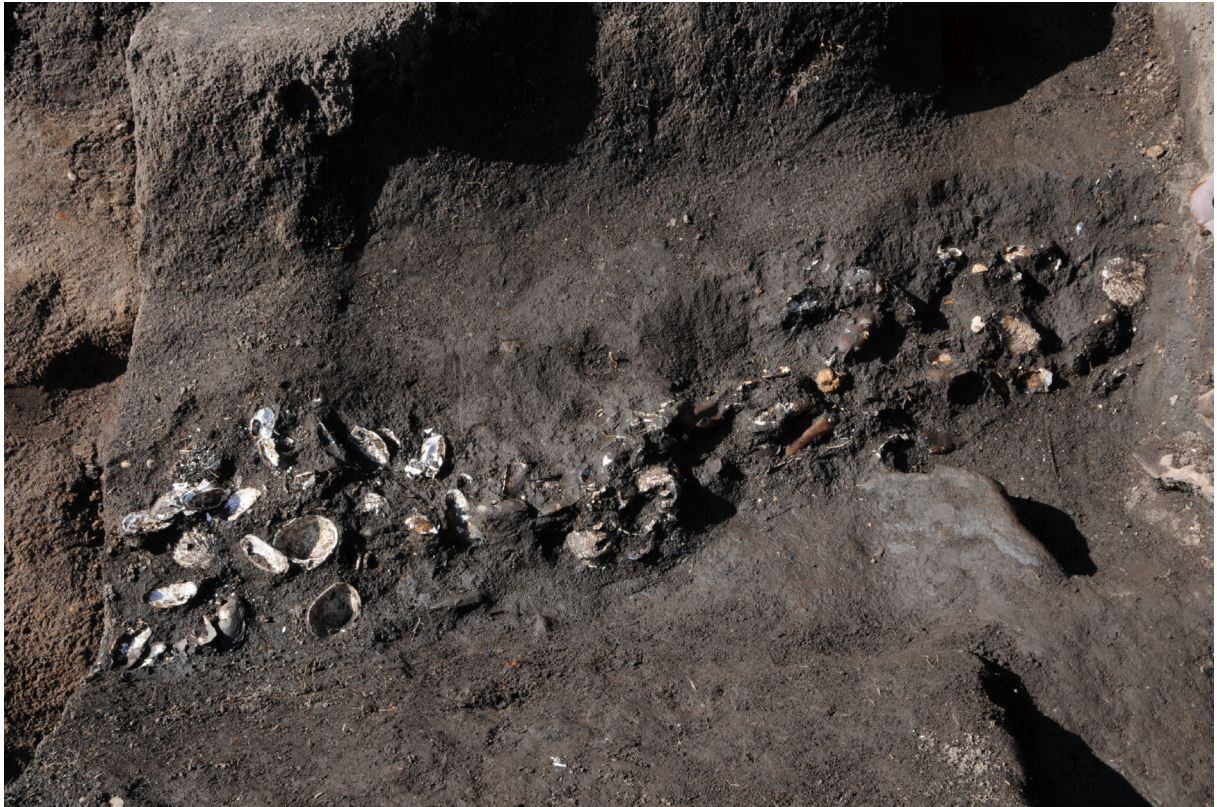
宇田川 洋	大澤 正己	熊木 俊朗
笹田 朋孝	佐藤 孝雄	佐藤 宣秀
高橋 健	中村 雄紀	夏木 大吾
福田 正宏	山田 哲	吉永亜紀子



1 L (50) -95 区周辺 石刃鏃文化の遺物集中 (北側から撮影)



2 XXIV (24) -61 区周辺 オホーツク 1 号墓 (西側から撮影)



1 トコロチャシ跡 壕内埋土火山灰下 貝集中 (XI (11) -5 区周辺、南東側から撮影)



2 トコロチャシ跡 新壕および旧壕完掘時 (2008 年度調査区、南西側から撮影)

序

北見市は、北海道東部オホーツク地域最大の河川としてオホーツク海にそそぐ常呂川の流域に位置し、地域の中核都市であると共に、東西 110km におよぶ広大な範囲は大雪山系からオホーツク海やサロマ湖にいたる多様な自然環境に恵まれています。この常呂川流域は、2 万年前を超える古さの旧石器時代から数百年前のアイヌ文化の時代まで、北海道の全ての先史時代の遺跡が豊富に存在する、まさに遺跡の宝庫といえます。それは、厳しくも豊かな自然の中で生き抜いた多くの先人たちの歴史がこの地域で悠久の昔から続いてきたことを示しています。特に海岸近くの常呂地区には大規模な遺跡が多く、保存状態の良好な遺跡およそ 128 万 m² が国指定史跡「常呂遺跡」として保護されております。

「常呂遺跡」の一部として現在の常呂市街地を望む小高い丘の上に位置するトコロチャシ跡遺跡群も、アイヌ文化期のチャシ（砦）をはじめとする様々な時代の遺構や遺物が混在する遺跡です。その重要性から、昭和 35 年の東京大学による学術発掘調査の開始以降、度重なる調査で考古学的な価値が明らかにされ、平成 14 年には国指定史跡に追加されるにいたりました。その後、史跡整備を目指した発掘調査が東京大学の御協力を得ながら旧常呂町及び北見市によって平成 21 年まで実施されました。遺跡をとりまく状況や調査主体に変化はありましたが、これまでのトコロチャシ跡遺跡群の調査成果は、東京大学と北見市・旧常呂町の長年にわたる協力関係の賜物といえます。

この度は、平成 11～13 年度に実施されたトコロチャシ跡遺跡群全体の試掘調査、平成 18～21 年度に実施されたオホーツク文化期集落周辺とアイヌ文化期チャシ周辺の試掘・トレンチ調査の報告書を東京大学と北見市で共同刊行することとなりました。これらの調査では、縄文時代早期石刃鏃文化（約 8 千～7 千年前）の遺物、縄文時代前・中期（約 6 千～4 千年前）の遺構、オホーツク文化期（約 1 千 2 百年前）の墓、アイヌ文化期（約 3 百年前）の遺構など、多くの資料が得られました。なかでも石刃鏃文化とオホーツク文化は北方・大陸との関係の強い外来の文化とされ、遙か昔に様々な文化を持った人々がこの地を行き交っていたことに思いが馳せられます。

今後こうした調査成果が、郷土に暮らした先人たちの歴史や文化に学ぶ資料となると共に史跡の整備などの様々なかたちで活用され、常呂遺跡が地域にかけがえのない宝として磨き上げられてゆくことを念願します。ここに、一連の調査において東京大学、文化庁、北海道教育委員会、土地所有者であった本田一夫氏をはじめ関係各位から多くの御指導と御協力を賜りましたことに深甚なる謝意を表しまして、序といたします。

平成 27 年 3 月

北見市教育委員会

教育長 佐藤 宣秀

例言

- 1) 本書は、トコロチャシ跡遺跡群（史跡常呂遺跡）の整備を目的として、1999（平成11）年度～2009（平成21）年度にかけて東京大学大学院人文社会系研究科および同文学部の考古学研究室・附属北海文化研究常呂実習施設と北見市（旧常呂町）教育委員会が共同で実施した、同遺跡群の詳細分布調査及び発掘調査の報告書である。
- 2) 1999年度以降、史跡整備を目的としてトコロチャシ跡遺跡群で実施された調査は以下のとおりである。
 - 1999年度～2001年度 トコロチャシ跡遺跡群全体の内容把握のための詳細分布調査
 - 2003年度～2007年度 オホーツク文化期の集落構造解明のための調査
 - 2008年度～2009年度 アイヌ文化期のチャシ跡復元のための調査本書では上記の調査で確認された遺構と、遺構に伴う遺物について報告する。（2003年度～2005年度にかけて実施されたオホーツク10号竪穴についてはすでに報告済みであるため、本書には掲載していない。また、遺構に伴う遺物であっても、土器の胴部破片や石器剥片などの一部については記載を省略している。）

遺構に伴わない出土遺物については、後日あらためて報告書を刊行する予定である。
- 3) 上記の調査と関連して、旧常呂町教育委員会による分布調査が1998年度にトコロチャシ跡遺跡オホーツク地点にて実施され、オホーツク9号竪穴の床面等が確認されている。この調査については、9号竪穴の報告書がすでに刊行済みであるため、本報告書では試掘坑の位置と出土遺物の概要のみを掲載し、詳細は省略した。
- 4) トコロチャシ跡遺跡群の調査研究にあたっては、以下の助成を受けた。
 - 1999年度～2001年度 科学研究費補助金（地域連携推進研究費（2））『常呂遺跡』の史跡整備に関する調査研究」（課題番号 11791006 研究代表者：宇田川洋）
 - 2007年度～2010年度 科学研究費補助金基盤研究（B）「北東アジア史からみた中世アイヌ文化形成過程の考古学的研究」（課題番号 19320124 研究代表者：熊木俊朗）
- 5) トコロチャシ跡遺跡群全体の内容把握のための詳細分布調査に関しては、すでに以下の概要報告が刊行されている。
 - 宇田川洋・熊木俊朗編 2002 『トコロチャシ跡遺跡群の調査』東京大学大学院人文社会系研究科・常呂町教育委員会
 - 宇田川洋・熊木俊朗編 2003 『居住形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究』東京大学常呂実習施設上記の概要報告と本報告書では内容の一部に重複する点があるが、本書の内容が優先する。
- 6) 遺構・遺物の図化・写真は以下の者が担当した。
 - 遺構実測図：熊木俊朗

土器実測図：山根美紀・熊木俊朗

石器実測図：山田 哲・中村雄紀・山田香織・夏木大吾・笹田朋孝

骨角器実測図：高橋 健

金属器実測図：笹田朋孝

遺構写真：熊木俊朗・宇田川洋

遺物写真：熊木俊朗・笹田朋孝

- 7) 石器石材の鑑定については合地信生氏（斜里町立知床博物館）によるご助言をいただいた。
- 8) 第一章～第五章の執筆は調査参加者の所見に基づき、報文末尾に氏名を記した者がおこなった。第六章の執筆は各論文の著者による。内容の責任はそれぞれの執筆者が負う。
- 9) 本書の編集は熊木俊朗がおこなった。

調査参加者

1999年～2001年：宇田川洋・熊木俊朗・高橋 健・桑原岳仁・山田 哲・塚本浩司・笹田朋孝・岡部
牧人・根岸 洋・佐藤昌俊・上奈穂美・宇田川拓・武田 修・佐々木覚・渡部高士・橋本信
義・原田聖吾・藤田伊玲・氷室福二・高橋道直・宇野彰一・工藤孝之・山根利智・豊原熙
司・福嶋 忍・松本勝浩・橋場信幸・多田篤史

2006年：熊木俊朗・福田正宏・今村啓爾・大貫静夫・佐藤宏之・高橋 健・根岸 洋・榊田朋広・森
岬子・田中眞司・鈴木 舞・古西里美・役重みゆき・高野耕作・大澤正吾・西河大貴・大島
義史・山崎智寛・武田 修・山田 哲・宇田川洋

2007年：熊木俊朗・高橋 健・大貫静夫・佐藤宏之・榊田朋広・有松 唯・石丸あゆみ・役重みゆき・
久富誠司・香西弘文・中村瑠里・林 正之・野村高広・亀井拓馬・高瀬光永・武田 修・山
田 哲・宇田川洋

2008年：熊木俊朗・高橋 健・今村啓爾・大貫静夫・佐藤宏之・榊田朋広・大澤正吾・役重みゆき・
古西里美・久富誠司・中村瑠里・名雪顕久・守屋 亮・津田祐也・山岸陽助・渡辺 綾・庄
田慎矢・安 昭炫・覚張隆史・友野雄己・酒井宏美・白杵 勲・村田一貴・西村昂洋・高瀬
光永・大給友樹・武田 修・山田 哲・宇田川洋

2009年：熊木俊朗・山田香織・今村啓爾・大貫静夫・佐藤宏之・根岸 洋・大澤正吾・堤絵莉子・夏
木大吾・野村高広・林 正之・遠藤哲廣・大崎和陽・多田彰吾・山本 堯・小玉悠平・白杵
勲・村田一貴・田島加奈子・高瀬光永・武田 修・山田 哲・高橋 健・宇田川洋

トコロチャシ跡遺跡群（史跡常呂遺跡） 整備に伴う発掘調査報告書

目次

巻頭カラー写真（Front）

序

例言

第一章 調査の経緯	1
第一節 史跡常呂遺跡の整備事業	1
1 史跡常呂遺跡整備事業の概要	1
2 トコロチャシ跡遺跡群（史跡常呂遺跡）の概要と調査史	2
第二節 調査目的と調査概要	6
1 調査目的	6
2 調査区と基本層序	6
3 各年度の調査概要	7
第二章 トコロチャシ跡遺跡群の全体試掘調査（1999年度－2001年度）	10
第一節 調査の経過	10
第二節 試掘坑の遺構各説	13
1 L（50）－95区周辺 石刃鏃文化の遺物集中	13
2 XCV（95）－55区 縄文早期竪穴	31
3 XXV（25）－24区周辺 縄文前期～中期集石	32
4 LXXV（75）－90区 縄文前期～中期遺物包含層	38
5 LXXX（80）－95区 縄文前期～中期（？）集石	38
6 C（100）－60区周辺 縄文中期竪穴	40
7 XVII（17）－51区 オホーツク11号竪穴	43
8 XXIV（24）－51区 オホーツク12号竪穴	44
9 XX（20）－23区 オホーツク竪穴（？）	46
10 時期不明のピット	47

第三節	オホーツク墓周辺トレンチの遺構各説	50
1	各トレンチの土層堆積および56ライン上で確認された沢状の落ち込みについて	50
2	XXIII (23) ライントレンチ東側の遺構	53
3	XXIII (23) -58~59区 オホーツク2号墓および周辺の遺構	59
4	XXV (25) ライントレンチの遺構	63
5	XXIV (24) -61区周辺 オホーツク1号墓	67
6	XXVII (27) ライントレンチの遺構	68
第三章	トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点A~Hトレンチの調査(2006年度-2007年度)	70
第一節	調査の経過	70
1	調査に至る経緯と調査目的	70
2	2006年度調査の経過	70
3	2007年度調査の経過	74
第二節	A~Hトレンチの土層堆積	77
1	基本層序	77
2	各トレンチの土層堆積	77
第三節	Cトレンチの遺構各説	84
1	XXX (30) -37~38区 焼土1	84
2	XXX (30) -35区 焼土2	84
3	XXX (30) -38区 ピット5	86
4	XXX (30) -38区 ピット6	86
5	XXX (30) -39~43区 縄文前期~中期竪穴	87
6	XXX (30) -42区 ピット4	90
7	XXX (30) -40区 ピット7	90
8	その他の遺構	93
第四節	Dトレンチの遺構各説	94
1	XXXII (32) -35~36区 縄文中期遺物集中1	94
2	XXXIII (33) -40区 縄文中期遺物集中2	98
3	XXXII (32) -41区 ピット1	100
4	XXXII (32) -41区 ピット2	100
5	XXXII (32) -43区 ピット3	100
6	その他の遺構	101
第五節	Eトレンチの遺構各説	102
1	XXVII (27) -34区 集石1	102

2	XXVII (27) -38~39区 集石4	102
3	その他の遺構	104
第六節	F トレンチの遺構各説	105
1	XXV (25) -34~35区 集石2	105
2	XXV (25) -36区 集石3	105
3	その他の遺構	108
第七節	G トレンチの遺構各説	109
1	XXII (22) -17~20区 オホーツク13号竪穴	109
2	XXII (22) -22~23区 集石6	111
3	XXII (22) -25区 集石5	113
4	XXII (22) -25~26区 ピット1	114
5	その他の遺構	114
第八節	H トレンチの遺構各説	116
1	H-3~4区 集石7	116
2	H-1~2区 骨集中および土器集中	116
3	その他の遺構	123
第四章	トコロチャシ跡遺跡チャシ壕関連の調査(2008年度-2009年度)	125
第一節	調査の経過	125
1	調査に至る経緯と調査目的	125
2	2008年度調査の経過	125
3	2009年度調査の経過	129
第二節	チャシ壕および関連する調査区の土層堆積	131
1	基本層序	131
2	チャシ壕内の土層堆積	131
第三節	アイヌ文化期の遺構各説	132
1	壕内埋土火山灰下 貝集中	132
2	旧壕埋土 貝集中	140
3	チャシ新壕	142
4	チャシ旧壕	144
5	チャシ壕の掘りあげ土	145
第四節	オホーツク文化期の遺構各説	147
1	旧Sトレンチ内6号竪穴(再発掘)	147
2	XII (12) -7区 壕の北側壁面 土器集中	148

3	XII (12) -3区周辺 魚骨集中	152
第五節	続縄文文化期の遺構各説	153
1	XVI (16)~XVIII (18) -5区トレンチ内 XVI-5区のピット	153
第五章	トコロチャシ跡遺跡群における遺構と遺物について	156
第一節	本調査で確認された遺構に関する考察	156
1	遺跡群全体における遺構と遺物の分布	156
2	アイヌ文化期の遺構	157
3	オホーツク文化期の遺構	159
4	続縄文~縄文文化期の遺構	161
第二節	出土遺物一覧	165
Table 6	試掘坑出土遺物一覧表 (1998年度 常呂町教育委員会調査分)	165
Table 7	試掘坑出土遺物一覧表 (1999~2001年度調査分)	168
Table 8-1~4	出土石器一覧表	172
Table 9	出土骨角器一覧表	174
第六章	考察と分析	175
第一節	トコロチャシ跡遺跡群出土の石刃鍬石器群について	175
第二節	トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点出土鉄器の金属学的調査	187
第三節	トコロチャシ跡遺跡の動物遺体	192
	引用文献 (第一章~第五章掲載分)	225

写真図版 (PLATES)

報告書抄録

付図 App. Fig.

第一章 調査の経緯

第一節 史跡常呂遺跡の整備事業

1 史跡常呂遺跡整備事業の概要

北海道北東部オホーツク海沿岸の北見市常呂町内には、およそ 128 万 m² の面積を有する国指定史跡常呂遺跡を中心とした多数の遺跡が所在しており、東京大学考古学研究室・同北海文化研究常呂実習施設と常呂町（現北見市）教育委員会による 50 年を超える調査研究の蓄積の結果、これらの遺跡は、旧石器時代、縄文時代、続縄文時代、擦文時代、オホーツク文化期、アイヌ文化期にわたるほぼ全ての時代を網羅した国内有数の複合遺跡群を形成していることが明らかにされている。

こうした貴重な遺跡およびそれから得られる資料の保存と活用を目指して、史跡公園「ところ遺跡の森」(1994 [平成 6] 年)、ガイダンス施設「ところ遺跡の館」(1993 [平成 5] 年)、整理・研究・保管・体験学習施設「ところ埋蔵文化財センター」(1998 [平成 10] 年) が、史跡常呂遺跡の西端を占める栄浦地区に設けられている。

上記史跡公園では、園内に分布する縄文時代・続縄文時代・擦文時代の住居跡・集落跡の復元と植生（冷温帯落葉広葉樹林）の保護・管理がなされているが、オホーツク文化（5～9 世紀）とアイヌ文化（14～19 世紀）に関する屋外展示施設を有していない。そこで、オホーツク文化期の集落やアイヌ文化期のチャシ等の当該期の遺構・遺物が豊富に認められるトコロチャシ跡遺跡群を新たに整備する計画が構想されてきた。まずは 1991 [平成 3] 年度から 1997 [平成 9] 年度にかけて東京大学が実施したトコロチャシ跡遺跡の調査（東大考古学研究室・常呂実習施設編 2001）の際に、町所有地である同遺跡を遺跡公園のような形で整備しつつ活用をはかるという構想が示された。この構想の実現に向けて東大と町教育委員会が協議を重ね、1998 [平成 10] 年には史跡整備専門委員会議が組織され、具体的な検討が開始された。またこの構想に基づいた科学研究費補助金（地域連携推進研究費（2）『常呂遺跡』の史跡整備に関する調査研究）が 1999 [平成 11] 年度～2001 [平成 13] 年度にかけて採択され、遺跡群全体の試掘調査などが実施された（宇田川・熊木編 2002）。これらの調査研究に基づく検討の結果、トコロチャシ跡遺跡及び同オホーツク地点・トコロチャシ南尾根遺跡を含むトコロチャシ跡遺跡群を史跡常呂遺跡に追加指定する方向性が示され、文化庁との協議を経て、2002 [平成 14] 年にはトコロチャシ跡遺跡群が史跡常呂遺跡の追加指定地区となった。

史跡常呂遺跡の整備では、実際の遺跡および屋外展示施設・ガイダンス施設を巡る中で、様々な立地環境のもとで暮らしてきた各時代の人々の生活の景観を具体的に実感しながら北海道の歴史を通時的に学ぶことができるあり方が目指されている。そのような史跡整備の基本構想・基本計画策定の基礎とな

る資料については、トコロチャシ跡遺跡群の追加指定以前に東京大学および常呂町教育委員会が本遺跡群にて実施した調査の成果を参照するとともに、より詳細なデータを収集するために、2003 [平成 15] 年度以降も小規模な発掘調査が継続されてきた。オホーツク文化竪穴住居については、7号・8号・10号住居を露出展示し、9号住居を復元する計画であるが、既に史跡追加指定以前に東京大学と常呂町教育委員会によって発掘調査がなされていた7・8・9号住居と、追加指定後新たに発掘調査が実施された10号住居によって必要な資料・データが得られている（東大考古学研究室・常呂実習施設編 2012）。さらに、オホーツク文化集落の周辺空間における遺構の分布を確認し、あわせてオホーツク文化の社会や精神の理解に欠かせない墓および墓域を探索するための調査や、アイヌ文化期のチャシ跡の未発掘部分の様相を正確に把握し、チャシ跡の全容を復元するための調査も追加指定後に実施されている。

本書では、史跡への追加指定以前に前述の科学研究費補助金等によって実施された遺跡群全体の分布調査についての正式報告と、史跡追加指定以後に実施された調査のうち、すでに報告済みの10号竪穴を除く分布調査やトレンチ調査についての成果報告をおこなう。本書によって、トコロチャシ跡遺跡群の史跡整備と関連して実施された調査のデータはその大半が公表されたことになる¹⁾。

(山田 哲・宇田川洋・熊木俊朗)

2 トコロチャシ跡遺跡群（史跡常呂遺跡）の概要と調査史

トコロチャシ跡遺跡群（史跡常呂遺跡）は、大雪山系に源をもちオホーツク海に注ぐ常呂川の河口付近の右岸段丘上に位置している遺跡である（Fig. 1、付図 App. Fig.）。地番は、北見市常呂町字常呂 106番 2、106番 3、108番 1～3、109番 1、109番 2、109番 4、110番、111番 1、111番 2、112番 1、112番 3、113番、116番 1、116番 2、117番 1、118番 1であり、通称「弁天」地区の一部に相当し、現在はそのほとんどが北見市の所有地となっている。当遺跡が立地する段丘は標高 18m～30m ほどであり、下位の常呂川付近との比高は約 13m ほどである。この遺跡群は段丘平坦面のほぼ全面に広がっているが、特に段丘の周縁には遺構密度の高い地点が 3箇所あり、それらは北から順にトコロチャシ跡遺跡、トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点、トコロチャシ南尾根遺跡と呼称されている。各地点の概要は以下のとおりである。

トコロチャシ跡遺跡（付図 App. Fig.）は、古くからアイヌの砦跡として知られており、斜里アイヌと戦った伝承も残されている。すなわち、考古学上のアイヌ文化期に属する遺跡といえる。発掘調査は東京大学文学部考古学研究室によって行われており（駒井編 1964、東大考古学研究室・常呂実習施設編 2001）、そこではアイヌ文化期の遺構・遺物に加え、縄文文化早期（微量）、縄文前期・中期（やや多量）、縄文後期・晩期（微量）、続縄文文化期（多量）、擦文文化期（微量）、オホーツク文化期（多量）の遺物も出土している。故に、本遺跡は縄文早期からアイヌ文化期に至るまで、粗密の差はあれ、継続的に永年にわたって利用されていたと理解できる。

さらにこの遺跡を特徴づけるものは、オホーツク文化の竪穴住居跡群の存在である。本遺跡の L 字

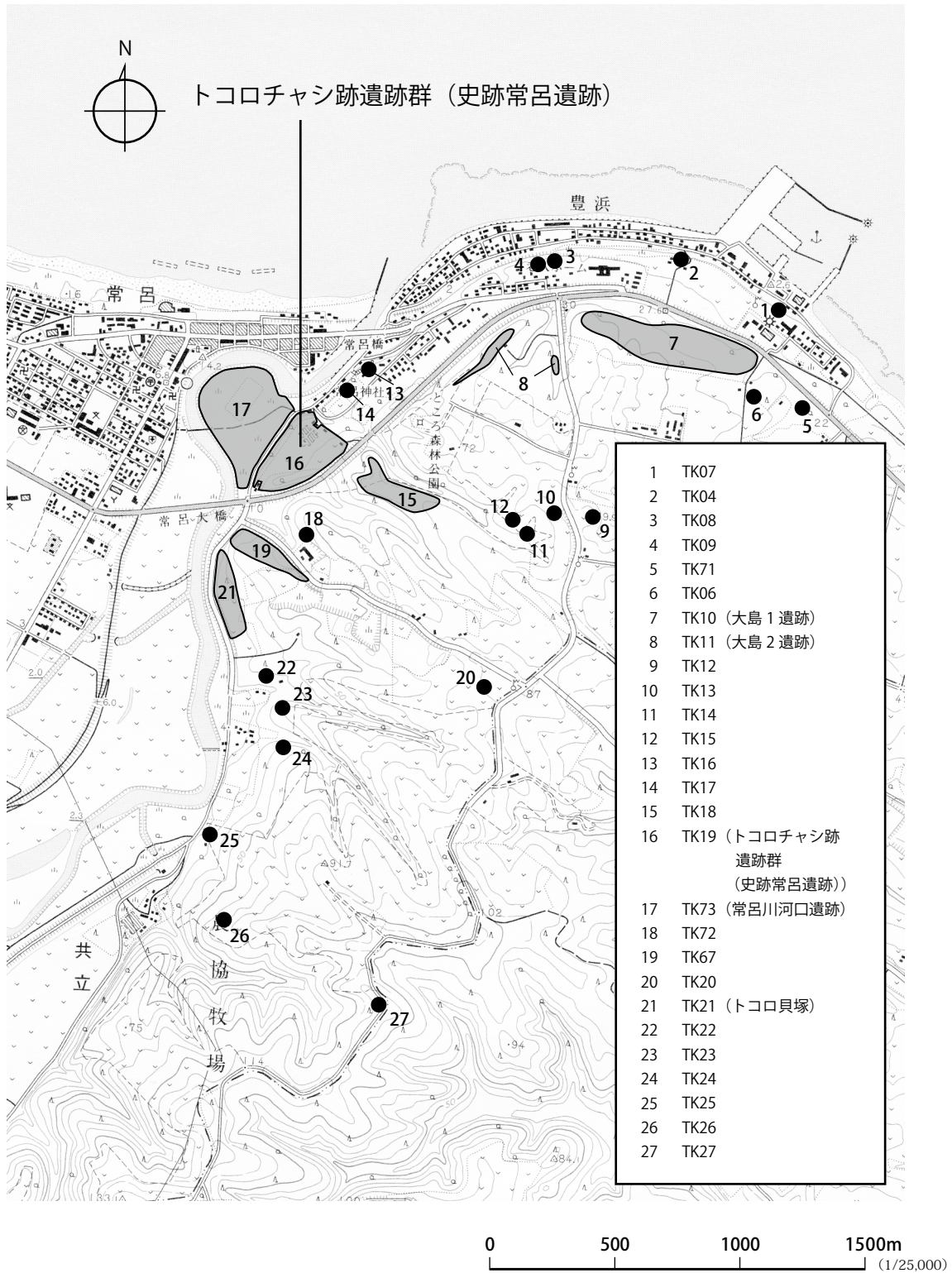


Fig. 1 トコロチャシ跡遺跡群 (史跡常呂遺跡) の位置

形に掘られたチャシの壕の内部、すなわちチャシの主体部内には2軒のオホーツク文化の竪穴住居跡（1号および2号竪穴）が窪みとして残存していた。それらは1960年度および1963年度に発掘調査されており、すでに『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下巻』（駒井編1964）の中で報告されている。さらに、その際の調査ではチャシの一部もトレンチ方式によって発掘されており、トレンチ内で検出されたオホーツク文化の竪穴（後述の4号と6号に相当）との新旧関係も把握されている。ちなみに、1960年度は1号竪穴とV'、V、U、IX、T、Sの各トレンチを、1963年度は2号竪穴およびその周辺とVIIトレンチを調査している。

1991年度～1997年度にはチャシの壕と壕に囲まれたチャシ主体部の調査を行い、隣接土地所有者の建物があって調査できなかった東北部を除き、チャシ跡をほぼ完掘した。なお、その調査時にオホーツク文化期と考えられる竪穴住居跡の一部が複数検出されており、それらは3号～6号竪穴と命名された。この調査結果については『トコロチャシ跡遺跡』（東大考古学研究室・常呂実習施設編2001）に報告されている。

トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点は、チャシ跡の南西側に隣接する、オホーツク文化の竪穴住居跡とみられる大型の窪み群が残されていた一帯を指す（付図 App. Fig.）。1960年度および1963年度の地形測量時には、ここに合計9基の窪みが確認されていたようだが（駒井編1964：Fig.5）、その後、窪みの多くは耕作等による削平や盛土によって平坦化され、1998年度の時点で付図 App. Fig. の7号と8号の2基の窪みのみが目視で確認できる状態であった。本地点では1998年度～2005年度にかけてオホーツク文化の竪穴住居跡4軒の発掘が実施され、それらは7号～10号竪穴と命名された。この調査結果については、『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』（東大考古学研究室・常呂実習施設編2012）に報告されている。また本地点に関しては、1960年代からすでに付近一帯で発見された遺物が報告されており（畠山1969、藤本・宇田川1989、右代1990、宇田川・熊本編2003）、その中には完形のオホーツク土器や鉄銚、蕨手刀が含まれていたことから、今回の分布調査を開始する前からオホーツク文化期の墓が存在する可能性が指摘されていた。

トコロチャシ南尾根遺跡は段丘の南斜面側に位置しており、1960年度には東京大学によって32軒の竪穴の窪みが確認されていた（駒井編1964）。その後、1964年度には東京大学文学部考古学研究室による学術調査、1974年度・1975年度には常呂町による国道238号線バイパス建設のための緊急調査、1985年度には常呂町教育委員会による住宅建設工事に伴う緊急調査が行われ²⁾、縄文時代早期から擦文時代にわたる19軒の竪穴住居跡とピット群等が調査されている。その成果は『常呂』（東大考古学研究室編1972）、『トコロチャシ南尾根遺跡』（藤本編1976）、『トコロチャシ南尾根遺跡—1985年度—』（武田編1986）の各報告書に記載されている。

（熊木俊朗）

註

- 1) トコロチャシ跡遺跡群で検出された遺構とそれに伴う遺物については、本報告によってその全てが公表されたことになる。遺構に伴わない出土遺物については例言にも示したとおり、オホーツク7・8・9・10号

竪穴の埋土や、トレンチ調査のグリッド一括遺物等、多くが未公表であるが、これについても今後、随時報告書を刊行する予定である。

- 2) トコロチャシ南尾根遺跡もその大半が2002年に史跡に追加指定されているが、1985年度の調査区周辺は史跡の範囲から除外されている。

第二節 調査目的と調査概要

1 調査目的

本調査は、トコロチャシ跡遺跡群の史跡整備と連携し、その準備段階の総合的な調査と研究を実施して整備計画に反映させ、計画を推進してゆくことを目的としている。具体的には以下の3次にわたる調査が企画立案され、実施された。

(1) 第一次調査：トコロチャシ跡遺跡群全体の内容把握のための詳細分布調査（1999～2001年度）

この時点までに本遺跡群で調査がおこなわれていた地点は、トコロチャシ跡遺跡やトコロチャシ南尾根遺跡など、地表に窪み等の遺構の痕跡が集中的に残る地点であり、それらの地点は全て遺跡群が立地する段丘の縁の部分に位置している。しかし、これら遺構の集中する各地点以外ではそれまで調査が実施されたことはなかったため、各地点の遺構の掘りや、遺跡群全体における遺構や遺物の分布状況については詳細が不明であった。このため、遺跡群全体の時期や遺構・遺物の分布を明らかにすることを目的として、遺跡群が立地する段丘の全面を対象としてテストピットないしトレンチ調査による詳細分布調査を実施した。また、これにあわせて航空撮影による遺跡群全体の地形測量も実施している。

(2) 第二次調査：オホーツク文化期の集落構造解明のための調査（2006～2007年度）

第一次調査ではトコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の西側でオホーツク文化期の墓が2基検出され、また1998年度～2005年度のオホーツク地点の調査ではオホーツク文化期の竪穴住居跡4軒が調査された。これらのことから、オホーツク地点には墓域を伴うオホーツク文化期の集落が存在していたことが明らかになったが、墓域の位置や規模がどのようなものであったか、また竪穴住居跡の数と比べて墓の検出数が少ないなど、集落の構造を復元する上での疑問点も浮上してきた。このため、オホーツク地点の竪穴群の周辺部、特に調査が手薄であった南東部を中心に調査トレンチを設定し、オホーツク文化期の墓域や他の遺構の存否を確認する調査を実施した。

(3) 第三次調査：アイヌ文化期のチャシ復元のための調査（2008～2009年度）

アイヌ文化期のチャシについては、前述のように主要な部分が既に史跡指定以前に発掘調査されていたが、壕の一部分（北東側端部付近）とその周辺の状況が旧土地所有者の建物等のため不明で、特に壕は主に旧土地所有者の廃棄物と埋土によって不自然に途切れた状態となっていた。こうしたことから、チャシ（壕）の形状と景観の適切な復元整備を進めるとともに、あわせてその周辺区域の状況を把握することを目的として、壕の北東側端部を対象とした調査を実施した。（熊木俊朗・山田 哲・宇田川洋）

2 調査区と基本層序

トコロチャシ跡遺跡群の発掘調査区を設定するにあたっては、過去のトコロチャシ跡遺跡の調査で用

いられた調査グリッドを踏襲し、これを拡張して用いることとした。グリッドラインの名称は、東側から西側に 0～130 (0 より東のグリッドラインは東に向かって (-1) → (-30))、北側から南側には I～CXX (I より北のグリッドラインは北に向かって A → F) というように与えられている (付図 App. Fig.)。調査グリッドの名称は、各グリッドの北東隅のグリッドライン交点のそれを採用した。実際の測量の際に基準としたのは、1991 年度に埋設された 3 箇所のコンクリート杭 X (10) -6、X-18、X-31 と、1998 年度に埋設された X-52 であり、これらの杭を基準としてさらに 1999 年には XXIX (29) -76、LII (52) - (-9)、LX (60) -123、CI (101) - (-9)、CI (101) -76 のコンクリート杭を設定し、調査をすすめた。以上のグリッドの国土座標系 (第 13 系) の値については藤本強が 1991 年度に測量しており、それによると平面直角座標系の値は X-6 : X (N-S) = 13015.09 ・ Y (E-W) = -13438.51、X-31 : X = 12994.45 ・ Y = -13484.05 で、グリッドの方位は、真北から東に 65°36'49" 振れた方向がグリッドのローマ数字のライン (すなわち、付図 App. Fig. では左右方向のグリッドライン) になると確認されている (藤本 2001)。これを日本測地系 2000 (世界測地系) に変換した値は、X-6 が N44°07'10.02153" ・ E144°04'41.20220"、X-31 が N44°07'09.34968" ・ E144°04'39.15580" となる (Web 版 TKY2JGD Ver.1.3.80 を使用)。

トコロチャシ跡遺跡群全体の基本層序については、1999 年度～2001 年度にかけて行われた遺跡群全体の分布調査の際に、以下のような堆積状況が確認されている (宇田川・熊木編 2002 : 35)。

I 層：表土もしくは耕作土。耕作土の場合、II 層以下の土層がブロック状や粒状に混入しているところもある。

II 層：暗褐色土。I 層と III 層の漸移層。しまりは III 層よりも弱い。

III 層：茶褐色粘土。いわゆるローム層。II 層との層界は明瞭ではない。しまりが強い。

IV 層：黄褐色粘土。いわゆるローム層。目立った (粗粒の) スコリアやパミスは含まれない。III 層同様にしまりは強いが、粘性はやや弱い。 (熊木俊朗・宇田川洋)

3 各年度の調査概要

各年度の調査概要は以下のとおりである。調査参加者については巻頭の例言に示した。調査の詳細な経過については、第二章・第三章・第四章にそれぞれ示したのでそちらを参照されたい。

(1) 第一次調査：トコロチャシ跡遺跡群全体の内容把握のための詳細分布調査

1999 年度

調査期間：1999 年 11 月 4 日～11 月 15 日

調査面積：約 17,700m²

調査地点と調査方法：

①トコロチャシ跡遺跡群全体の西半分を中心とした区域 (60 ラインより西側を中心とする区域) の分布調査。1m×1m のテストピットを 10m 間隔を基本として設定し、III 層上面までを基本とする試掘調

第一章 調査の経緯

査をおこなった。テストピットは遺構の検出状況等を踏まえて適宜拡張している。

②地形測量。遺跡群全体に対し、航空撮影による地形測量を実施した。

検出された主な遺構：石刃鍬石器群の遺物集中（L（50）－95区周辺）、縄文中期竪穴（C（100）－60区周辺）、オホーツク11号竪穴（XVII（17）－51区）、オホーツク12号竪穴（XXIV（24）－51区）。

2000年度

調査期間：2000年10月23日～11月2日

調査面積：約6,630m²

調査地点と調査方法：

トコロチャシ跡遺跡群全体の東半分を中心とした地区（56ラインより東側を中心とする地区）の分布調査。1m×1mのテストピットを10m間隔を基本として設定し、III層上面までを基本とする試掘調査をおこなった。テストピットは遺構の検出状況等を踏まえて適宜拡張した。

検出された主な遺構：縄文早期竪穴（XCV（95）－55区）、縄文前期～中期集石（XXV（25）－24区周辺）。

2001年度

調査期間：2001年4月19日～4月26日（春期）、10月22日～10月29日（秋期）

調査面積：約4,300m²（春期・秋期の合計）

調査地点と調査方法：

①トコロチャシ跡遺跡群の南東端を中心とした地区（LXX（70）～CX（110）－（－20）～（－25）を中心とする地区）の分布調査（春期）。1m×1mのテストピットを10m間隔を基本として設定し、III層上面までを基本とする試掘調査をおこなった。

②トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の西部における第一次トレンチ調査（春期）。XXII（22）とXXV（25）のラインに沿って幅1m、長さ16m～28mのトレンチを設定し（Fig. 29参照）、III層上面までを基本とする試掘調査をおこなった。トレンチは遺構の検出状況等を踏まえて適宜拡張した。

③トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の西部における第二次トレンチ調査（秋期）。XXIII（23）・XXVII（27）・XXIX（29）の各ラインに沿って幅1m、長さ16m～38mのトレンチを設定し（Fig. 29参照）、III層上面までを基本とする試掘調査をおこなった。トレンチは遺構の検出状況等を踏まえて適宜拡張した。検出された主な遺構：オホーツク1号墓（XXIV（24）－61区周辺）、オホーツク2号墓（XXIII（23）－59区周辺）。

(2) 第二次調査：オホーツク文化期の集落構造解明のための調査

2006年度

調査期間：2006年8月21日～9月13日

調査面積：93m²

調査地点と調査方法：

トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の南部における第一次トレンチ調査。XXXI（31）ラインとXXXIII（33）ラインに沿って幅1m、長さ60mのトレンチを断続的に設定し（A～Dトレンチ、付図

App. Fig. および Fig. 42 参照)、III 層上面までを基本とする試掘調査をおこなった。C トレンチと D トレンチは遺構の検出状況等を踏まえて適宜拡張した。

検出された主な遺構：縄文前期～中期竪穴 (C トレンチ)、縄文中期遺物集中 2 箇所 (D トレンチ)。

2007 年度

調査期間：2007 年 8 月 21 日～9 月 13 日

調査面積：93.3m²

調査地点と調査方法：

トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の南部における第二次トレンチ調査。XXIII (23)・XXVI (26)・XXVIII (28) の各ライン沿いと、XXIII (23) -28 と XXX (30) -35 を結ぶライン沿いに幅 1m、長さ約 19.8m～30m のトレンチを設定し (E～H トレンチ、Fig. 42 および Fig. 43 参照)、III 層上面までを基本とする試掘調査をおこなった。H トレンチは遺構の検出状況等を踏まえて適宜拡張した。

検出された主な遺構：縄文前期～中期の集石 5 箇所 (集石 2・4～7：E～H トレンチ)、続縄文文化期の集石 (集石 3：F トレンチ)、オホーツク 13 号竪穴 (G トレンチ)、オホーツク文化期の骨集中・土器集中 (H トレンチ)、オホーツク文化期の集石 (集石 1：E トレンチ)。

(3) 第三次調査：アイヌ文化期のチャシ復元のための調査

2008 年度

調査期間：2008 年 8 月 21 日～9 月 13 日

調査面積：52.5m²

調査地点と調査方法：

①チャシ壕の北東側端部を対象とした第一次発掘調査。6.5m×9m の区域 (Fig. 72) を発掘し、チャシ壕の形状や付随する遺構を確認するとともに、かつて東京大学が 1960 年度に発掘調査をおこなった「S トレンチ」を再発掘し、オホーツク 6 号竪穴の様相を再確認した。

②チャシ壕外側南東部のトレンチ調査。5 ライン上に幅 1m、長さ 6m のトレンチを設定し (Fig. 72)、続縄文文化期の生活面までの掘り下げを基本とする発掘調査をおこなった。

検出された主な遺構：チャシ壕、火山灰下貝集中、旧壕埋土貝集中、オホーツク 6 号竪穴 (再発掘)。

2009 年度

調査期間：2009 年 8 月 21 日～9 月 13 日

調査面積：41.75m²

調査地点と調査方法：

チャシ壕の北東側端部を対象とした第二次発掘調査。8m×9m の区域 (Fig. 72) を Ta-a 火山灰の上部まで発掘し、壕の概ねの形状を確認した。発掘区内の北東端幅 1.5m の部分については壕の底面まで掘り下げをおこない、壕の形状を詳細に把握した。

検出された主な遺構：チャシ壕、火山灰下貝集中、魚骨集中。

(熊木俊朗)

第二章 トコロチャシ跡遺跡群の全体試掘調査 （1999年度－2001年度）

第一節 調査の経過

前章でも述べたように、トコロチャシ跡遺跡群の史跡整備は1998年度から本格的な検討が開始されたが、最初の課題となったのは遺跡群が立地する段丘全体の遺跡分布状況を正確に把握することであった。この目的に沿って最初に実施されたのが、1998年度に旧常呂町教育委員会におこなわれた分布調査である。この調査は、トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の竪穴群の近辺に墓域が存在するか否かを確認する目的で計画され、トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の中心部（IV～XXIV-33～49周辺）とオホーツク地点の西部（XXII～XXVI-63～75周辺）の二ヶ所で試掘調査がおこなわれた。調査の方法は、1m×1mの試掘坑を4m間隔を基本として設定し、III層上面まで掘り下げて遺構等の存否を確認するというものである。調査の結果、これらの地点ではオホーツク文化の墓は検出されなかったが、墓以外の遺構としては、かつて竪穴の窪みがあり、後に9号竪穴として発掘調査がおこなわれた（東大考古学研究室・常呂実習施設編2012）地点の試掘坑（XX-33、XX-35、XXII-33、XXII-35の4ヶ所）内で粘土の貼床や炭化材等、オホーツク文化の竪穴住居跡やそれに伴う遺物が検出された¹⁾。

1999年度には科学研究費の交付を受けて本格的な分布調査を開始した。本年度は遺跡群の西半分（60ラインより西側）を中心とした地区を主な対象とし、1m×1mの試掘坑を10m間隔を基本として設定してIII層上面まで掘り下げ、遺構と遺物を確認する方法で調査を実施した。その結果、既知の遺構集中地点付近に加えて、これまで存在が知られていなかった地点にも遺物集中地点や遺物包含層が存在することが確認された。具体的には、既知の地点付近としてはトコロチャシ南尾根遺跡付近となるC(100)-60区周辺の縄文中期の竪穴、トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の、かつて竪穴の窪みが確認されていた地点で検出されたオホーツク11号竪穴（XVII(17)-51区）とオホーツク12号竪穴（XXIV(24)-51区）などが検出され、未知の地点のものとしてはL(50)-95区周辺では石刃鍬石器群などが確認されている。他にも遺物は調査対象とした西半分地区の全体からほぼ満遍なく出土した。各試掘坑の遺物出土状況についてはTable 7の一覧表にまとめてある。ほかに、本年度には前章第二節2「調査区と基本層序」に記した調査グリッド基準杭の設置や、航空撮影による地形測量も実施した。

2000年度は前年度には手付かずであった遺跡群の東半分、56ラインより東側を中心とした地区のうち、遺跡群の南東端部分を除いた地区を主な対象とした分布調査を、前年度と同様の方法で実施した。確認された主な遺構は以下のとおりである。トコロチャシ南尾根遺跡に近いXCV(95)-55区では縄文早期の竪穴が検出され、南尾根遺跡の遺構分布範囲がやや内陸側まで広がっていることが確認された。また、トコロチャシ跡遺跡の南部に相当するXXV(25)-24区周辺で縄文前期～中期の集石遺構が検出

されている。これは、トコロチャシ跡遺跡もしくは同オホーツク地点の延長として、両地点の範囲がここまで広がっていることを示すものとして捉えることが出来よう。ただしこの遺構はそれまで両地点では確認されていなかった性格のものであり、縄文前期～中期における本遺跡群の性格を考える上では新しい発見となった。遺物については、調査対象とした東半分の地区（遺跡群の南東端を除く）の全体からほぼ満遍なく出土した。なお調査の当時、XXV (25)～LXX (70) -0～65 グリッドの周辺には野菜用ビニールハウスが点在していて試掘坑の設定が困難であったため、この地点周辺の試掘調査は 10m 間隔の密度ではおこなっていない。

2001 年 4 月には、前年度に未調査であった遺跡群の南東端、LXX (70)～CX (110) -(-20)～(-25) を中心とする地区の分布調査を前年度と同様の方法で実施した。その結果、この地区では時期不明のピット以外に遺構は検出されず、さらに遺物が確認できなかった試掘坑もほかの地区より多い傾向にあることが判明した。すなわち、この地区の遺構や遺物の分布密度は他の地区と比較すると相対的に低いとみられるが、遺物の分布範囲は調査対象とした南東端地区の全体に及んでいた。

以上の分布調査によって遺跡群全体の遺構と遺物の分布状況はおおよそ把握できたが、その成果を踏まえて次の課題となったのは、オホーツク文化の墓域の所在確認である。本遺跡群のオホーツク文化の竪穴群の近辺には、以下の点から墓域が存在する可能性が極めて高いと考えられていた。すなわち、トコロチャシ跡遺跡と同オホーツク地点は比較的規模の大きい集落であり竪穴群に墓域が併存すると予測されたこと、分布調査以前から副葬品とみられる蕨手刀や鉄鉾などが採集されていたこと（畠山 1969、藤本・宇田川 1989、右代 1990、宇田川・熊木編 2003）、さらに本遺跡群の当時の地主であった本田一夫氏より、過去にも畑の耕作作業中に土器が伏せられた状態で出土したことがあったという情報を得ていたことなどが、墓域の存在を示唆していた。しかしこの時点までの分布調査では墓は全く確認できていなかったため、前述の本田氏の情報などをもとに、墓が存在する可能性が高いと予想されたオホーツク地点の西側、XX (20)～XXX (30) -50～70 周辺の地区に調査トレンチを設定し、より詳細な遺構確認調査を試みることにした (Fig. 29)。調査は 2001 年 4 月の分布調査から継続するかたちで同年 4 月に実施し、幅 1m のトレンチを① XXII (22) -52 グリッドと XXII-60 ラインを結ぶ線の北側 (XXII ライントレンチ)、② XXV (25) -53 グリッドと XXV-67 グリッドを結ぶ線の北側 (XXV ライントレンチ)、③ XXI (21) -60 グリッドと XXII (22) -60 グリッドの中間点と、XXV (25) -60 グリッドとを結ぶ線の西側、の 3ヶ所に設定して遺構確認調査をおこなった (Fig. 29)。その結果、XXIV (24) -61 区周辺ではオホーツク文化の墓が検出された (オホーツク 1 号墓)。オホーツク 1 号墓の調査に際しては、周辺区域のトレンチを 1～2m 程度拡張して発掘している。オホーツク 1 号墓以外にも、XXV ライントレンチ内では時期不明のピットなどが検出されている。これ以外の、XXII ライントレンチと 60 ライン沿いのトレンチでは遺構は確認できなかった。これらのトレンチ調査では試掘坑同様に III 層上面まで掘り下げをおこなって遺構を確認したが、XXII ラインでは 55 区から 57 区付近、XXV ラインでは 53 区から 56 区付近にかけて、III 層上面に相当する土層が深く落ち込んでいることが確認された。このことから、現地表面からは確認できないが、上記の地点にはかつて沢状の落ち込みが存在していた

ことが推測された。

このオホーツク1号墓の発見を受けて、さらに詳細に分布調査を実施してオホーツク文化の墓域の拡がりを確認するため、同じ年の10月に再度、オホーツク1号墓周辺でのトレンチ調査を実施した。この調査では幅1mのトレンチを①XXIII(23)－54グリッドとXXIII－62グリッドを結ぶ線の南側(XXIIIライントレンチ)、②XXVII(27)－52グリッドとXXVII－62グリッドを結ぶ線(これは後にXXVII－71グリッドまで延長した)の北側(XXVIIライントレンチ)、③XXIX(29)－53グリッドとXXIX－75グリッドを結ぶ線の北側(XXIXライントレンチ。XXIX－65グリッドより西側は、1m×2mの試掘坑を2m間隔で配置するという断続的な形状で設定している)、の3ヶ所に設定して遺構確認調査をおこなった(Fig. 29)。その結果、XXIII－59区周辺でオホーツク2号墓が確認された。2号墓の調査に際しては周辺部分のトレンチを南側に1m×2mの範囲で拡張したほか、北側にも縄文晩期末～続縄文文化期の墓の可能性のある別のピット(ピット3)が確認されたため1.5m×2.5mの範囲でトレンチを拡張している。XXIIIライントレンチではほかに溝状の掘り込みや礫の集中などが検出されたが、これらは前述の沢状の落ち込み上に位置しており、後世の耕作や客土によって原位置からは移動している可能性もあると判断された。XXVIIライントレンチでは、XXVI－52区で時期不明のピット(ピット1)が確認されたほかに遺構は検出されなかった。XXIXライントレンチとその延長の試掘坑では遺構は確認されていない。なお、XXIIIライントレンチとXXVIIライントレンチでは、4月の調査トレンチで確認されたものと同様の沢状の落ち込みが確認されたことから、この地区ではXXVII－55～56区からXXI－55～57区にかけて南北方向に延びる沢状の落ち込みが存在していたことが判明した。

(熊木俊朗)

註

- 1) ここに記した1998年度の旧常呂町教育委員会の調査については、試掘坑の位置と出土遺物の概要を付図App. Fig. とTable 6に示しておく。遺構や遺物の詳細については、9号竪穴の正式報告がすでになされていることもあり、本報告書では省略している。

第二節 試掘坑の遺構各説

1 L (50) -95 区周辺 石刃鏃文化の遺物集中

発掘区と出土状況

L (50) -95 区の試掘坑 (1m×1m) において、主に南西壁付近から石斧や石刃数点が出土した。周辺の耕作・攪乱土から発見されていた他の縄文時代以降の土器片や石器類とは異なり、これらの遺物はほぼプライマリーな土層から出土したこと、さらには縄文時代早期の石刃鏃文化もしくはそれ以前の石器群に関連する遺物であると予想されたことから、その内容と出土状況を確認するため、発掘区を拡張して調査を行なった。

プライマリーな土層からの遺物の出土が確認できなくなる範囲まで発掘区を拡張したところ、最終的

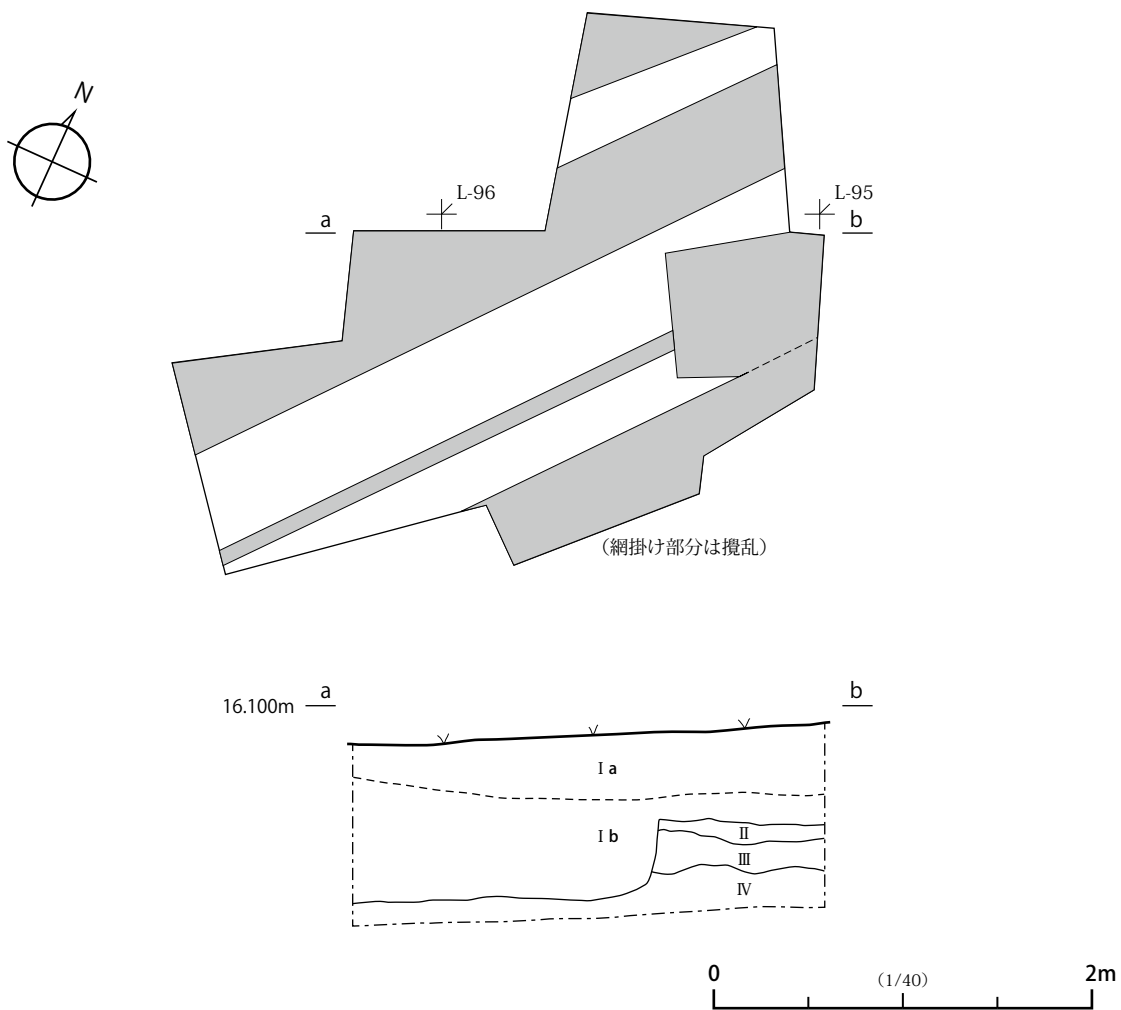


Fig. 2 L (50) -95 区周辺 石刃鏃文化の遺物集中 発掘区と土層図

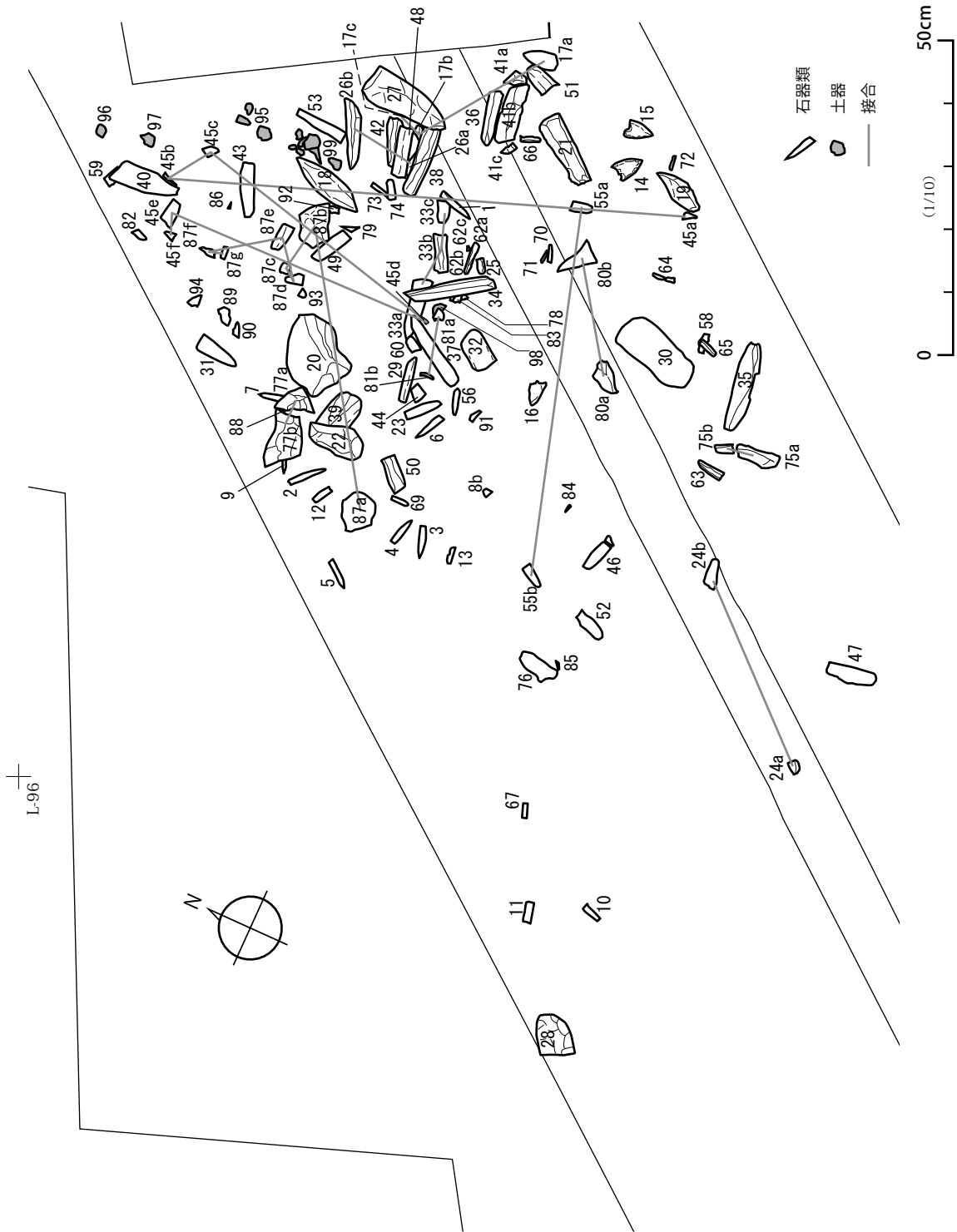


Fig. 3 L (50) 区周辺 石刃鎌文化の遺物集中 遺物分布平面図

な発掘区は Fig. 2 のように概ね北東－南西方向に 3.5m、北西－南東方向に 3.0m ほどの範囲となった。しかし、実際には、発掘区の北西側と南東側では長イモの作付け等の耕作による攪乱が IV 層にまで及んでおり、遺物包含層相当層（II 層・III 層）はほぼ消失していた。耕作・攪乱の影響が比較的少ない良好な遺物包含層は北東方向の一部から南西方向に伸びていたが、96 ラインより南西では遺物の出土が稀であったため、発掘区の拡張は 96 ラインの南西 1.2～1.4m までとした。

土層と出土層位

本発掘区の土層は、遺跡全体の基本層序と概ね同様であるが、以下のような状況が観察された (Fig. 2)。

Ia 層：耕作土。

Ib 層：耕作土。II 層以下の土層のブロック状や粒状の混入が顕著である。

II 層：暗褐色土。本来は表土（腐植土）と III 層の漸移層と考えられる。しまりは III 層よりも弱い。

III 層：褐色～茶褐色土。所謂ローム層であり、しまりが強い。II 層・IV 層との層界は明瞭ではない。

IV 層：黄褐色土。所謂ローム層であり、III 層と同様にしまりが強いが、やや粗粒である。部分的に変質しており、特に攪乱を受けた部分では色調がやや明るい。

石刃鏃文化の遺物は主に II 層下部から III 層上部にかけて出土したが、その出土層準は III 層上面付近に集中していた。Ia・Ib 層からも縄文時代以降の石器類や土器片が出土したが、石刃鏃文化に関連すると考えられる遺物はほとんど含まれていなかった。

(山田 哲・中村雄紀)

遺物

(1) 石器

石刃鏃文化に関連する石器類は、石鏃類 17 点、尖頭器 5 点、削器 2 点、搔器 2 点、彫器 1 点、楔形石器 2 点、石器破片 2 点、石斧類 6 点、石刃類 55 点、剥片・細片 16 点、礫片 13 点からなる計 121 点である (Table 1・2)。本稿では、剥離軸方向の長ささとそれに直交する幅がともに 2cm 以内の剥片・破片を細片としている (剥片の部分的な破片を破片と称する)。石器の石材は、特に言及がない限り、白色～灰白色の流理構造のみられるものを含む漆黒～透明の黒曜石である。

石鏃 (Fig. 4-1～16)

1～13 は石刃鏃である。石刃鏃は 14 点出土したが、折面接合 (8) が 1 例あるため、ほぼ完形となるもの 9 個体 (1～9)、欠損品 4 個体 (10～13) である。完形品についてみると、サイズは最大のもの (1) で長さ 6.4cm、幅 1.2cm、厚さ 0.2cm、最小のもの (9) で長さ 2.9cm、幅 0.6cm、厚さ 0.2cm、平均で長さ 4.8cm、幅 1.0cm、厚さ 0.2cm となっており、長さ 4～5cm 程度のもが多い。長幅比は 3.7 (7)～5.6 (2・6) とかなり細身の形態を呈する。欠損品は全て基部で、顕著な背面のフィニアル (11・12) や側縁の槌状剥離痕 (13) がみられるなど、刺突による衝撃損傷を思わせる。いずれも背面・腹面の剥離方向が同じ石刃を素材としており、素材石刃の打点側を基部とするものと末端側を基部とするものがあるが、前者が 5 点、後者が 8 点で大きな偏りはない。二次加工は主に腹面の周縁に施され、背面では尖端部や基部に限られる。基本的に腹面の二次加工は細かく平行し背面の加工を切っているが、基端縦方向の背面側剥離痕は例外的に腹面側を切ることが多い。基端は背面側から比較的急斜度に加工されている

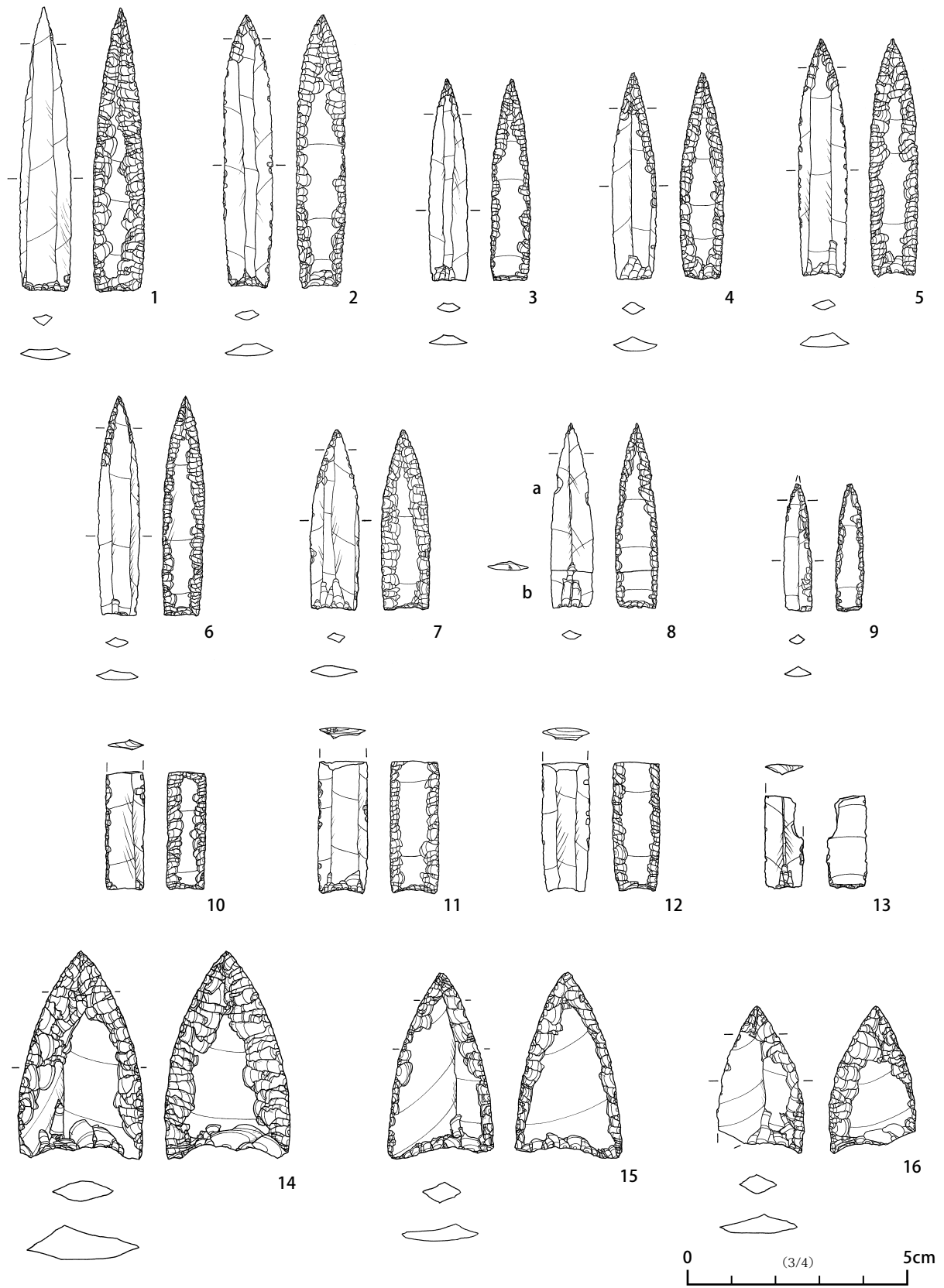


Fig. 4 L (50) -95 区周辺 石刃鏃文化の遺物集中 出土石器 1 (石刃鏃)

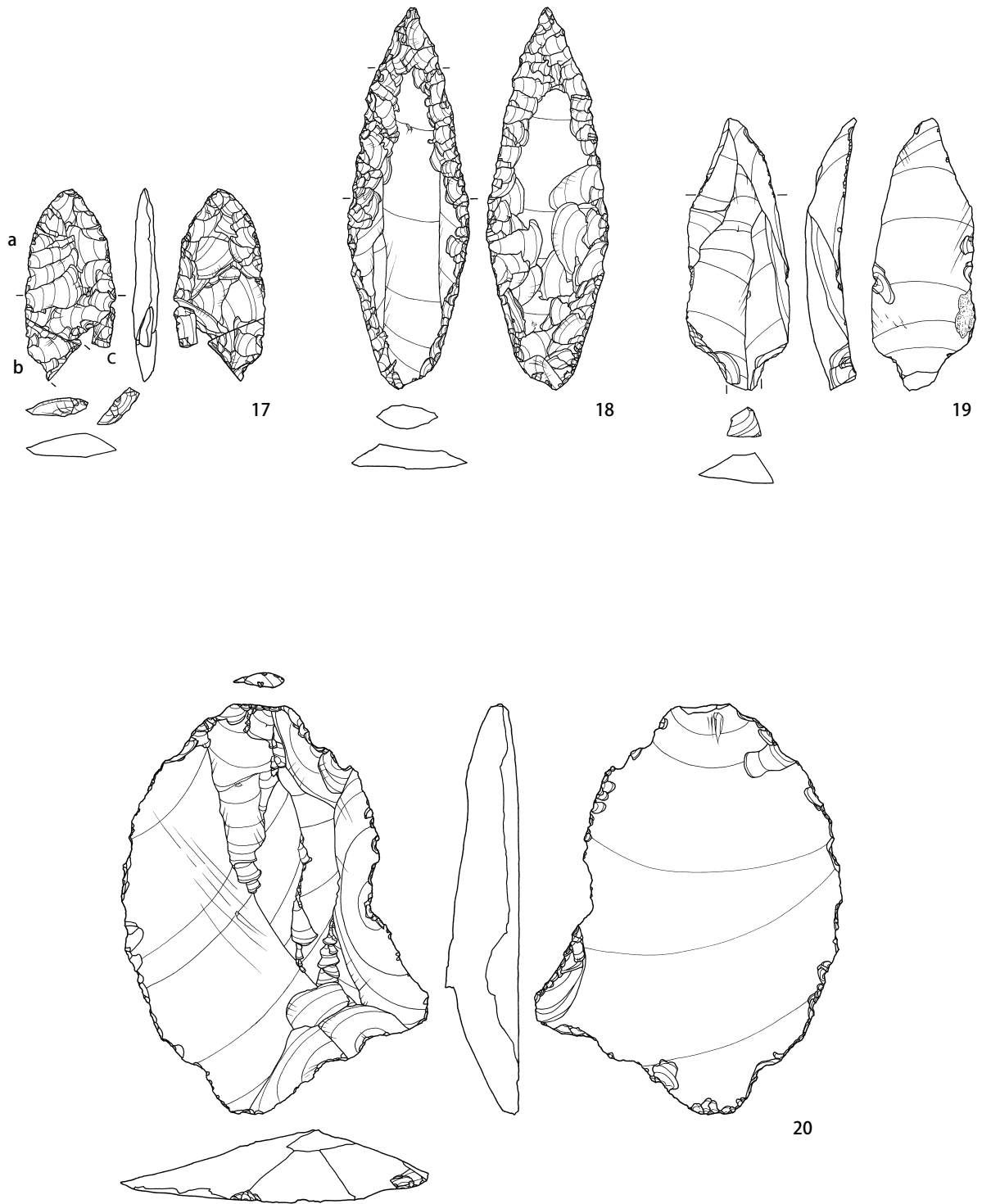


Fig. 5 L (50) -95区周辺 石刃鋸文化の遺物集中 出土石器2 (尖頭器・削器)

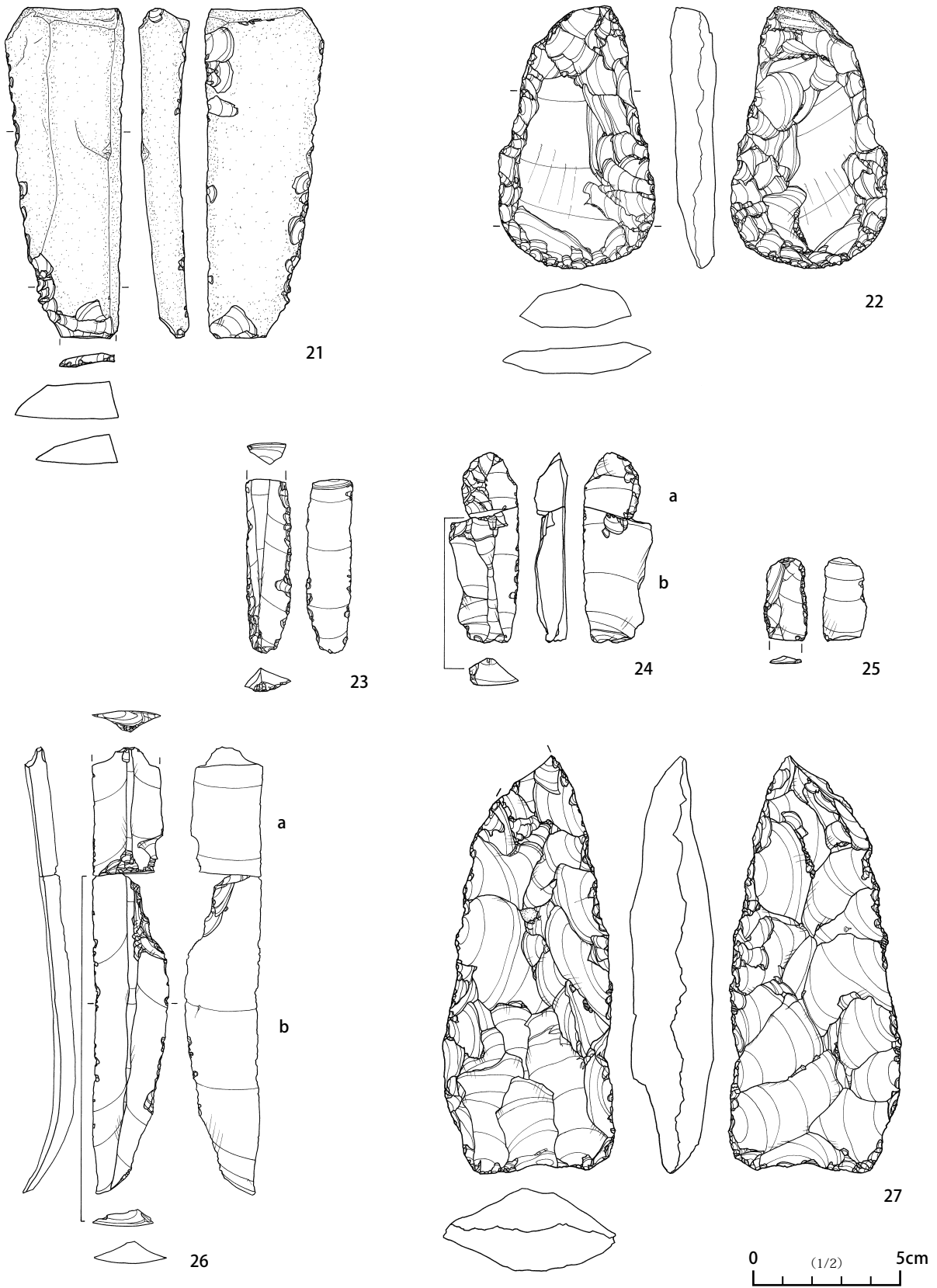


Fig. 6 L (50) -95 区周辺 石刃鋸文化の遺物集中 出土石器 3 (削器・搔器・楔形石器・彫器・打製石斧等)

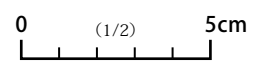
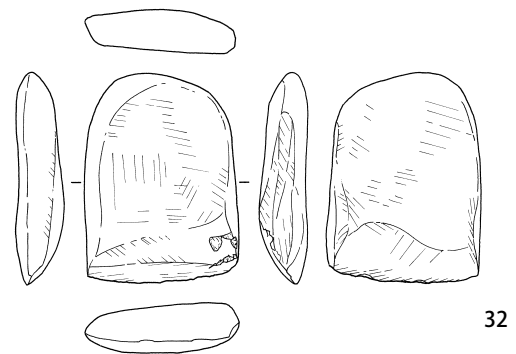
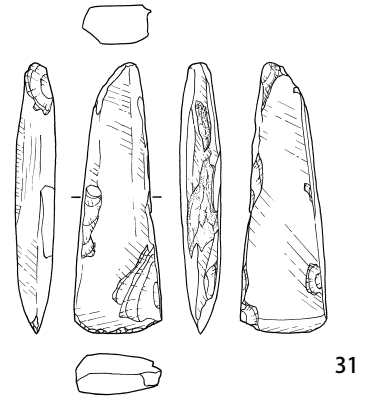
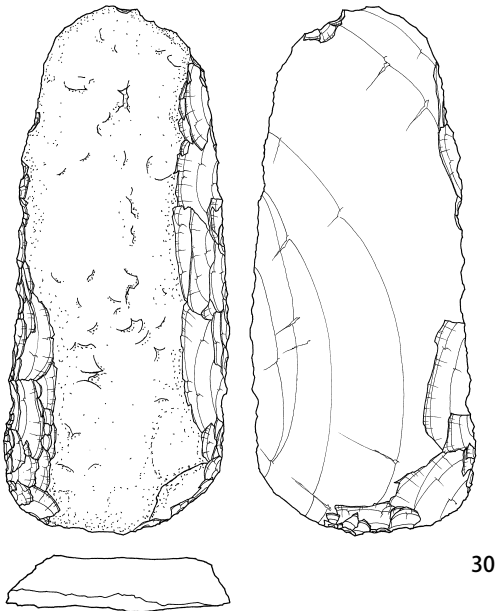
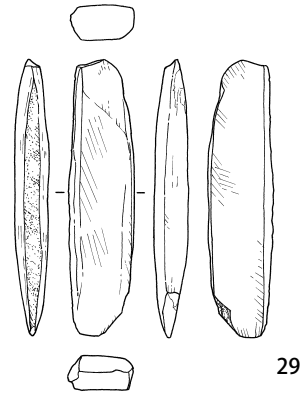
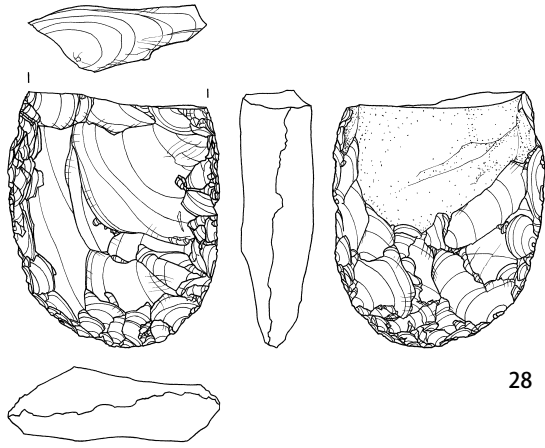


Fig. 7 L (50) -95 区周辺 石刃鎌文化の遺物集中 出土石器 4 (打製石斧・磨製石斧)

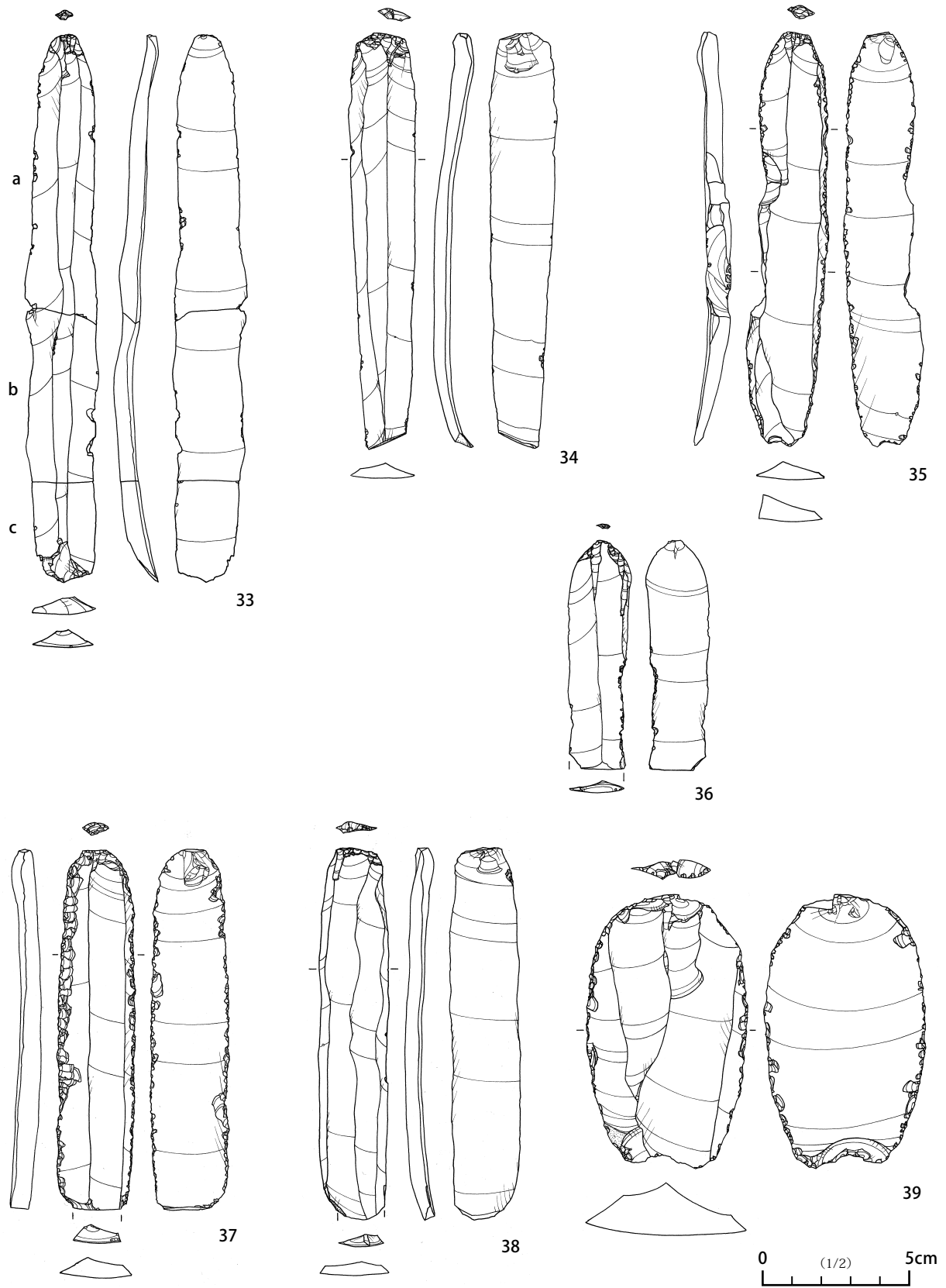


Fig. 8 L (50) -95 区周辺 石刃鋸文化の遺物集中 出土石器 5 (石刃類)

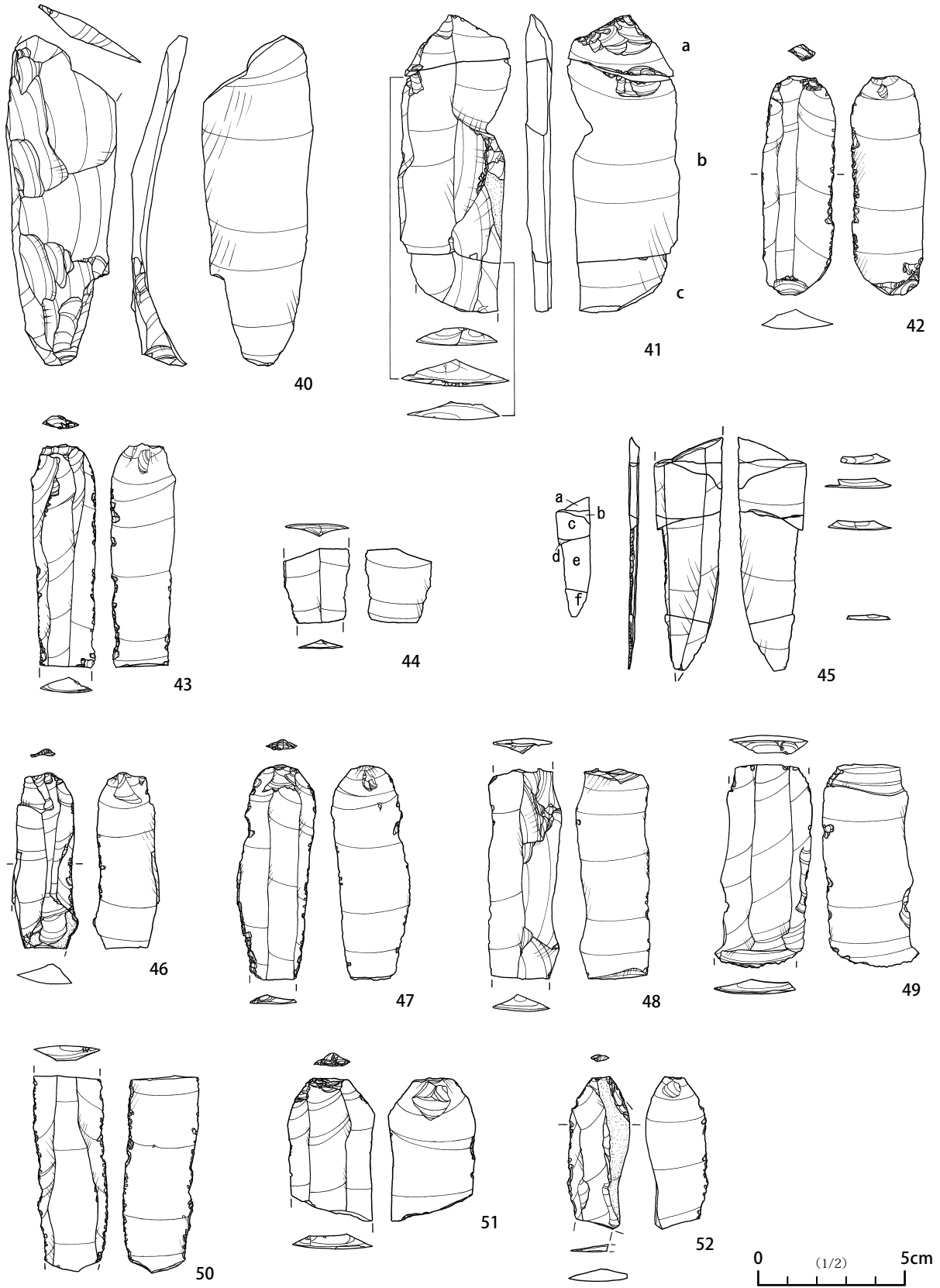


Fig. 9 L (50) -95 区周辺 石刃鏃文化の遺物集中 出土石器 6 (石刃類)

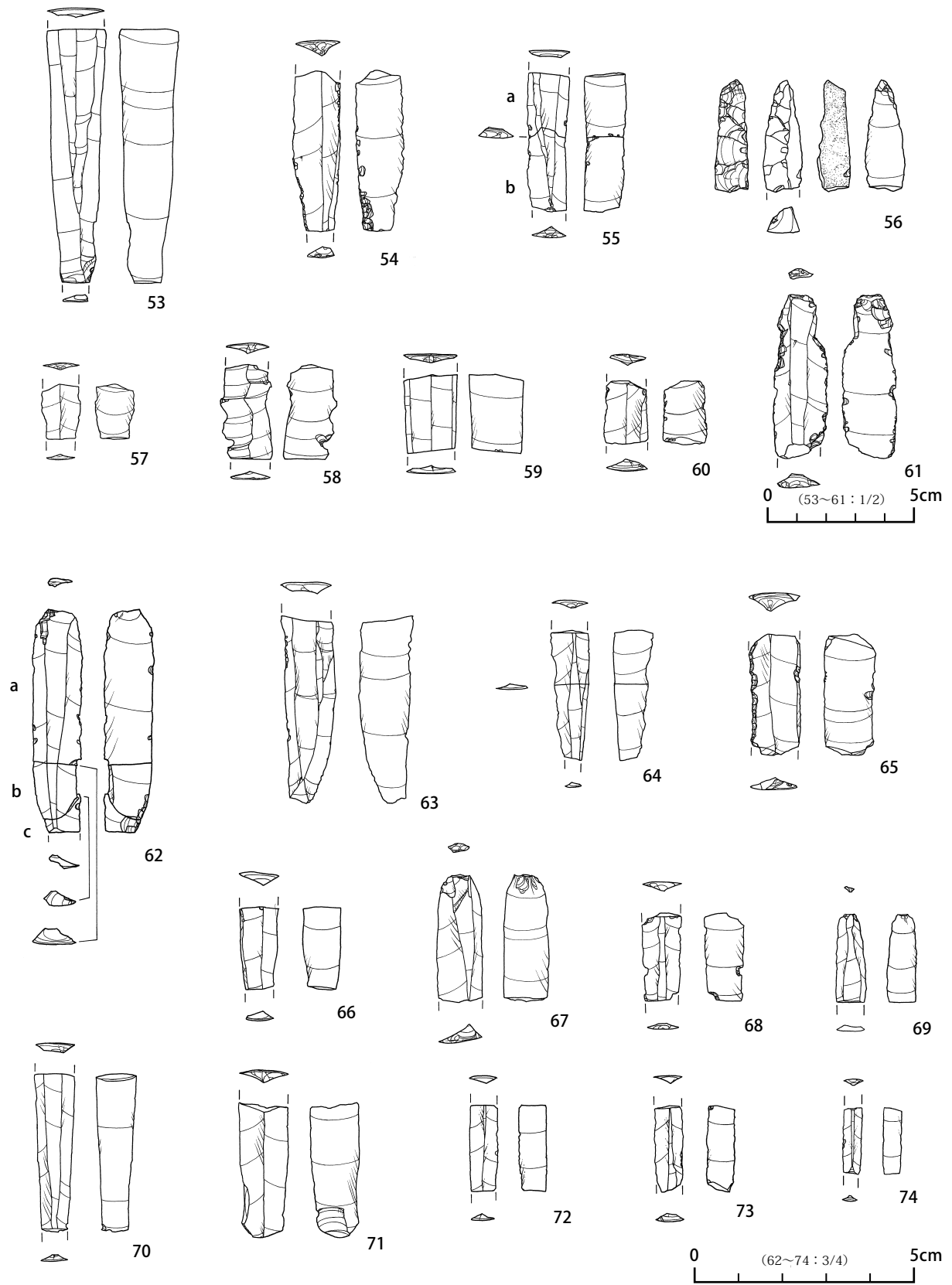


Fig. 10 L (50) -95 区周辺 石刃鋸文化の遺物集中 出土石器 7 (石刃類)

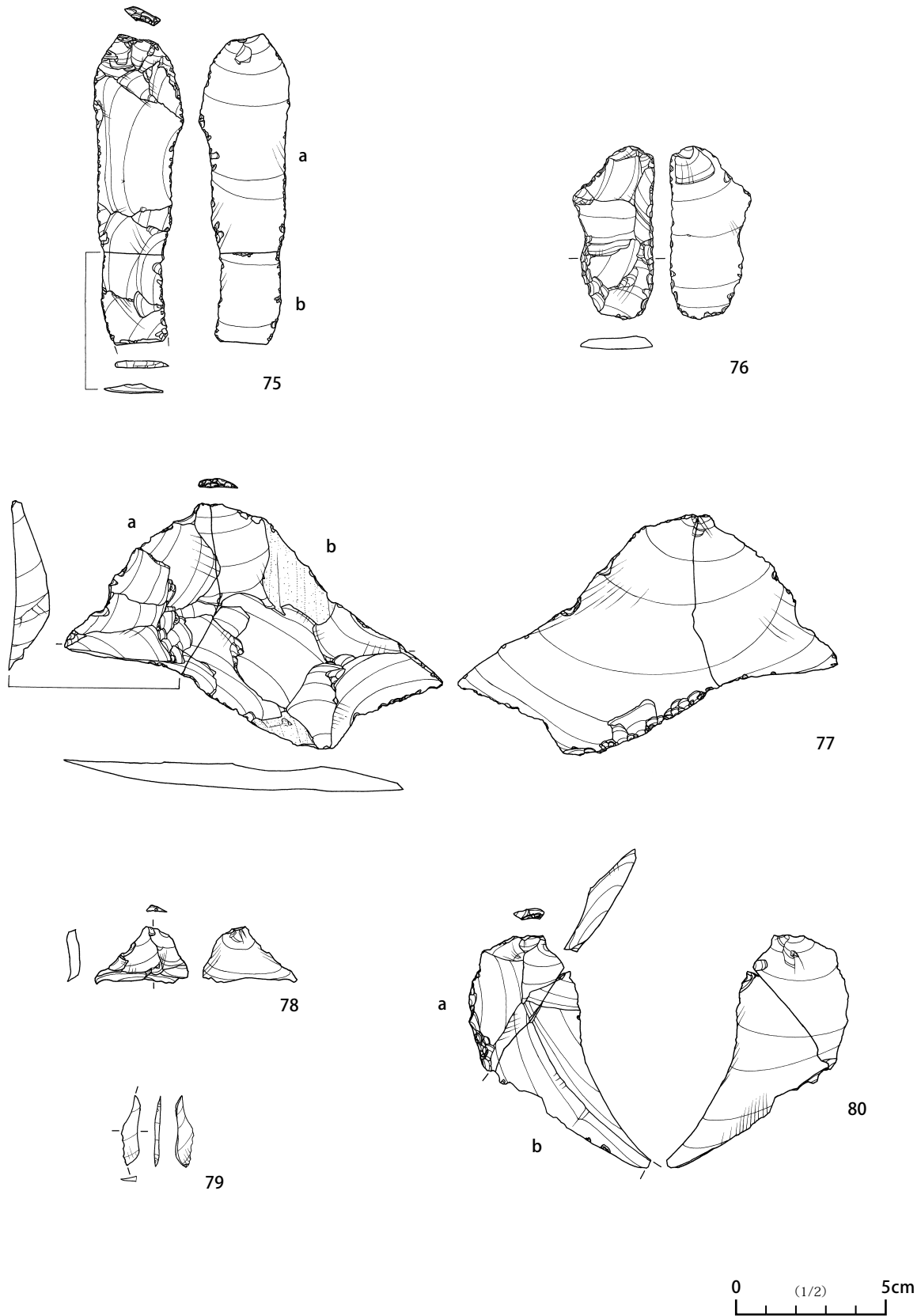


Fig. 11 L (50) -95区周辺 石刃鍬文化の遺物集中 出土石器8(剥片)

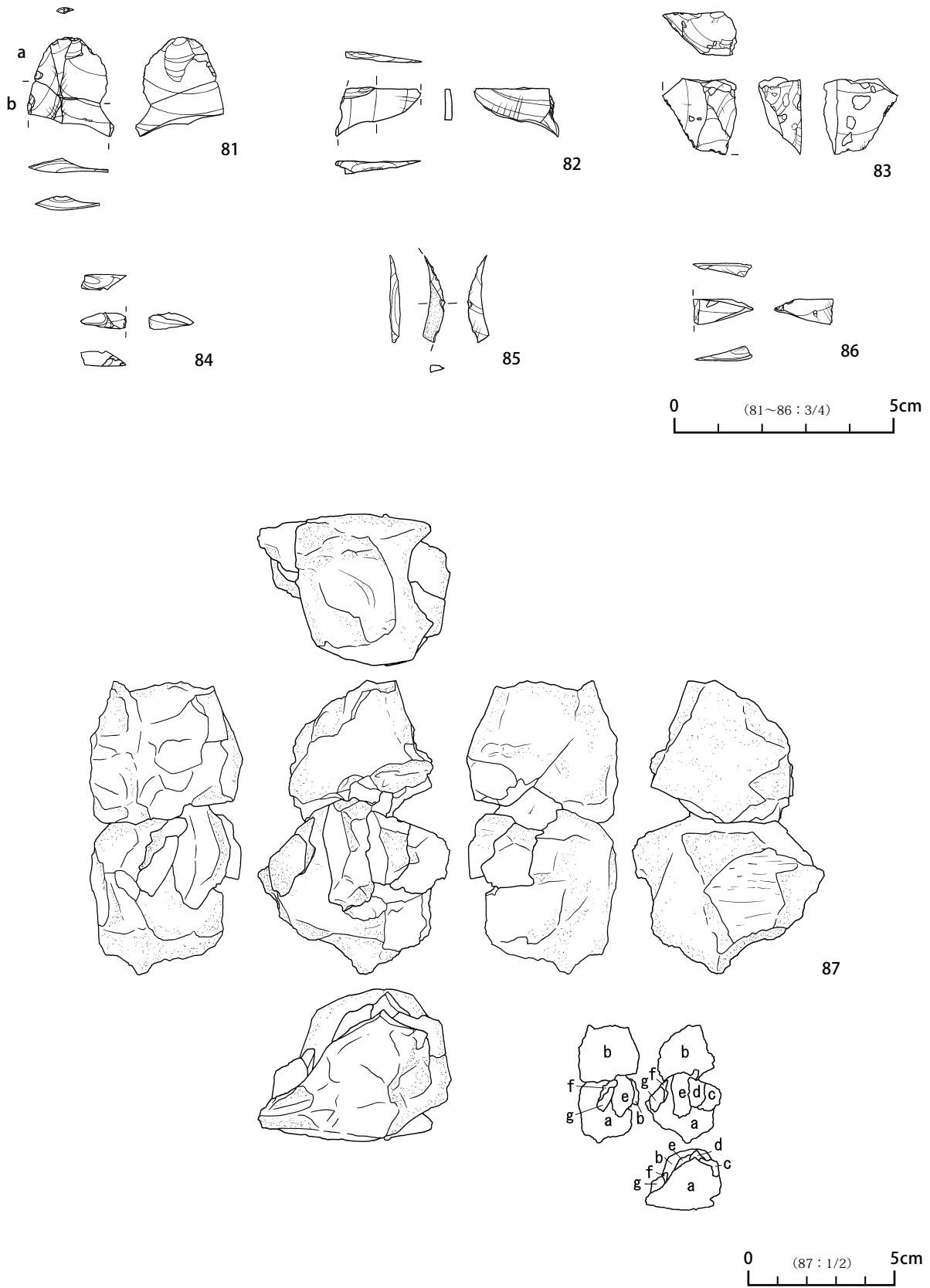


Fig. 12 L (50) -95区周辺 石刃鋸文化の遺物集中 出土石器9（細片・礫塊）

もの(3・6～10・12・13)と、背腹両面への剥離により器厚中央に稜を形成するもの(1・2・4・5・11)がみられ、弱い凹基もしくは平基の平面形態を呈する。

14～16の石鏃も石刃素材であるが、素材のサイズや形態の特徴で1～13のような一般的な石刃鏃と大きく異なっており、特に識別して広形石刃鏃と呼称しておく。3点はいずれも背面・腹面の剥離方向が同じ石刃を素材としており、素材石刃の末端側を基部としている。サイズは幅2.0～2.8cm、厚さ0.4～0.8cmと石刃鏃の2倍程度以上であるが、それに比して長さは短く(3.3～4.6cm)、長幅比は2に満たない。二次加工の特徴は一般的な石刃鏃に似るが、背面への二次加工がより顕著であり、明瞭な凹基をなす。16は、僅かに赤褐色が入る黒曜石を用いている。

尖頭器 (Fig. 5-17～19)

17は両面加工の尖頭器である。下部を欠損しており、破片が2点接合する。粗形の両面調整体に薄く細かい剥離による最終的な加工が施され、正面及び裏面の上半は精巧な剥離痕で被われているが、裏面下半には粗い剥離痕が残っており、両者の間には明瞭な段差が認められる。基部側縁辺が抉入状をなしており、茎部を作出していた可能性がある。紫がかった赤褐色の網目が入る黒曜石による。

18は両面周縁加工の尖頭器である。大形の石刃を素材として周縁に加工を施し、特に尖頭部(素材打点側)および基部(素材末端側)を大きく減ずることにより木葉形に仕上げている。素材面は二次加工の剥離痕と比べてキズの度合いが強く(特に背面稜線付近の縦方向の線状痕が顕著)、素材生産と二次加工との時間差が明瞭である。

19は基部加工尖頭器である。素材は厚身の石刃であり末端部で腹面側に大きく湾曲している。基部背面両側に抉入状の加工が施されており、欠損しているが茎部を作出していたと考えられる。その他に明瞭な二次加工はなく、縁辺に微小剥離痕が断続する程度である。左側縁背面側に顕著な線状痕がみられ、機能的には石匙のような加工具の類であった可能性が高いと思われる。

削器・搔器 (Fig. 5-20・Fig. 6-21～23)

20・21は削器としたが、素材やサイズの点で通常の削器とはやや異なる。20は大形厚身の剥片を素材とし、右側縁から末端部にかけて腹面を打面とする大形の剥離痕が数枚あるため石核状を呈する。これら大形の剥離痕により形成された抉入部には微小な剥離痕が認められ、また右側縁末端側の腹面への連続的な剥離によりやや内反する刃部が形成されている。以上の剥離痕に比べて素材面はキズの度合いが非常に強い。21は棒状の角礫を素材とするもので、左側縁下端側を中心に二次加工が施され、弱い鋸歯状の縁辺をなしている。

22・23は搔器である。22は厚身の剥片を素材とし基部に自然面と思われる風化した剥離面を残すが、側縁から末端にかけて背腹両面に二次加工を施し、末端部に弧状の刃部を形成している。素材面と一部の二次加工面に線状痕および磨耗が顕著で、特に背面側に縦方向のものが多い。23は長狭な石刃を素材とし、左側縁下部から末端部にかけて背面側への二次加工により急斜度の弧状の刃部を形成している。また右側縁にも微小剥離痕が連続する。素材打点側は欠損している。

その他の剥片石器（Fig. 6-24～26）

24は、1個体の石刃が二分されており、このうち上部（a）の石器では、左側縁腹面から右側縁にかけてと折面から左側縁腹面にかけてに数条のやや粗い槌状剥離が入っている。下部（b）の石器は折面から背腹両面に不規則な剥離が入り、また下縁に折れや微小な剥離をともなう。典型的なものではないが、いずれも楔形石器に分類した。

26は、1個体の石刃が折断されており、上部（a）は折面から右側縁にかけて削片が剥離されているため彫器としたが、背面に折面からの不規則な剥離が入るなど、24bの石器と類似するものである。下部（b）は折断石刃の打点側すなわち折面近くの右側縁にやや内反する急斜度の縁辺が形成された基部加工石刃である。

25は下半を欠損した石器破片で、両側縁に微小な剥離痕が連続する。赤褐色の斑が入る黒曜石である。

石斧類（Fig. 6-27・Fig. 7-28～32）

27・28・30は打製石斧である。27は正面に僅かに岩屑面が残るが、全面的に大ぶりの剥離痕に被われており、稜線を中心に磨耗がみられる。刃部正面側は最終的に縦方向の剥離によって調整されている。基部を一部欠損する。28は裏面に広く岩屑面を残すが、大ぶりの剥離による器体成形の後、両面の縁辺を中心として細かな調整が加えられ半円形の刃部に仕上げられている。稜線、剥離面ともに磨耗や線状痕が顕著に観察される。基部側を欠損し、紫がかった赤褐色の網目が入る黒曜石を用いている。30は安山岩製で、亜円礫面を背面とする比較的薄身の幅広剥片を用い、打点側と末端側を直線的に加工して器体を作り出している。一方、下端刃部に関しては裏面に若干の平坦剥離が認められるのみで加工に乏しい。

29・31・32は磨製石斧である。いずれも蛇紋岩製で、29・31が両刃、32が片刃状の刃部をなし、31には刃こぼれ状の微小剥離痕が顕著である。また、特に29の左側面には素材の溝切り・折断による段差が明瞭に残っている。

石刃類（Fig. 8-33～39・Fig. 9-40～52・Fig. 10-53～74）

石刃は、幅に基づくサイズに分けて記述する。なお、石刃製作技術については第六章第一節の分析にてまとめる。

33～52は幅2cmを超える大形・中形の石刃である。部分加工のあるもの（37）を含めて28点出土したが折面接合を考慮すると20個体となる。顕著な打面調整・頭部調整を伴う狭小な打面をもち、そこからやや幅が広がった後、直線的な側縁がほぼ平行に走って末端に至るとというのが基本的な形態である。完形品では35が長さ14.1cmで最長であるが、折損品も含めると33が長さ18.9cmに還元され最長となる。35・40・41・48には背面に横方向の先行剥離痕が認められ、石刃核の調整された側面を取り込んだものと考えられる。その他の背面構成は基本的に腹面と同方向の剥離痕からなる。35～37・39・42・43・46～48・50・52のように側縁に刃こぼれ状の微小剥離痕が観察されるものが多く、43は側縁に平行する線状痕が顕著である。41の頭部や33・42の末端部は新鮮な剥離痕（ガジリ）である。石材は全て黒曜石であるが、35のみ赤褐色の網目が入る黒曜石である。34・38・39・41・46・52に僅かに残る

Table 1 L (50) -95 区周辺 石刃鏃文化の遺物集中 出土遺物全点数

	点取遺物 (II・III 層出土)	一括遺物 (耕作土等)	計
石刃鏃	13	1	14
広形石刃鏃	3		3
尖頭器	5		5
削器	2		2
搔器	2		2
彫器	1		1
楔形石器	2		2
石器破片	2		2
打製石斧	3		3
磨製石斧	3		3
石刃類	51	4	55
剥片	9		9
細片	7		7
礫片	13		13
石器計	116	5	121
土器片	≥23		≥23

自然面は岩屑・角礫面である。45は折断された石刃の接合資料である。1個体の石刃が8以上に折れ、そのうち打点側と末端部を除く6点が接合したものである。末端側2点(e・f)は、左側縁に微小剥離痕が連続し背付石刃様となっている。

53～61は幅2cm以下1.2cm超の小形の石刃である。10点出土したが折面接合により9個体となる。このうち56は蛋白石(オパール)製の稜付石刃である。横断面形は正三角形に近く、背面左側は調整面、右側は自然面となっている。左側縁に部分的な加工が施されている。残る53～55・57～61は黒曜石製で、背面剥離痕が基本的に全て腹面と同方向の剥離によるものであり、石刃核側面の調整の痕跡や自然面を持たない。いずれも欠損しており、打面が残っているのは61のみである。61には、打面付近の側縁に部分的な二次加工がみられる。また、54は側縁の微小剥離痕が目立つ。

62～74は幅1.2cm以下のごく小形の石刃で、所謂「細石刃」のサイズに近い。15点出土したが、全て欠損しており、折面接合により13個体となる。基本的に背面剥離痕は腹面と同方向であり、自然面を持たないが、71のみ左側縁末端側に横方向の剥離痕(石刃核の側面)が観察される。打面の残る62・67・69は、細かく調整された狭小な打面を持ち側縁がほぼ平行に走るなど、より大形の石刃と同様の形態的特徴を示している。62・65は側縁に微小剥離痕が目立つ。なお、69・72～74は光沢や透明感に乏しい灰色の特徴的な黒曜石が用いられており、同一母岩と考えられる。

剥片・細片 (Fig. 11-75～80・Fig. 12-81～86)

75・76は縦長剥片である。75は調整打面から石刃のような縦長の剥片を剥離したものであるが、背面は右方向からの先行剥離で被われており、石刃核の調整痕であろう。76は、縁辺に不規則な小剥離痕が顕著であり、また、磨耗や風化により光沢を減じている。

第二章 トコロチャシ跡遺跡群の全体試掘調査 (1999年度-2001年度)

Table 2 L (50) -95区周辺 石刃鏃文化の遺物集中 石刃鏃石器群属性表

図 番号	遺物 番号	写真 図版	器種	石材	自然面	被熱痕	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	接合 番号	完形	打点	備考	標高 (m)
1:	41:	1:	石刃鏃	黒曜石			6.4	1.2	0.2	2.1		1			15.393
2:	37:	1:	石刃鏃	黒曜石			6.2	1.1	0.3	2.1		1			15.416
3:	23:	1:	石刃鏃	黒曜石			4.6	0.9	0.3	1.1		1			15.402
4:	29:	1:	石刃鏃	黒曜石			4.7	1.0	0.3	1.6		1			15.402
5:	34:	1:	石刃鏃	黒曜石			5.4	1.1	0.2	1.9		1			15.410
6:	75:	1:	石刃鏃	黒曜石			5.0	0.9	0.2	1.1		1			15.388
7:	80:	1:	石刃鏃	黒曜石			4.1	1.1	0.2	1.3		1			15.398
8a:	135:	1:	石刃鏃	黒曜石			3.4	1.0	0.2	0.7	7			(排土資料)	
8b:	104:	1:	石刃鏃	黒曜石			0.9	1.0	0.2	0.2	7				15.339
9:	40:	1:	石刃鏃	黒曜石			2.9	0.6	0.2	0.5		1			15.413
10:	65:	1:	石刃鏃	黒曜石			2.7	0.9	0.3	0.7					15.350
11:	66:	1:	石刃鏃	黒曜石			3.0	1.1	0.2	1.0					15.361
12:	36:	1:	石刃鏃	黒曜石			2.9	1.1	0.2	1.0				赤褐色が僅かに入る黒曜石	15.406
13:	57:	1:	石刃鏃	黒曜石			2.1	0.9	0.2	0.4					15.407
14:	20:	1:	広形石刃鏃	黒曜石			4.6	2.8	0.8	8.9		1			15.450
15:	24:	1:	広形石刃鏃	黒曜石			4.1	2.4	0.5	3.6		1		赤褐色の網目が僅かに入る黒曜石	15.445
16:	31:	1:	広形石刃鏃	黒曜石			3.3	2.0	0.4	2.3				赤褐色が僅かに入る黒曜石	15.420
17a:	26:	1:	尖頭器	黒曜石			4.8	2.9	0.8	10.0	12			赤褐色の網目が入る黒曜石	15.415
17b:	55:	1:	尖頭器破片	黒曜石			2.1	1.8	0.6	1.5	12			赤褐色の網目が入る黒曜石	15.416
17c:	90:	1:	尖頭器破片	黒曜石			1.4	0.7	0.4	0.3	12			赤褐色の網目が入る黒曜石	15.414
18:	2:	1:	尖頭器	黒曜石			12.3	3.9	0.9	41.1		1		線状痕顕著	15.412
19:	3:	1:	基部加工尖頭器	黒曜石	節理?		8.8	3.3	1.2	31.0				断続的微小剥離痕、線状痕顕著	15.425
20:	12:	2:	削器	黒曜石			13.2	9.7	2.3	215.7		1		1:キズ顕著、石核様	15.405
21:	8:	2:	削器	黒曜石	角礫		11.2	4.0	1.7	78.9		1			15.407
22:	13:	2:	搔器	黒曜石	岩屑?		8.9	5.3	1.5	73.1		1		線状痕・磨耗顕著	15.408
23:	76:	2:	搔器	黒曜石			5.9	1.5	0.7	6.9					15.388
24a:	68:	2:	楔形石器	黒曜石			2.2	1.9	1.1	3.9	8				15.399
24b:	70:	2:	楔形石器	黒曜石			4.7	2.4	1.0	9.7	8			微小剥離痕	15.399
25:	51:	2:	石器破片	黒曜石			2.8	1.5	0.5	2.2				削器様、赤褐色の斑が入る黒曜石	15.407
26a:	54:	2:	彫器	黒曜石			4.4	2.4	0.7	7.9	3				15.416
26b:	35:	2:	石刃	黒曜石			10.9	2.5	0.7	18.5	3	1		基部加工、微小剥離痕	15.419
27:	1:	2:	打製石斧	黒曜石	岩屑		14.1	5.7	2.7	192.1		1		磨耗顕著	15.416
28:	64:	2:	打製石斧	黒曜石	岩屑		6.6	5.5	2.0	82.7				磨耗顕著、紫がかった赤褐色の網目が入る黒曜石	15.356
29:	6:	2:	磨製石斧	蛇紋岩			7.3	1.7	0.9	21.0		1			15.389
30:	4:	3:	打製石斧	安山岩	垂円礫		14.0	5.8	1.3	164.5		1			15.503
31:	7:	2:	磨製石斧	蛇紋岩			7.1	2.3	1.1	25.9		1		微小剥離痕	15.363
32:	5:	2:	磨製石斧	蛇紋岩			5.5	4.1	1.3	47.9		1			15.400
33a:	91:	3:	石刃	黒曜石			9.9	2.4	0.6	14.3	2	1			15.394
33b:	39:	3:	石刃	黒曜石			6.0	2.4	0.6	10.2	2				15.421
33c:	49:	3:	石刃	黒曜石			3.6	2.1	0.7	5.0	2			新鮮な剥離痕	15.393
34:	21:	3:	石刃	黒曜石	岩屑		14.1	2.3	0.6	18.3		1	1		15.414
35:	100:	3:	石刃	黒曜石			14.1	2.4	0.9	26.0		1	1	微小剥離痕、赤褐色の網目が入る黒曜石	15.421
36:	42:	3:	石刃	黒曜石			7.7	2.1	0.4	6.7		1		微小剥離痕	15.415
37:	17:	3:	石刃	黒曜石	白濁		12.2	2.6	0.7	27.4		1		部分加工、微小剥離痕	15.401
38:	25:	3:	石刃	黒曜石	角礫		12.6	2.3	0.5	20.7		1	1		15.417
39:	16:	3:	石刃	黒曜石	角礫		9.3	5.5	1.8	81.5		1	1	1:小剥離痕(挟入状)、微小剥離痕	15.383
40:	84:	3:	石刃	黒曜石			11.2	3.7	1.0	27.7					15.389
41a:	11:	3:	石刃	黒曜石	白濁		2.5	3.6	0.9	3.9	14			新鮮な剥離痕	15.407
41b:	9:	3:	石刃	黒曜石	角礫		8.0	3.6	0.8	23.6	14				15.414
41c:	10:	3:	石刃	黒曜石			2.0	3.0	0.6	4.0	14				15.415
42:	53:	3:	石刃	黒曜石			7.4	2.5	0.7	14.0		1		微小剥離痕、新鮮な剥離痕	15.404
43:	47:	3:	石刃	黒曜石			7.6	2.1	0.6	11.0		1		微小剥離痕、線状痕顕著	15.391
44:	77:	4:	石刃	黒曜石	白濁		2.5	2.3	0.4	1.8					15.392
45a:	97:	4:	石刃	黒曜石			0.8	1.8	0.3	0.4	4				15.408
45b:	85:	4:	石刃	黒曜石			1.1	2.3	0.3	0.4	4				15.358
45c:	86:	4:	石刃	黒曜石			1.9	2.3	0.3	1.8	4				15.391
45d:	120:	4:	石刃	黒曜石			0.5	1.0	0.3	0.2	4			破片	15.363
45e:	116:	4:	石刃	黒曜石			3.8	2.0	0.3	2.7	4			微小剥離痕	15.383
45f:	121:	4:	石刃	黒曜石			17.6	1.6	0.2	0.4	4			微小剥離痕	15.358
46:	72:	4:	石刃	黒曜石	角礫		6.0	2.1	0.6	8.4		1	1	微小剥離痕	15.381
47:	119:	4:	石刃	黒曜石			7.2	2.4	0.5	7.5		1		微小剥離痕	15.415
48:	30:	4:	石刃	黒曜石			7.1	2.4	0.8	12.7				微小剥離痕	15.412
49:	109:	4:	石刃	黒曜石			6.9	3.0	0.6	14.7					15.399
50:	74:	4:	石刃	黒曜石		ウロコ状ヒビ、やや変色	6.7	2.4	0.5	9.2				微小剥離痕	15.374

第二節 試掘坑の遺構各説

図 番号	遺物 番号	写真 図版	器種	石材	自然面	被熱痕	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	接合 番号	完形	打点	備考	標高 (m)
51:	27:	4:	石刃	黒曜石			4.8	3.0	0.5	9.3			1		15.418
52:	22:	4:	石刃	黒曜石	岩屑		5.2	2.1	0.5	5.0			1	微小剥離痕	15.412
53:	38:	4:	石刃	黒曜石			8.6	2.0	0.4	6.3					15.413
54:	131:	4:	石刃	黒曜石			5.4	1.6	0.6	4.5				微小剥離痕、(II層出土一括資料)	
55a:	43:	4:	石刃	黒曜石			2.2	1.4	0.3	1.2	6				15.425
55b:	71:	4:	石刃	黒曜石			2.9	1.3	0.4	1.6	6			微小剥離痕	15.391
56:	106:	4:	石刃(稜付)	蛋白石	円礫		3.8	1.3	1.0	4.0			1	部分加工	15.398
57:	133:	4:	石刃	黒曜石			1.9	1.3	0.2	0.4				(II層出土一括資料)	
58:	99:	4:	石刃	黒曜石			3.2	1.7	0.3	1.7					15.444
59:	117:	4:	石刃	黒曜石			2.6	1.8	0.3	1.8					15.387
60:	107:	4:	石刃	黒曜石		白濁・ヒビ	2.2	1.5	0.4	1.3				微小剥離痕	15.391
61:	132:	4:	石刃	黒曜石			5.6	1.9	0.4	5.8			1	基部加工、微小剥離痕、(I層出土一括資料)	
62a:	50:	4:	石刃	黒曜石			3.5	1.1	0.4	1.9	1		1	微小剥離痕	15.407
62b:	52:	4:	石刃	黒曜石			1.3	1.0	0.4	0.6	1				15.407
62c:	93:	4:	石刃	黒曜石			0.9	0.8	0.3	0.1	1				15.407
63:	33:	4:	石刃	黒曜石			4.2	1.2	0.3	1.4					15.435
64:	98:	4:	石刃	黒曜石			2.9	0.8	0.2	0.3				2点(折れた状態で出土)	15.406
65:	32:	4:	石刃	黒曜石			2.7	1.2	0.4	1.3				微小剥離痕	15.510
66:	67:	4:	石刃	黒曜石			1.8	0.8	0.3	0.4					15.394
67:	28:	4:	石刃	黒曜石			2.9	1.0	0.4	1.2			1		15.396
68:	134:	4:	石刃	黒曜石			2.0	0.9	0.2	0.3				(II層出土一括資料)	
69:	56:	4:	石刃	黒曜石			2.0	0.7	0.2	0.2			1	灰色の黒曜石	15.406
70:	45:	4:	石刃	黒曜石			3.6	0.9	0.2	0.7					15.422
71:	46:	4:	石刃	黒曜石			3.0	1.1	0.2	0.8					15.422
72:	95:	4:	石刃	黒曜石			1.9	0.6	0.2	0.3				灰色の黒曜石	15.404
73:	44:	4:	石刃	黒曜石			1.9	0.6	0.2	0.3				灰色の黒曜石	15.414
74:	118:	4:	石刃	黒曜石			1.5	0.4	0.1	0.1				灰色の黒曜石	15.399
75a:	102:		剥片	黒曜石			7.3	3.0	0.6	10.8	5		1	微小剥離痕	15.402
75b:	101:		剥片	黒曜石			3.1	2.1	0.3	2.8	5			微小剥離痕	15.402
76:	18:		剥片	黒曜石			5.8	2.7	0.5	7.7			1	小剥離痕、磨耗顕著	15.397
77a:	15:		剥片	黒曜石			5.7	5.0	1.2	18.8	10		1	微小剥離痕、赤褐色の網目が僅かに入る黒曜石	15.403
77b:	14:		剥片	黒曜石	岩屑		8.3	8.8	1.1	45.2	10		1	部分加工、赤褐色の網目が僅かに入る黒曜石	15.416
78:	92:		剥片	黒曜石		白濁	1.9	3.1	0.4	1.4			1	1	15.398
79:	81:		剥片	黒曜石			2.4	0.6	0.2	0.1					15.380
80a:	19:		剥片	黒曜石			4.4	3.2	1.0	10.2	11		1	部分加工	15.414
80b:	96:		剥片	黒曜石			6.7	3.2	0.9	9.9	11				15.399
81a:	48:		細片	黒曜石		白濁	1.6	1.6	0.4	0.7	9		1	石刃破片	15.402
81b:	78:		細片	黒曜石		白濁	0.7	1.9	0.3	0.4	9			石刃破片	15.393
82:	58:		細片	黒曜石			1.1	1.9	0.3	0.4					15.386
83:	108:		細片	頁岩		剥落・ヒビ	1.7	1.7	1.0	1.5					15.394
84:	73:		細片	黒曜石			0.3	1.0	0.4	0.1				石刃破片	15.368
85:	69:		細片	黒曜石	岩屑		2.0	0.5	0.2	0.1				微小剥離痕	15.388
86:	113:		細片	黒曜石		白濁	0.5	1.3	0.3	0.1				石刃破片	15.406
87a:	60:		礫片	溶岩(安山岩)		黒・赤化	6.6	5.4	3.3	104.6	13			擦痕	15.398
87b:	89:		礫片	溶岩(安山岩)		黒・黄化	5.6	4.7	5.2	101.3	13				15.376
87c:	112:		礫片	溶岩(安山岩)		黒・緑化	2.6	2.0	1.9	6.8	13				15.385
87d:	88:		礫片	溶岩(安山岩)		黒・緑化	2.6	1.9	1.3	4.1	13			擦痕	15.385
87e:	87:		礫片	溶岩(安山岩)		黒・緑化	4.4	2.1	2.0	19.8	13				15.389
87f:	83:		礫片	溶岩(安山岩)		黒・赤化	2.9	1.4	0.7	1.5	13				15.386
87g:	114:		礫片	溶岩(安山岩)		黒・赤化	2.4	2.2	0.5	1.0	13				15.392
88:	115:		礫片	溶岩(安山岩)	垂円礫	黒・赤化	2.5	3.6	0.6	4.9					15.389
89:	59:		礫片	溶岩(安山岩)			2.3	2.2	0.4	1.6					15.394
90:	82:		礫片	溶岩(安山岩)	垂円礫	黒化	2.3	2.7	0.5	2.2					15.385
91:	105:		礫片	溶岩(安山岩)		黒化	1.8	0.9	0.3	0.2					15.378
92:	110:		礫片	溶岩(安山岩)			1.5	2.0	0.2	0.6					15.370
93:	111:		礫片	溶岩(安山岩)		黒化	1.3	1.5	0.3	0.4					15.388
94:	79:		石器破片	黒曜石			1.4	0.5	0.2	0.1					15.398
95:	61:		土器片											3点	15.418
96:	62:		土器片											1点	15.410
97:	63:		土器片											1点	15.398
98:	94:		土器片											2点	15.396
99:	103:		土器片											16点以上	15.410

- ・完形(1):完形品の9割以上残存すると考えられるもの。
- ・打点(1):素材の打点が残存するもの。
- ・微小剥離痕:長さ2mm以下の剥離痕。
- ・小剥離痕:長さ2mm超20mm以下の剥離痕。

77・78・80は幅広剥片である。77は赤褐色の網目が僅かに入る黒曜石製で、背面は一部に岩屑面を残すものの求心的な先行剥離で被われている。下縁腹面に平坦な小剥離痕が連続する。80も背面に求心的な剥離痕を取り込んでおり、斜軸剥片となっている。背面左側縁の一部に部分的な二次加工が施されている。

79・81～86はその他の剥片・細片である。小片のため本来の全体形状は分かりにくい。81は石刃の頭部、84・86は石刃の破片の可能性もある。また83は灰色を呈する頁岩製で、ヒビやポットリッド状の剥落が観察されるため、被熱したと考えられる。

礫片・礫塊（Fig. 12－87）

同様の石質の礫片13点が出土し、うち7点の接合によって87のような礫塊が復元された。石材は安山岩質の溶岩と思われるが、外皮が煤様の黒色・黒褐色、その内部が橙褐色～緑灰色を呈し、被熱をうかがわせる。一部に擦痕を有する滑らかな面や光沢を有する面があるため、顔料原材の可能性があろう。

(2) 土器

石刃礫石器群に伴って少数ながら土器片が出土した。土器片には取り上げが困難な微細片が多かったが、主だったものは23点である。この23点も薄手の小片で非常に脆いため、バインダーによって処理した。

採取された土器片は約0.5cm角の資料のみで、そのうち7点の破片を接合資料3点に復元しえたが、接合しても最大2.5cm角以上にならない。基本的な成形は「紐作り」による。口縁部片、もしくは粘土帯接合部を残す胴部片と判断される例が数点ある。土器は最少でも2個体分ある。石刃礫石器群に共伴するトコロ14類土器（駒井編1963）や湧別市川遺跡出土土器（湧別市川I群：福田編2015）の特徴から外れる要素は認められない。

個体1：器厚0.4～0.5cmの薄手深鉢とみられる個体が1点ある（Fig. 3－95・96・99）。バインダー含浸後の色調は、外面が橙色、内面が明褐色～にぶい橙色。焼成温度が低く、胎土には有機物（植物質）が混和される。内外面に条痕文（横方向、間隔均等）とみられる凹列が残るが、小礫の脱落空隙（0.3～0.5cm）と混在し、表面観察からは両者を区別しがたい。体部文様は確認できない。

個体2：器厚約0.3cmの薄手深鉢とみられる個体が1点ある（Fig. 3－98）。細片2点を接合したものである。バインダー含浸後の色調は、外面が褐色、内面がにぶい褐色。個体1よりは焼成良好。砂粒を多く含む粘土を使うため、表面がザラつく。ヨコナデ痕とみられる凹列が内外面にわずかに残る。無文土器であろう。

(3) その他の遺物

上述した石刃礫文化の遺物の他に、Ia・Ib層から石器類94点、土器片40点の計134点が発見されている。これらは確実に石刃礫文化に関連するような特徴を備えた遺物を除いたものであり、多くが小片であるが、そのほとんどが後の時代の遺物と考えられる。（山田 哲・中村雄紀・福田正宏）

遺物分布

本発掘区（Fig. 2）では、先述したように耕作による攪乱によって遺物包含層であるII層・III層が残存する範囲が限られており、またそうした範囲においても包含層がある程度の耕作の影響を受けている

可能性がある。したがって、遺構の検出や遺物の分布状態の把握に支障を伴っていることに留意しなければならないが、遺構は発見されていない。

直接確認できた遺物の分布（巻頭写真 Front 1-1、Fig. 3）は径 1.5m ほどの範囲内であり、その北西側・北東側・南東側の 3 方向は攪乱によってほぼ限られている。しかしながら、遺物の分布が狭い範囲に集中する一方で、包含層である II 層・III 層が残る南西側の区域や他の区域では遺物が全く出土しなくなることや周囲の攪乱区域内の耕作土からも石刃鍬文化関連遺物がほとんど確認されていないことから、この遺物集中の本来の範囲も現在の分布範囲から大きく広がるものではないと推測される。すなわち、一つの遺物集中部の主要な部分を発掘した可能性が高いと思われる。

こうした中で、石器製作作業の痕跡に乏しい（第六章第一節参照）にも関わらず、主に製品（ツール）からなる石器群が狭い範囲に集中し、ときに折重なるように出土する状況からは、かなり意図的に遺物が配置されたことが窺われ、各器種の分布にも特徴がある。

石刃鍬は、耕作・攪乱土出土の 1 点（8a）を除く 13 点が基本的に遺物分布の西部から出土した。このうち 10 点（2~9・12・13）が径 0.5m の範囲に集中し、南西側にやや離れる 2 点（10・11）は基部片である。これとは対照的に、広形石刃鍬（14~16）は遺物分布の東部から出土した。また、尖頭器類（17~19）は北東部に偏る。削器（20・21）、搔器（22・23）、彫器（26a）等は遺物分布の中央付近に位置するようである。磨製石斧（29・31・32）もこれに近いが、打製石斧（27・28・30）は周縁部から出土するように見える。石刃（33~53・55・56・58~67・69~74）は概ね全体に広く分布するが、比較的大形の石刃（33・34・36~39・41・42 等）は中央付近に著しく集中し、ごく小形の石刃（62~67・69~74）は南部に偏る。この他に、礫片（87~93）は遺物分布の北西部に、土器片（95~99：網掛表示）は北東部にまとまる。

このように各器種が特徴的な様相を呈しながら、遺物分布の中央付近で南北 0.4m、東西 0.8m ほどの環状の密集をなしていることは非常に興味深い。確認された接合資料は少ないが、幾つかはこの環状部分をまたいで接合している。また、礫片以外で被熱痕跡の顕著な石器類 10 点のうち 8 点（37・44・50・60・78・81a・81b・83）は、環状部分の南部 0.35m×0.1m ほどの範囲にまとまっており、この場所で火が焚かれた可能性は高いだろう。

（山田 哲・中村雄紀）

2 XCV (95) —55 区 縄文早期竪穴

調査の経緯

XCV-55 区において、地表下約 50cm で遺構の覆土と思われる暗褐色粘質土層を検出した。この層の厚さは約 20cm である。層序は以下のとおりである（Fig. 13）。1 層：耕作土。2 層：暗褐色粘質土。ロームブロック、黒色土粒を含む。遺構覆土。3 層：茶褐色砂質土。粘性強い。いわゆる地山。2 層中からは東釧路式系の土器底部が出土した（Fig. 13-1）。

遺構

試掘坑の範囲では壁の立ち上がりは確認できなかったため、遺構の形状や大きさは不明であるが、Fig. 13 土層断面図の3層上面を床面とする、縄文早期の竪穴であると考えられる。床面上では、3層上面に掘り込み面をもつ径12cm、深さ18cmのピットが検出されている。（高橋 健）

遺物

Fig. 13-1は縄文早期の東釧路式系土器の底部である。底面が外側にやや張り出す器形で、外面には組紐圧痕文が縦方向に連続して押捺されている。

小括

試掘坑の範囲のみでの検出であるため確言はできないが、本遺構は埋土の様相からすると竪穴の床面と判断できる。埋土からは縄文早期後半の土器が出土しており、その時期の遺構である可能性が高い。

（熊木俊朗）

3 XXV (25) -24区周辺 縄文前期～中期集石

調査の経緯

XXV・XXVI-24区の地表下約50cm～80cmで集石を検出したが、試掘坑の範囲内では明確なプランを検出することはできなかった。層序は以下のとおりである（Fig. 14）。1層：耕作土。2層：黒色土。攪乱でしまり弱い。3層：黒色土。4層：黒色土。しまり弱く、茶褐色土混じる。5層：焼土。炭化物を少量含む。6層：茶褐色土。7層：焼土。8層：茶褐色土。礫が多く混じる。集石遺構の層。9層：漸移層。10層：黄褐色土。いわゆる地山のローム層。3層と6層からは土器片と剥片石器が多量に出土した。

遺構

集石遺構は8層の上面に形成されており、その8層の上面は皿状に凹んでいるが、特に掘り込み等は見られなかった。集石は円礫と角礫の両方を含み、径約5cm～25cmで、一部は焼けている。集石の上面に貼り付いてトコロ6類土器（Fig. 15-5）が出土し、集石中からも剥片石器が出土した。集石の規模であるが、試掘坑内で確認された約1.4m×0.6mの範囲の外まで広がっていることは確実であるが、全体の大きさは不明である。（高橋 健）

遺物

Fig. 15は試掘坑内から出土した土器である。1～3はFig. 14-1～4層から、4～11はFig. 14-6層以下から出土している。1・2はオホーツク貼付文系土器。1は肥厚帯を有する口縁部で、口唇部外縁に刺突のある貼付文を有している。2は口縁部で肥厚帯の有無は不明である。刺突のある貼付文が2条確認できる。3～8・10は縄文中期の土器である¹⁾。3・5・6は北筒式トコロ6類の口縁部。3（PL. 5-1）は胎土に繊維をほとんど含まず、口縁部肥厚帯上に突引文を有する。5（PL. 5-4）・6（PL. 5-3）は胎土に繊維を含み、口縁部肥厚帯上に円形刺突文を有する。7・8は口縁部を欠損しているが、北筒式土器の口縁部近くの破片であり、円形刺突文が確認できる。7・8とも胎土に繊維を含む。10は北筒式土器

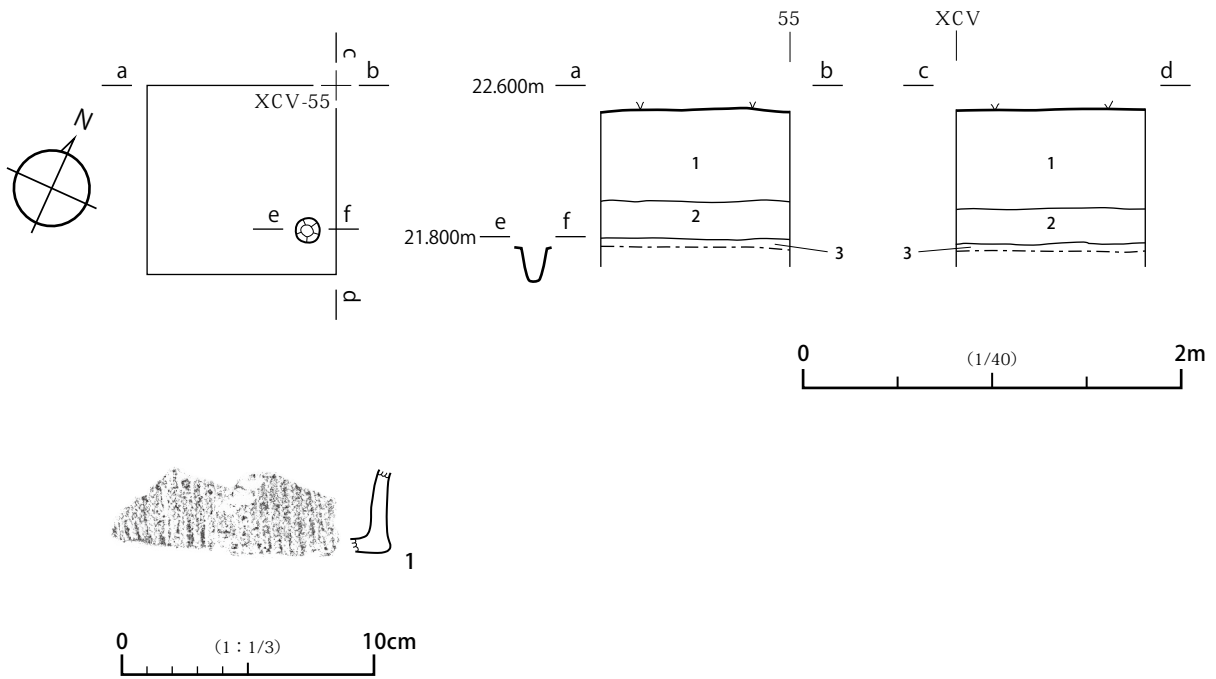


Fig. 13 XCV (95) -55 区 縄文早期竪穴および出土土器

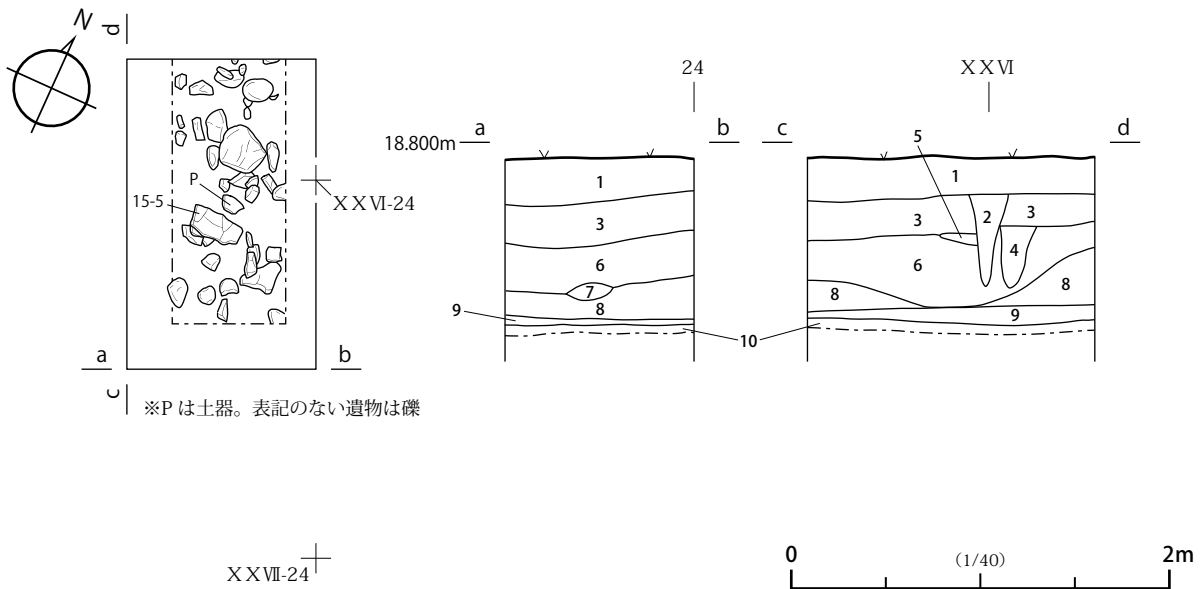


Fig. 14 XXV (25) -24 区周辺 縄文前期～中期集石

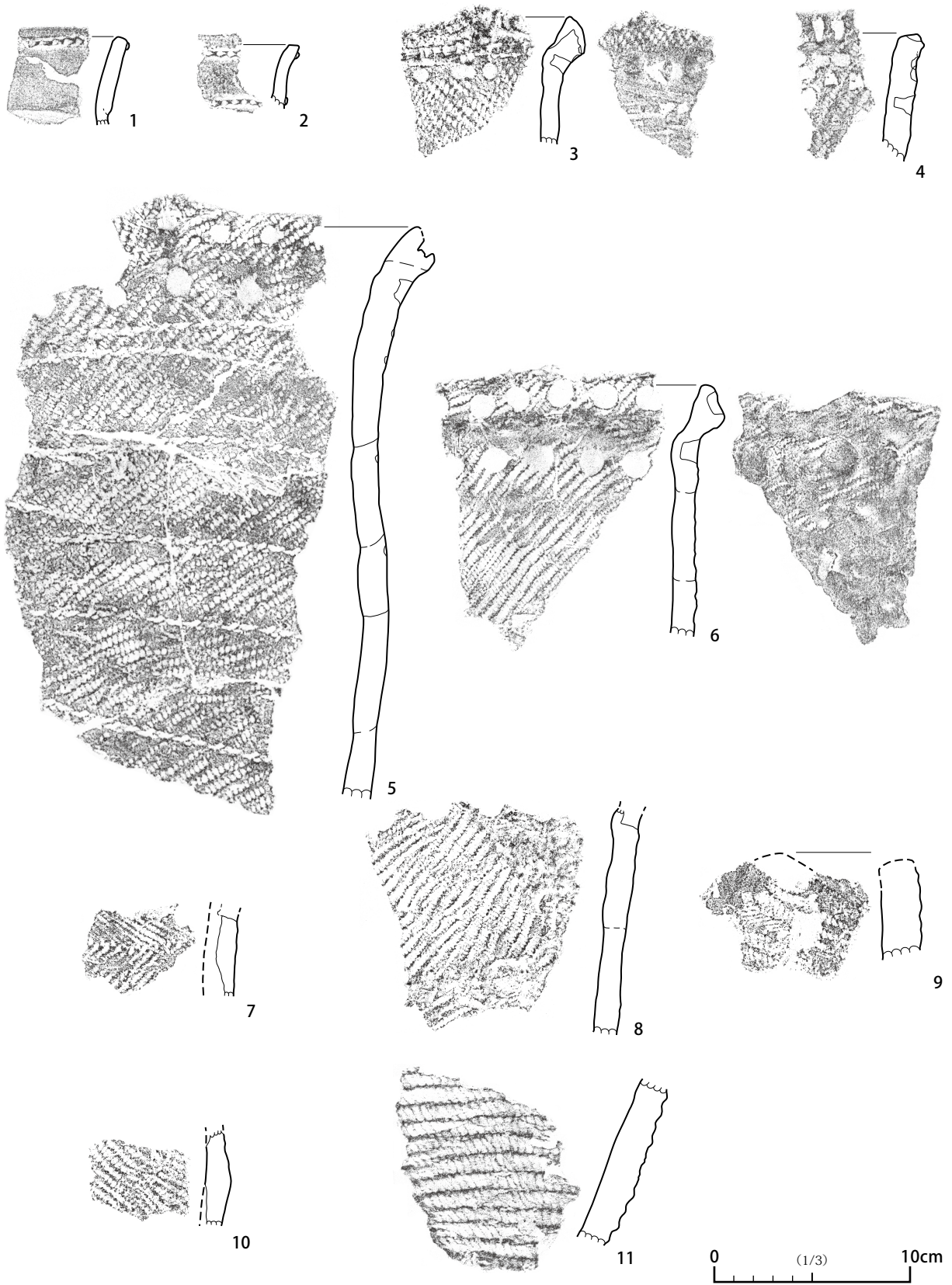


Fig.15 XXV (25) -24区周辺 縄文前期～中期集石出土の土器

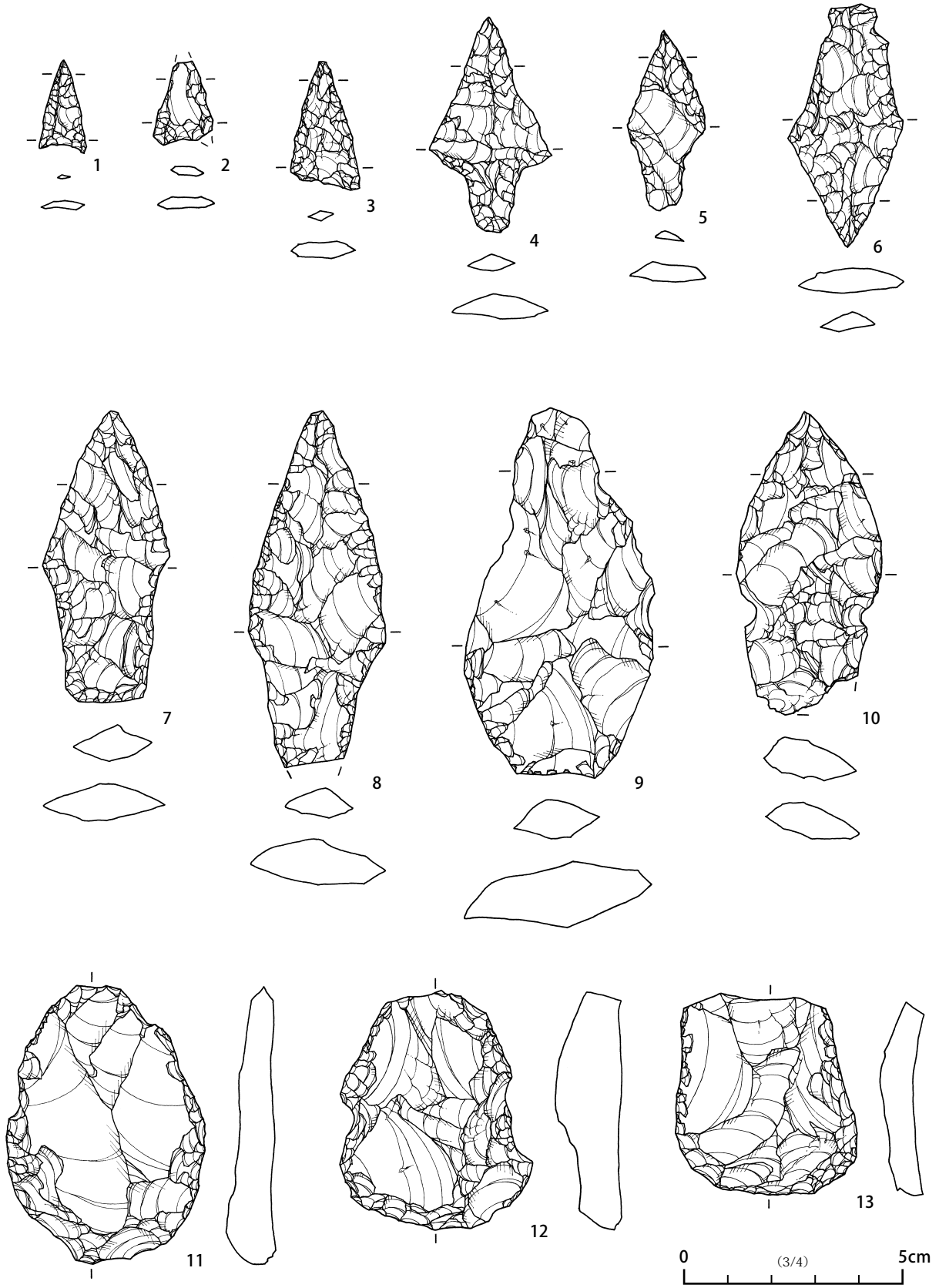


Fig.16 XXV (25) -24区周辺 縄文前期～中期集石出土の石器1

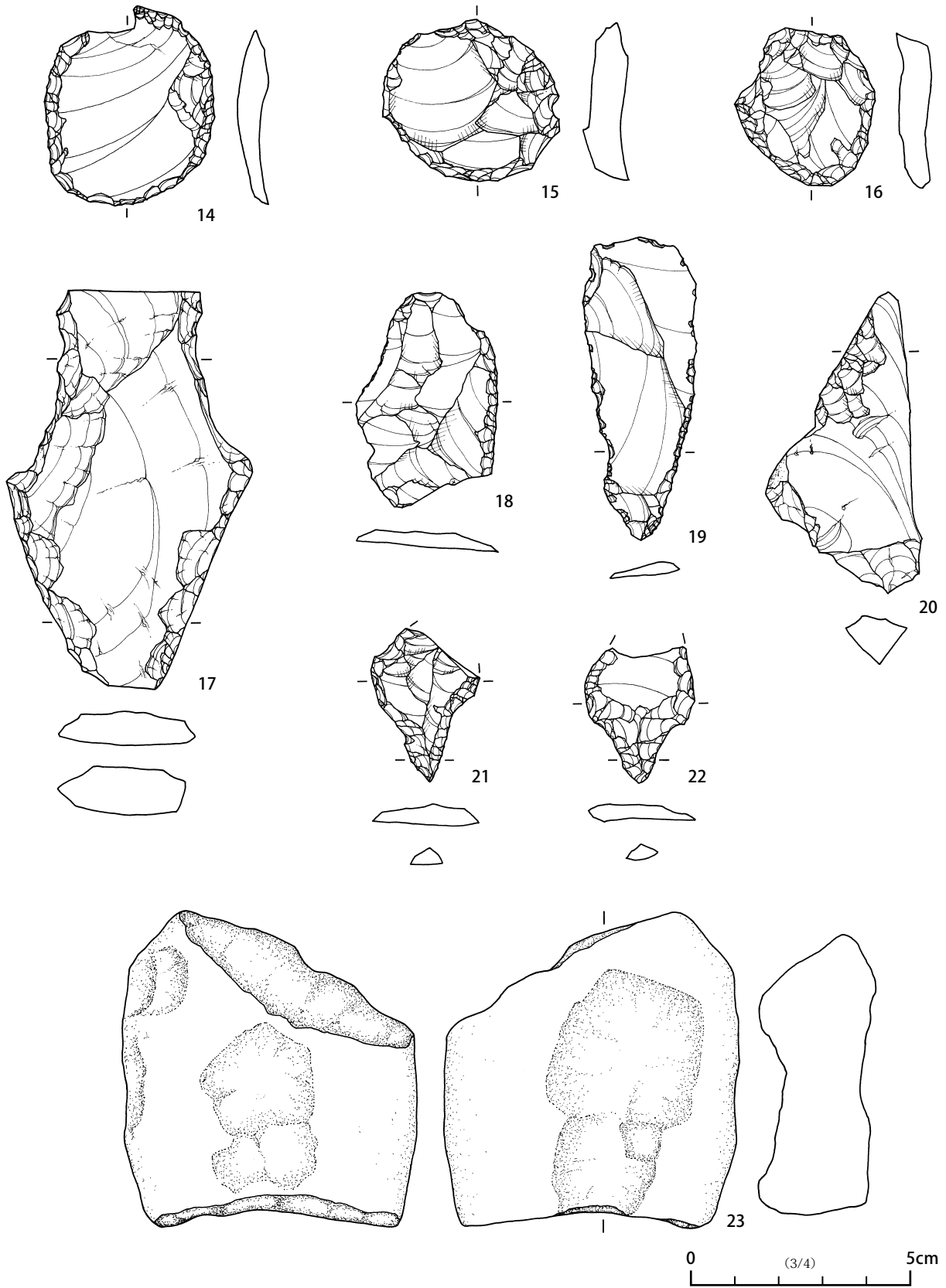


Fig.17 XXV (25) -24区周辺 縄文前期～中期集石出土の石器 2

とみられる胴部破片で、胎土には繊維が含まれている。4 (PL. 5-2) はモコト式土器とみられる口縁部。口唇部に肥厚帯や貼付はないが、口唇が折り返し状に作り出されており、口唇面とその直下には刺突文が、その下部には円形刺突文が施されている。胎土に繊維を含む。9 (PL. 5-5) は厚手の土器で、口縁部の山形突起部分の破片とみられる。文様は合撚の縄文とみられるが原体は判然としない。胎土には繊維が含まれる。縄文前期の土器であろう。表面には被熱した痕跡が認められる。11 (PL. 5-6) はいわゆる綱文式土器の胴部破片。胎土に繊維が含まれており、焼成は堅緻である。

Fig. 16・17 は試掘坑内から出土した石器。1・5・8・16 は Fig. 14-1~4 層から、他は Fig. 14-6 層以下から出土している。Fig. 16-1~5 (PL. 5-7~11) は石鏃。すべて黒曜石製で、2 は被熱により光沢が消失している。1~3 は弱い抉りのある凹基で、長さが 2~3cm の比較的小型のサイズである。4 と 5 は茎部をもち、前者は基部縁辺に擦痕調整が認められる。Fig. 16-6 (PL. 5-12) は石匙。黒曜石製である。外形は五角形を呈する。折損した両面調整尖頭器の折れ面付近につまみ部を作出し、石匙に転用している。Fig. 16-7~10 は両面調整尖頭器。すべて黒曜石製で、7 は赤褐色が入る。7 (PL. 5-13) と 8 (PL. 5-14) は基部が区分される形態をもった尖頭器で、前者は五角形状を呈し、平らな基部をもつ。9 は器体が粗い剥離により調整され、縁辺もジグザグであるため、尖頭器の未成品と考えられる。10 (PL. 5-15) は最大幅部分の直下に抉りをもつ尖頭器である。Fig. 16-11~13・Fig. 17-14~16 は搔器。すべて黒曜石製で、16 には僅かに赤褐色が入る。12 (PL. 5-16) は被熱により表面の光沢が消失している。すべて剥片を素材とし、腹面側への内湾の強い端部側に刃部が作出されている。形態加工として側縁が緩い弧状か直線状に加工されているが、12 は両側縁に抉り部をもつ。16 は背面と腹面の両方で傷が多く、刃部のリダクションが著しい。Fig. 17-17~20 は削器。17 は凝灰岩製で、18~20 は黒曜石製である。17 (PL. 5-18) は板状に剥離された剥片を素材とし、両側縁の中央部付近に内湾する急角度の調整が施された五角形状の削器である。18~20 は比較的縦長の剥片を素材とし、側縁の背面側に加工を施している。18 は尖頭器等の両面調整石器の調整剥片が用いられている。Fig. 17-21・22 は石錐。すべて黒曜石製である。剥片を素材とし、21 が素材末端部側、22 が素材打点部側とそれぞれ素材の厚みの大きい部分に刃部が形成される。21 は背面側への急角度の剥離、22 は両面加工により刃部が調整されている。刃部縁辺の摩耗や擦痕は認められない。Fig. 17-23 (PL. 5-17) は凹石。やや粗粒な砂岩の円礫が用いられている。全体形状は不明であるが、正面と裏面に凹みが認められる。

(熊木俊朗・夏木大吾)

小括

集石の上面に貼り付いて出土した Fig. 15-5 の土器がこの遺構に伴うとみるならば、この集石は縄文中期トコロ 6 類の時期に形成された蓋然性が高いが、他の出土土器の内容も考慮すると形成時期が前期まで遡る可能性も否定できない。集石の性格としては、礫の一部が焼けている点、土器や石器が比較的高い密度で出土している点が注目される。

(熊木俊朗)

4 LXXV (75) -90 区 縄文前期～中期遺物包含層

調査の経緯

LXXV (75) -90 グリッド交点に 1m×1m の試掘坑を設定して掘り下げたところ、耕作土下に 40cm 弱の厚さで黒褐色土の堆積が確認され、さらにその堆積の下面が傾斜している様子が確認されたため、試掘坑を東側に 1m 拡張して土層堆積や遺構の有無を精査した。黒褐色土の堆積の下部には溝状の落ち込みが確認されたが、遺構とは認定できず、自然地形の落ち込みと判断した (Fig. 18)。層序は以下のとおりである。1層：耕作土。2層：黒色土。3層：黒褐色土。ロームブロックを含む。4層：黒褐色土。3層より色調がやや明るく、ロームブロックをやや多く含む。5層：黒色土。6層：茶褐色土。ローム層への漸移層。7層：黄褐色土。いわゆる地山のローム質土。

遺物

Fig. 18-1～3 は 2層より下位から出土した土器。1 は縄文中期北筒式とみられる胴部破片で、胎土には繊維が含まれる。2・3 は回転押型文が施された胴部破片で、縄文前期後半～中期前半の平底押型文土器とみられる。胎土に繊維は含まれていない。

小括

縄文前期～中期の遺物包含層とみられるが、遺構の存在は確認できなかった。周辺地点の状況を見ると、次項に記す LXXX (80) -95 区では縄文前期～中期の可能性のある集石が確認されているものの、ほかに遺構や包含層の存在は確認されておらず、周囲に広範囲にわたって包含層が遺存している可能性は低い。本試掘坑の地点にのみ遺物包含層が確認された理由としては、自然地形の落ち込みにより耕作の影響を免れた可能性なども考えられる。 (熊木俊朗)

5 LXXX (80) -95 区 縄文前期～中期 (?) 集石

調査の経緯

LXXX (80) -95 区の地表下 45cm～55cm で凝灰岩の礫 3点と黒曜石の剥片 1点がややまとまった形で出土した (Fig. 19)。周辺を精査したが、掘り込み等の遺構は確認できず、遺物もこれら以外には検出されなかった。層序は以下のとおりである。1層：耕作土。2層：黒褐色土。ロームブロックを含む。ローム層への漸移層。3層：黄褐色土。いわゆる地山のローム質土層。前述の礫と剥片は 2層から検出している。

小括

確認できた出土遺物はわずか 4点であり規模はきわめて小さいが、集石として扱っておく。土器が伴っておらず時期は判然としないが、他の地点の類例や、近隣の LXXV (75) -90 区で確認された遺物包含層の存在から判断すると、縄文前期～中期に属する可能性が考えられる。 (熊木俊朗)

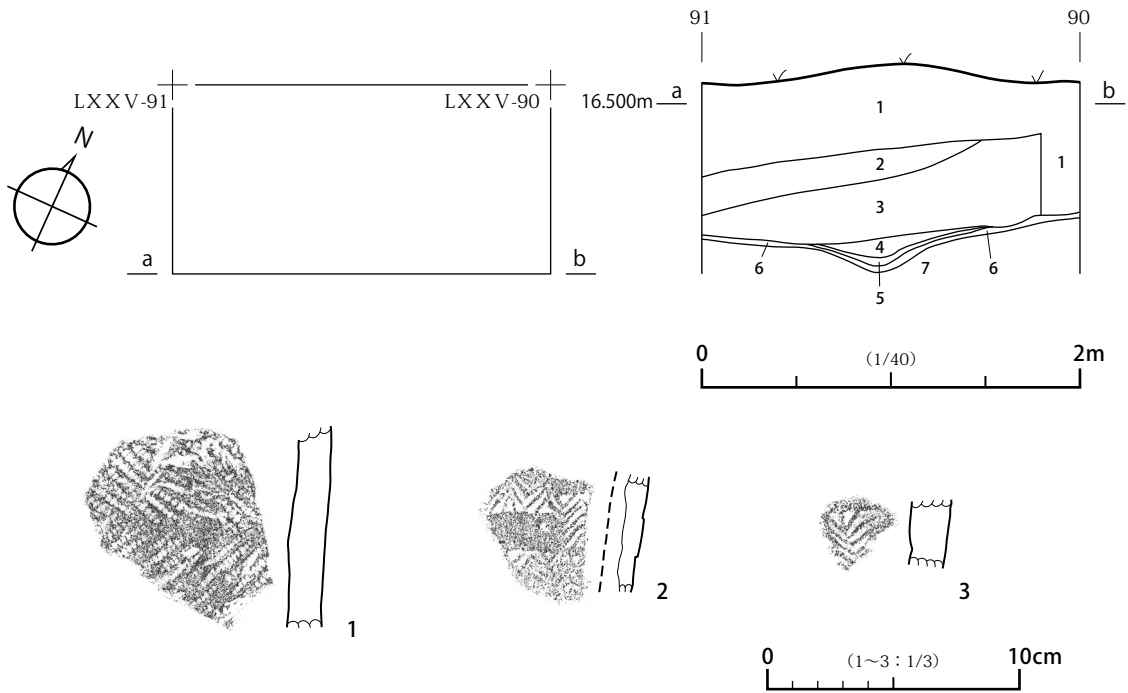


Fig. 18 LXXV (75) -90 区 縄文前期～中期遺物包含層および出土土器

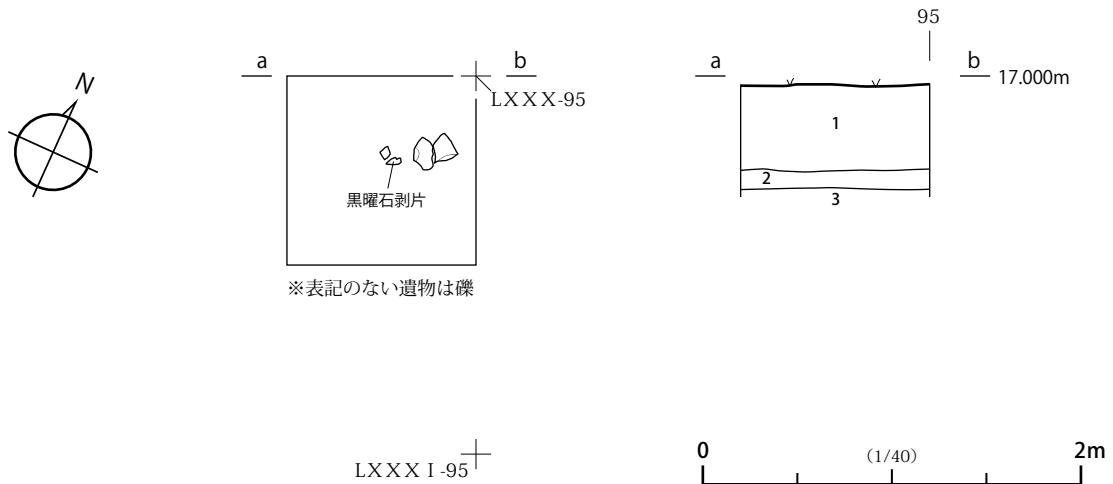


Fig. 19 LXXX (80) -95 区 縄文前期～中期(?)集石

6 C（100）－60区周辺 縄文中期竪穴

調査の経緯

C（100）－60区において、地表下約70cmで遺構の覆土と思われる茶褐色土を検出し、さらに地表下約100cmで試掘坑東側において焼土を検出した（Fig. 20）。焼土が伴う床面を出した段階で発掘を中止したが、確認のために試掘坑北西隅を掘り下げたところ、地表下約130cmでやはり焼土を検出した。層序は以下のとおりである（Fig. 20）。1層：耕作土。2層：黒褐色土。しまりあり。旧耕作土。3層：茶褐色土。ロームブロックが多く混じる。4層：茶褐色土。しまりなし。5層：茶褐色土。炭が多く混じる。しまりあり。6層：茶褐色土。明茶褐色砂、礫、炭が混じる。しまりなし。7層：焼土。骨、炭が多く混じる。8層：明茶褐色砂質土。しまりなし。9層：明茶褐色砂質土。炭が混じる。しまりなし。10層：焼土。11層：明茶褐色砂質土。

遺構

2箇所の焼土はいずれも炉だと考えられる。東側と西側の焼土が伴う床面をそれぞれa床、b床とした。a床は8層上面、b床は11層上面に当たる。この部分では竪穴住居が重複していると推測されるが、いずれも壁の立ち上がりは検出されていない。覆土中およびa床の床面からは縄文中期を中心とする土器片、石器が出土している。したがってa床は縄文中期の竪穴住居のものであると考えられる。b床については調査面積が狭いこともあり、覆土・床面のいずれからもほとんど遺物が得られなかった。したがって時期的にa床に先行することは確実であるが、時期不明である。（高橋 健）

遺物

Fig. 20-1～5は土器。1・2・4・5はa床、3は耕作土（Fig. 20-1層）から出土している。1～4は縄文中期北筒式とみられる土器の胴部破片。いずれも胎土に繊維を含む。5も胎土に繊維を含む土器の胴部破片。北筒式とみられるが縄文の特徴がやや特異であり、縄文晩期末～続縄文初頭の土器である可能性も捨てきれない。

Fig. 22は石器。1・3・4はa床、2・5・6・8はFig. 20-2～4層中、7と9は耕作土（Fig. 20-1層）から出土している。Fig. 22-1（PL. 5-19）は尖頭器。黒曜石製である。背面は両側縁方向から中心へ直行する丁寧な薄い剥離によって整えられ、裏面側は右肩上がりの斜状平行剥離によって器体が調整され、側面観からみた側縁は直線的で、断面はレンズ状をなす。分類上尖頭器としたが、先端部はやや丸みを帯び、基部付近には両側縁合わせて四か所の抉り部をもち、精製品のナイフと考えられる。Fig. 22-2（PL. 5-20）は筥形石器。黒曜石製である。縦長剥片を素材とし、背面の大部分を覆うような平坦剥離によって調整されている。基部と端部側は弧状に整形され、腹面側にも端部側から複数の平坦剥離が施されている。両側縁にはやや基部よりの位置に抉り部分が作出されている。Fig. 22-3～5・8は削器。3・5・8は黒曜石製で、4は凝灰岩製である。5の黒曜石は灰黒色を呈する。3は比較的大きな円礫において剥離された、薄手の湾曲の強い剥片が素材として用いられ、片側縁において弧状の刃部が作られている。4は扁平な円礫の長軸方向に並行する片側縁辺と一端に加工を施している。5は正面に円

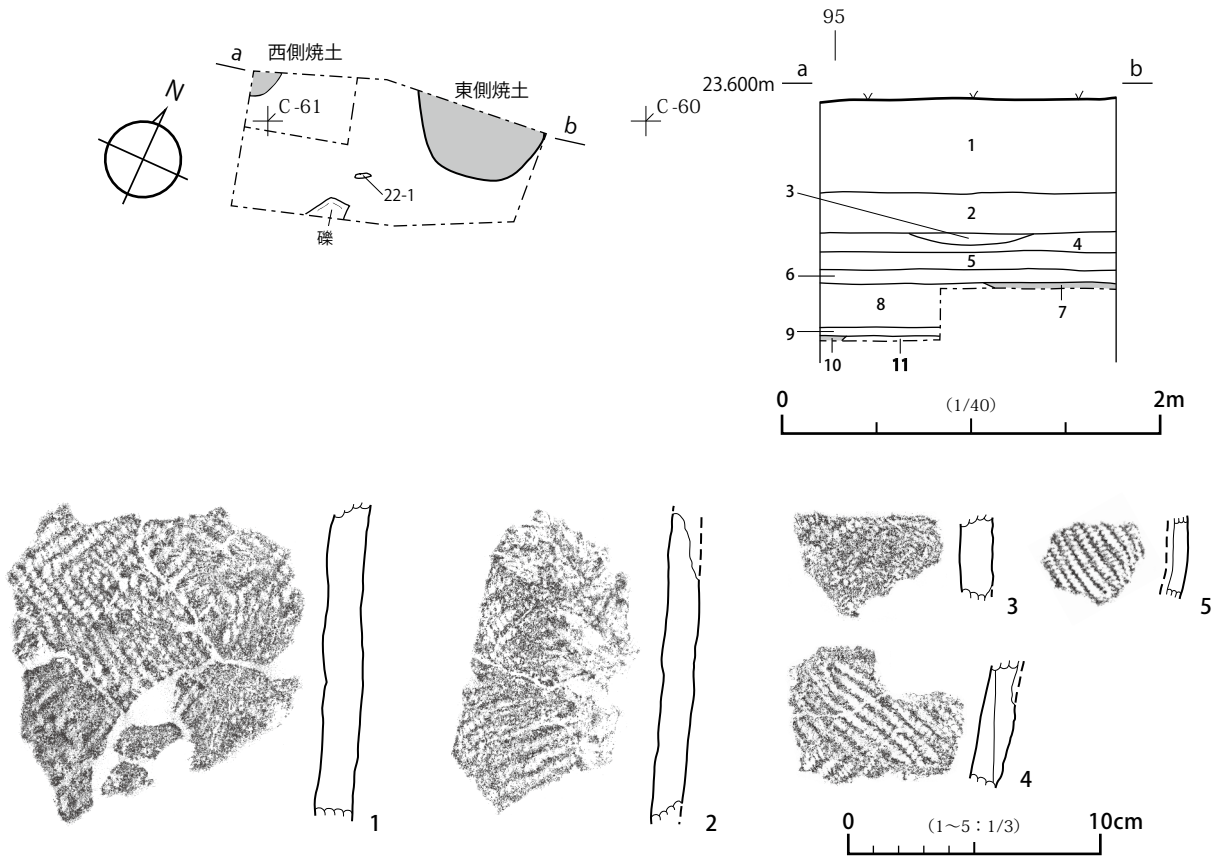


Fig. 20 C (100) -60 区周辺 縄文中期竪穴および出土土器

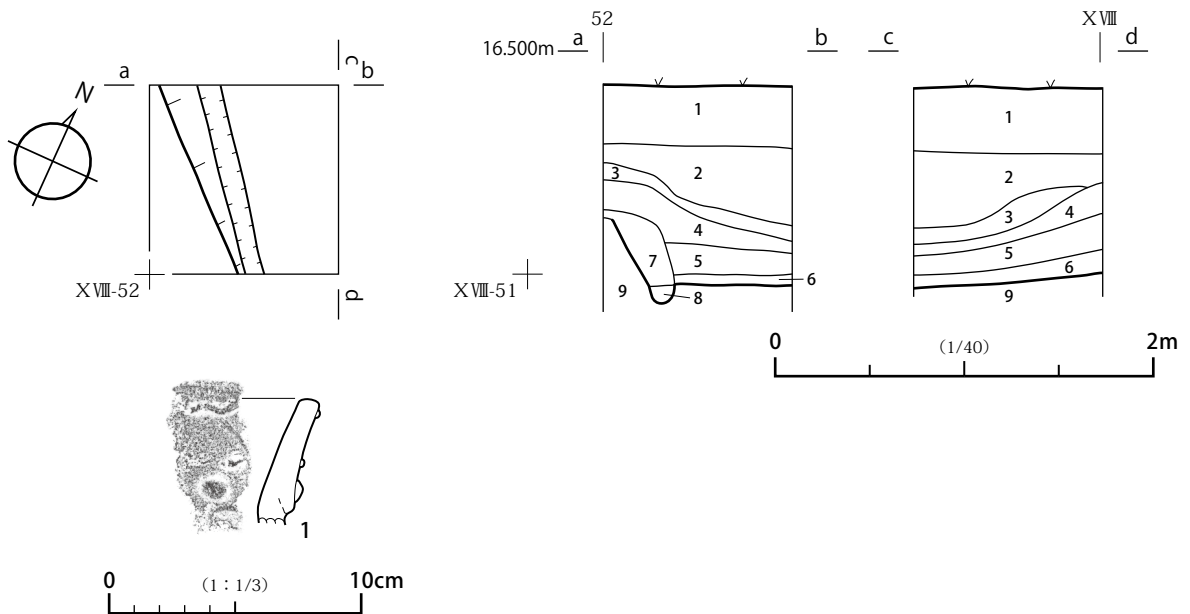


Fig. 21 XVIII (17) -51 区 オホーツク 11 号竪穴および出土土器

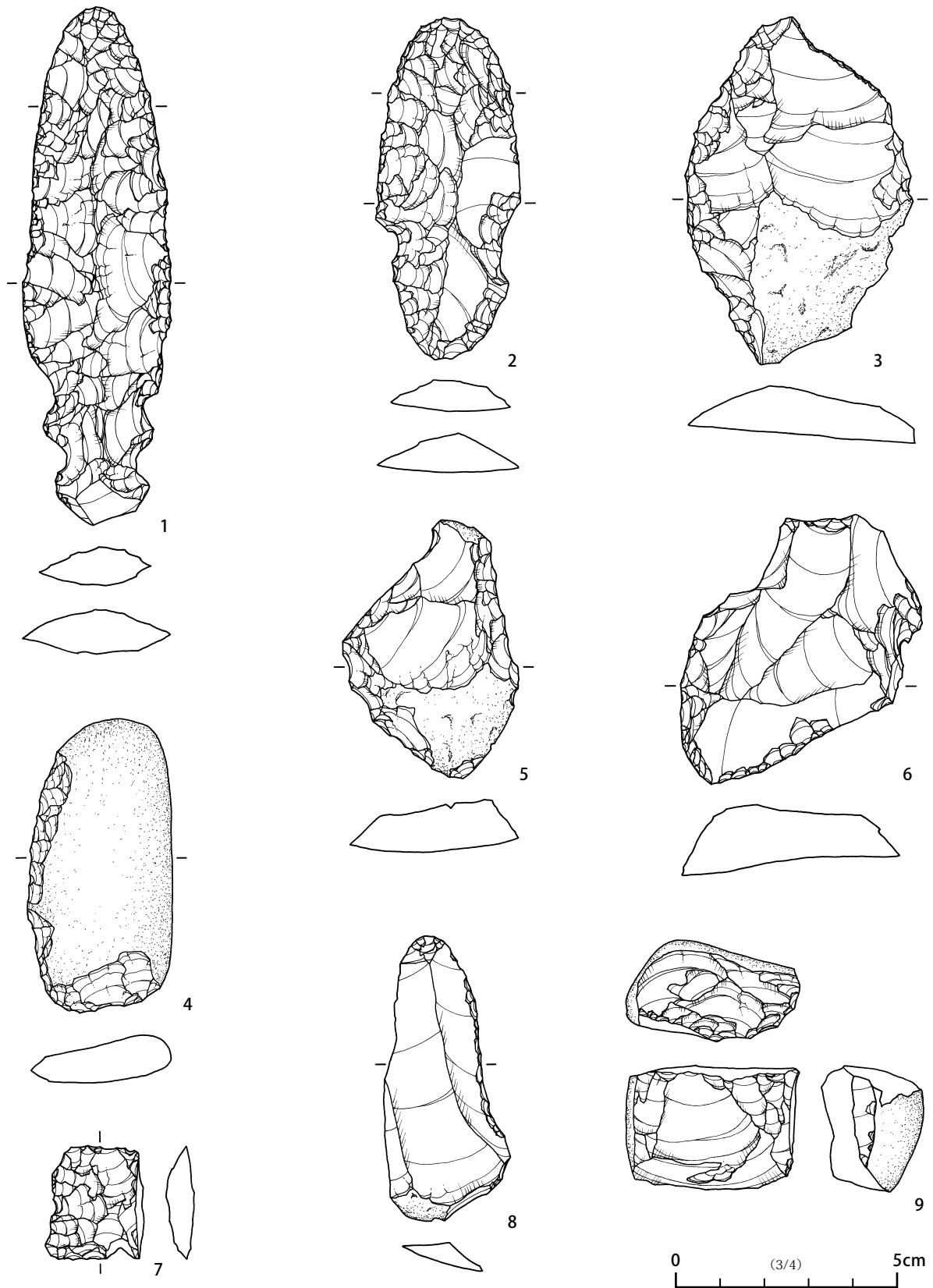


Fig. 22 C (100) -60 区周辺 縄文中期竪穴出土の石器

礫面が残り、扁平な石核を素材とし左側縁に鋸歯状の刃部を作出している。8は縦長剥片の右側縁に直線状の刃部が形成され、端部付近には円礫面が認められる。Fig. 22-6は搔器。黒曜石製である。厚手の剥片を素材とし、その端部に刃部が作出され、刃部は基部方向にやや右肩下がりとなる。Fig. 22-7は楔形石器。黒曜石製である。厚さは6mmと薄く、両面加工である。石鏃作成時の失敗品が転用された可能性がある。Fig. 22-9は石核。黒曜石製で、僅かに茶褐色が入る。黒曜石の小型円礫を用いている。細かな打面縁辺調整をともなう複剥離打面で、正面の広い面で剥片の剥離作業がおこなわれている。石鏃等のサイズの小さな石器の素材剥片を生産するための石核と考えられる。

(熊木俊朗・夏木大吾)

小括

炉を伴う竪穴の床面とみられる遺構面が、上下に重複して二面確認された。上層の遺構面(a床)は縄文中期のもものとみられるが、下層の遺構面(b床)は時期不明である。どちらの遺構面もごく狭い範囲の調査のみであるため、遺構の規模や形状等の詳細は不明である。

(熊木俊朗)

7 XVII (17) -51区 オホーツク11号竪穴

調査の経緯

本試掘坑が設定されたXVII (17) -51区は、1960年度および1963年度の調査時には竪穴の窪みが確認されていた地点であり(付図 App. Fig.)、本試掘坑の位置はその窪みの西側の縁に相当するが、試掘坑の調査時には、おそらく耕作等の影響で窪みの痕跡はすでに確認できなくなっていた。調査を開始すると耕作土の下部に遺構の埋土とみられる暗褐色土や黒色土の堆積が確認されたため、さらに掘り下げると地表下105cmで竪穴床面とみられる遺構面と幅10cmほどの溝が確認され、遺構の壁とみられる地山の立ち上がりも検出された(Fig. 21)。層序は以下のとおりである。1層：耕作土。2層：暗黄褐色土。3層：黒色土。4層：暗黄褐色土。ロームブロックを含む。5層：暗褐色土。しまり弱。6層：黄褐色土。ローム質土を主体とし、暗褐色土が混じる。7層：黄褐色土。6層よりも黄色みが強い色調。ロームブロックを含み、しまりが強い。8層：暗黄褐色土。9層：黄褐色土。いわゆる地山のローム質土。竪穴は4層中から掘り込まれたとみられ、4層と5層が竪穴の埋土、6層が竪穴床面直上の堆積土、7層が竪穴壁際の堆積土(いわゆる三角堆積)に相当すると考えられる。

遺構

幅約10cm、深さ約10cmの溝が竪穴床面と見られる面から掘り込まれており、その西側に沿うように遺構の壁が立ち上がっている。掘り込み面からの壁の深さは約30cmである。Fig. 21のc-dラインでの土層図を見ると、同ラインのc側からd側(北から南の方向)に向かって土層堆積が立ち上がっており、その点から判断すると、おそらく同ラインのd側、すなわち本試掘坑の南縁からそう遠くない場所に竪穴の南側の壁(立ち上がり)が存在する可能性が考えられる。この推定が正しければ、本試掘坑は、この竪穴の南西角に近い場所に位置していることになろう。ただし調査範囲はごく限られており、

遺構の規模や形状等の詳細は不明である。

遺物

Fig. 21-1 は耕作土（Fig. 21-1 層）から出土したオホーツク貼付文系土器。口縁部に肥厚帯を有し、肥厚帯上に指でひねった貼付文が2条と、粒状の貼付文が付されている。

小括

竪穴の壁際に設定された周溝の特徴からみて、この遺構はオホーツク文化期の竪穴住居跡とみられる。前回報告書（東大考古学研究室・常呂実習施設編2012）で報告されたオホーツク10号竪穴からの連番で、11号竪穴として扱う。前述のように本地点ではかつて竪穴の窪みが確認されていたが、調査時にはその痕跡が判然としなくなっており、今回の試掘調査によって竪穴住居跡の存在が改めて確認された。かつての調査で記録された窪みの位置と、今回の試掘調査で検出された竪穴の壁の位置もほぼ整合しているといえよう（付図 App. Fig.）。

（熊木俊朗）

8 XXIV (24) -51 区 オホーツク 12 号竪穴

調査の経緯

本試掘坑が設定された XXIV (24) -51 区も、1960 年度および 1963 年度の調査時には竪穴の窪みが確認されていた地点であり（付図 App. Fig.）、本試掘坑の位置はその窪みの西側の縁に相当するが、試掘坑の地点は調査時にはすでに耕地となっており、地表面は平坦に均されていて竪穴の窪みは全く確認できない状態であった。調査を開始すると耕作土の下部に遺構の埋土とみられる黒褐色土や茶褐色土の堆積が確認されたため、さらに掘り下げると地表下 75cm で竪穴床面とみられる遺構面が確認され、また試掘坑の南西角部分ではこの遺構面の直上に焼土が検出された（Fig. 23）。層序は以下のとおりである。1層：耕作土。2層：黒褐色土。粘性が強い。3層：茶褐色土。ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を含む。4層：明褐色土。ローム質土を主体とする土層中に多量の焼土粒と炭化物粒が含まれている。5層：焼土。6層：炭化物。7層：黄褐色土。いわゆる地山のローム質土。3層が竪穴の埋土、4層が竪穴床面直上の堆積土に相当すると考えられる。

遺構

竪穴床面とみられる面では、試掘坑の南西角部分に 15cm×15cm 程の範囲で焼土が確認された。焼土は試掘坑の外まで拡がっており、その範囲は不明である。

（熊木俊朗）

遺物

Fig. 23-1・2 は竪穴埋土出土のオホーツク土器。1 は口縁部破片で、貼付文系土器である。口唇下に3本一組の貼付文（中央の貼付文は刻み目あり）が施されている。2 は底部破片。

Fig. 23-3 は 12 号竪穴埋土出土の骨角器。2012 年の報告書（東大考古学研究室・常呂実習施設編 2012）で II 類とした U 字形の釣針軸である。軸の太さは 5mm、全長はおそらく 5cm 程度だったと考えられ、オホーツク文化の釣針としては小形品である。被熱している。

（熊木俊朗・高橋 健）

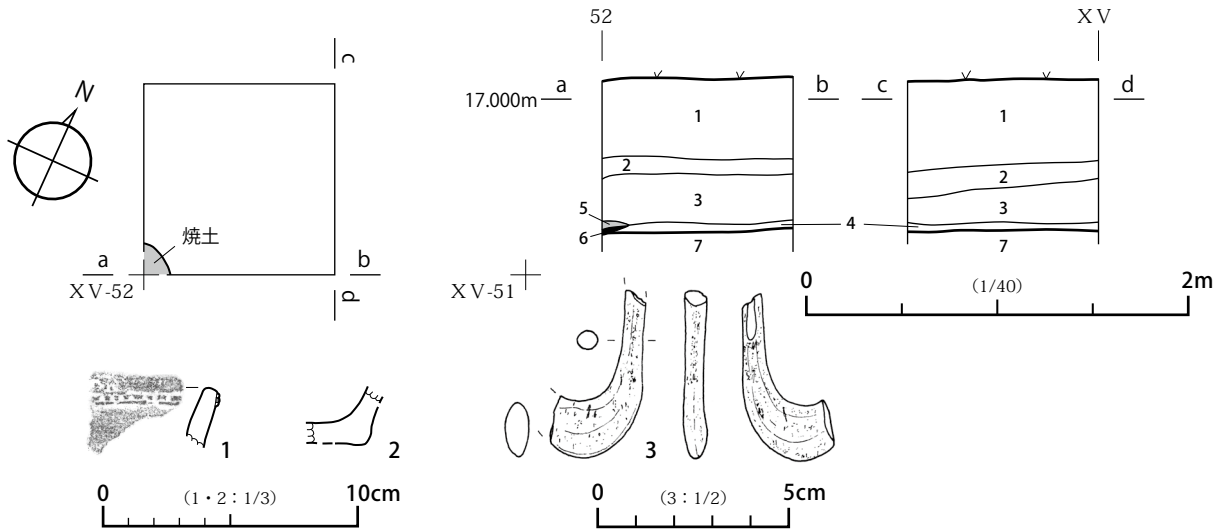


Fig. 23 XXIV (24) -51区 オホーツク12号竪穴および出土土器(1・2)・骨角器(3)

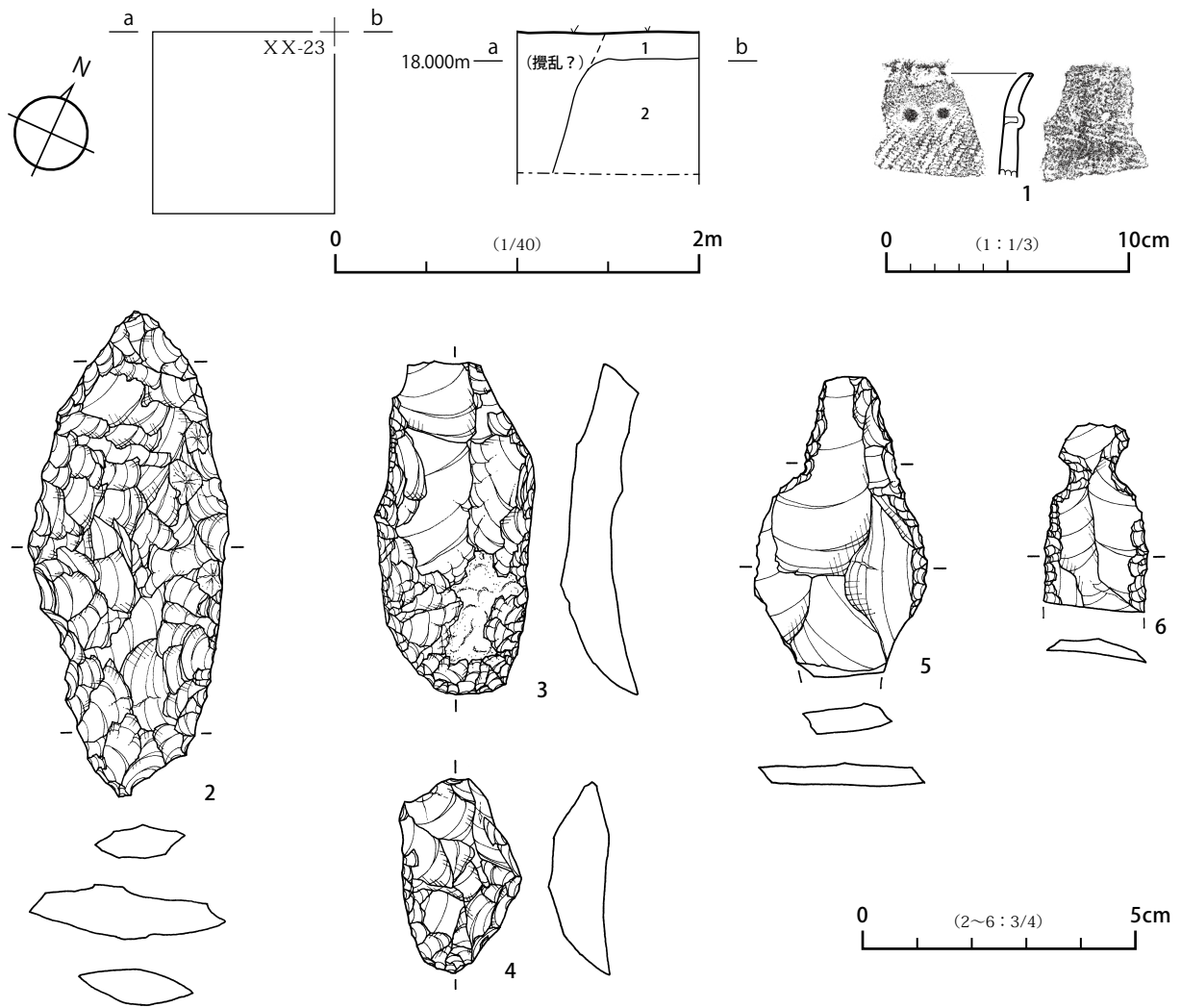


Fig. 24 XX (20) -23区 オホーツク竪穴(?)および出土土器(1)・石器(2~6)

小括

竪穴の埋土とみられる土層堆積の状況や焼土の存在からすると、本遺構は竪穴住居跡の床面であり、埋土出土の土器からするとオホーツク文化貼付文期に属する蓋然性が高い。前述のように本地点でもかつては竪穴の窪みが確認されていたが、現状では耕作によりその痕跡は完全に消失しており、今回の試掘調査で竪穴住居跡の存在を改めて確認した。かつての調査で記録された窪みの位置と、今回の試掘調査で検出された焼土の関係にも特に矛盾はない（付図 App. Fig.）。この焼土を竪穴の壁際の床面上に堆積したものとみるならば、この12号竪穴は廃絶時に火を受けた焼失住居である可能性が考えられよう。

（熊木俊朗）

9 XX (20) -23区 オホーツク竪穴 (?)

調査の経緯

XX (20) -23区において、地表下約15cmで遺構の覆土と考えられる茶褐色土が検出されたため地表下約80cmまで試掘坑を掘りすすめたが、土層に変化が認められず、遺構面が遺存するとしてもかなり深い位置にあることが予想されたため、この深度で掘り下げを停止した（Fig. 24）。層序は以下のとおりである。1層：耕作土。試掘坑の西側はこの土層中から攪乱が下層へと及んでいる。2層：茶褐色土。焼土粒、炭化物粒、黒色土粒を多量に含む。2層が遺構の埋土と考えられる。

（熊木俊朗）

遺物

Fig. 24-1は試掘坑内出土の土器。IOの突瘤文を有する口縁部破片で、口唇部が尖り、口唇部に刺突文が施されている。続縄文初頭の「元町2式」（熊木1997）に相当する土器であろう。

Fig. 24-2～6は試掘坑内出土の石器。Fig. 24-2は尖頭器。黒曜石製である。直径5～8mmの球顆を複数含むために、均整のとれた左右対称形にはなっておらず、縁辺は滑らかでない。Fig. 24-3・4は搔器。2点とも黒曜石製で、4は僅かに茶褐色が入る。いずれも剥片を素材とし、両側縁が加工され、その末端に弧状の刃部をもつが、3は基部方向に右肩下がり、4は左肩下がりに刃部が傾斜する。3の背面には僅かに円礫面が認められる。Fig. 24-5は削器。黒曜石製で、扁平な剥片を素材とする。両側縁の大部分は錯交調整で、上部の狭まった範囲でのみ両側縁が背面側のみの調整となる。Fig. 24-6は石匙。黒曜石製で、薄手（厚さ0.35cm）の縦長剥片を素材とする。素材末端部付近につまみ部が形成され、背面側の加工のみで両側縁が整えられる。

（熊木俊朗・夏木大吾）

小括

遺構の埋土とみられる2層は、その厚さや土層中の含有物の様相からするとオホーツク文化の竪穴住居跡の埋土である可能性が高いと考えられる。しかしながら竪穴床面は確認できておらず、この2層は周辺に位置するオホーツク文化の竪穴住居跡（オホーツク4号竪穴（東大考古学研究室・常呂実習施設編2001）等）の掘りあげ土か、もしくは過去の調査の排土等の二次堆積土である可能性も排除できない。このように本試掘坑に関してはオホーツク文化の竪穴の存在を明確に確定できたわけではないので、竪

穴番号は与えずにその可能性を指摘するに止めておく。

(熊木俊朗)

10 時期不明のピット

調査の経緯

XXIX (29) -32 区、XLII (42) -26 区、CI (101) -25 区、CI (101) -30 区のそれぞれにおいて、試掘坑内でピットが検出された。各試掘坑の土層堆積とピットの掘り込みが確認された層位は以下のとおりである。

XXIX (29) -32 区 (Fig. 25) の1層：耕作土。2層：黒色土層。粘性がやや強い。3層：暗褐色土。しまりが弱い。4層：暗褐色土。3層とほぼ同じだが、礫を多く含む。5層：暗褐色土。黒色土粒を含む。6層：暗褐色土。ローム質土を主体とする。7層への漸移層。7層：黄褐色土。いわゆる地山のローム質土。ピットの掘り込み面は2層もしくは5層中とみられる。

XLII (42) -26 区 (Fig. 26) の1層：耕作土。2層：黒色土。3層：暗褐色土。ローム質土を主体とする。4層への漸移層。4層：黄褐色土。いわゆる地山のローム質土。ピットは3層中で検出された。

CI (101) -25 区 (Fig. 27) の1層：耕作土。2層：茶褐色土。3層への漸移層。3層：黄褐色土。いわゆる地山のローム質土。ピットは2層中で検出された。

CI (101) -30 区 (Fig. 28) の1層：耕作土。2層：茶褐色土。3層への漸移層。3層：黄褐色土。いわゆる地山のローム質土。ピットは2層中で検出された。

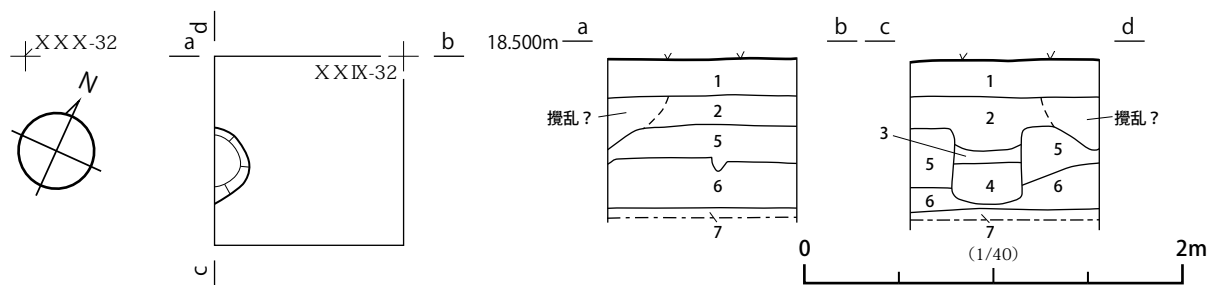


Fig. 25 XXIX (29) -32 区 時期不明のピット

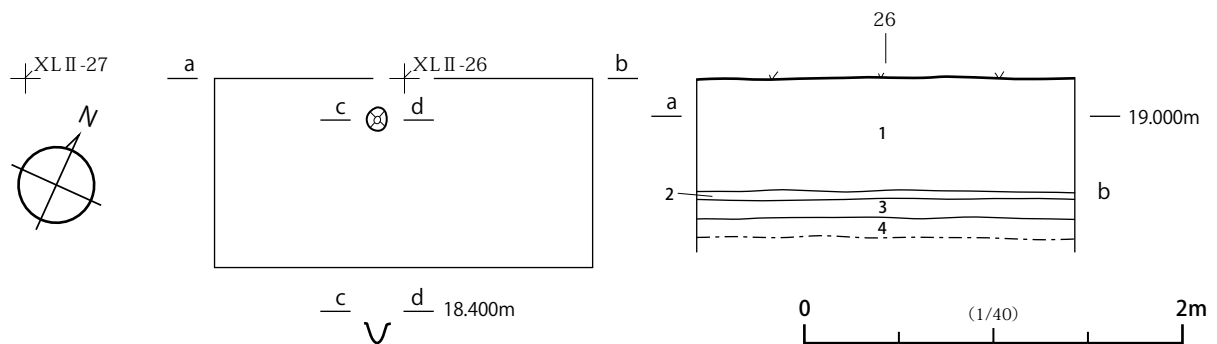


Fig. 26 XLII (42) -26 区 時期不明のピット

遺構

XXIX (29) -32区 (Fig. 25) のピットは直径約 39cm、掘り込み面からの深さ約 40cm で、円筒形を呈する。XLII (42) -26区 (Fig. 26) のピットは直径約 12cm、掘り込み面からの深さ約 11cm で、断面形は V 字形に近い。CI (101) -25区 (Fig. 27) のピットは直径約 25cm、掘り込み面からの深さ約 42cm で、断面形は縦長の V 字形である。CI (101) -30区 (Fig. 28) のピットは直径約 12cm、掘り込み面からの深さ約 19cm で、断面形は縦長の V 字形に近い。 (熊木俊朗)

遺物

Fig. 28-1・2 は CI (101) -30区 試掘坑内出土の石器。1 は耕作土 (Fig. 28-1 層) から、2 は Fig. 28-2 層から出土している。Fig. 28-1 は搔器。黒曜石製で、被熱により表面の光沢が消失している。多段階表面変化の観察から、被熱前に搔器であったものが、被熱後も搔器として再加工されたことがわかる。長さ 3.44cm で、比較的小型である。Fig. 28-2 は削器。黒曜石製で、僅かに円礫面が観察される。長さ 7.5cm 程度の薄手 (厚さ 1.12cm) の剥片を素材とし、右側縁側の端部付近に僅かに加工がある。 (夏木大吾)

(夏木大吾)

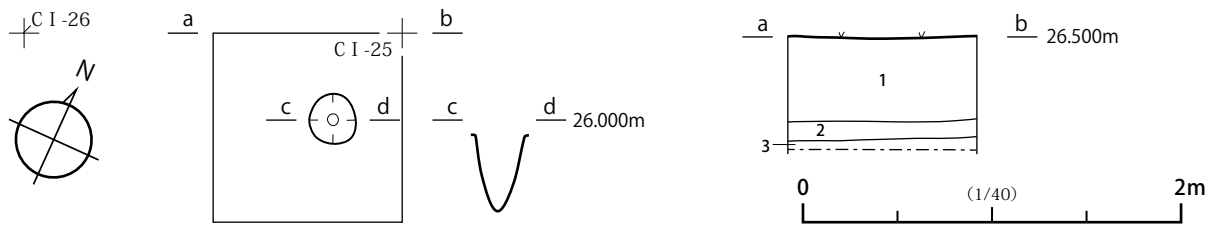


Fig. 27 CI (101) -25区 時期不明のピット

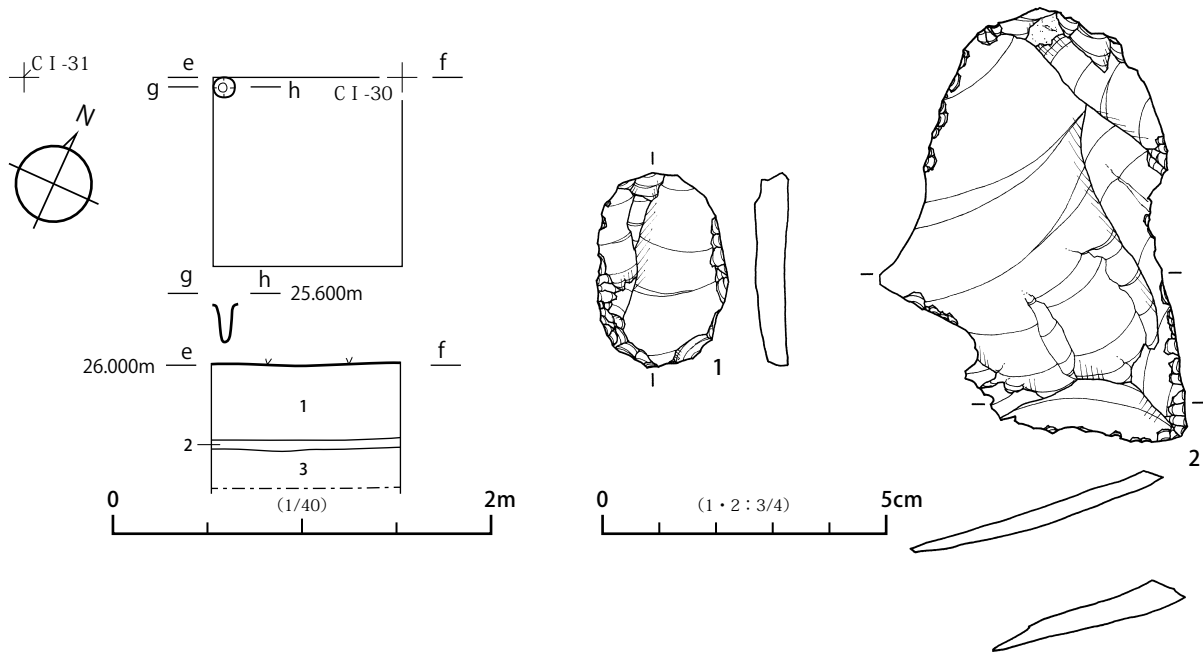


Fig. 28 CI (101) -30区 時期不明のピットおよび出土石器

小括

Fig. 25～Fig. 28 のピットはいずれも耕作土より下位の土層で検出されており、どれも本遺跡群にて耕作が開始される以前に形成されたピットとみられるが、詳細な帰属時期や性格は判然としない。耕作土の土層中でピットの埋土を確認するのは難しいことからすると、これらのピットは耕作開始以後のものであってそれを見落としていた可能性も否定できない。(熊木俊朗)

註

- 1) 北筒式土器の編年に関しては、近年、トコロ5類土器以降を縄文後期に位置づける見解が主流になりつつあるが、ここではトコロチャシ跡遺跡の報告書（東大考古学研究室・常呂実習施設編 2001）に則り、北筒式土器群は縄文中期に編成しておく。

第三節 オホーツク墓周辺トレンチの遺構各説

1 各トレンチの土層堆積および56ライン上で確認された沢状の落ち込みについて

前節で述べたように、2001年度にはオホーツク墓の分布確認を目的としてFig. 29に示した各トレンチを設定し、調査をおこなっている。各トレンチの土層堆積は以下のとおりである（Fig. 30）（XXIXライントレンチについては遺構が検出されなかったため土層図を省略した）。

XXII ライントレンチ（Fig. 29・Fig. 30のa-b間）の1層：耕作土。2層：黒色土。ロームブロック、炭化物を含む。粘性が強い。3層：暗茶褐色土。ロームブロック、炭化物を含む。4層：暗褐色砂質土。ロームブロック、炭化物を少量含み、しまりが弱い。5層：茶褐色砂質土。6層：明褐色土。ロームブロックを多く含む。7層への漸移層とみられる。7層：明褐色砂質土。

XXIII ライントレンチ（Fig. 29・Fig. 30のc-d間）の1層：耕作土。8層：黒色土。礫を多く含む。粘性あり。9層：茶褐色土。礫を多く含む。粘性あり。10層：茶褐色土。ロームブロックを含む。粘性あり。11層：灰色を帯びた茶褐色土。ロームブロックを多量に含む。粘性あり。12層：茶褐色土。礫を非常に多く含み、炭化物粒と焼土粒を少量含む。粘性あり。13層：茶褐色土。礫を非常に多く含み、灰褐色の粘土ブロックを含む。粘性あり。14層：茶褐色土。礫を非常に多く含む。粘性あり。15層：黒色土。粘性あり。16層：茶褐色砂質土。礫を非常に多く含む。粘性あり。17層：茶褐色土。炭化物粒、焼土粒、ロームブロックを含む。粘性あり。18層：灰色を帯びた茶褐色土。粘性あり。19層への漸移層。19層：黄褐色ローム質土。粘性あり。いわゆる地山。8層からはオホーツク文化期を含む遺物が出土し（Fig. 33-1～10、Fig. 34-6・7）、14層からもオホーツク文化期や続縄文文化期・縄文文化期の遺物が出土している（Fig. 33-11～15）。12層・13層は後述の「溝状遺構」の埋土、16層は後述の「集石2」の埋土、9層・10層・11層は後述の「ピット2」の埋土である。

XXV ライントレンチ（Fig. 29・Fig. 30のe-fおよびg-h間）の1層：耕作土。20層：黒褐色土。角礫を多く含む。しまりがやや強い。21層：黒褐色土。ローム質土を多く含む。22層：黒褐色土。ロームブロック、炭化物を含む。23層：茶褐色土。ロームブロックを多く含む。24層：明褐色ローム質土。砂を多く含み、粘性が強い。いわゆる地山。25層：茶褐色土。ロームブロックを含む。26層：明茶褐色ローム質土。27層：明茶褐色ローム質土。28層：24層と同じ明褐色ローム質土。砂を多く含み、粘性が強い。いわゆる地山。

XXVII ライントレンチ（Fig. 29・Fig. 30のi-j間）の1層：耕作土。29層：茶褐色土。ローム粒を含む。30層：明褐色土。31層への漸移層。31層：明褐色ローム質土。砂を多く含み、粘性が強い。いわゆる地山。

Fig. 30の土層図に示したように、XXII・XXIII・XXV・XXVIIの各ラインのトレンチにおいてはいずれも55ラインから56ラインにかけての部分で最深部とする沢状の落ち込みが形成されていたことが確

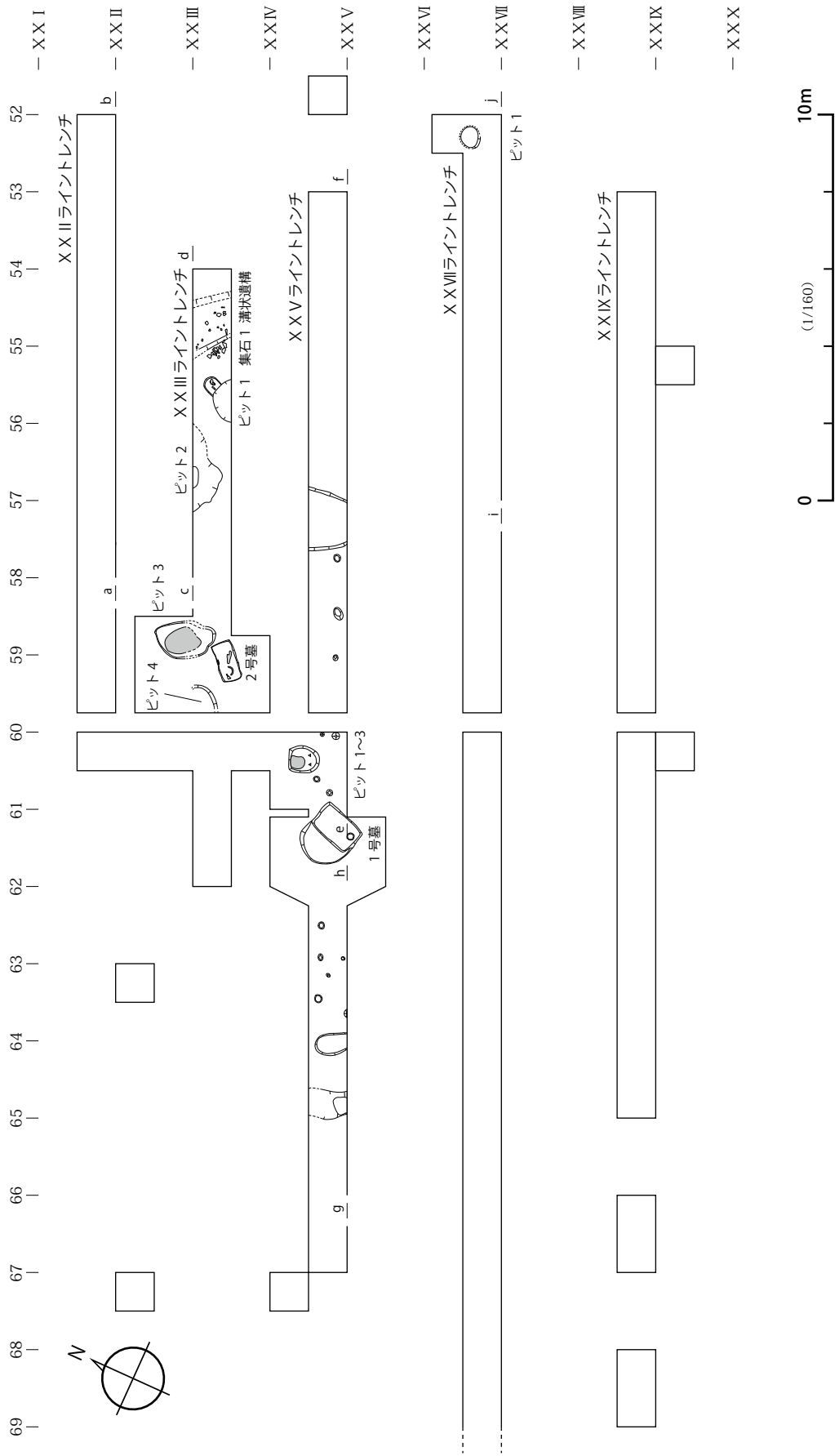


Fig. 29 オホーツク墓周辺トレンチ全体図

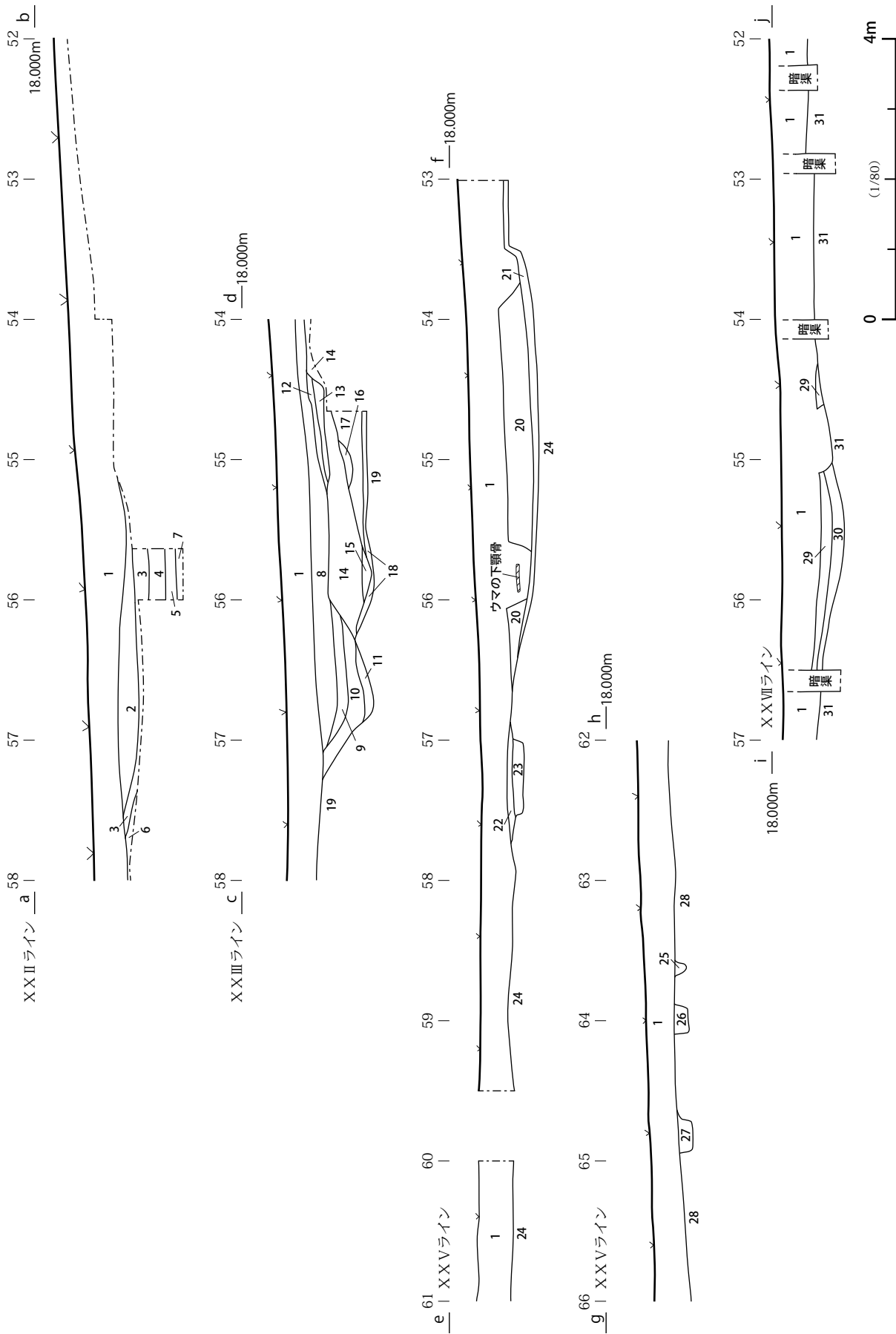


Fig. 30 オホーツク墓周辺トレンチ土層図

認められた。この落ち込みは調査時には埋没していて現地表面からはほとんど確認できなかったが、各トレンチの土層堆積からは、XXVII-55・56区からXXII-54~58区にかけて南から北へと傾斜しながら延びており、北へ向かうに従って落ち込みの幅も広がっている様子が確認できた。すなわち落ち込みの幅は約4m (XXVIIライン上)~8m以上 (XXIIライン上)、深さはXXIIライン上で現地表面から1.3m以上となる。この落ち込みの埋没過程をXXIIIラインの土層堆積から推測すると、以下の二とおりの可能性が考えられる。第一は埋土中の遺構の時期に基づく推定である。Fig. 30-16層は後述の「集石2」遺構の埋土であるが、この集石2には続縄文前半期の遺物が含まれており、形成時期はその時期以降である。よって少なくとも続縄文前半期までは17層上面を底とする落ち込みが埋没せずに存在していた可能性が考えられる。後述の「溝状遺構」(Fig. 30の12層・13層) およびその下層となるFig. 30-14層にはオホーツク貼付文系土器が含まれていることからすると、少なくともこのXXIIIラインの位置では、続縄文前半期以降からオホーツク文化期にかけて14層が堆積し、落ち込みがほぼ埋没して溝状遺構が形成されたと見ることも可能である。14層にオホーツク貼付文系土器が含まれていること重視するならば、オホーツク文化貼付文期には落ち込みはまだ完全に埋没しておらず、溝状遺構の形成はそれ以降と推察できるが、後述するように溝状遺構の形成時期がオホーツク文化貼付文期である可能性も否定できないため、判断は難しい。第二は落ち込みの埋土の様相からの推定である。この落ち込みの埋土はXXIIラインでは14層と8層を主体としており、その堆積は厚く比較的単純な様相を呈する。このことからすると、この落ち込みは長期にわたって自然に埋没したのではなく、オホーツク文化貼付文期以後に人為的な埋め戻し、もしくは自然の崩落等によって比較的短期間に埋没した可能性が高いと考えられる。そうであるならば埋土中の集石2や溝状遺構は埋没の際に形成されたことになり、原位置を保っていない可能性が高くなる。ここでは第二の見解、すなわちこの落ち込みはオホーツク文化貼付文期以後の比較的短期間に埋没したとの推定を支持しておきたい¹⁾。ただし、第一・第二のいずれの見解を支持するとしても、この沢状の落ち込みはオホーツク文化貼付文期にはまだ完全に埋没してはいなかったとみられる点には注意しておきたい。すなわち第五章第一節で述べるように、この沢状の落ち込みはオホーツク文化貼付文期の住居跡と墓域の境界に相当する地点に位置しており、注目される。(熊木俊朗)

2 XXIII (23) ライントレンチ東側の遺構

集石1

XXIII (23) -55区において、凝灰岩の角礫を中心とする集石が検出された (Fig. 31の集石1)。検出面はFig. 30の14層の上面で、後述の溝状遺構の埋土である12層の直上に相当する。集石の範囲は約60cm×30cmのごく小規模なもので、凝灰岩の角礫、黒曜石の剥片、土器 (Fig. 32-1~6) などがこの範囲にまとまって検出された。集石に伴う掘り込み等は認められなかった。土器にはオホーツク貼付文系土器が含まれており、集石1の形成時期はその時期もしくはそれ以降とみられるが、この集石1は前述のように下層に存在する沢状の落ち込みが埋没する際に形成されたか、もしくは埋没の際に原位置か

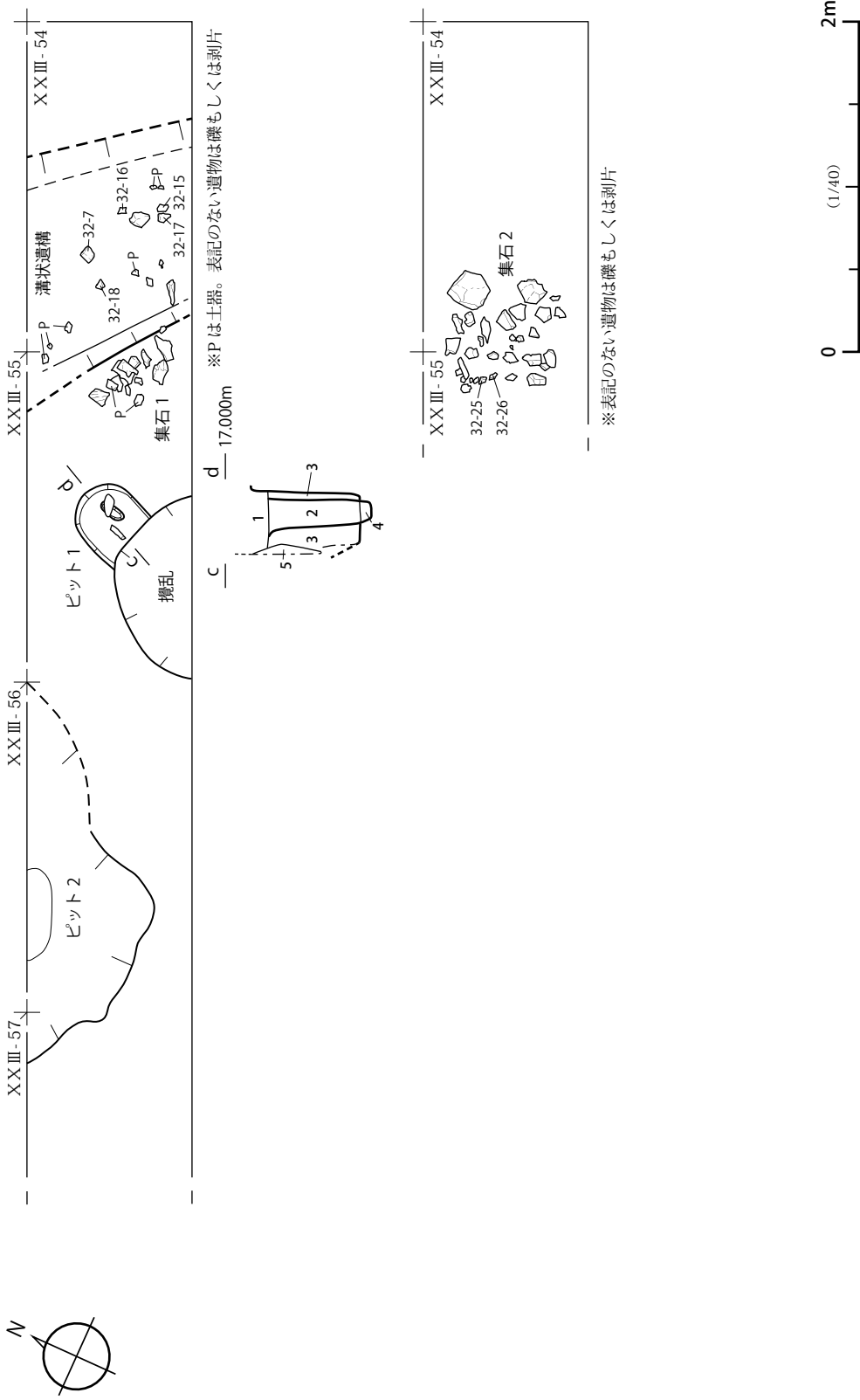


Fig. 31 XXIII (23) ライントレンチ東側の遺構

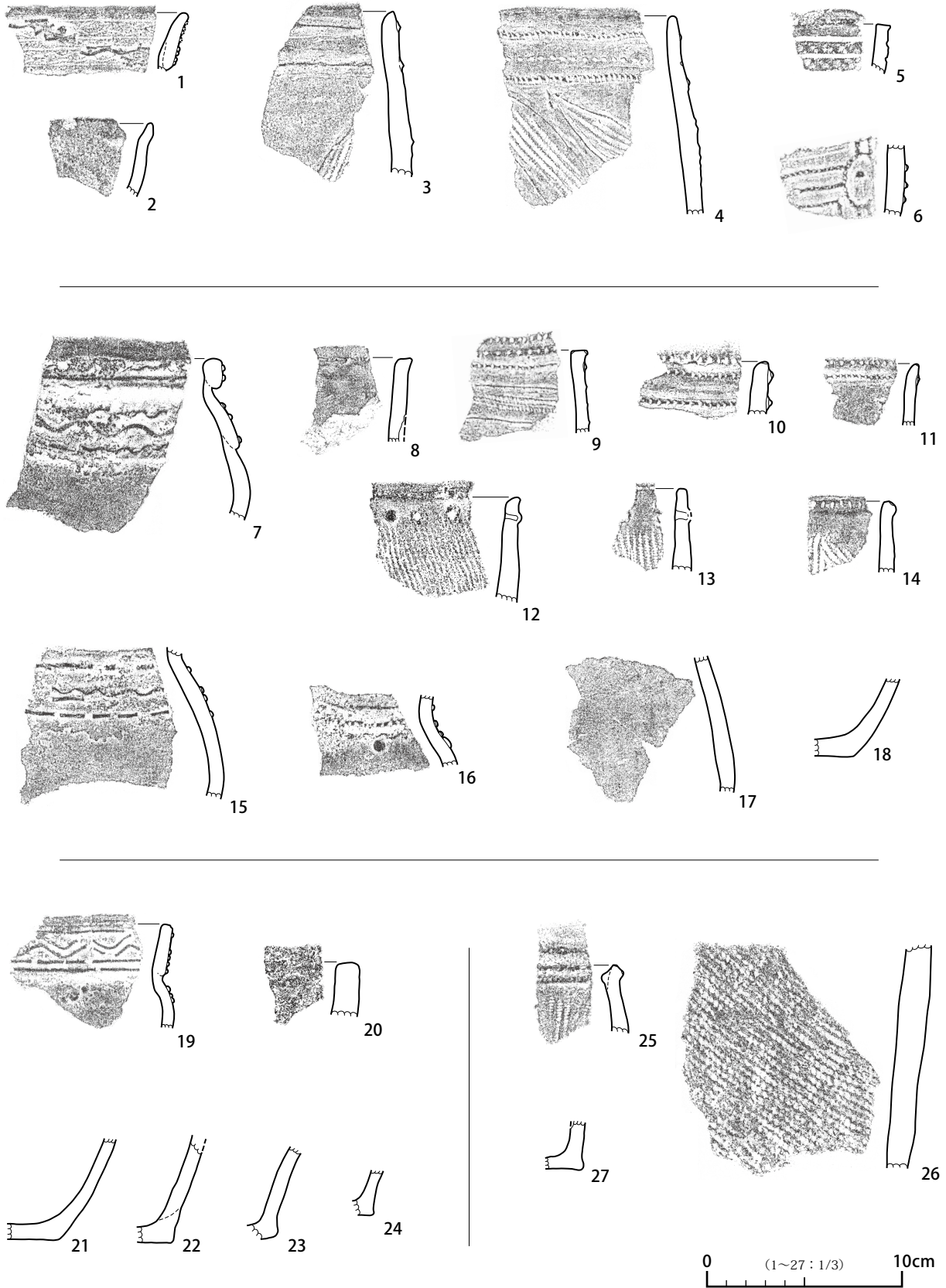


Fig. 32 XXIII (23) ライントレンチ東側の遺構等出土の土器
 (1~6: 集石 1、7~18: 溝状遺構、19~24: 溝状遺構の下層、25~27: 集石 2)

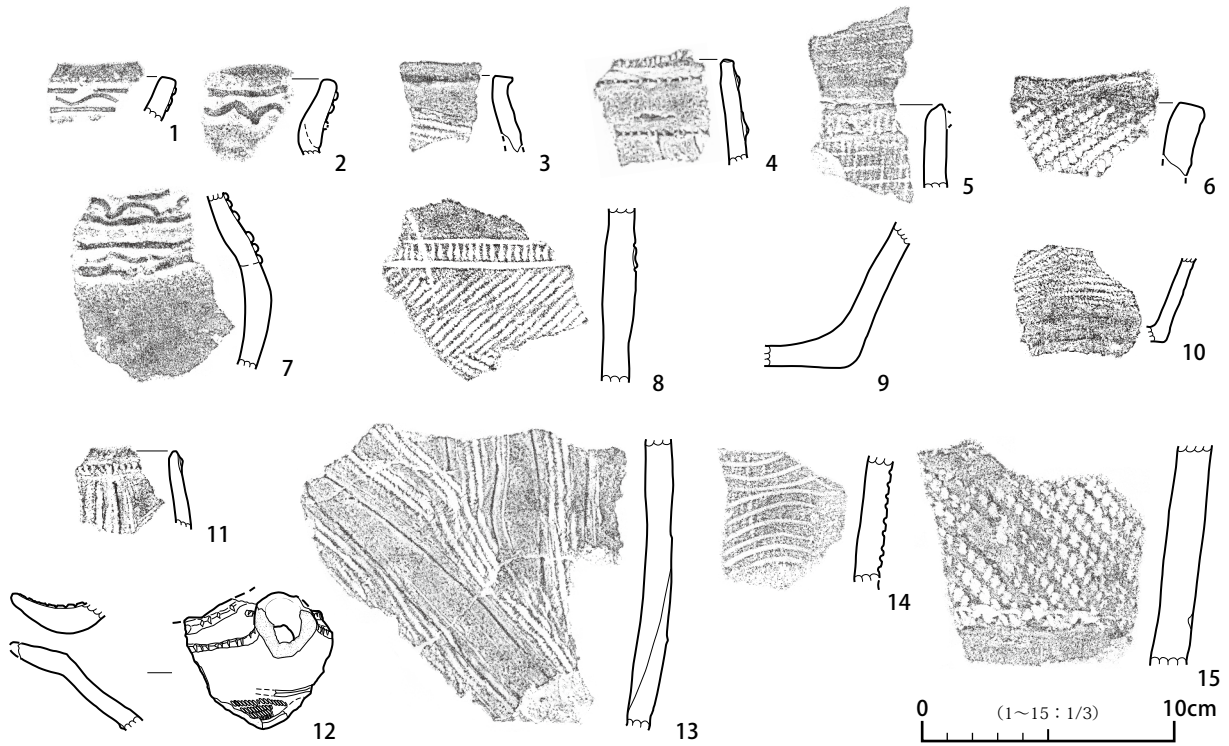


Fig. 33 XXIII (23) ライトレンチ東側の包含層出土の土器
 (1～10 : Fig. 30-8 層、11～15 : Fig. 30-14 層)

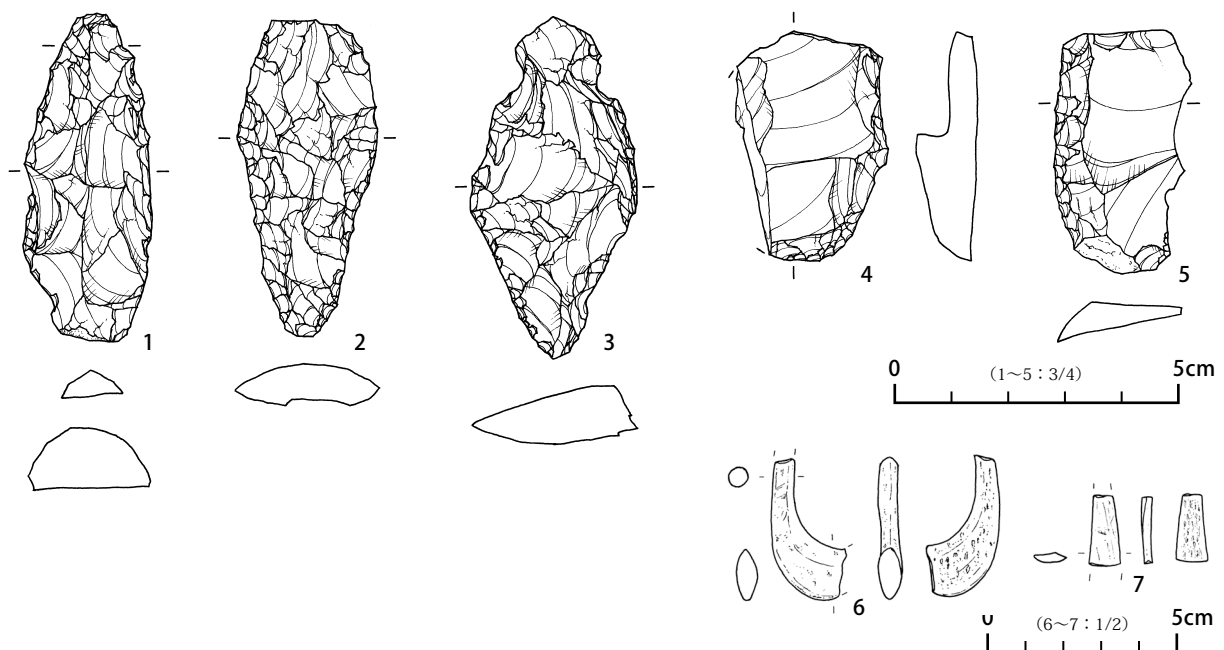


Fig. 34 XXIII (23) ライトレンチ出土の石器 (1～5)・骨角器 (6・7)
 (1・2 : 集石 2、3・5 : 溝状遺構、4 : 溝状遺構の下層、6・7 : Fig. 30-8 層)

ら移動している可能性が高く、形成時期や遺構の性格などの詳細は不明である。

溝状遺構

XXIII (23) -54・55 区において、集石 1 の位置する面より下層で、南北方向の幅約 1.2m~1.3m、深さ約 12cm~22cm の溝状の遺構が北西-南東の方向に延びている様子が確認された (Fig. 31)。隣接する XXII ライントレンチや XXV ライントレンチではこの遺構の続きは確認されていないので、この溝状遺構はこれらのトレンチまでは延びていないとみられる。遺構の覆土は Fig. 30 の 12 層と 13 層である。溝状遺構の内部ではオホーツク土器を中心とした土器 (Fig. 32-7~18) のほか、石器 (Fig. 34-3・5) や黒曜石の剥片、凝灰岩の角礫が散点的に出土している。この遺構も出土遺物からするとオホーツク文化貼付文期もしくはそれ以後に形成されたものとも考えられるが、これも前述のように沢状の落ち込みが埋没する際に形成されたか、もしくは埋没の際に原位置から移動している可能性が高い。

ピット 1

XXIII (23) -55 区において、現地表面から 60cm 下、Fig. 30 の 8 層中でピットの上面が確認された。ピットの検出面ではピットの埋土上に礫が 2 点確認された (Fig. 31)。ピット内の土層堆積は以下のとおりである。1 層：黒色を帯びた茶褐色土層。骨片、炭化物粒、焼土粒を含む。2 層：黒色を帯びた茶褐色土層。粘性が強い。木炭の破片を多量に含む。3 層：黒色を帯びた茶褐色土層。粘性が強い。ロームブロックと礫を多く含む。4 層：茶褐色土層。地山のローム質土層への漸移層。5 層：黒色を帯びた茶褐色土層。粘性が強い。ロームブロック等を含まない。本ピットでは Fig. 31 で示したように 2 層・4 層を埋土とする細いピットと 1 層・3 層・5 層を埋土とするピットの二つが入れ子のようになっている状況が確認できたが、これはむしろ 1 本の柱穴の中に柱材が炭化して残った状態を示すものである可能性が高い。本ピットは掘り込み面の位置 (Fig. 30 の 8 層) から判断すると、オホーツク文化貼付文期以降に形成された可能性が高い。

ピット 2

XXIII (23) -56・57 区において、Fig. 30-8 層の下部に東西約 2.2m、南北約 0.8m の範囲ですり鉢状のピットが確認された (Fig. 31)。ピットは発掘区の北側まで広がっており、全体の形状や規模は不明である。ピットは Fig. 30-14 層を切って掘り込まれており、深さは最深部で掘り込み面から約 56cm、ピットの埋土は Fig. 30-9~11 層となる。14 層が切られているところから判断すると、本ピットは人為的に掘り込まれたものである可能性が高く、その形成時期はオホーツク文化貼付文期以後と考えられるが、ピットの性格や正確な形成時期は不明である。

集石 2

XXIII (23) -54・55 区において、溝状遺構および集石が位置する面の下層から、凝灰岩の角礫を主体とする集石が検出された (Fig. 31 の集石 2)。検出面は Fig. 30-17 層の上面で、16 層がこの集石の範囲に相当する。集石は 70cm×70cm の範囲で確認されており、南北方向にはトレンチ外まで広がっている可能性が認められた。集石に伴う掘り込み等は確認されていない。この集石を構成する遺物の大半は凝灰岩の角礫で、他に土器 (Fig. 32-25~27) や黒曜石の剥片等が含まれていた。土器には宇津内 IIb

式土器が含まれており、集石の形成時期はそれ以降とみられるが、集石の性格や正確な形成時期は不明である。

（熊木俊朗）

遺物

Fig. 32-1～6は集石1出土の土器。1はオホーツク貼付文系土器の口縁部。4本一単位の貼付文（直線＋波状＋波状＋直線）が2単位確認できる。2は無文の口縁部。オホーツク土器とみられるが、後北C₂・D式の可能性もある。3・4は後北C₂・D式土器の口縁部。3は口唇面や微隆起線上に刻み目は施されていない。4は微隆起線上に刻み目があり、微隆起線の間に列点文がある。5は縄文晩期末～続縄文初頭の土器の口縁部破片。口唇部が平坦になでつけられており、口縁部に沈線文が2条確認できる。6は宇津内式土器の胴部。縄線文の上に貼付文が施文されているようにみられるため、宇津内IIIb式の可能性が高い。

Fig. 32-7～18は溝状遺構出土の土器。7はオホーツク貼付文系土器。口縁部に肥厚帯が2段あり、3本一組の貼付文が2段（直線＋波線＋直線、ひねり＋波線＋ひねり）施されている。8は無文の土器の口縁部で、口唇面は平坦になでつけられている。後北C₂・D式もしくは北大I式土器とみられる。9～11は後北C₂・D式土器の口縁部。いずれも口唇部や口唇下の貼付文上に刻みが施される。12はIO突瘤文を持つ宇津内IIa式土器。13もIO突瘤文を持つ土器で、「元町2式」である可能性が高い。14は口唇部に刻み目があり、RLの縄文が施された土器。型式不詳であるが、縄文晩期末～続縄文初頭の土器であろうか。15～18はオホーツク土器で、15・16は貼付文系土器の、17は無文の胴部破片。18は底部破片である。

Fig.32-25～27は集石2出土の土器。25は宇津内IIIb式土器の口縁部破片。口唇直下の内面と外面に貼付文がめぐっており、外面の貼付文には刻み目が施されている。26は北筒式土器の胴部破片。胎土に繊維は含まれていない。27は底部破片で、縄文晩期末～続縄文前半期の土器とみられる。

Fig. 33はXXIII（23）-54～56区の包含層から出土した土器で、1～10はFig. 30-8層、11～15はFig. 30-14層から出土している。溝状遺構の下層から出土したFig. 32-19～24の土器も、層的にはこの11～15と同じ位置で出土したと見てよいであろう。Fig. 32-19はオホーツク貼付文系土器。肥厚帯を有し、肥厚帯上に5本一組の貼付文、頸部に斜位の貼付文が施されている。20は厚手無文の口縁部破片。胎土に繊維はほとんど含まれていない。網走式土器の可能性が高い。21～24は底部破片で、21はオホーツク土器、22～24は後北C₂・D式土器とみられる。Fig. 33-1・2はオホーツク貼付文系土器の口唇部。どちらも3本一単位の貼付文（直線＋波線＋直線）が施されている。3・4は後北C₂・D式土器。3は口唇面が平坦になでつけられている。4は口唇部とその直下の貼付文上に刻み目が施されている。5は宇津内IIIb式の口縁部。口唇部直下に貼付文が施されていたとみられるが、剥落している。6は羅臼式（豊原1996）とみられる口縁部破片。胎土に繊維は含まれていない。7・8は胴部破片で、7はオホーツク貼付文系土器。8は縄文後期の鯨潤式とみられる。9・10は底部破片で、9はオホーツク土器、10は後北C₂・D式土器。11～13は後北C₂・D式土器。11は口縁部破片で、口唇部とその直下の貼付文上に刻みが施されている。12は注口土器の注口部の破片。13は胴部破片。14は地文の縄文の上

に弧状の沈線文が施された土器で、縄文後期中葉ないし後葉の土器の胴部破片とみられる。15は羅白式とみられる土器の胴部破片。複節の縄文と横方向の磨消帯が確認できる。

Fig. 34-1・2は集石2、3・5は溝状遺構、4は溝状遺構の下層から出土した石器。Fig. 34-1・2は尖頭器。2点とも黒曜石製で、1には僅かに円礫面が残る。1は何らかの石器を再加工し、正面側のみに粗い加工を施し、横断面はカマボコ形を呈する。2は基部が区分される形態をもち、先端部が折損し、裏面において衝撃剥離痕の可能性のある剥離が観察される。Fig. 34-3は石匙。黒曜石製で、わずかに赤褐色が入る。両面調整石器を転用し、正面側にのみ加工を施し、つまみ部を形成している。Fig. 34-4は搔器。黒曜石製である。剥片を素材とし、上下両端に搔器刃部が形成されている。Fig. 34-5は削器。黒曜石製で、僅かに岩屑・角礫面が認められる。縦長剥片の左側縁に直線状の刃部を形成している。

Fig. 34-6・7はXXIII(23) -55区のFig. 30-8層から出土した骨角器。6はU字形の釣針軸である。サイズや形状が12号竪穴出土資料とよく似た小形品である。7は骨鏃である。2012年報告(東大考古学研究室・常呂実習施設編2012)でI類とした極めて薄い葉状のタイプである。被熱・破損しており、裏面には海綿質が露出している。

(熊木俊朗・夏木大吾・高橋 健)

小括

XXIII(23) ライントレンチの東側では、溝状遺構、集石1、集石2、ピット1、ピット2が検出された。これら各遺構の層位的な新旧関係をみると、新しい順にピット1(Fig. 30-8層中)・集石1(Fig. 30-12層もしくは14層の直上)→溝状遺構(8層の下位)→ピット2(11層より下位)→集石2(14層より下位)となる。集石2は続縄文前半期以降、その他の遺構はオホーツク文化貼付文期以降に形成されたものとみられるが、これらの各遺構については全て前項に記した沢状の落ち込み内に形成されたものであり、前述のとおり人為的な埋め戻し等の影響により原位置を保っていない可能性がある。

(熊木俊朗)

3 XXIII(23) -58~59区 オホーツク2号墓および周辺の遺構

調査の経緯

XXIII-58・59区において、耕作土下の地山の面において長方形のプランをもつ墓壇と倒立状態の土器口縁部の一部を検出した。遺構の上部は耕作によってかなり破壊されており、検出面から墓壇底部までの深さは約14cmを残すのみである。墓壇内の層序は以下のとおりである(Fig. 35)。5層：暗褐色砂層。しまりなし。土器内部の砂。6層：黄褐色土層。ロームに黒褐色土が混じる。耕作土の最下部。7層：暗褐色砂層。しまりなし。8層：暗褐色砂層。ロームブロック・ローム粒が混じる。粘性・しまりややあり。9層：暗褐色砂層。ローム粒がまじる。粘性・しまりややあり。

また、このオホーツク2号墓の北側及び西側においても別の2基のピット(ピット3・ピット4)の底部を検出している(Fig. 35)。これらのピットの上部も耕作によってかなり破壊されていた。ピット内の層序は以下のとおりである。ピット3の1層：黄褐色ローム質土。灰褐色土が混じる。2層：灰褐

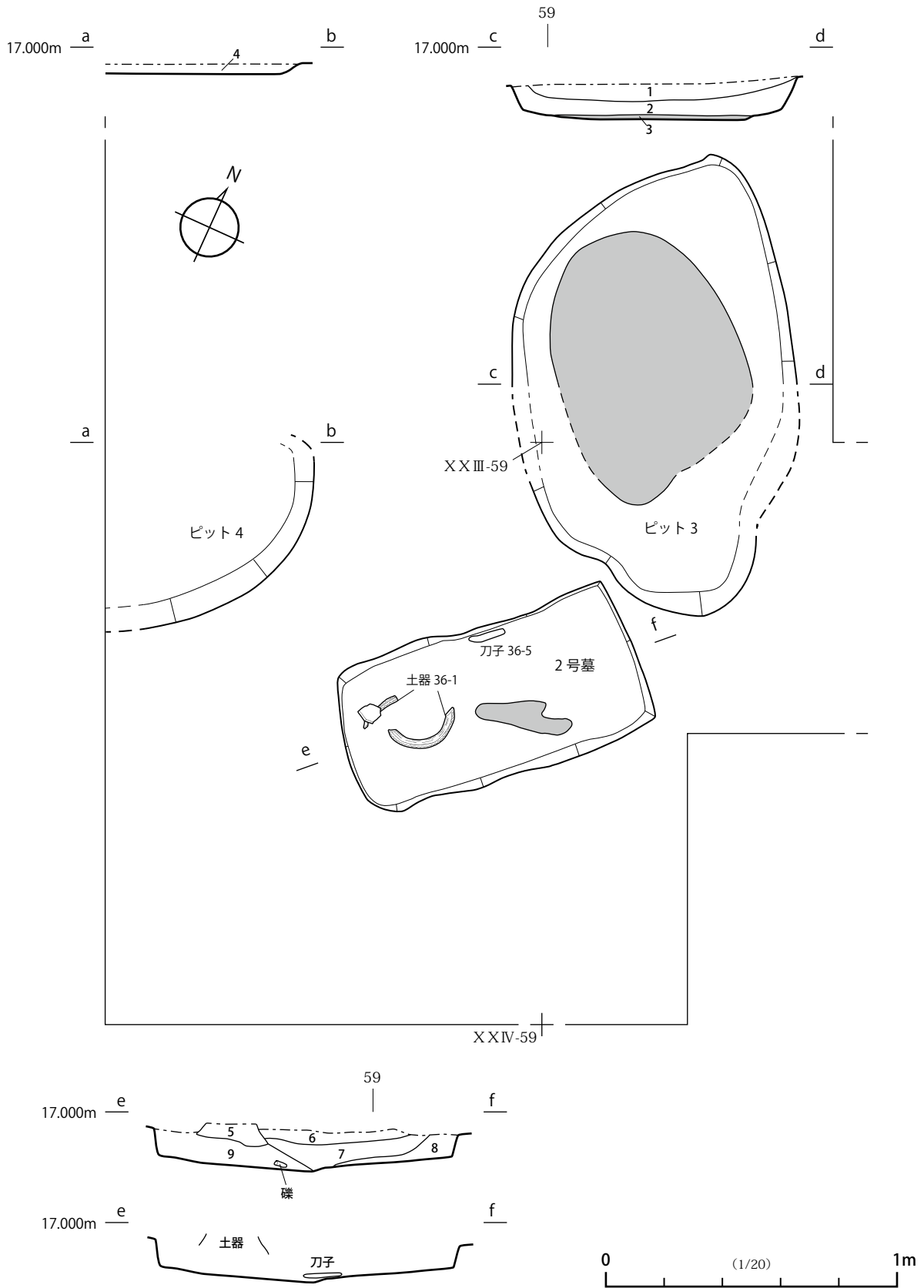


Fig. 35 XXIII (23) - 58~59 区 オホーツク 2号墓および周辺の遺構

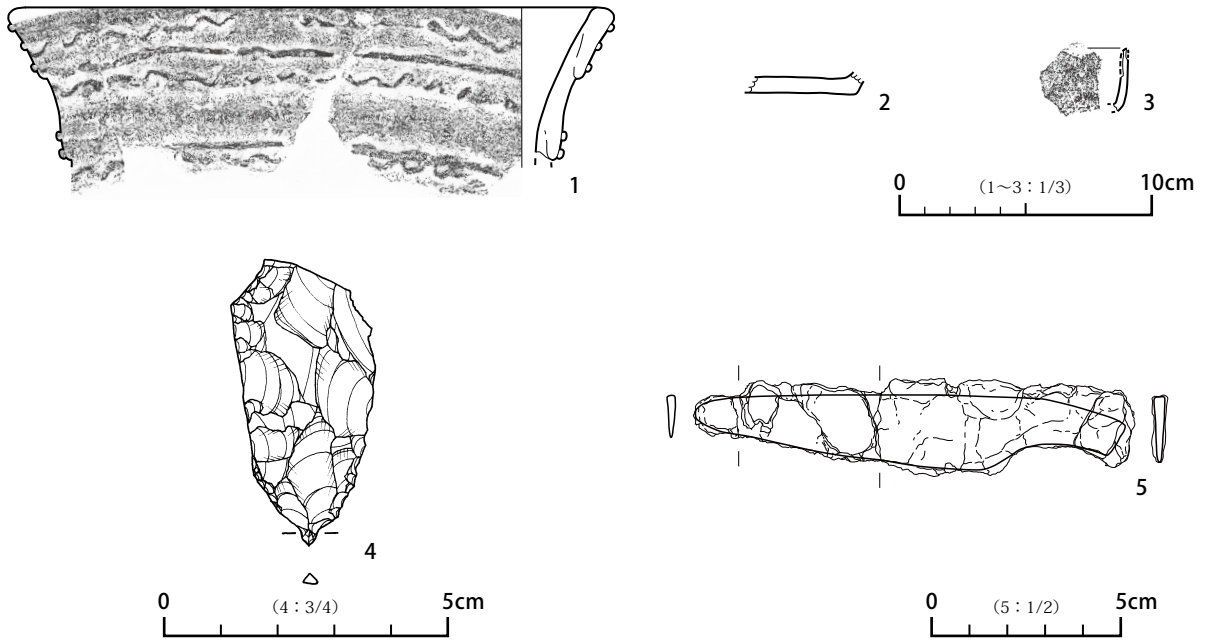


Fig. 36 XXIII (23) -58~59区 オホーツク2号墓出土の土器(1~3)・石器(4)・鉄器(5)

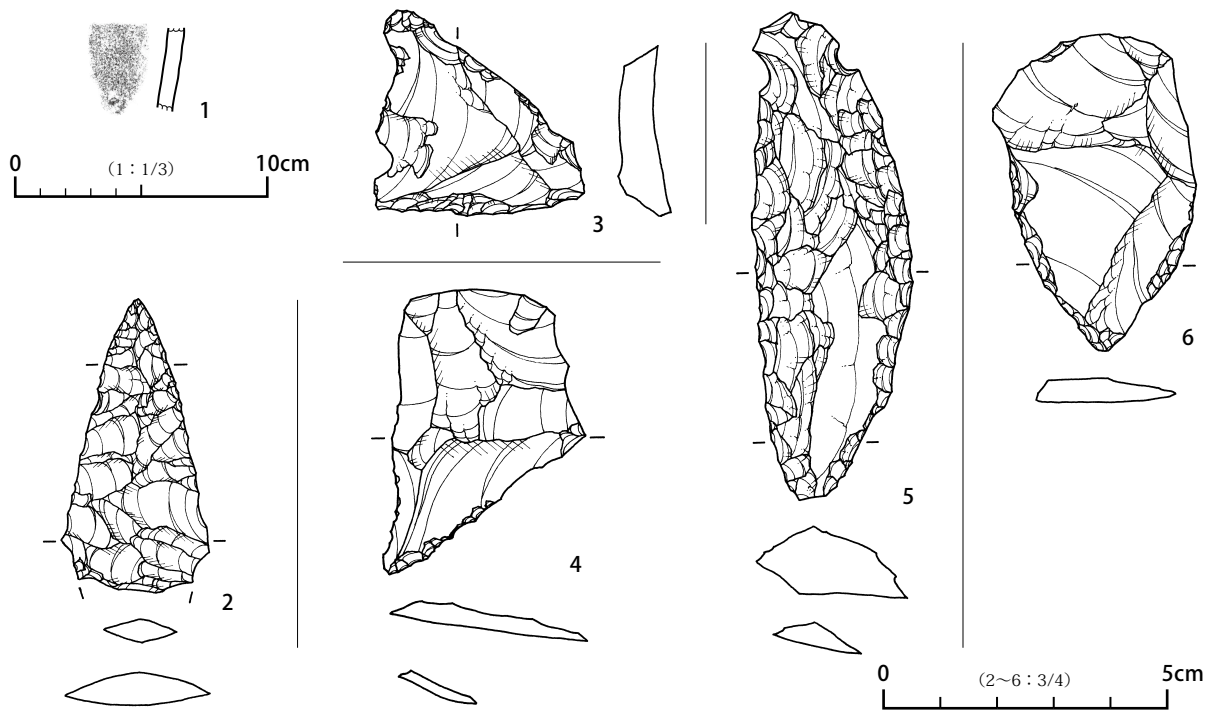


Fig. 37 XXV (25) ライントレンチの遺構出土の土器(1)・石器(2~6)
(1~3:ピット1、4・5:ピット2、6:ピット3)

色土。黄褐色ローム質土が少量混じる。3層：赤褐色土。ベンガラと思われる。ピット2の4層：灰褐色土。黄褐色ローム質土が少量混じる。底面にごく薄く赤褐色土が堆積する。

遺構

2号墓の墓壙（Fig. 35・PL. 6）は長軸105cm、短軸55cmの長方形である。長軸方向は北東－南西、頭位は土器の位置から判断して南西である。覆土は混じりけのない暗褐色砂（7層）が楕円形の皿状に堆積し、その下層及び壁際では暗褐色砂にローム粒やロームブロックを含む。副葬品は口縁部の半分程度を残すオホーツク貼付文系土器と、北西側長辺に沿った位置に墓壙床面から出土した刀子がある。また覆土7層中に玉砂利がみられた。遺体はほとんど残存していなかったが、墓壙底面において遺体に関連する可能性がある灰褐色土の分布を検出した（網掛け部分）。

ピット3は長軸147cm、短軸97cmの不整な楕円形を呈する。底面のほぼ中央部にはベンガラとみられる赤褐色土が85cm×65cmほどの範囲に1cmほどの厚さで広がっていた（網掛け部分）。ピット3に伴う遺物は出土していない。

ピット4は北側の部分が破壊されており、また西側は調査区外まで広がっていて全体の1/4程度しか確認できなかったため、規模や形状の詳細は不明であるが、直径1m以上の円形もしくは楕円形を呈するものとみられる。図示していないが、ピットの底面ではベンガラとみられる赤褐色土がごく薄く堆積していた。ピット4に伴う遺物は出土していない。

（高橋 健・熊木俊朗）

遺物

2号墓からはFig. 36の遺物が出土した。副葬品であることが確実なのは1と5で、他は副葬品か否か確言できない。

Fig. 36-1～3は土器。1は被覆状態で出土し、2は墓の埋土から、3は墓の検出面で確認された。1（PL. 6-1）はオホーツク貼付文系土器。おそらく2段の肥厚帯を有しているとみられるが、下段の肥厚帯はほとんど肥厚しておらず、明瞭には確認できない。上段の肥厚帯には貼付文が3条（ひねりあり、直線、ひねりあり）施され、下段の肥厚帯の縁には2本一単位の貼付文（直線＋ひねりあり）が施されている。内面・外面ともに炭化物が厚く付着する。2は後北C₂・D式土器の底部破片。3は無文のミニチュア土器。型式は不詳であるが、オホーツク土器もしくは後北C₂・D式土器の可能性が高いとみられる。

4は石器。遺体と関連する可能性がある灰褐色土の直上から出土している。黒曜石製の石錐で、黒と灰白色の流理が明瞭である。縦長剥片を素材とし、その端部に錐部が形成されている。

5（PL. 6-2）は錆膨れがあるものの、ほぼ完形の曲手刀子である。鋒部分はやや丸みを帯びる。茎尻は直線的に切れている。

（熊木俊朗・夏木大吾・笹田朋孝）

小括

2号墓はオホーツク貼付文期の墓である。被覆や刀子の副葬など、この時期に典型的な葬法が認められるが、頭位が南西である点はやや特異であり、注目されよう。

ピット3は伴う遺物が確認できておらず帰属時期や性格は判然としないが、ベンガラが敷かれている点からすると土坑墓である可能性が考えられよう。本遺跡群全体における遺構や遺物の確認状況や、常

呂川下流域における類例から判断するならば、縄文晩期末～続縄文文化期に属する蓋然性が高いといえる。ピット4についても同様で、縄文晩期末～続縄文文化期のいずれかの時期に属する土坑墓である可能性が考えられるが、どちらのピットも墓である確証は得られていない。 (熊木俊朗)

4 XXV (25) ライントレンチの遺構

検出されたピットの概要

XXV (25) ライントレンチ中では、後述するオホーツク1号墓のほかに、時期や性格がはっきりしないピットや溝状の遺構が合計で17基検出されている (Fig. 38)。これらのピットや溝状の遺構の検出面は全て耕作土の下層、Fig. 30-24層もしくは28層の上面であり、ピットの埋土は茶褐色もしくは明茶褐色のローム質土か、ロームブロックを多量に含む土であった。検出面の層位や埋土の様相からみて耕作開始以後に掘り込まれたものではないと判断したが、耕作土中ではピットのプランの検出が困難であることからすると耕作開始以後につくられたものである可能性も否定はできない。ここでは遺物が出土した3基のピットについてのみ記述し、他の遺構は省略する。遺構の形状等についてはFig. 38を参照されたい。

ピット1

XXIV (24) -60区において検出されたピットで、深さは掘り込み面から35cm、断面形 (Fig. 38 : k-1間) は縦長のV字形を呈する。埋土からFig. 37-1の土器とFig. 37-2・3の石器が出土した。

ピット2

XXIV (24) -60区において検出されたピットで、平面形は80cm×70cmの楕円形に近く、掘り込み面からの深さは20cmである。底面にベンガラとみられる赤褐色土が薄く敷かれている (網掛部分)。床面からFig. 37-4・5の石器が出土している。

ピット3

XXIV (24) -60区において検出されたピットで、深さは掘り込み面から15cm、断面形 (Fig. 38 : q-r間) は下部がすぼまる台形を呈する。埋土からFig. 37-6の石器が出土している。 (熊木俊朗)

遺物

Fig. 37-1はピット1埋土出土の土器。胴部破片で、表面は摩滅しており文様等の判別が難しいが無文とみられる。続縄文土器もしくはオホーツク土器の可能性が高いとみられるが、型式は不明である。

Fig. 37-2・3はピット1、4・5はピット2、6はピット3のそれぞれ埋土から出土した石器。2は尖頭器。黒曜石製である。基部が区分される形態をなし、丁寧な剥離で器面と縁辺は滑らかに整えられ、横断面はレンズ状を呈する。3は石匙。黒曜石製である。打点から末端部にかけて幅が広がる形態の剥片を素材とし、打点付近につまみ部、末端部に直線状の搔器刃部が形成される。4は削器。黒曜石製で、両面調整石器の調整剥片を素材とする。素材剥片の末端部付近に微細調整を施している。5は石匙。白灰色を呈する頁岩が用いられる。両面に加工があり、打点部付近につまみ部が形成されたナイフである。

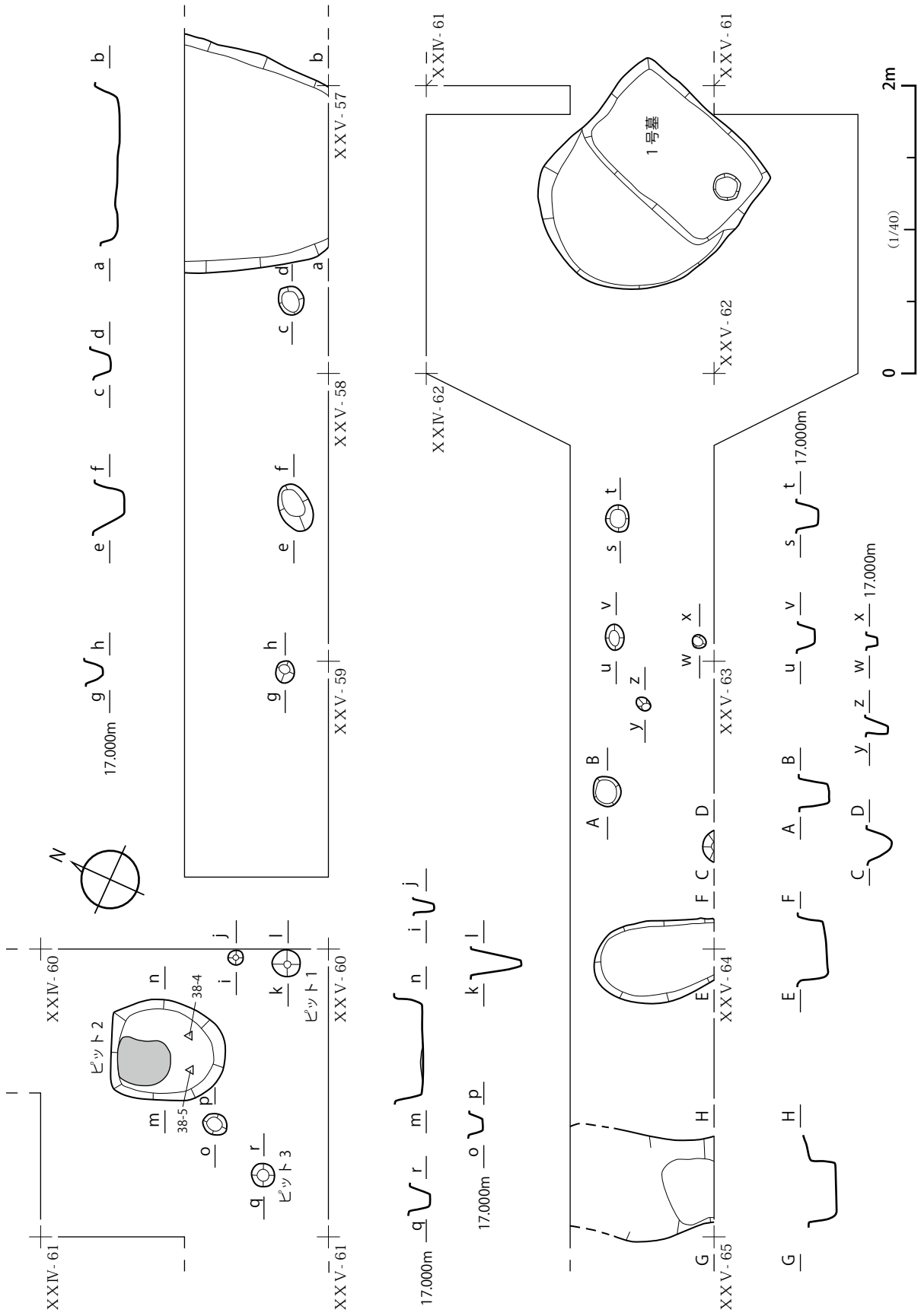


Fig. 38 オホーツク墓周辺 XXV (25) ライトレンチの遺構

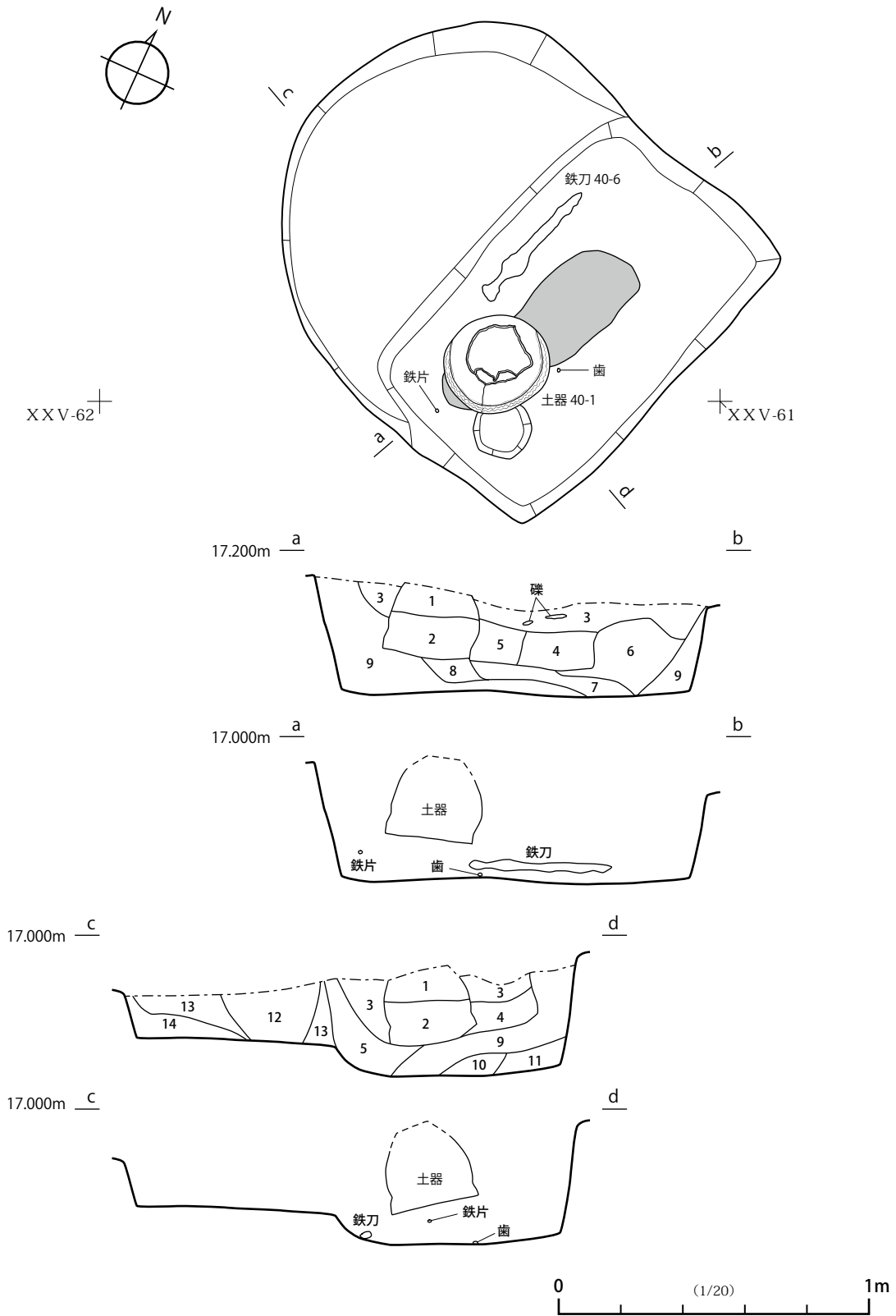


Fig. 39 XXIV (24) -61 区周辺 オホーツク 1号墓

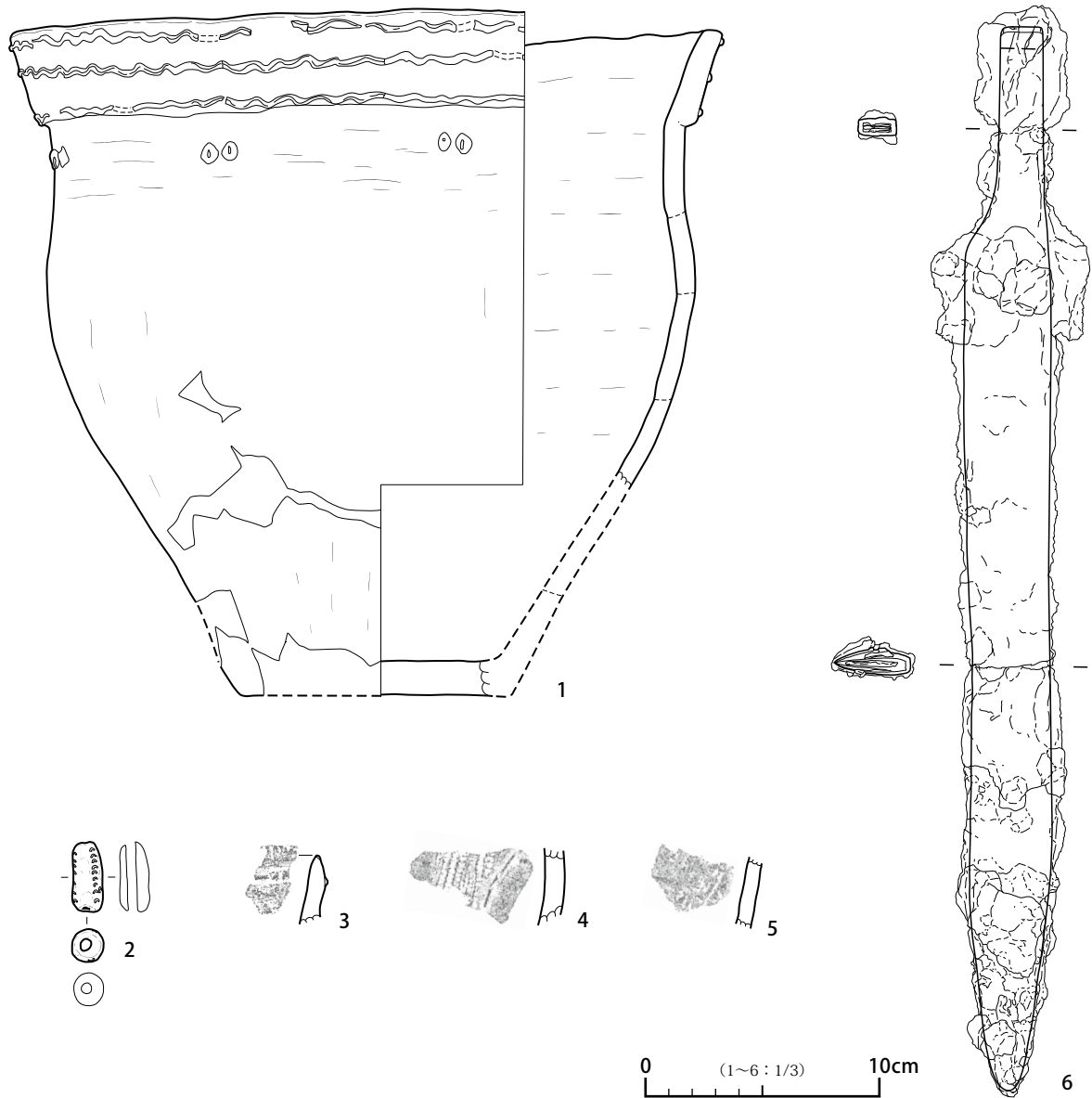


Fig. 40 XXIV (24) -61区周辺 オホーツク1号墓出土の土器(1・3~5)・土製品(2)・鉄器(6)

6は削器。黒曜石製である。剥片の両側縁に緩い弧状の刃部が形成されている。(熊木俊朗・夏木大吾)

小括

ピット1は出土遺物からすると続縄文文化期以降のピットであるとみられるが、詳細な帰属時期や性格は不明である。ピット2はベンガラとみられる赤褐色土の存在からすると墓の可能性が考えられるが、遺体の痕跡等は確認できておらず墓か否か確言できない。時期は Fig. 37-5 の石匙の特徴から判断すると、縄文前期につくられた可能性が高いといえよう。ピット3は帰属時期、性格ともに不明である。

(熊木俊朗)

5 XXIV (24) -61 区周辺 オホーツク 1号墓

調査の経緯

XXIV-61 区において、地表下約 50cm の耕作土中で倒立状態の土器を検出した (Fig. 39)。耕作によって遺構上部が破壊されていたため土器底部は破損しており、遺構検出面はほぼ地山の面であった。プランは長方形であるが、西側においては長辺に接してより不鮮明な半円形の広がりが確認された。なお検出面において径 5~15cm の礫が数個分布していたが、配石と確認できるほど明確なプランは見出せなかった。墓壙内の層序は以下のとおりである (Fig. 39)。1 層：黒褐色土層。ローム少し混じる。粒子粗く植物の根が多い。土器内部への耕作土の流れ込み。2 層：暗褐色砂層。ロームブロック混じる。土器内部の土。3 層：黒褐色土層。しまり弱い。4 層：黒褐色土層。ロームブロックが少し混じる。5 層：黒褐色土層。ロームブロックがほぼ半々で混じる。6 層：黄褐色土層。ロームに黒褐色土が多く混じる。7 層：黒褐色土層。8 層：黒褐色土層。ローム混じる。9 層：黄褐色土層。ロームブロックが大半を占め、黒褐色土が少し混じる。10 層：暗褐色土層。11 層：黄褐色土層。黒褐色土が少し混じる。9 層との区別は付け難い。12 層：黄褐色土層。大きなロームブロックに黒褐色土が少し混じる。13 層：黒褐色土層。14 層：黄褐色土層。ロームに黒褐色土が少し混じる。以上、ロームと黒褐色土が混じった土を両者の比率によって分層したため、その違いはしばしば漸移的である。

遺構

墓壙 (Fig. 39・巻頭写真 Front1-2) は長軸 126cm、短軸 78cm の長方形で、検出面からの深さは約 35cm である。墓壙西側に径約 125cm の半円形ピットがテラス状に隣接する。この部分の底面は墓壙より約 10cm 高い。このテラス状部分は土層堆積から判断すると墓壙より古いようであるが、テラスの径と墓壙の長軸の長さがほぼ一致している点は、このテラスが墓壙の付帯施設である可能性を思わせる。また土器からややずれた位置の墓壙底面では、径 18cm、深さ 3.5cm のピットが検出された。墓壙に伴うものであろう。長軸方向は北北東-南南西、頭位は土器の位置から判断して南南西である。副葬品は被喪状態で出土した土器と、墓壙西側長辺に沿った位置に墓壙床面から出土した刀があり、他に土器の近くから鉄製品小片が出土した。なお覆土中には玉砂利がみられたほか、Fig. 40-2 の土製品が出土している。遺体の残存状態は非常に悪いが、墓壙底面の土器からややずれた位置から歯のエナメル質部分が出土し、土器の下にあたる部分から微小な骨片が少数出土した。また墓壙底面に遺体に関連する可能性がある変色部分を検出した (網掛部分)。(高橋 健)

遺物

Fig. 40-1 (PL. 7-1) は被喪の状態出土したオホーツク貼付文系土器。底面付近には欠損部分が多いが、それ以外はほぼ完全な形で遺存している。口縁部に肥厚帯を有し、肥厚帯上に 3 条の貼付文 (全てひねりあり) を有する。頸部には 2 ケー組のボタン状貼付文が計 8 組付されている。内面・外面ともに炭化物が厚く付着している。2 (PL. 7-2) は墓の埋土出土の土製品。両端がややすぼまる管玉状の形をしており、外面の全周には植物の茎を原体にしたとみられる、半裁竹管の形をした刺突文の列が 5

列施されている。形式的な特徴からは帰属時期を特定するのは難しく、その点では墓に伴うものか否か確言できないが、遺物の形状からすると装飾品の可能性もあり、その意味では副葬品と考えてよいかもしれない。3は墓の埋土、4・5は墓の底部付近から出土した土器。これら3～5の土器は型式から判断すると副葬品ではなく、埋土中に混入したものとみられる。3・4は後北C₂・D式土器で、3は口縁部、4は胴部破片。3の口唇部とその直下の貼付文上には刻み目が施されている。5は無文の胴部破片であるが、胎土などから判断すると後北C₂・D式土器とみられる。

Fig. 40-6 (PL. 7-3) は完形の鉄刀である。全長は45.5cmで刃部の長さは36.3cm、棟の厚みは7mmである。棟区は無く、刃区は撫角である。オホーツク文化に伴う鉄刀や蕨手刀の鋒の形状は主にカマスになることが多い。それに対してこの資料では鋒部分が内反りで一見すると両刃となっている。鋒が両刃となる鉄刀は目梨泊遺跡第9号墓（佐藤編1994）からも出土しているがその類例は少ない。鋒部分が両刃になるように研ぎ直している可能性がある。茎部分に目釘孔は確認されない。茎尻は切断後、折り返している。『モヨロ貝塚資料集』（米村1950）の図版62の上から二つ目の鉄刀の茎尻などと共通する。

（熊木俊朗・笹田朋孝）

小括

1号墓はオホーツク文化貼付文期の墓である。被襲や鉄刀の副葬など、この時期に典型的な葬法が認められるが、頭位が南南西である点や、半円形のテラスのような付帯施設が伴う点はやや特異である。頭位は2号墓のそれとも近く、本遺跡例に特徴的なあり方として注目されよう。

（熊木俊朗）

6 XXVII (27) ライントレンチの遺構

ピット1

XXVI (26) -52区において、耕作土の下部、Fig. 30-31層の上面でピットが検出された (Fig. 41)。ピットの北側がXXVII ライントレンチの外まで広がっていることが確認されたため、トレンチの西端を北側に0.8m×1mの範囲で拡張してピットの全体を検出している。ピットの埋土はローム粒を含む茶褐色土であり、埋土中からはFig. 41-1~3の土器が出土した。

ピットの上端の大半は耕作で破壊されていたため、元々の形状や規模は正確にはわからないが、遺存している範囲では平面形は55cm×60cmの楕円に近い形で、深さ36cmの円筒形を呈する。

遺物

Fig. 41-1~3はピット埋土から出土した土器。1はオホーツク貼付文系土器の口縁部破片。肥厚帯を有し、肥厚帯上には2本一単位の貼付文と3本一単位の貼付文が付される。頸部にも2本一単位の貼付文が確認できる。2はIO突瘤文を有する口縁部破片で、地文は原体Rの撚糸文である。宇津内IIa式もしくは元町2式であろう。3はオホーツク貼付文系土器の胴部破片。

小括

ピット1は出土遺物から判断するとオホーツク文化貼付文期以降に掘り込まれたピットとみられるが、

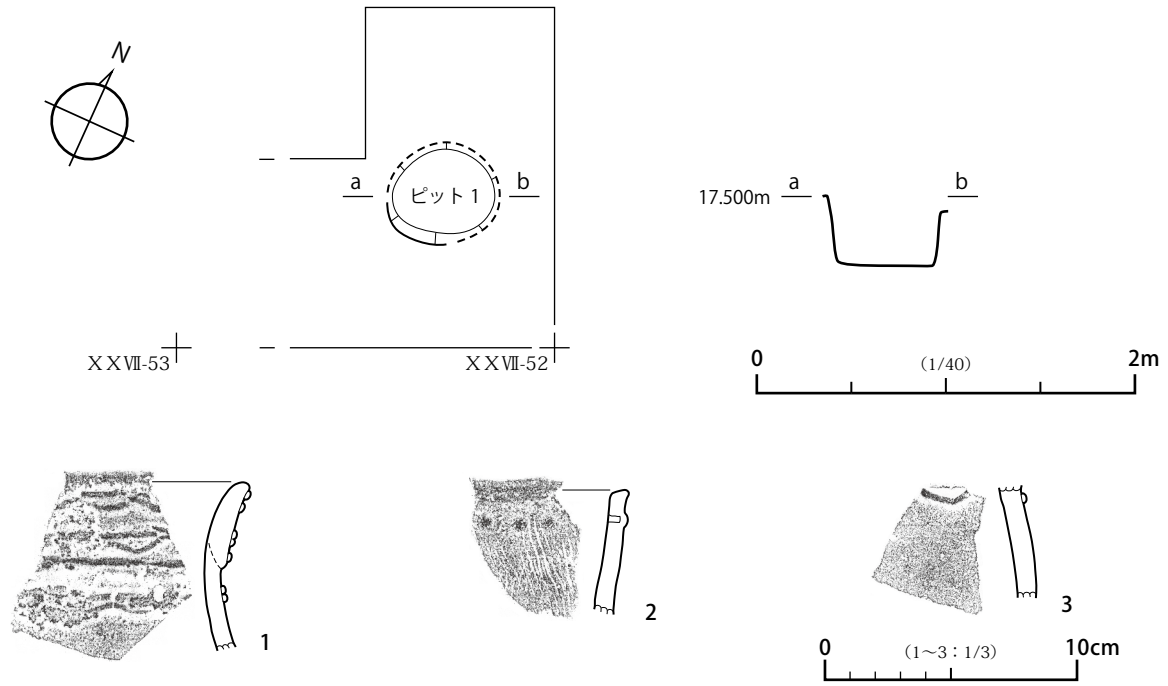


Fig. 41 XXVII (27) ライントレンチの遺構および出土土器

正確な時期や性格は不明である。なお、XXVII ライントレンチではこのピット 1 以外に遺構は確認されていない。(熊木俊朗)

註

- 1) この「短期間の埋没」には耕作等による近代以降の埋め戻しの可能性も含まれる。

第三章 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点 A～H トレンチの調査（2006 年度－2007 年度）

第一節 調査の経過

1 調査に至る経緯と調査目的

2001 年度までの全体試掘調査で遺跡群全体の遺跡分布状況が概ね把握できたこともあり、トコロチャシ跡遺跡群は 2002 年 9 月に史跡常呂遺跡の追加指定地区となった。その後の史跡整備計画では、オホーツク文化の竪穴住居復元のためのデータ整備を図るため、オホーツク 10 号竪穴の発掘調査を実施することを決め、2003 年度から 2005 年度までの三カ年をかけて 10 号竪穴を完掘した（東大考古学研究室・常呂実習施設編 2012）。この調査により、復元住居建設のためのデータはより一層充実したものとなり、具体的な復元案も示されるに至った（浅川・大給 2010）。

一方でオホーツク文化期の竪穴群と墓域の関係については、前章で詳述した 1 号墓と 2 号墓の発見によって、竪穴群の南東に隣接して墓域が存在することは判明したものの、10 基以上の竪穴群からなる比較的大規模な集落の墓域としては墓の数が少なく、他にも墓域が存在する可能性が疑われた。オホーツク文化の墓域は竪穴群に近接した地点で確認されている例が多い（熊木 2002）ことからすると、1 号墓・2 号墓の位置する地区から竪穴群の南～南西に隣接する地区にかけて墓域が広がっている可能性が考えられたのである。以上のことから、2006 年度～2007 年度の史跡整備計画ではオホーツク文化の墓域の範囲確認を目的として、トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の南側地区を中心とした詳細な遺構確認調査が企画された。

2 2006 年度調査の経過

2006 年度では 1 号墓・2 号墓の南側からオホーツク地点 10 号竪穴の南部にかけてトレンチを設定し、遺構の分布調査を行うこととした。トレンチは XXXI (31) -35 から XXXI (31) -65 までの XXXI ライン、および XXXIII (33) -35 から XXXIII (33) -65 までの XXXIII ラインのそれぞれ北側に沿って、幅 1m のものを 2 列、断続的に設定した。47 ラインから 52 ラインまでが未調査なのは主に農道部分を避けたためであり、60 ライン以東の調査区が断続的なのは地下水位が高くトレンチ内が水没したためである。各トレンチの呼称として、XXXI ライン西側を A トレンチ、XXXIII ライン西側を B トレンチ、XXXI ライン東側を C トレンチ、XXXIII ライン東側を D トレンチとそれぞれ定めた（付図 App. Fig.、Fig. 42）。検出された遺構の名称については、A～D の各トレンチを一括して検出順にピット 1・ピット

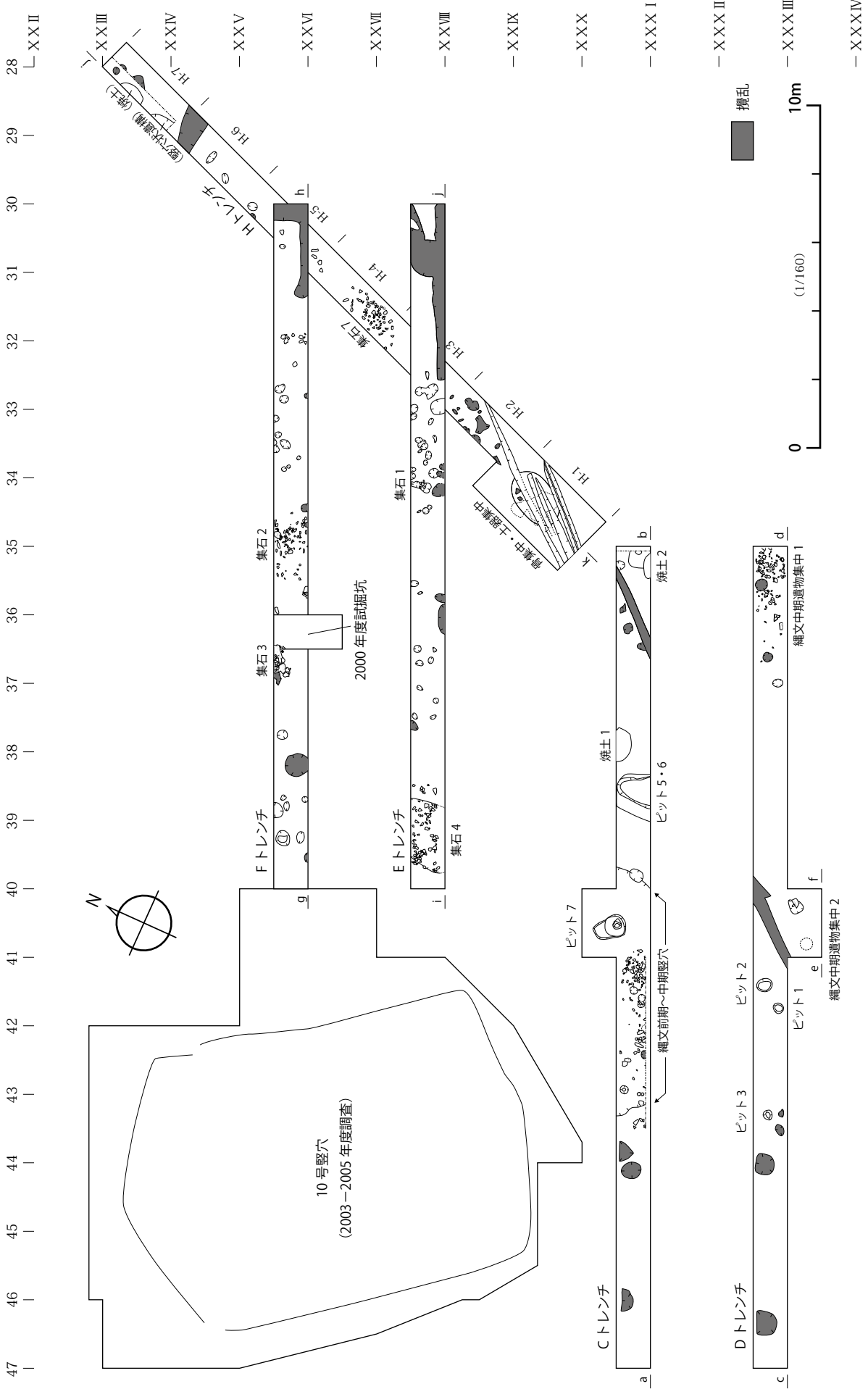


Fig. 42 C・D・E・F・Hトレンチ全体図

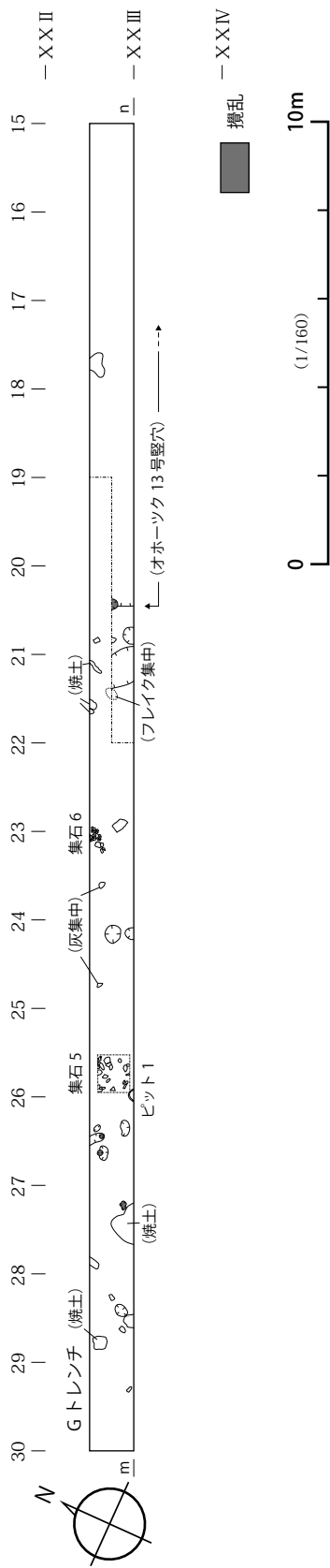


Fig. 43 G トレンチ全体図

2…のような連番とすることとした。遺物は遺構に伴うものを除き、表土・耕作土ではトレンチ毎に、それ以下の土層では各トレンチのグリッド毎に一括して取り上げた。

調査はA・Bの各トレンチから先に開始した。耕作土を除去し基本層序II層の上面を検出して精査したところ、遺物は散点的に出土したが両トレンチとも遺構の痕跡は全く認められなかった。暗渠など、II層以下まで掘り込まれた多数の攪乱部分を掘りあげた後、土層堆積の確認のためA・B各トレンチ内のXXXIライン及びXXXIIIラインに沿った側の下面を幅50cmでさらに深さ50cmほど掘り下げ、基本層序のIII層及びIV層の堆積状況を確認したが、この段階でもA・Bの両トレンチ内では遺構は全く確認できなかった。

A・B両トレンチの調査と併行して、C・Dトレンチの調査にも着手した。Cトレンチでは基本層序のI層（表土・耕作土）の下層に堆積する黒褐色土層、もしくはそのさらに下層に位置する基本層序のII層まで掘り進めた段階で遺構が検出されはじめた。XXX(30)－40区ではオホーツク文化の墓が検出されたと判断して、遺構の位置に合わせてトレンチを北に2m×1mの範囲で拡張して調査をすすめたが、最終的に墓ではないと判断し、「ピット7」として扱った。また、XXX－39～43区にかけては縄文前期～中期の竪穴住居跡とみられる遺構（「縄文前期～中期竪穴」）を確認しているが、遺構の範囲確認と覆土中の遺物の出土状況を記録するのみに止め、詳細な調査はおこなわなかった。Cトレンチでは他にもII層上面までの土層中でピットや焼土の存在をいくつか確認し、「ピット4」・「ピット5」・「ピット6」及び「焼土遺構1」・「焼土遺構2」については完掘して記録したが、これ以外の遺構については完掘せずに上面の確認と記録のみに止め、基本的に基本層序II層の上面を検出した段階で調査を停止した。

Dトレンチでは、隣接するXXXIII－40区において2000年度詳細分布調査の際に遺構の可能性のある凹みがDトレンチの区域まで及ぶような状況で観察されていたので、この部分に2m×1m拡張区を設定して調査を進めた。Dトレンチ全体の耕作土を除去しII層上面を検出したところ、XXXII(32)－35～36区において縄文中期の北筒式トコロ6類土器、石器、被熱した礫を含む遺物集中を確認した（「XXXII－35～36区 縄文中期遺物集中1」）。ほかにもDトレンチ内ではXXXIII(33)－40区のII層中において中期の土器集中（「XXXIII－40区 縄文中期遺物集中2」）を確認したほか、II層上面で「ピット1」・「ピット2」・「ピット3」を確認した。これらの遺構については完掘して記録したが、これ以外の遺構については完掘せずに上面の確認と記録のみに止めた。XXXIII－40区の拡張区で2000年度に検出されていた凹みについては、周辺でその続きを確認できなかったことから、遺構ではないと判断した。Dトレンチも基本的にはII層上面を検出した段階で調査を停止したが、XXXIII(33)－40区と、トレンチの東端1m×1mおよび西端1m×1mの部分では土層堆積を確認するためIII層上面まで発掘を行った。その際、XXXIII－40区ではIII層上面でピットを確認しているが上面確認に止めている。このように2006年度A～Dトレンチの調査においては、CおよびDトレンチで縄文文化期などの遺構が検出されたものの、オホーツク文化の墓は確認できなかった。

3 2007 年度調査の経過

2007 年度は前年度調査区の北側、すなわちオホーツク地点の南東部に隣接する区域に新たにトレンチを設定し、遺構の分布を確認することとした。トレンチは幅 1m のものを、XXVIII (28) -30 から XXVIII-40 までの XXVIII ライン沿いの北側 (E トレンチ)、および XXVI (26) -30 から XXVI-40 までの XXVI ライン沿いの北側 (F トレンチ)、XXIII (23) -15 から XXIII-30 の XXIII ライン沿いの北側 (G トレンチ)、XXX-35 と XXIII-28 を結ぶライン沿いの東側 (H トレンチ) に各々設定した (Fig. 42・Fig. 43)。なお、F トレンチは 2000 年度試掘調査のテストピット (XXV (25)～XXVI (26) -36 区に 1m×2m の範囲で設定、Fig. 42 参照) の北半分と重なる位置に設定されている。検出された遺構の名称については、前年度同様、E～H の各トレンチを一括して検出順に集石 1・集石 2…のような連番とすることとした。また各トレンチの出土遺物も、遺構に伴うものを除き、表土・耕作土ではトレンチ毎に、それ以下の土層では各トレンチのグリッド毎に一括して取り上げた。H トレンチの調査区については、XXX-35 と XXIII-28 を結ぶライン上に位置する 6ヶ所のグリッド交点を基準として、長さ約 2.8m の区を南側から H-1 区～H-7 区まで設定して遺物の取り上げ等をおこなっている。

調査は E・F の各トレンチから先に開始した。両トレンチにて基本層序 I 層の表土・耕作土を除去したところ、耕作の影響を受けていないとみられる黒褐色～茶褐色の土層上面が検出された。当初、これは基本層序 II 層の上面と判断されたが、その後の掘り下げによって、さらに下層の暗褐色土が本来の II 層に相当すると判断された。よってこの I 層直下の黒褐色～茶褐色の土層は「I_o 層」(o はオホーツク文化の頭文字を意味する) として扱うこととした。I_o 層は E・F トレンチの広い範囲で 5～10cm の厚さで堆積が確認されたが、堆積が認められない部分もあった。この I_o 層を掘り下げて II 層上面を検出してゆく過程で、砂岩の角礫・土器・石器などを集積した遺構 (「集石 1～4」¹⁾) が E トレンチで 2ヶ所、F トレンチでも 2ヶ所検出された。集石 1からはオホーツク土器、集石 2・集石 4からは縄文中期北筒式などの土器、集石 3からは続縄文初頭とみられる土器が出土しており、各遺構はこれらの遺物の時期に属している可能性が高いと判断された。他にも II 層上面ではピットとみられる黒褐色土の落ち込みや、小規模な集石遺構が検出された。これらの遺構については上面プランの確認と、上面で確認された土器・石器を取り上げたのみで掘り下げは行っていない。ほかに、E トレンチ・F トレンチの東端付近では耕作による攪乱が確認されている。E トレンチ・F トレンチの掘り下げは II 層上面を検出した段階で停止し、調査を終了した。

E トレンチ・F トレンチの調査がある程度進行したところで、G トレンチの調査に着手した。G トレンチにて基本層序 I 層の表土・耕作土を除去したところ、21 ラインより西側では基本層序 II 層の上面が検出されたが、東側では同じ標高で II 層が検出されずに黒褐色土がより下部まで続いている状況が確認された。このような土層堆積が形成された要因を探るために、XXII-17 区と XXII-25 区に各々 1m×1m の深掘り区を設定して掘り下げを行った。すると XXII-17 区では、深掘り区内のほぼ全面に焼けたローム質土の土層面が確認された。この土層面については、オホーツク文化竪穴住居跡の焼けた

床面の可能性が高いと判断した（「オホーツク 13 号竪穴」²⁾）。この竪穴床面の調査は深掘り区の範囲内に止めたが、竪穴の拡がり（壁の立ち上がり）を確認するために XXII-18・19・20・21 区にかけて G トレンチ内の南半分に長さ 8m、幅 50cm のサブトレンチを設定し、II 層上面相当の標高からさらに 30cm ほど掘り下げを行った。すると XXII-20 区内の地表下約 60cm で壁の立ち上がりとみられる土層の境界面（II 層の暗褐色土と、黒褐色土や焼土粒を含む暗褐色土との境界）が検出され、さらに深掘り区内（＝竪穴内）に向かって黒褐色土が落ち込んでゆく堆積状況が確認された。よって竪穴の存在は確定的なものと判断し、サブトレンチ内の調査を停止した。一方、XXII-25 区の深掘り区では II 層を 15cm ほど掘り込んだ面で、一見、竪穴住居跡の落ち込みのように見える帯状の茶褐色土と、その面上に分布する礫と縄文前期の土器を確認した。その後の精査によってさらにその下部には 35cm ほどの厚さの間層を挟んで焼土を含む礫・土器などからなる集石遺構（「集石 5」）が存在することが確認された。ちなみにこの間層中には焼土・炭化物・獣骨などがやや多く含まれていた。この集石 5 は地表下約 1m で確認されているが、III 層やいわゆる地山層である IV 層はこの段階でも検出されず、この深掘り区では II 層相当の層が 50cm 以上の深さで堆積していることが確認された。しかし、集石 5 が検出されたためこの XXII-25 区の深掘り区の調査は II 層の途中で停止し、III 層上面の確認は行わなかった。ほかに G トレンチの II 層上面では、縄文前期・中期の土器を含む集石遺構（「集石 6」）、焼土、ピットなどが確認されているが、これらの遺構についても上面プランの確認と、上面で確認された土器・石器を取り上げたのみで掘り下げは行っていない。G トレンチの掘り下げも上記の深掘り区・サブトレンチを除いて II 層上面相当の標高で停止し、調査を終了した。

E・F 両トレンチの調査終了後、H トレンチの調査にも着手した。H トレンチにて I 層の表土・耕作土を除去する過程で、H-1 区から H-2 区にかけて細かな骨片、オホーツク貼付文系土器や石器が集中する地点があり、層位と遺物の内容からみてオホーツク文化期の遺構と判断された。この遺構は墓と関連する可能性も考えられたが、トレンチャー等による攪乱を激しく被っていたため掘り込みを検出するのが困難な状態であり、また H トレンチ外の西側まで拡がっていたので、H トレンチの南端に幅 1m、長さ 3.5m の拡張区を設定し、遺構の残存状況と内容を確認した。その過程で、この遺構は全面的に耕作による攪乱を受けていることが判明したため、記録は範囲確認のみに止めて掘り下げを行い、骨の精密なサンプリングは行わなかった。調査の結果、オホーツク文化の墓を構成するような遺構・遺物は確認されず、鳥骨や海獣骨などの獣骨の細片を主体とすることが明らかとなったので、これを「H-1～2 区 骨集中」とした。骨集中の下面（II 層上面の直上）からは、1 個体以上のオホーツク土器の破片が大量に集中して出土したため、その範囲を記録して取り上げた。この土器集中もほぼ全面的に耕作による攪乱を受けていた。一方、H トレンチ北端部の H-7 区では、I 層の直下にロームの堆積が確認された。暗渠等による攪乱の可能性が考えられたため、H トレンチ内 H-7 区の西側に長さ約 2.8m、幅 30cm のサブトレンチを設定してこのロームの掘り下げを行った。ロームを確認面から 20cm ほど掘り下げると、プライマリーな II 層の堆積が確認されたため、このロームは暗渠等の埋土による攪乱と判断した。サブトレンチ内の II 層上面においては、焼土と、遺構（竪穴住居跡か？）の落ち込みとみら

れる暗褐色土の拡がり確認されている。H トレンチのⅡ層上面では、これらの遺構以外にも縄文前期～中期の土器や礫などを含む集石遺構（「集石 7」）やピットなどが確認されているが、これらの遺構についても上面プランの確認と、上面で確認された土器・石器を取り上げたのみで掘り下げは行っていない。H トレンチの掘り下げも上記のサブトレンチを除いてⅡ層上面で停止し、調査を終了した。

（熊木俊朗）

註

- 1) 各「集石」遺構については、発掘調査の際には「配石」という名称で台帳や図面に記録している。
- 2) オホーツク 13 号竪穴については、発掘調査の際には「オホーツク 11 号竪穴」という名称で台帳や図面に記録している。

第二節 A～H トレンチの土層堆積

1 基本層序

トコロチャシ跡遺跡群全体の基本層序は第一章第二節2に示したとおり、I層：表土もしくは耕作土、II層：暗褐色土（I層とIII層の漸移層）、III層：茶褐色粘土（いわゆるローム層）、IV層：黄褐色粘土（いわゆるローム層）である。2006年度までに確認されていたオホーツク文化期や続縄文文化期の遺構はII層を掘り込んで構築されており、また縄文早期の石刃鍬石器群はIII層上面を中心として確認されていた。A～Hトレンチ内の層序も基本的にはこれらと同じであったが、Cトレンチの中央部（XXXI-38グリッドからXXXI-44グリッドにかけての部分）付近と、Eトレンチ及びFトレンチのやや広い範囲、さらにGトレンチとHトレンチの一部ではI層とII層の間に黒褐色土が5～10cmの厚さで堆積しており、これは出土遺物の内容からオホーツク文化期を中心として形成された土層堆積の可能性が高いと考えられた。この黒褐色土層は本遺跡群におけるオホーツク文化期の土地利用を知る上で重要であると考えられたため、「Io層」¹⁾と呼称してA～Hトレンチの基本層序として扱うこととした。

(熊木俊朗)

2 各トレンチの土層堆積

A トレンチ・B トレンチ

AトレンチおよびBトレンチの土層堆積は以下のとおりである（Fig. 44）。1層：耕作土。耕作等によって下層から巻き上げられたとみられるロームブロックを含む箇所が部分的に認められる。基本層序のI層。2層：暗褐色土。III層よりも不均質・粗粒で腐植土の粒子が混ざる。基本層序のII層。3層：茶褐色土。粘性がやや強い。下位の4層との層界は不明瞭。基本層序のIII層。4層：黄褐色土。砂質でしまりが強い。基本層序のIV層。

C トレンチ・D トレンチ

CトレンチおよびDトレンチの土層堆積は以下のとおりである（Fig. 45）。1層：耕作土。暗渠など、現代の攪拌によって下層から巻き上げられた土などを含む。基本層序のI層。2層：黒褐色土。径4cm以下の円礫や、下位の暗褐色土の粒子が少量混じる。土器・石器等の遺物が多く認められる。基本層序のIo層。3層：黒褐色土。2層とほぼ同じ様相を呈するが、径25cm以下の角礫や、ローム粒を含む。土器・石器等の遺物が多く認められ、骨片、炭化物粒、焼土粒を少量含む。基本層序のIo層。4層：焼土。炭化物粒を少量含む。5層：暗褐色土。粘性がやや強い。基本層序のII層。6層：暗褐色土。5層とほぼ同じだが、径20cm以下の角礫をやや多く含んでいる。土器・石器等の遺物が認められる。7層：茶褐色土。粘性がやや強い。基本層序のIII層。8層：暗褐色土。5層に近い様相を呈するが、径25cm

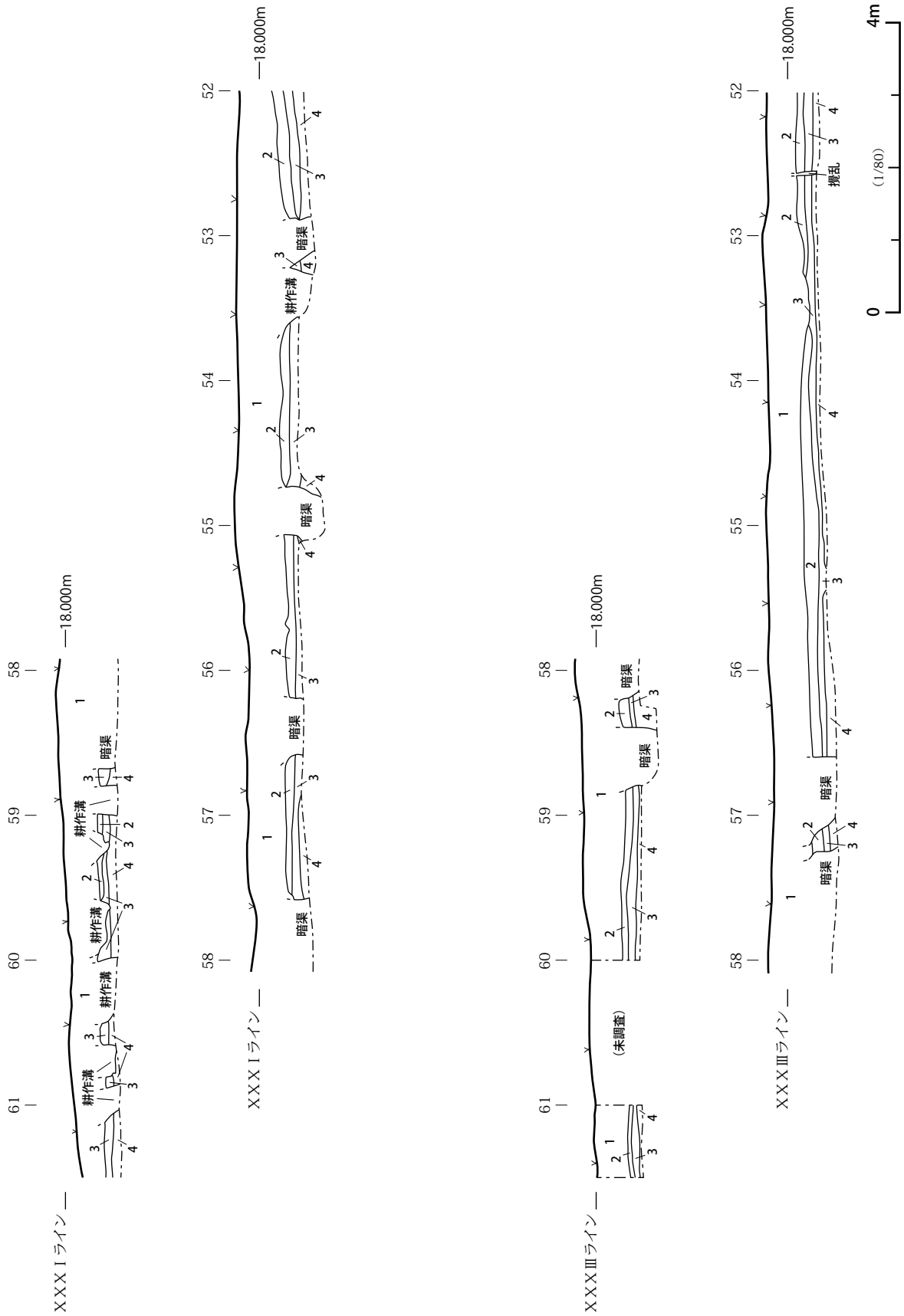


Fig.44 A トレンチ・B トレンチ土層図

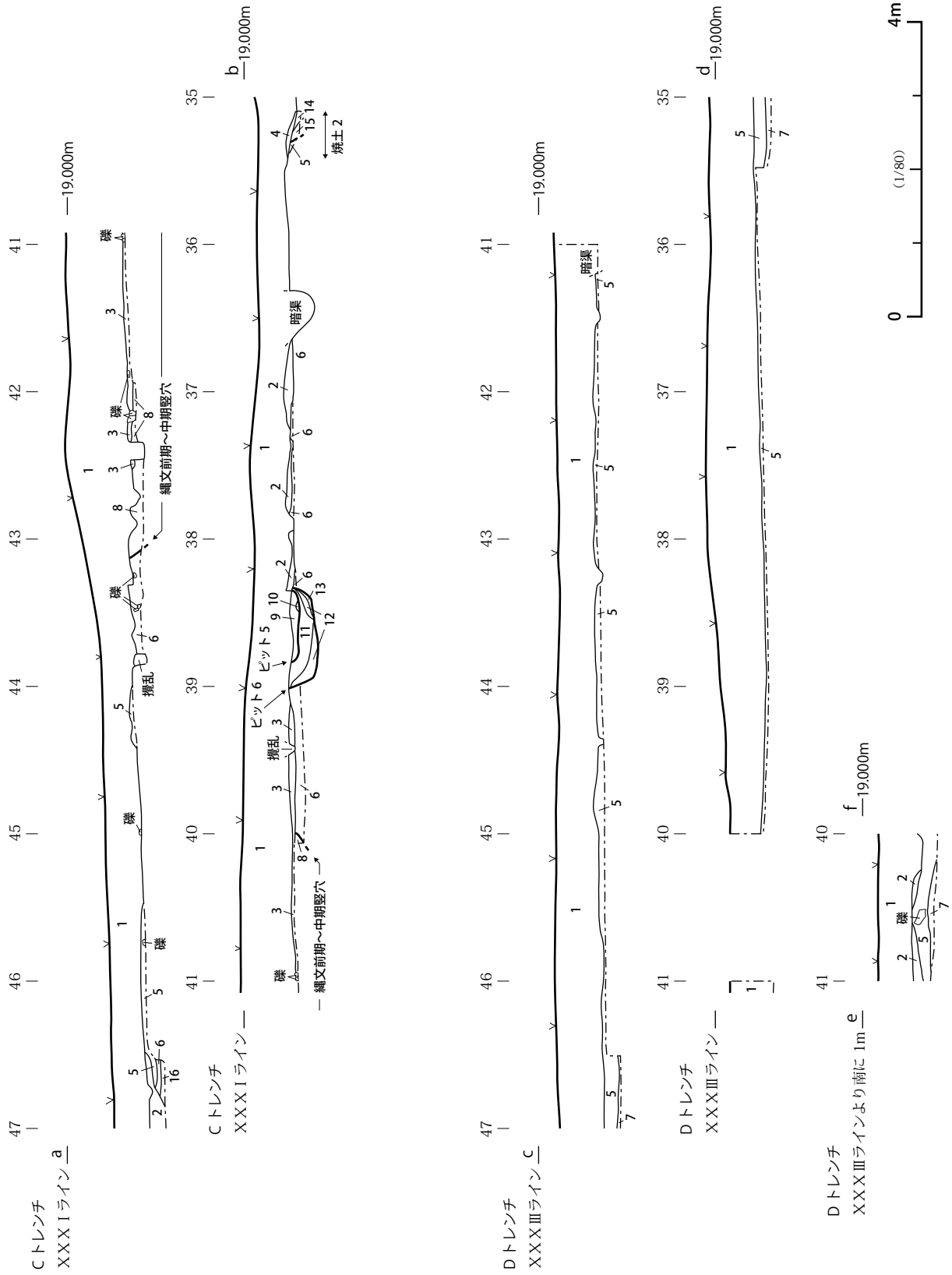


Fig. 45 C トレンチ・D トレンチ土層図

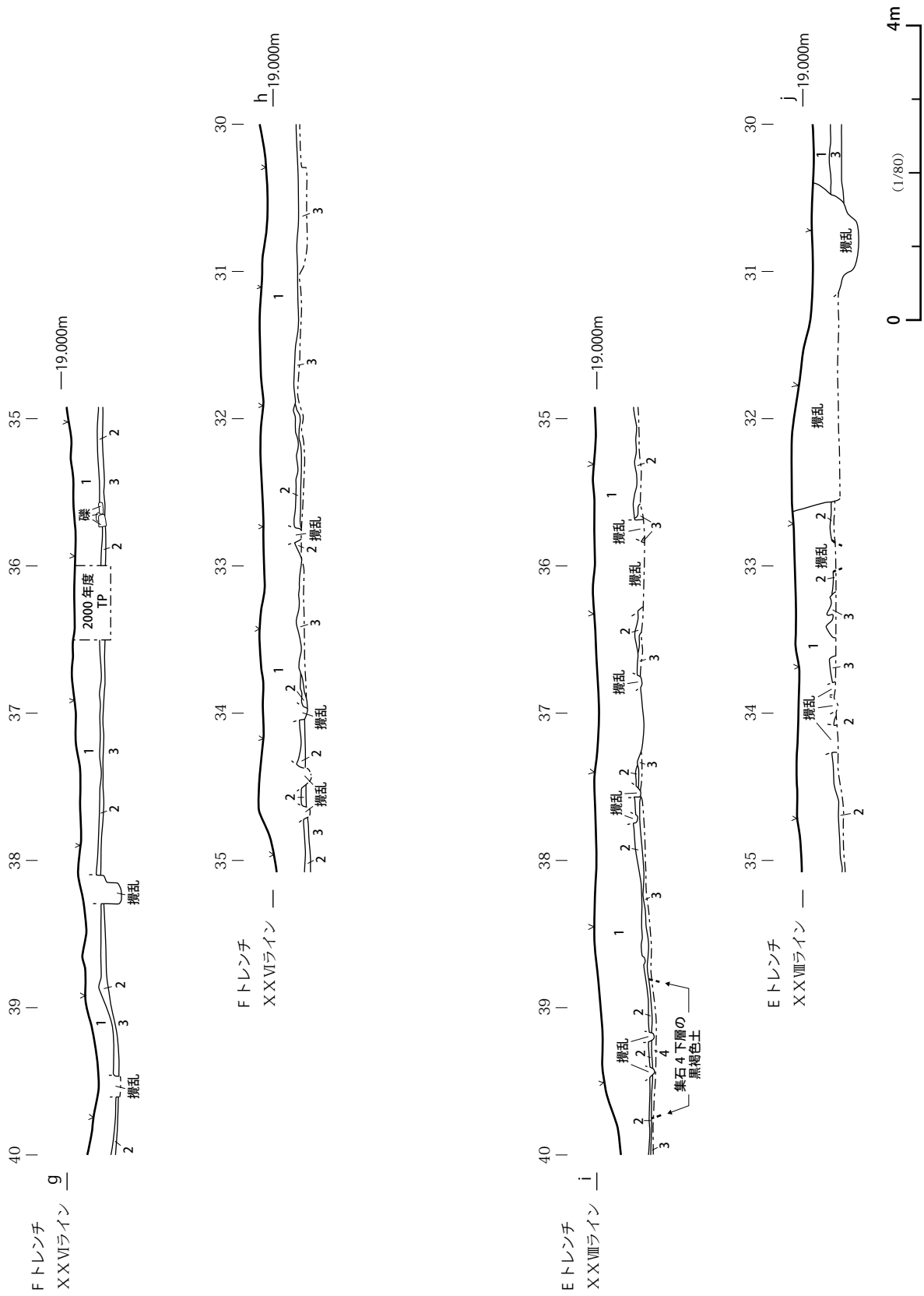


Fig. 46 F トレンチ・E トレンチ土層図

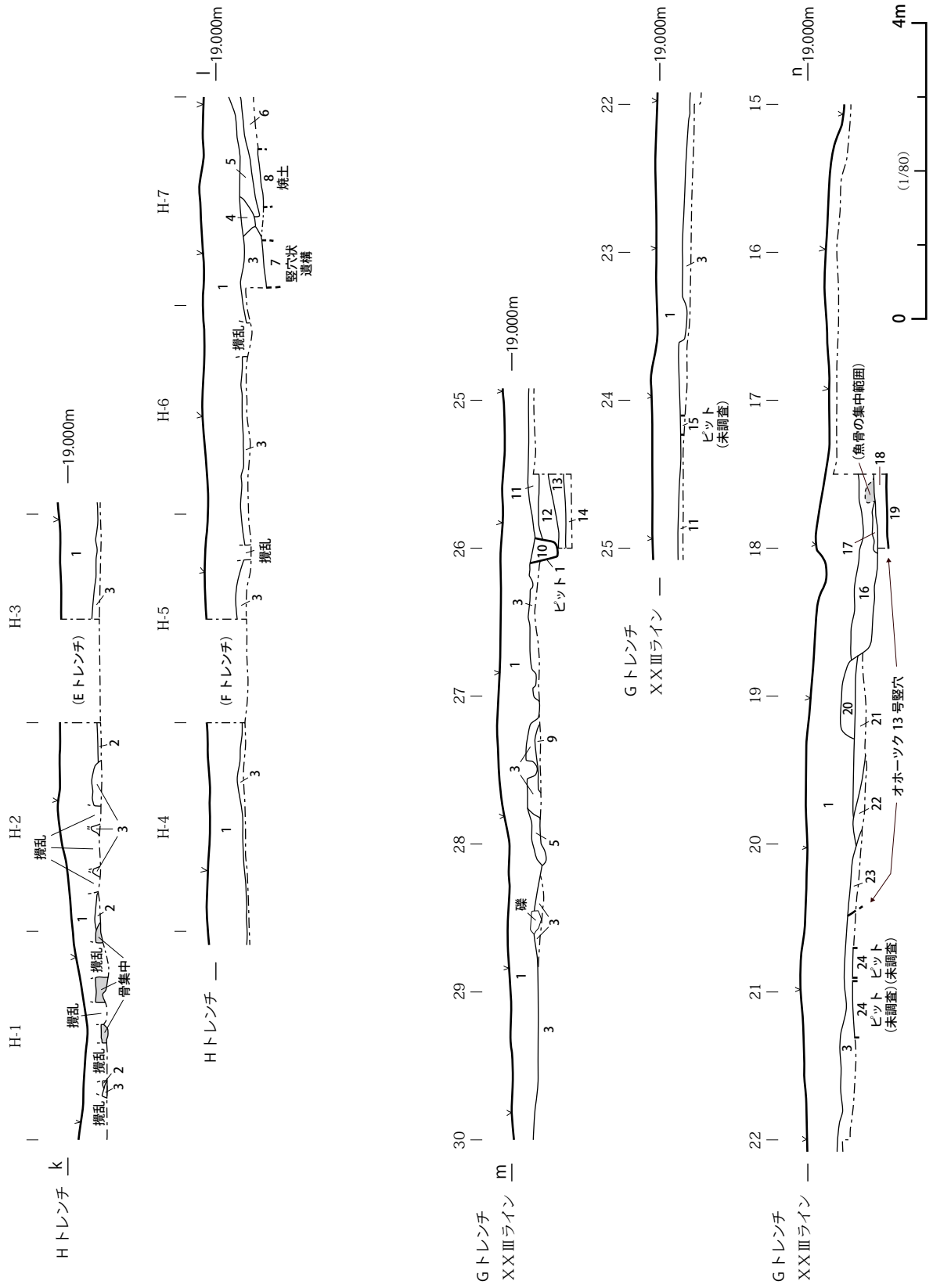


Fig. 47 H トレンチ・G トレンチ土層図

以下の角礫を多く含み、土器・石器等の遺物が多く認められ、焼土粒、ローム粒、炭化物粒を少量含む。9 層：黒褐色土。粘性がやや強い。径 2cm 以下の円礫と焼土粒を少量含む。10 層：黒褐色土。粘性がやや強い。径 8cm 以下の角礫を含む。11 層：暗褐色土。5 層に近い様相を呈するが、やや黒みが強い色調。ローム粒、径 5cm 以下の円礫を少量含む。12 層：暗褐色土。11 層とほぼ同じ様相を呈するが、径 10cm 以下の角礫を少量含む。13 層：暗褐色土。11 層とほぼ同じ様相を呈するが、わずかに赤みがかった色調。しまりがやや弱い。14 層：黒色土。15 層：暗褐色土。5 層に近い様相を呈するが、ロームブロックを多く含む。16 層：黄褐色土。基本層序の IV 層。

4 層は C トレンチ焼土遺構 2 の焼土、8 層は C トレンチ縄文前期～中期竪穴の埋土、9 層・10 層は C トレンチピット 5 の埋土、11 層～13 層は C トレンチピット 6 の埋土である。2 層・3 層はオホーツク文化貼付文期を中心とする遺物包含層、6 層は縄文前期～中期を中心とする遺物包含層に位置づけることができる。

E トレンチ・F トレンチ

E トレンチおよび F トレンチの土層堆積は以下のとおりである (Fig. 46)²⁾。1 層：耕作土。暗渠など、現代の攪拌によって下層から巻き上げられた土などを含む。基本層序の I 層。2 層：黒褐色土。下位の暗褐色土の粒子や、焼土粒が少量混じる。基本層序の Io 層。3 層：暗褐色土。粘性がやや強く、下位の茶褐色土よりも粗粒・不均質。一部の地点では焼土粒・角礫・円礫を多く含み、土器・石器等の遺物が顕著に認められる。基本層序の II 層。4 層：黒褐色土。

4 層は E トレンチ集石 4 の下層で検出された土層である。3 層は縄文前期～中期を中心とする遺物包含層に位置づけることができる。

G トレンチ・H トレンチ

G トレンチおよび H トレンチの土層堆積は以下のとおりである (Fig. 47)。1 層：耕作土。暗渠など、現代の攪拌によって下層から巻き上げられた土などを含む。基本層序の I 層。2 層：黒褐色土。下位の暗褐色土の粒子や、焼土粒が少量混じる。基本層序の Io 層。3 層：暗褐色土。粘性がやや強く、下位の茶褐色土よりも粗粒・不均質。基本層序の II 層。4 層：暗褐色土。2 層とほぼ同じ様相を呈するが、下位の 5 層の粒子が多く含まれ、焼土粒、炭化物粒が少量混じる。5 層：褐色土。均質なローム質土であるが、層中に異色の筋が認められるため、現代の攪乱とみられる。6 層：暗褐色土。3 層とほぼ同じ様相を呈するが、色調がやや明るい。7 層：暗褐色土。8 層：焼土。9 層：赤褐色土。焼土を多く含む。10 層：黒褐色土。11 層：暗褐色土。3 層とほぼ同じ様相を呈するが、色調がやや明るく、焼土粒と炭化物を少量含む。12 層：暗褐色土。11 層とほぼ同じ様相を呈するが粘性がやや強い。焼土粒と炭化物を少量含む。13 層：暗褐色土。粘性が強く、灰を多く含む。焼土粒、炭化物、骨を含む。14 層：暗褐色土。13 層より灰色がかった色調で、粘性がやや強い。炭化物を少量含む。15 層：黒褐色土。16 層：黒褐色土。しまりが弱く、魚骨等の骨をやや多く含み、土層内部にその集中箇所が認められる。径 2～3mm の礫、炭化物粒を少量含む。現代の遺物は認められないが、耕作土の可能性もある。17 層：黄褐色ローム質土。18 層：黒褐色土。焼土粒を含む。19 層：赤褐色土。焼土を多く含む。20 層：黒褐色土。

ロームブロックや灰を多量に含み、焼土粒を少量含む。現代の攪乱である可能性もある。21層：黒褐色土。粘性がやや強く、3層のものともみられる暗褐色土の粒子を含む。砂、焼土粒、炭化物、径10cm以下の礫を少量含む。22層：黒褐色土。21層よりもやや暗い色調を呈する。上面付近に焼土粒を少量含む。23層：暗褐色土。黒褐色土、焼土粒、径4cm以下の礫を少量含む。24層：黒褐色土。径4cm以下の円礫と炭化物を少量含む。

7層はHトレンチ縦穴状遺構の埋土、8層はHトレンチ焼土、10層はGトレンチピット1の埋土、15層・24層はGトレンチのピット（上面検出のみで未調査）の埋土、21～23層はオホーツク13号縦穴の埋土³⁾である。19層の上面がオホーツク13号縦穴の床面に相当する。 (熊木俊朗)

註

- 1) I_o層の“o”は本文前項の「2007年度調査の経過」で記したとおり、「オホーツク文化」の頭文字にちなむ。ちなみに2006年度の調査時には、本土層を「黒褐色土層」と仮称して扱っていた。
- 2) Fトレンチでは本文に述べたとおり基本層序のII層以下の掘り下げを行っていないが、XXV(25)～XXVI(26)～36区において2000年度に設定した試掘坑(Fig. 42参照)では基本層序のIV層上面まで掘り下げをおこなっている。その際の記録によればこの区でのII層以下の土層堆積の厚さは、II層が約30cm、III層が約20cmとなっている。なお、この試掘坑の西壁のII層中には焼土が確認されたが、写真記録に止めたのみで埋め戻している。
- 3) 21～23層出土の遺物については、発掘調査時にはI_o層相当の土層から出土したものとして記録している。

第三節 C トレンチの遺構各説

1 XXX (30) －37～38 区 焼土 1

調査の経緯

耕作土を除去し、黒褐色土層（基本層序の I₀ 層）を調査中に、XXX (30) －37～38 区にかけて焼土のひろがりを検出した (Fig. 48)。焼土付近の土層堆積は以下のとおりである (Fig. 48 の a-b 間)。1 層：耕作土。基本層序の I 層。2 層：焼土を多量に含む茶褐色土。粘性が強い。炭を多量に含む。骨片を少量、灰をごく少量含む。3 層：橙色を帯びた褐色土。火を強く受けており硬化している。4 層：暗褐色土。炭化物と灰を多量に含む。5 層：暗褐色土。基本層序の II 層。

遺構

一部は調査区外まで延びており正確な規模・形状は不明であるが、東西約 100cm、南北 50cm 以上の不定形を呈するものと思われる。上面の一部を攪乱によって破壊されているため正確な厚さは不明であるが、最もよく焼けた部分 (Fig. 48 の 3 層) の厚さは約 4cm で、その周囲に茶褐色土や炭を含む焼土が 16cm ほどの厚さで堆積していた。焼土中からはオホーツク土器の胴部破片 (非掲載) などが出土している。

小括

この焼土 1 は基本層序 I₀ 層に相当する土層中で確認されており、出土遺物からみてもオホーツク文化期のものである蓋然性が高い。

(熊木俊朗)

2 XXX (30) －35 区 焼土 2

調査の経緯

耕作土を除去し、II 層上面を精査していたところ XXX (30) －35 区において焼土のまとまりを 2ヶ所検出した (Fig. 48)。検出状態の記録後に焼土を掘り下げたところ、焼土の下部にピットが検出された (Fig. 48)。このピットについては上面確認のみで掘り下げはおこなっていない。

遺構

調査区外まで広がっており規模等の詳細は不明であるが、南側の焼土は長辺 70cm 以上、東側の焼土は径 20cm 以上の規模になると思われる。焼土の厚さはどちらも約 6cm であった。焼土中からは動物骨と黒曜石の剥片が出土している。

小括

焼土 2 は出土層位からするとオホーツク文化期もしくはそれ以前のものと考えられるが、正確な時期等は不明である。

(熊木俊朗)

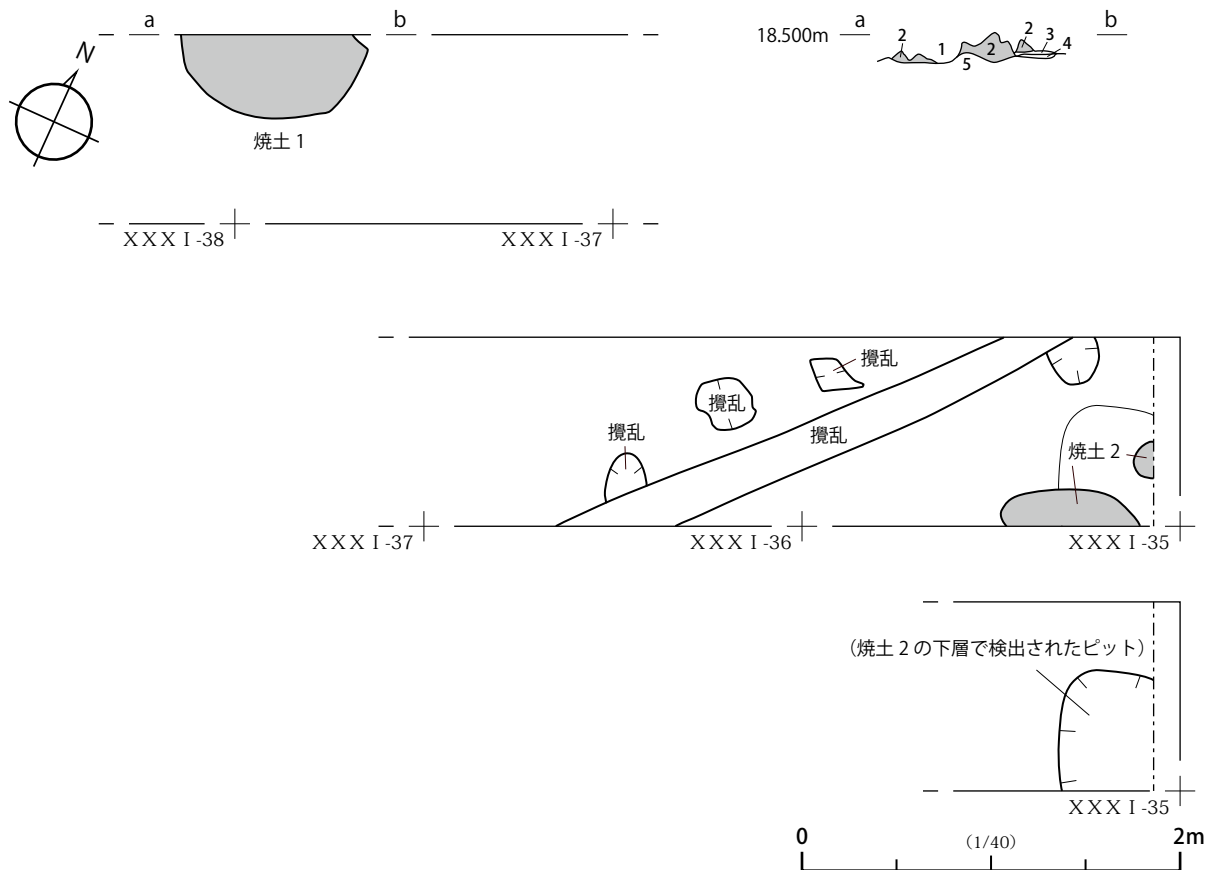


Fig. 48 Cトレンチ 焼土 1・焼土 2

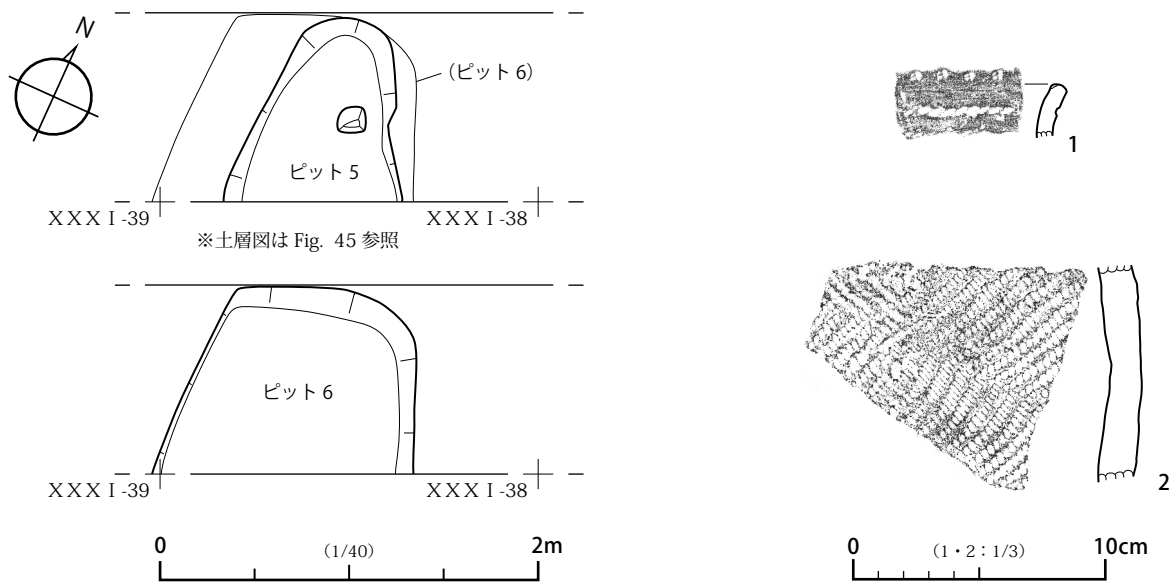


Fig. 49 Cトレンチ ピット 5・ピット 6 および出土土器 (1・2:ピット 6 埋土)

3 XXX (30) －38 区 ピット 5

調査の経緯

XXX (30) －38 区の II 層上面にて平面プランを確認した (Fig. 49)。ピット埋土は前節に記した C トレンチの 9 層と 10 層が相当する (Fig. 45)。底面の中央部を精査したところ、底面からさらに直径約 8cm、深さ約 4cm の小ピットが穿たれているのを確認した。小ピットの埋土は径 6cm 以下の角礫や円礫を含む黒褐色土である。ピット埋土からはオホーツク土器や北筒式土器の破片が出土したが (非掲載)、ピットに伴うか否かは確定できなかった。

遺構

調査区外まで拡がっており正確な形状は不明であるが、長径 90cm 以上、短径 80cm 以上で南北方向に長い不定形を呈する。確認面からの深さは約 7cm で断面形は長方形、底面は平坦であった。

小括

本ピットはオホーツク文化期以降のピットと考えられるが、正確な時期や性格は不明である。

(熊木俊朗)

4 XXX (30) －38 区 ピット 6

調査の経緯

ピット 5 の調査終了後、縄文前期～中期竪穴の状況を確認していたところ、同じ XXX－38 区の II 層中で平面プランを確認した (Fig. 49)。覆土の一部をピット 5 に切られていたが、ピットの底面は遺存していた。ピット埋土は前節に記した C トレンチの 11 層・12 層・13 層が相当する (Fig. 45)。

遺構

本ピットは調査区外まで延びており正確な形状は不明であるが、平面形はおそらく方形ないし長方形を呈し、南北方向に 90cm 以上、東西方向に 130cm 以上の大きさになるものと思われる。確認面からの深さは約 18cm で底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。

遺物

Fig. 49-1 と 2 はピット埋土出土の土器である。1 は縄文晩期末～続縄文初頭の土器とみられる口縁部破片。口唇部内縁に縄端の刺突があり、口縁部には原体 RL の縄線文が確認できる。2 は縄文中期北筒式土器の胴部破片。胎土には繊維が含まれる。

小括

本ピットは縄文中期以降のピットと考えられるが、正確な時期や性格は不明である。

(熊木俊朗)

5 XXX (30) -39~43 区 縄文前期~中期竪穴

調査の経緯

XXX (30) -40 区で基本層序の I₀ 層に角礫の集中が認められたため、C トレンチの南壁沿いに幅 50cm のサブトレンチを 39 ラインから 43 ラインまでの間に断続的に設定して遺構の確認をおこなったところ、XXX (30) -39 区および XXX-43 区において、黒褐色土層（基本層序 I₀ 層）の下層、基本層序の II 層中で遺構の立ち上がりが確認されるとともに、XXX-41 区のサブトレンチ内では、I₀ 層からその下層にかけて一辺 5~10cm 程度の角礫が直径約 80cm の範囲に集中する状況も確認された (Fig. 50・PL. 8-1)。角礫には被熱したものも含まれていた。遺構の立ち上がりに挟まれた内部に礫などの遺物が集中し、遺物には縄文前期~中期の土器などが含まれていたことから、これらは一連の遺構で、縄文前期~中期の竪穴の埋土中に遺物が集中する状況と判断した。完掘していないため竪穴埋土の全容は不明であるが、前節に記した C トレンチの土層堆積 (Fig. 45) では、8 層がこの竪穴の埋土に相当する。

遺構

XXX-39 区および XXX-43 区の 2ヶ所の立ち上がり部分から推定すると、本竪穴は直径約 7.2m 以上の不整な円形を呈すると思われるが、詳細は不明である。深さも床面を検出していないので不明であるが、XXX-42 区サブトレンチや、本竪穴より深く掘り込まれたピット 7 の断面の状況から推定すると、II 層上面から 10cm 程度の深さまで掘り込まれていると考えられる。また XXX-42 区のサブトレンチ内では、本竪穴の床面近くと思われる位置から、一辺 10~20cm の角礫とともに黒曜石の剥片の集中が認められた (Fig. 50 の「剥片集中」)。おそらく本竪穴に伴うものと思われる。他にも同区のサブトレンチ内では炭化材等が検出されており、本竪穴に関連するものと判断された。 (熊木俊朗)

遺物

Fig. 51 は竪穴の埋土 (Fig. 45 の 8 層) から出土した遺物。1 は縄文中期北筒式とみられる土器の胴部破片。胎土に繊維は含まれない。2 は厚手無文の土器の胴部破片。胎土に繊維は含まれない。縄文前期の網走式土器とみられるが確言はできない。3・4 は石鏃。2 点とも黒曜石で、梨肌である。3 は薄手 (0.22cm) の剥片を素材とし、周縁加工が施されている。4 は両面加工で、基部が欠損しているが、茎部をもつ石鏃である。5 は尖頭器。黒曜石製である。基部が区分される形態をなし、基部は一度折損した後に再加工され、平基となる。丁寧な平坦剥離によって整えられ、器面と縁辺は滑らかで、横断面はレンズ状をなす。6 は石核。黒曜石の円礫を素材とする。複剥離打面で、剥片剥離作業面は幅広で平坦であり、裏面には自然面が大きく残る。作業面からは幅広・短寸で薄手の剥片が剥離されているため、石鏃等の小型石器の素材剥片を生産するための石核と考えられる。7 は凹石。石英製である。正面と裏面の両方に凹みがある。実測図の網掛け部分に赤色の顔料が付着することから、顔料の粉碎に用いられたと考えられる。 (熊木俊朗・夏木大吾)

小括

本竪穴は全体の一部のみの調査であり、床面も未調査で遺構の状況や付帯施設等が不明であるため時

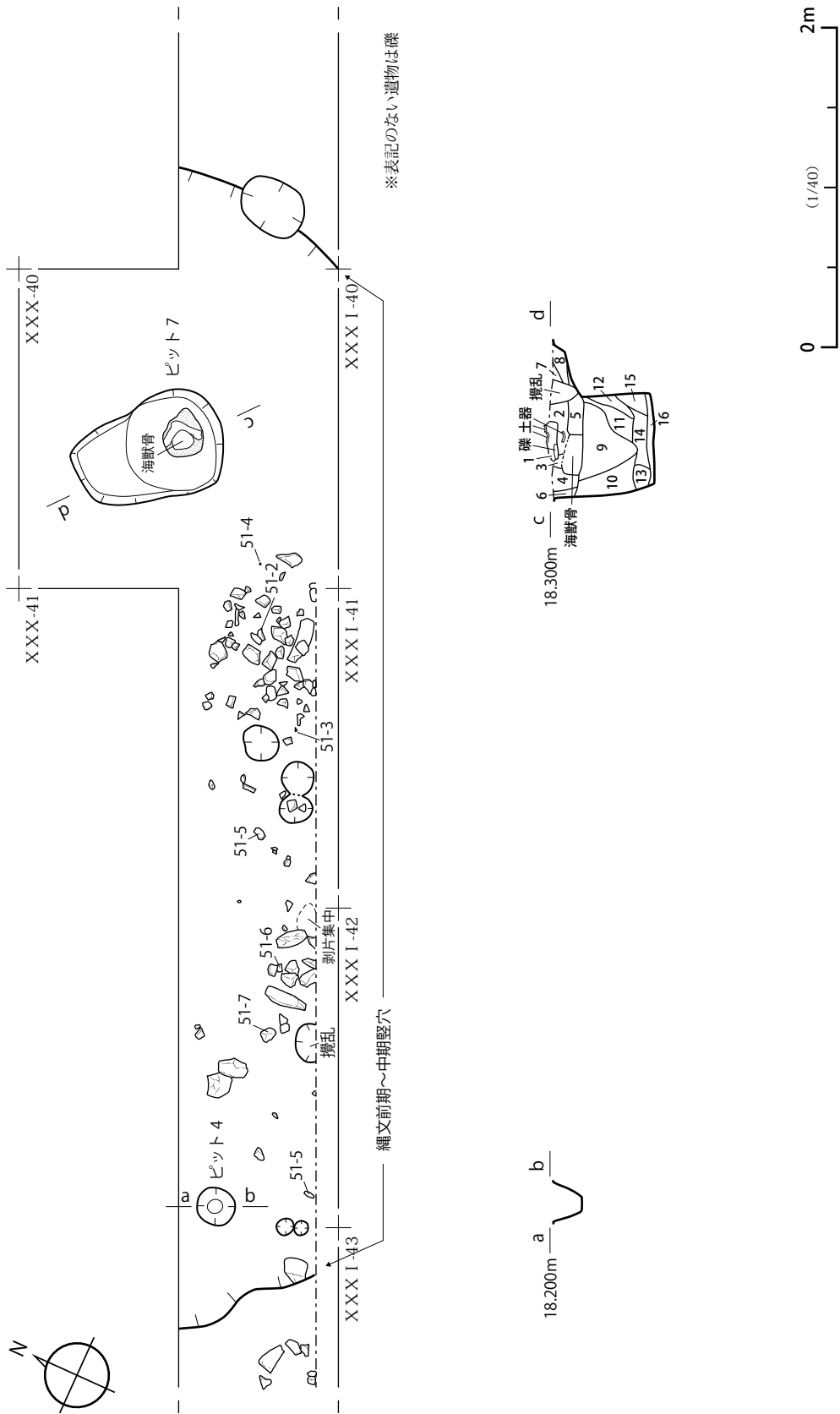


Fig. 50 C トレンチ XXXI (30) -39~43 区 縄文前期~中期の竪穴・ピット 4・ピット 7

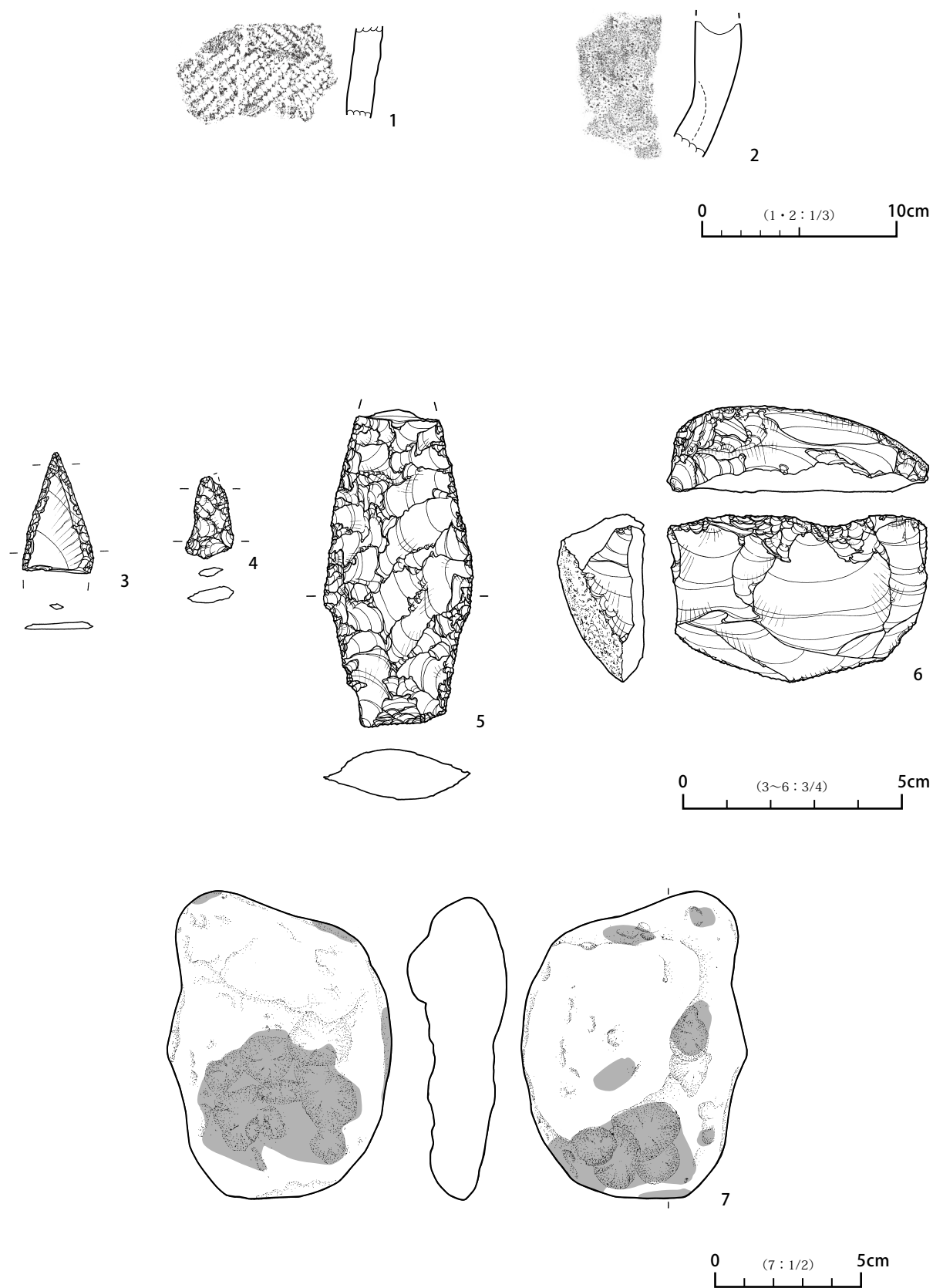


Fig. 51 Cトレンチ XXX (30) -39~43区 縄文前期~中期の竪穴出土の土器 (1・2)・石器 (3~7)

期や性格は判然としないが、オホーツク文化期の包含層である I_o 層より下層に位置することや、覆土中の遺物に縄文前期～中期の土器や石器が含まれる点、本遺跡群の他の地点で確認された同時期の集石と本竪穴の埋土の様相が酷似する点、遺構の形状・規模などからすると、縄文前期～中期の竪穴住居跡と推定される。竪穴の埋土中に確認された角礫を主体とする遺物集中も、竪穴と一連の遺構である可能性が高いと考えられる。(熊木俊朗)

6 XXX (30) -42 区 ピット 4

調査の経緯

XXX (30) -42 区の黒褐色土層以下、基本層序の II 層上面にて平面プランを確認した (Fig. 50)。ピットの覆土はローム粒が少量混入する黒褐色土である。

遺構

本ピットの平面形は円形で、確認面での直径約 21cm、確認面からの深さは約 18cm、断面形は台形に近い形を呈する。覆土中には無文で型式不明の土器片 1 点 (非掲載) が含まれていた。

小括

本ピットは確認面の層位からすると、オホーツク文化期より古く、前項の縄文前期～中期の竪穴よりは新しい時期に形成されたとみられるが、詳細な帰属時期や性格は不明である。(熊木俊朗)

7 XXX (30) -40 区 ピット 7

調査の経緯

XXX (30) -40 区において、耕作土の直下、基本層序の I_o 層中に土器・石器・礫の集中部と暗褐色土の平面プランの一部を検出した。埋土中にオホーツク土器の底部や石鏃が含まれていたことから、オホーツク文化期の墓が存在する可能性を考慮して C トレンチを拡張し、周囲を精査したところ、土器・石器・礫の集中部と長方形の平面プランを検出した。平面プランの方向に合わせてセクションラインを設定し、遺構の掘り下げをすすめたところ、遺存状況のきわめて悪い骨の一部、オホーツク土器の口縁部破片などが検出されたため、当初は墓の可能性が高いと判断し、「3 号墓」と仮称して調査を進めた。しかし後述するようにこの骨が大型の海獣骨、おそらくはクジラ類の椎骨であることが明らかになったため、「3 号墓」からピット 7 に名称変更をおこなった (Fig. 50)。

ピット埋土の土層堆積は以下のとおりで、1～8 層がクジラ椎骨よりも上部の埋土、9～16 層がクジラ椎骨より下位の埋土である。1 層：暗褐色土。2 層：黒褐色土。しまりが弱い。3 層：赤褐色土。ブロック状に堆積した焼土。4 層：暗褐色土。しまりがやや弱い。5 層：黒褐色土。ローム粒を含む。6 層：黒褐色土。7 層：黒褐色土。ローム粒を少量含む。8 層：黒褐色土。ローム粒を多く含む。9 層：暗褐色土。粘性が強く、ローム粒を含む。10 層：黄褐色土。黄褐色のローム質土に暗褐色土が多く混じるが、

11層や14層などと比べてローム質土の比率が低い。11層：黄褐色土。粘性としまりが強く、黄褐色のローム質土に暗褐色土が多く混じる。12層：黒褐色土。少量のローム粒が混じる。13層：黒褐色土。ローム質土がブロック状に入っている。14層：黄褐色土。黄褐色のローム質土に暗褐色土が多く混じる。11層よりはローム質土の比率が低い。15層：黄褐色ローム質土。暗褐色土が混じる。16層：黒褐色土。粘性があり、炭化物を含む。なお、上記の層のうち1～6層には礫、骨片、炭化物が含まれていた。

遺構

検出面で確認された平面プランは長軸95cm、短軸55cmの長方形であり、この部分の埋土(1～8層)は黒褐色土を主体として、暗褐色土や、骨片やローム粒・炭化物を含む土器・石器・礫の集中部を伴っていた。これらの遺物や礫は南東側半分に集中しており、北西側は遺物も少なく掘り込みも浅かった。南西側からは、径25cmを越える大型の海獣骨(Fig. 50の「海獣骨」、PL. 8-2)をはじめ、極めて遺存状況の悪い骨が複数個所検出された。この大型の海獣骨は原型を保った状態で取上げることはできなかったが、その大きさと厚さから考えてクジラ類の椎骨であったと考えられる。クジラ椎骨より下位ではピットの形状は径60～65cmの不整楕円形となる。この部分の埋土(前述の9～15層)は黄褐色のローム質土と暗褐色土が混じっており、底部には黒褐色土(前述の16層)が薄く堆積している。底面はほぼ平らで、深さは遺構検出面から65cm、クジラ椎骨から45cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、部分的にややオーバーハングしている。(高橋 建)

遺物

Fig. 52は本ピット出土の遺物で、7・8・10・11・14がピット検出面、1・3・5・6・12がクジラ椎骨より上部の埋土、2・4・9・13がクジラ椎骨より下層の埋土からの出土である。

1～3はオホーツク貼付文系土器の口縁部。1はごく薄い肥厚帯を有し、肥厚帯上に3条の貼付文(いずれもひねりあり)を施している。2は肥厚帯の有無は不明で、3条の貼付文(直線、ひねりあり、直線)が確認できる。3は肥厚帯を有し、肥厚帯上に3条の貼付文(いずれも鎖状の刺突あり)が施されている。4は縄文晩期末～続縄文初頭の土器の口縁部破片。口唇面に刺突文、口縁部に縄線文が確認できる。5は北筒式トコロ6類土器の口縁部破片。胎土には繊維が含まれる。肥厚帯上に突引文が施されている。6は櫛引文を有する胴部破片。北大I式土器とみられるが、確言できない。7～9はオホーツク土器の底部。7は被熱している。

10～12は石鏃。すべて黒曜石製で、11は梨肌である。10と11は基部が区分される形態をなすが、10は茎部のくびれが不明瞭で菱形状を呈し、11は明瞭な茎部をもつ。10と11は裏面に素材面を残す。12は表面の剥離調整が粗く、欠損しているため、製作途中の失敗品と考えられる。13は石匙。黒曜石製で、黒色と灰色、白灰色が互層をなすような明瞭な流離構造が認められる。裏面は面積の半分ほど素材主剥離面を残し、主に背面方向の剥離によって整形されているため、断面はカマボコ状をなす。先端部は先鋭で、基部側には緩い抉り部をもつナイフである。14は石斧。玄武岩の円礫を素材としている。剥離と敲打によって粗く整形された後に、主に正面と側面の研磨によって器面と刃部が仕上げられている。両刃で、刃部外形が弧状をなす、重厚な蛤刃石斧である。

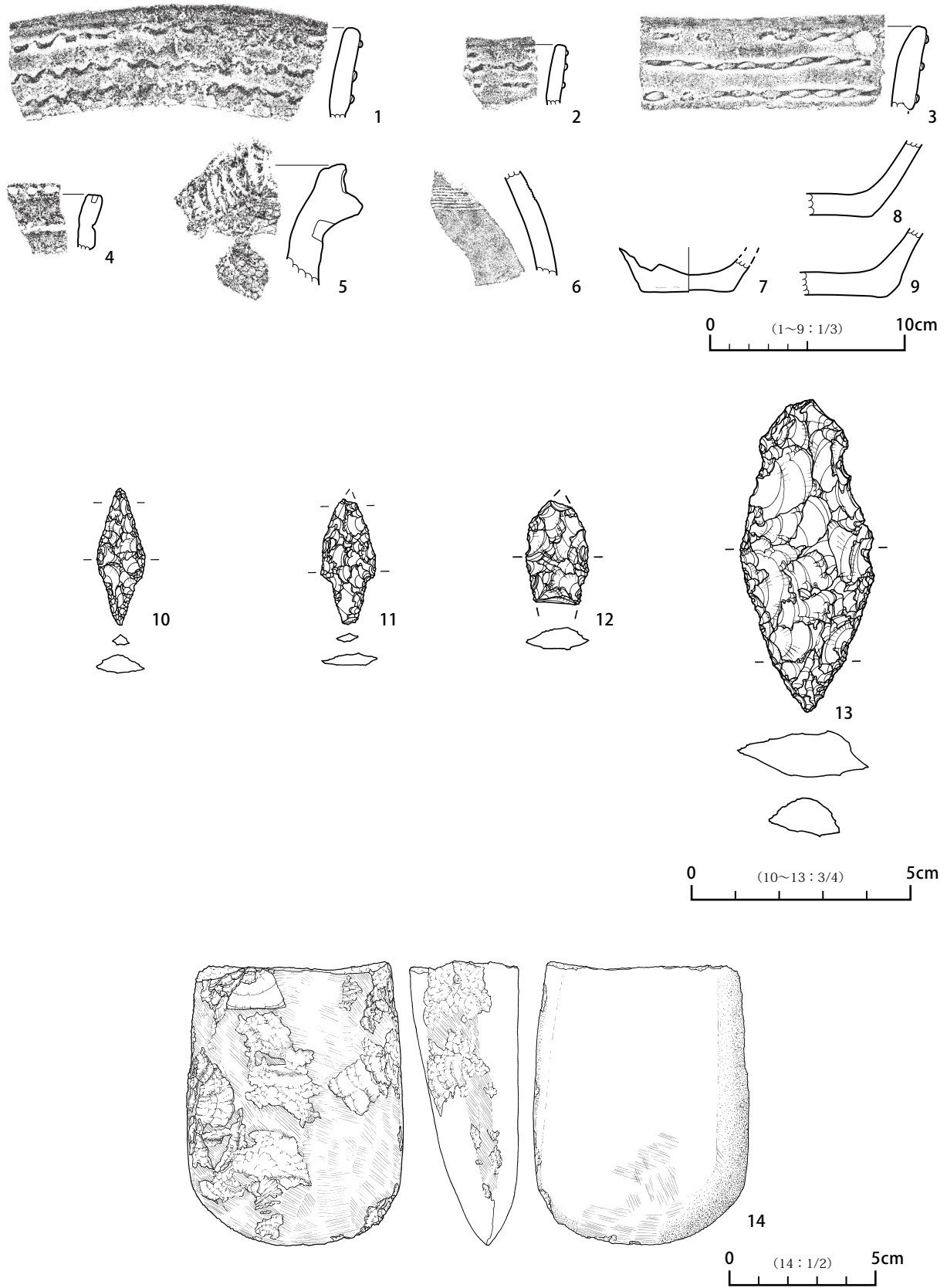


Fig. 52 C トレンチ XXX (30) -40 区 ピット 7 出土の土器 (1~9)・石器 (10~14)

ほかに、上記のように海獣骨や魚骨等の動物骨が出土している。

(熊木俊朗・夏木大吾)

小括

本ピットは検出面の層位、出土遺物から判断するとオホーツク文化貼付文期のピットと考えられる。基本層序のⅢ層及びⅣ層を非常に深く垂直に掘り込んでいることから、新しい時期の攪乱である可能性も考慮したが、上部に大型のクジラ椎骨や土器、石器、礫などの集中部がみられる点からするとその可能性は低いと考えられる。確実な根拠とすることはできないが、埋土中に後世の遺物が混じらなかったこと、オホーツク土器がある程度まとまって出土したことなどを考えると、オホーツク文化貼付文期に形成されたものである蓋然性が最も高い。同時期の10号竪穴と近い距離にある点にも注意しておきたい。

(高橋 建)

8 その他の遺構

Cトレンチでは上記のほかに、基本層序Ⅱ層の上面でピットとみられる平面プランが検出されている。具体的には、XXX(30)－35区(焼土2の北側、Fig. 48)、XXX－39区(縄文前期～中期の竪穴の東側の壁上、Fig. 50)、XXX－41区(縄文前期～中期の竪穴の埋土中、Fig. 50)の3ヶ所で確認された。しかしこれらの遺構については上面の検出のみで掘り下げをおこなっていないため、深さ・時期・性格等の詳細は不明である。

(熊木俊朗)

第四節 D トレンチの遺構各説

1 XXXII (32) －35～36 区 縄文中期遺物集中 1

調査の経緯

XXXII (32) －35～36 区の基本層序 II 層 (Fig. 45 の 5 層) の上面において、縄文中期北筒式トコロ 6 類土器、黒曜石を中心とする剥片石器、被熱した角礫などからなる遺物の集中が確認された (Fig. 53・PL. 9-1)。II 層中において遺物のみが乱雑に集中している状況であり、遺物集中の範囲内にピットや焼土などの遺構は確認できなかった。土層の堆積状況と遺物の出土状況を確認するため、この遺物集中の東側の一部に相当するトレンチ東端 (XXXII-35 区) 部分を 1m×1m の範囲で III 層 (Fig. 45 の 7 層) の上面まで掘り下げたところ、約 8cm の厚さで堆積している II 層中の上面から下面まで、全体にわたって同じような遺物の集中が続いている状況が確認された。

遺構

確認できた範囲では、XXXII (32) －35～36 区の東西 2.5m の幅で遺物の集中が確認されたが、遺物の集中範囲はトレンチの外、南北方向や東方向に拡がっており、全体の規模は不明である。遺物集中に伴う掘り込みやピットなどは検出されていない。出土した礫の大多数は被熱していた。(熊木俊朗)

遺物

Fig. 55-1 は XXXII-35 区に穿たれていた攪乱坑の上面で出土した土器であり、本遺構に伴うものではない。Fig. 55-2～11 および Fig. 56 の遺物は全て本遺構に伴うものである。

1 はオホーツク貼付文系土器の口縁部破片。肥厚帯を有し、肥厚帯上に 3 本一単位の貼付文 (直線+波線+直線) と 2 本一単位の貼付文 (波線+直線) が施されている。その下部にも貼付文が 1 条確認できる。2 は北筒式トコロ 6 類土器とみられる口縁部破片。口唇部付近は摩滅しており不明瞭だが、肥厚帯はなく、太い刻みが施されているように見える。胎土に繊維は含まれない。3 は北筒式トコロ 6 類土器。肥厚帯上に突引文を有する。胎土には繊維が含まれる。4～7 は北筒式土器の底部破片。いずれも胎土には繊維が含まれる。

Fig. 55-8～10 は尖頭器。すべて黒曜石製で、10 は梨肌である。8 は尖頭器の先端部で、厚さ 0.63cm と薄く、薄い丁寧な剥離によって器面と縁辺は滑らかに整えられている。9 は細身の柳葉形に近い形状の尖頭器で、多段階表面変化が観察され、より大型で幅広の尖頭器から正面の周縁部を調整することで再加工されている。10 は尖頭器の基部で、基部が区分されるような形態をなすと推測される。11 は削器。黒曜石製で、素材剥片の打面部には円礫面が観察される。厚さ 1cm 程度の幅の広い剥片を素材とする。表裏面の周縁加工によって端部と右側縁に直線状の刃部が形成され、角部付近はやや弧状の刃部となる。12・13 は石斧。12 は砂岩製の円礫を素材とし、13 は玄武岩の扁平な円礫を素材とする。12 は加工の痕跡が顕著でないが、右側面が研磨で平坦に整形され、刃部において打撃痕と推定される小さな窪みが複

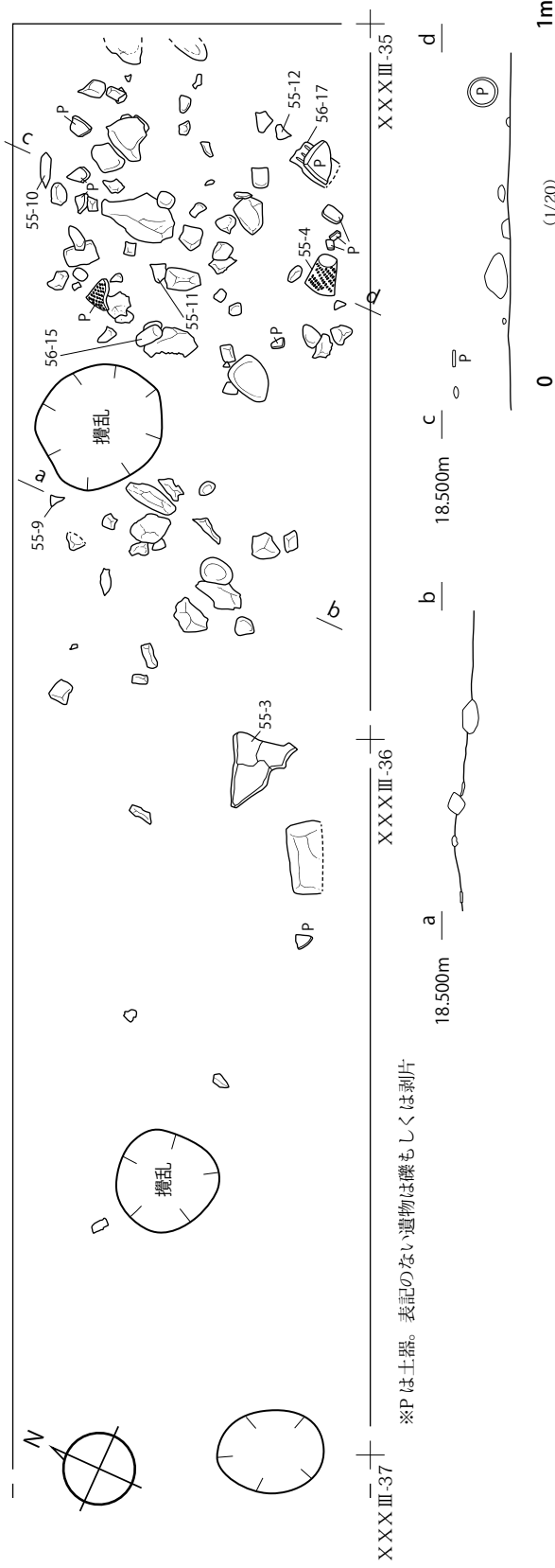


Fig. 53 Dトレンチ XXXII (32) -35~36区 縄文中期遺物集中1

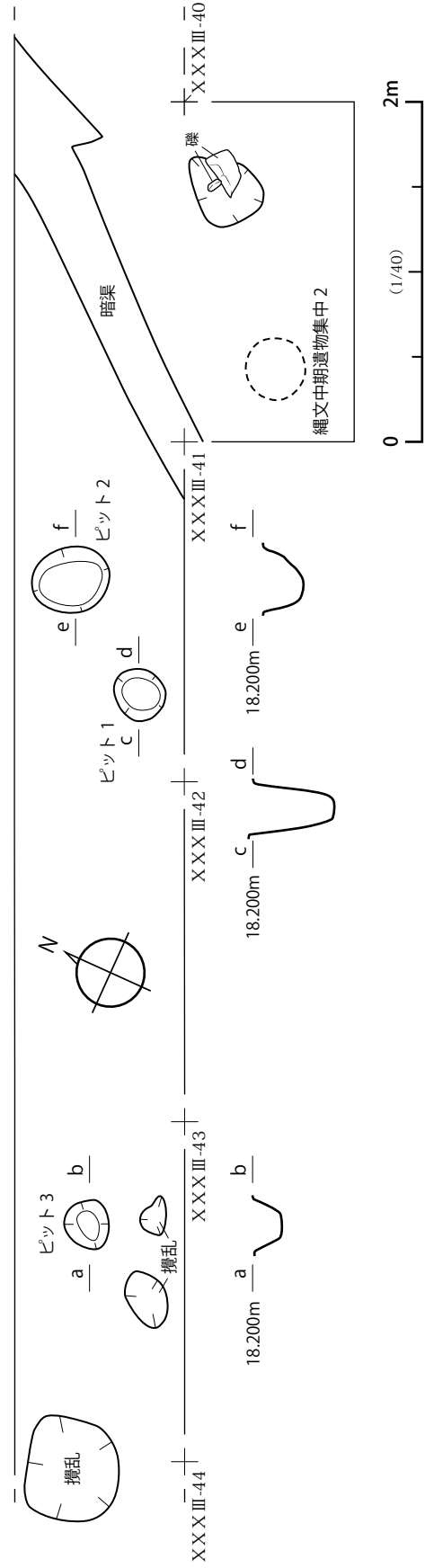


Fig. 54 Dトレンチ XXXII (32) -40~43区 縄文中期遺物集中2 ピット1・ピット2・ピット3

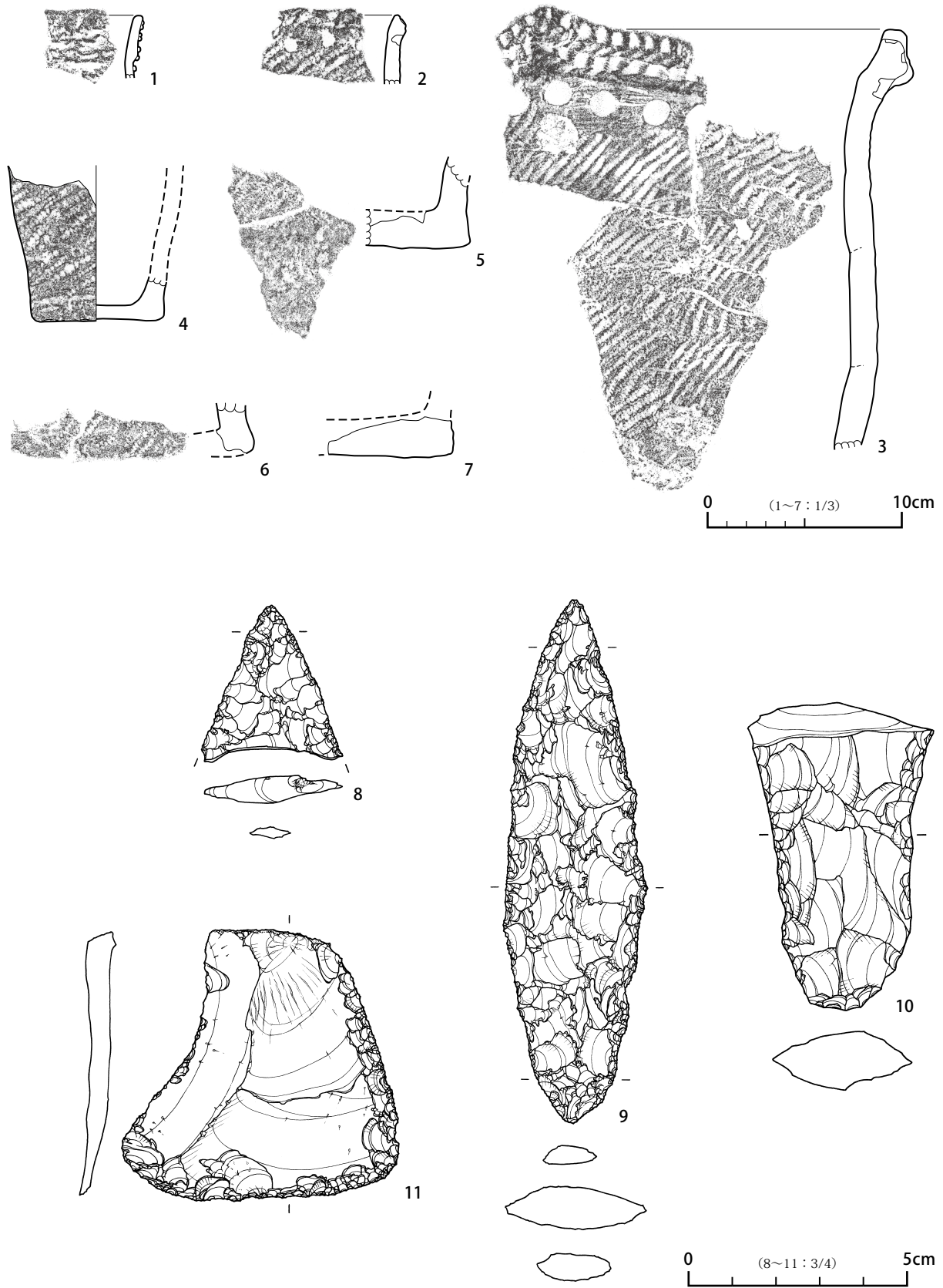


Fig. 55 D トレンチ XXXII (32) -35~36 区 縄文中期遺物集中 1 出土の土器 (1~7)・石器 1 (8~11)

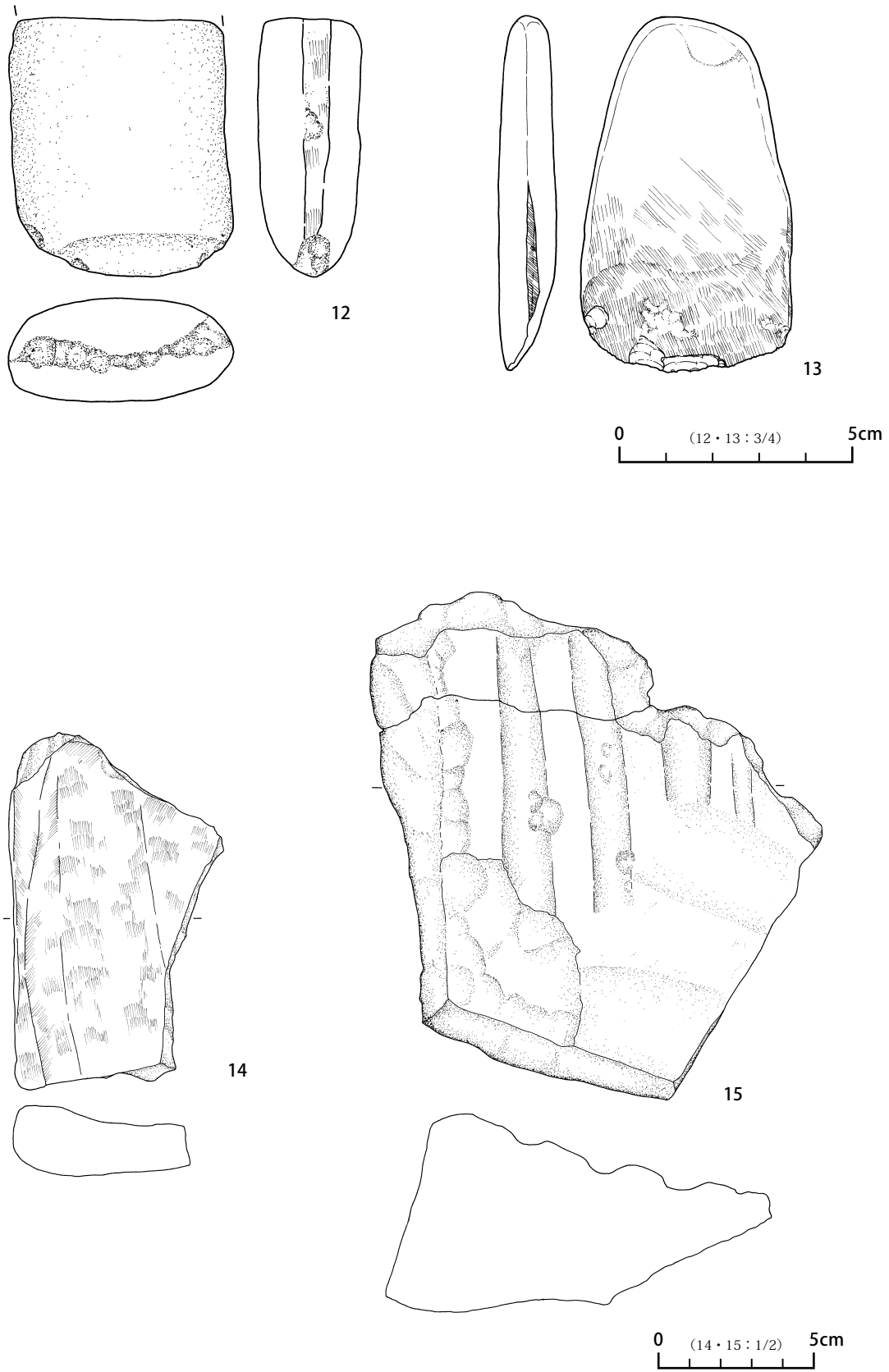


Fig. 56 Dトレンチ XXXII (32) -35~36区 縄文中期遺物集中1出土の石器2 (12~15)

数認められる。13 は刃部にのみ剥離と研磨による加工を施した片刃石斧である。14・15 は砥石。すべて砂岩製である。14 は表裏面と側面において研磨の痕跡が顕著であり、表面と裏面の研磨面は僅かに凹む。15 は粗粒であるため、研磨痕が観察できないが、表裏面と側面が研磨に用いられ、表面と裏面に幅 0.8～1.5cm 程度の溝状の窪みが 2～3 列ほど並行した有溝砥石である。（熊木俊朗・夏木大吾）

小括

この遺物集中 1 は縄文中期北筒式トコロ 6 類期のもものとみられる。遺物の集中範囲はトレンチ外まで連続して広がっていると予想されるが、拡がりの範囲は未調査のため把握できなかった。本遺構の特徴としては、被熱した礫が認められる点、土器・石器の出土密度が高い点、出土土器の主体が北筒式トコロ 6 類土器である点などがあげられるが、これらの特徴は前章で報告した XXV (25) -24 区周辺の「縄文前期～中期の集石」と酷似している。この集石は位置的にも本遺構と近く、関連が注目される。

（熊木俊朗）

2 XXXIII (33) -40 区 縄文中期遺物集中 2

調査の経緯

D トレンチの拡張区である XXXIII (33) -40 区の基本層序 II 層 (Fig. 45 の 5 層) 中において、縄文中期北筒式トコロ 6 類土器などからなる遺物の集中¹⁾ が確認された (Fig. 54・PL. 9-2)。周辺を精査したが、遺物に伴う掘り込み等の遺構は確認できなかった。

遺構

遺物は径 30cm ほどの範囲に集中しており、土器と石器が含まれていた。

遺物

Fig. 57-1～3・5～7 が本遺構で確認された遺物である。Fig. 57-4 は XXXIII-40 区試掘坑 (2000 年度調査) の基本層序 II 層から出土した土器であり、本遺構に伴うものとはいえないが、近い地点から出土しているためここでまとめて記載しておく。

1～3 は北筒式トコロ 6 類土器。1・2 は同一個体で、口縁部に肥厚帯を有し、山形突起の頂部に刺突文を有する。胎土には繊維が含まれる。3 は肥厚帯を有し、胎土には繊維がわずかに含まれる。4 は北筒式とみられる土器の底部。胎土には繊維が含まれる。

5・6 は石鏃。すべて黒曜石製である。5 は平坦な粗い調整剥離が施され、石鏃の未成品である。6 は基部が区分される形態をもつ有茎の石鏃である。7 は砥石。砂岩製である。表面のみが研磨のための面として利用される。観察される研磨方向は一方向のみで、研磨面は平坦である。（熊木俊朗・夏木大吾）

小括

この遺物集中 2 は縄文中期の北筒式トコロ 6 類期のもものとみられる。意図的に集積されたものと判断したが、きわめて小規模であり礫の集中などもみられないため、他の区の「集石」遺構とはやや性格を異にするものと考えられる。

（熊木俊朗）

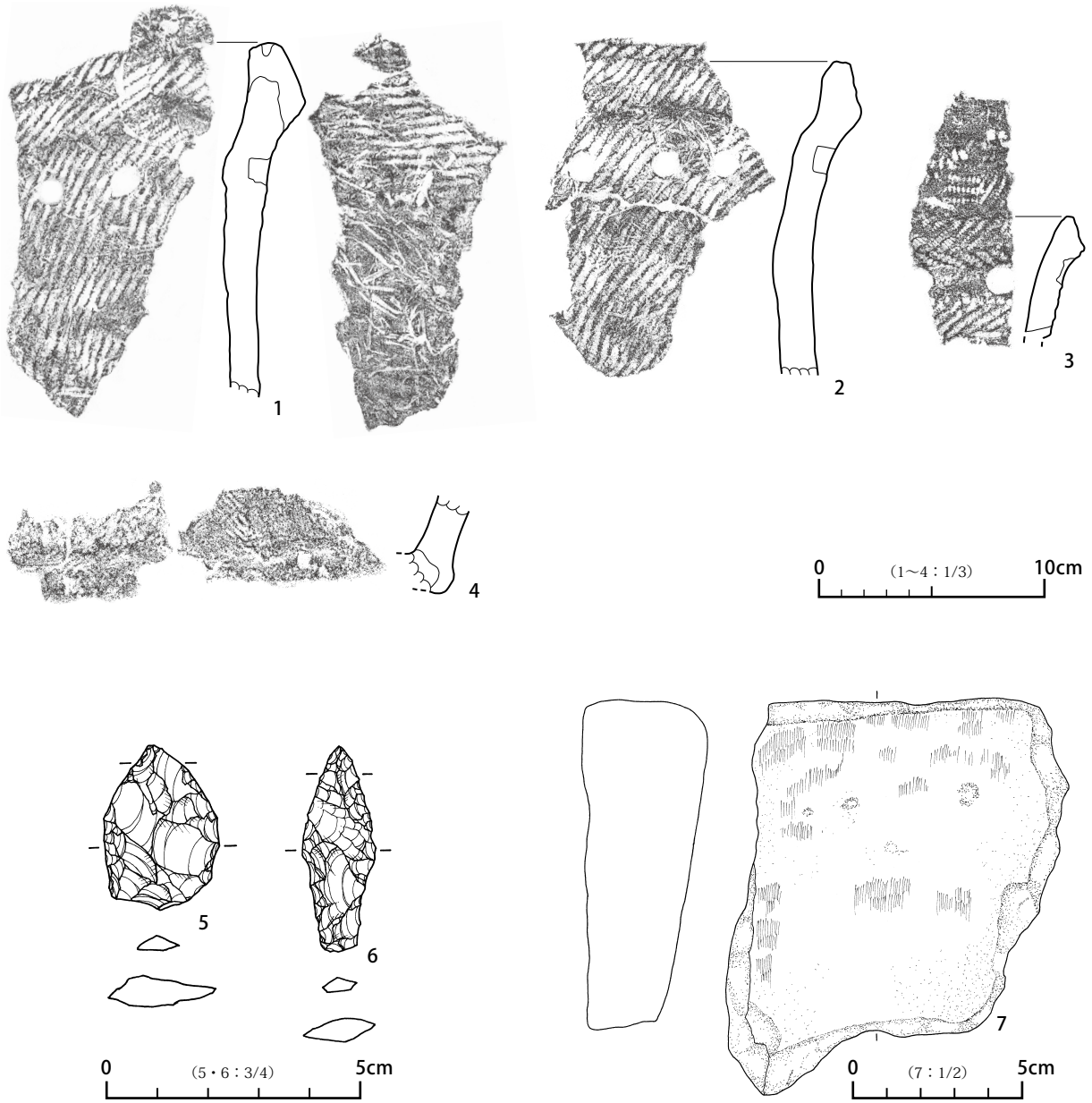


Fig. 57 Dトレンチ XXXIII (33) -40区 縄文中期遺物集中2ほか出土の土器(1~4)・石器(5~7)
(1~3・5~7:土器集中2、4:2000年度調査XXXIII-40区試掘抗)

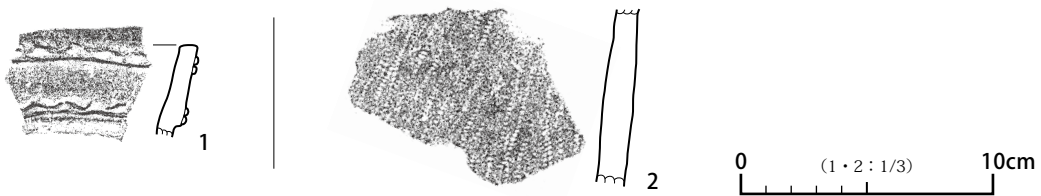


Fig. 58 Dトレンチ XXXIII (33) -40区 ピット1・ピット2出土の土器(1:ピット1、2:ピット2)

3 XXXII (32) -41 区 ピット 1

調査の経緯

XXXII (32) -41 区の基本層序 II 層の上面において平面プランを確認した (Fig. 54)。ピットの埋土は小礫やローム粒を少量含む黒褐色土である。

遺構

平面形は円形を呈し、確認面での直径は約 30cm、確認面からの深さは約 48cm で、底部がややすぼまる円筒形を呈する (Fig. 54 の c-d 間)。

遺物

Fig. 58-1 はピットの埋土から出土したオホーツク貼付文系土器の口縁部である。肥厚帯を有し、肥厚帯上には 2 本一単位（ひねりあり+直線）の貼付文が 2 単位施されている。

小括

本ピットは出土遺物から判断してオホーツク文化貼付文期以降のピットと考えられるが、詳細な時期・性格は不明である。(熊木俊朗)

4 XXXII (32) -41 区 ピット 2

調査の経緯

XXXII (32) -41 区の基本層序 II 層の上面において平面プランを確認した (Fig. 54)。ピットの埋土はロームブロック、円礫を含む黒褐色土である。

遺構

平面形は南北にやや長い楕円形を呈し、確認面での大きさは長径約 44cm・短径約 38cm、確認面からの深さは約 48cm、断面形は U 字と V 字の間のような形を呈する (Fig. 54 の e-f 間)。

遺物

Fig. 58-2 は埋土中から出土した続縄文前半期とみられる土器の胴部破片である。

小括

本ピットは出土遺物から判断して続縄文前半期以降のピットと考えられるが、詳細な時期・性格は不明である。(熊木俊朗)

5 XXXII (32) -43 区 ピット 3

調査の経緯

XXXII (32) -43 区の基本層序 II 層の上面において平面プランを確認した (Fig. 54)。ピットの埋土はローム粒を少量含む黒褐色土であり、埋土中から遺物は出土しなかった。

遺構

平面形は円形を呈し、確認面での直径は約 28cm、確認面からの深さは約 15cm、断面形は底部のすぼまる台形を呈する (Fig. 54 の a-b 間)。

小括

本ピットでは埋土中からも遺物は出土しておらず、時期・性格は不明である。 (熊木俊朗)

6 その他の遺構

Dトレンチ内では以上の遺構のほかにも、XXXII (32) -37グリッド交点付近 (Fig. 53) とXXXIII (33) -40区 (遺物集中2の北東約1mの地点、Fig. 54) の2ヶ所でピットとみられる平面プランを検出している。前者は基本層序II層の上面、後者はIII層上面で確認されたものであるが、これらの遺構は上面の検出のみで完掘していないため、深さ・時期・性格等の詳細は不明である。 (熊木俊朗)

註

1) 縄文中期遺物集中2については、発掘調査の際には「中期土器集中」という名称で図面等に記録している。

第五節 E トレンチの遺構各説

1 XXVII (27) -34 区 集石 1

調査の経緯

XXVII-34 区において、基本層序 II 層 (Fig. 46 の 3 層) の上面で円礫・角礫が数点とオホーツク土器の底部片がまとまっている箇所が検出された (Fig. 59・PL. 10-1)。周囲を精査すると、遺物出土地点を中心としてその下部に黒褐色土の拡がり確認された。

遺構

土器を伴う集石の範囲は南北約 20cm、東西約 25cm である。集石の下部で確認された掘り込みは、上面プランが南北約 60cm、東西約 30cm の「ひょうたん」のような形を呈していた。掘り込みは上面確認に止めて完掘していないため、深さ等の詳細は不明である。

遺物

Fig. 61-1・2 は本遺構に伴って出土したオホーツク土器。1 は貼付文系土器の口縁部。ごく薄い肥厚帯を有し、肥厚帯上には 2 本一単位 (直線+波線) の貼付文が 3 単位付されている。その下部には 2 本一単位 (波線×2) の貼付文が確認できる。2 は底部破片。

小括

掘り込みを伴うごく小規模な集石遺構であり、伴出した遺物からするとオホーツク文化貼付文期に形成されたものと考えられる。 (熊木俊朗)

2 XXVII (27) -38～39 区 集石 4

調査の経緯

XXVII (27) -39 区を中心に一部は XXVII-38 区にかけて、II 層上面で砂岩の角礫が集中している箇所が検出された (Fig. 60・PL. 10-2)。周囲を精査したところ、南北はトレンチの幅の全面、東西は約 2.5m の幅で多数の角礫・円礫と縄文前期とみられる土器片が数点まとまって分布していることが確認され、ほぼその範囲に重なるように黒褐色土の拡がりその下面に検出された。

遺構

トレンチ内で確認された範囲では、集石の拡がり東西約 2.5m、その下面の黒褐色土を埋土とする掘り込みの幅は東西約 2m に及んでいる。これらの遺構の分布範囲はトレンチ外まで及ぶことは確実であるが、未調査のため拡がりの範囲は確定できなかった。集石 4 の礫には被熱しているものが認められたが、被熱の痕跡が認められない礫も多数含まれていた。 (熊木俊朗)

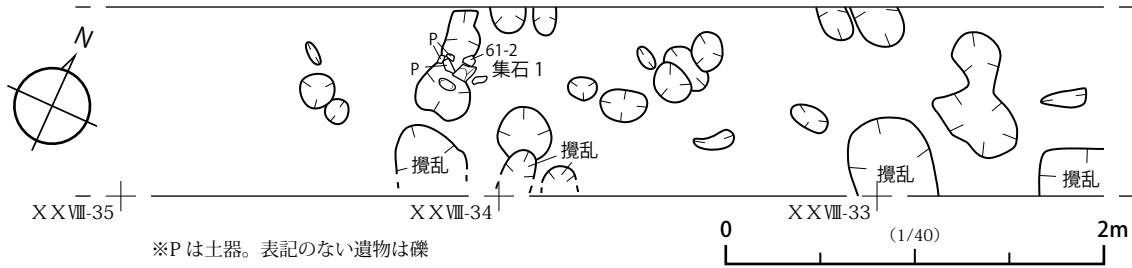


Fig. 59 Eトレンチ XXVII (27) -34区 集石1

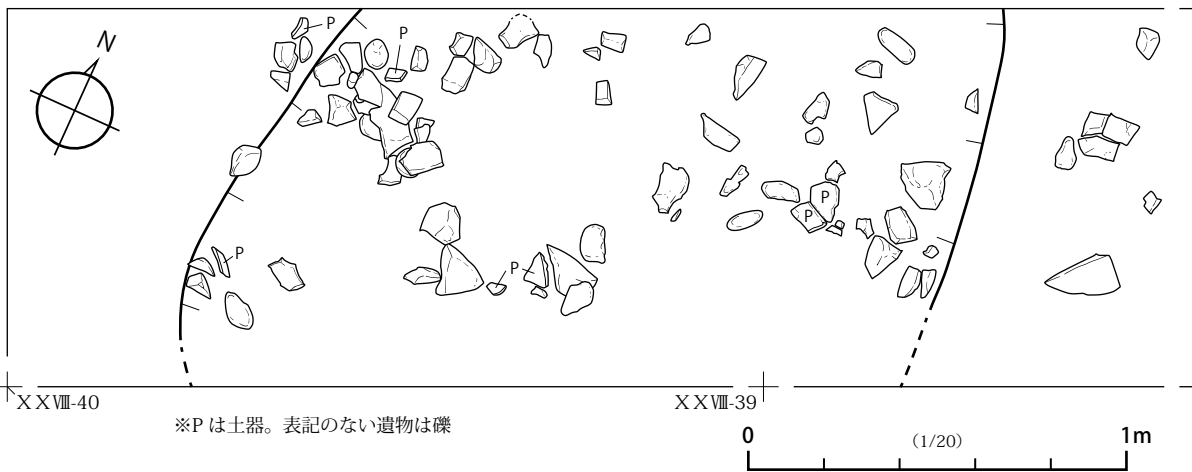


Fig. 60 Eトレンチ XXVII (27) -38~39区 集石4

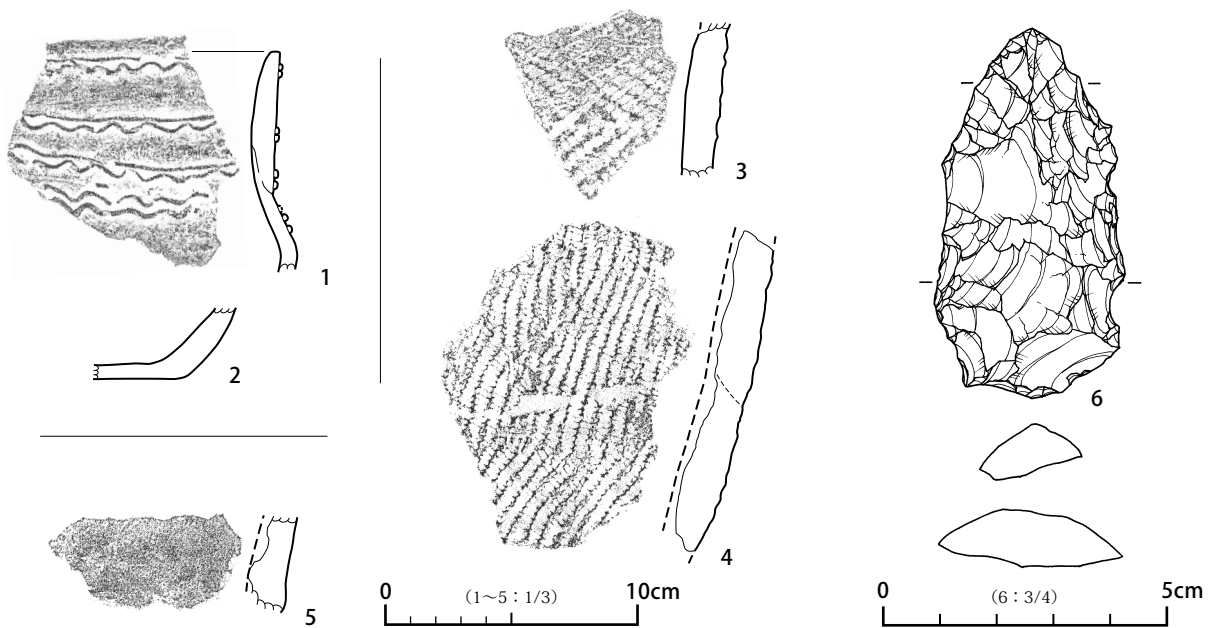


Fig. 61 Eトレンチ 集石1・集石4 出土土器 (1~5)・石器 (6) (1・2:集石1、3~6:集石4)

遺物

Fig. 61-3～6 は本遺構に伴って出土した遺物。

3・4 は縄文中期の北筒式土器とみられる胴部破片。胎土には繊維が含まれる。5 は厚手無文の土器の、底部付近の破片である。胎土には繊維が含まれており、被熱の痕跡が認められる。縄文前期の土器とみられるが、型式は不明である。

6 は尖頭器。黒曜石製である。多段階表面変化が観察され、片面加工の尖頭器が再加工されたものである。裏面の周縁加工によって鋸歯状の粗い刃部を作出している。 (熊木俊朗・夏木大吾)

小括

本遺構は掘り込みを伴う集石遺構と考えられる。遺構はトレンチ外まで及んでおりその範囲は不明である。出土土器から判断すると形成時期は縄文前期～中期のいずれかとみられる。集石の下面で確認された掘り込みについては、上面確認に止めたため深さ等の詳細は不明である。 (熊木俊朗)

3 その他の遺構

E トレンチ内では以上の遺構のほかにも、XXVII (27) -32～34 区 (Fig. 59) および 35 区～37 区 (Fig. 42) にかけての地点で、基本層序 II 層の上面においてピットとみられる平面プランを多数検出している。しかしこれらの遺構については上面の検出のみで掘り下げをおこなっていないため、深さ・時期・性格等の詳細は不明である。 (熊木俊朗)

第六節 F トレンチの遺構各説

1 XXV (25) -34~35 区 集石 2

調査の経緯

XXV (25) -34~35 区にかけて、II 層上面で砂岩の角礫が集中している箇所が検出された (Fig. 62・PL. 11-1)。周囲を精査したところ、南北はトレンチの幅の全面、東西は約 3m の幅で多数の角礫が乱雑に分布していることが確認された。分布の中心では、北筒式トコロ 6 類土器の破片が数点、まとめて出土した。礫の下面に掘り込み等の痕跡は認められなかった。

遺構

トレンチ内で確認された範囲では集石の拡がり東西約 3m に及んでおり、集中範囲の東側でより分布の密度が高い。集石の分布範囲はトレンチ外まで及ぶことは確実であるが、未調査のため広がり範囲は確定できなかった。礫に被熱の痕跡は認められなかった。

遺物

Fig. 62-1・2 は集石とともに出土した土器。1 は北筒式トコロ 6 類土器の口縁部。肥厚帯はなく、円形刺突文が付されている。胎土には繊維が含まれる。2 は北筒式土器とみられる胴部破片。胎土には繊維が含まれる。

小括

本遺構は掘り込みを伴わない集石遺構と考えられる。出土遺物から判断すると縄文中期に属する可能性が高い。礫が被熱していない点や、土器・石器の出土がやや少ない点が注目される。 (熊木俊朗)

2 XXV (25) -36 区 集石 3

調査の経緯

XXV (25) -36 区において、II 層上面で大型の砂岩の礫が集中している箇所が検出され、精査の結果、大型の礫が重なり合うように集中している様子が確認された (Fig. 63・PL. 11-2)。礫の様相からオホーツク墓に伴う配石の可能性を考えたが、礫の下面に掘り込みのプランが確認できない点と、礫とともに続縄文初頭の土器片が確認された点から、少なくともオホーツク墓ではないと判断した。

遺構

礫の集中範囲は南北約 50cm、東西約 100cm で、大型の礫を主体とする。礫に被熱の痕跡は認められない。礫のほかには続縄文初頭の土器と黒曜石の剥片が確認された。大型の礫は取り上げていないため礫の直下の様相は不明であるが、礫の周辺部では掘り込み等の遺構は認められなかった。

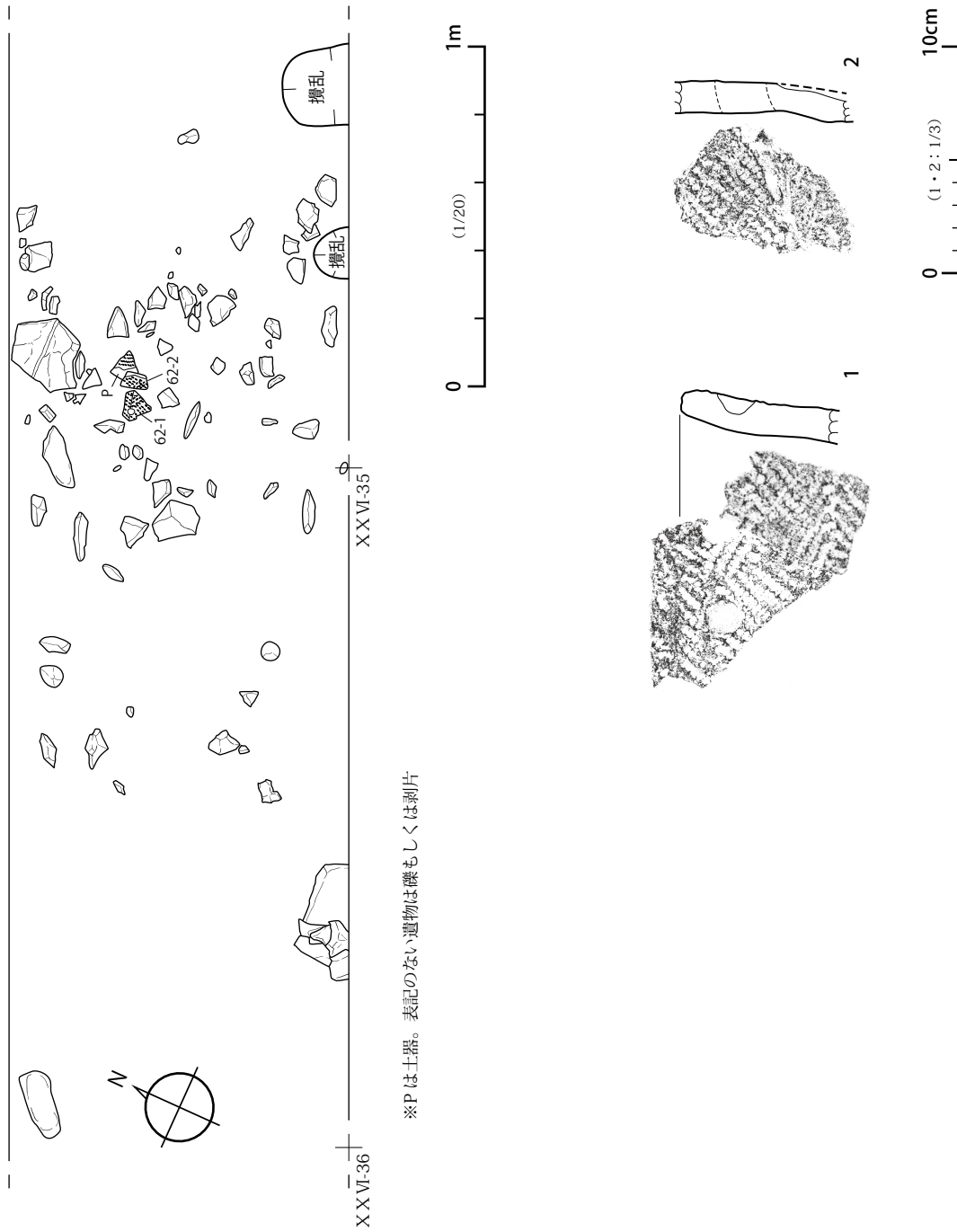


Fig. 62 F トレンチ XXXV (25) - 34~35 区 集石 2 および出土土器

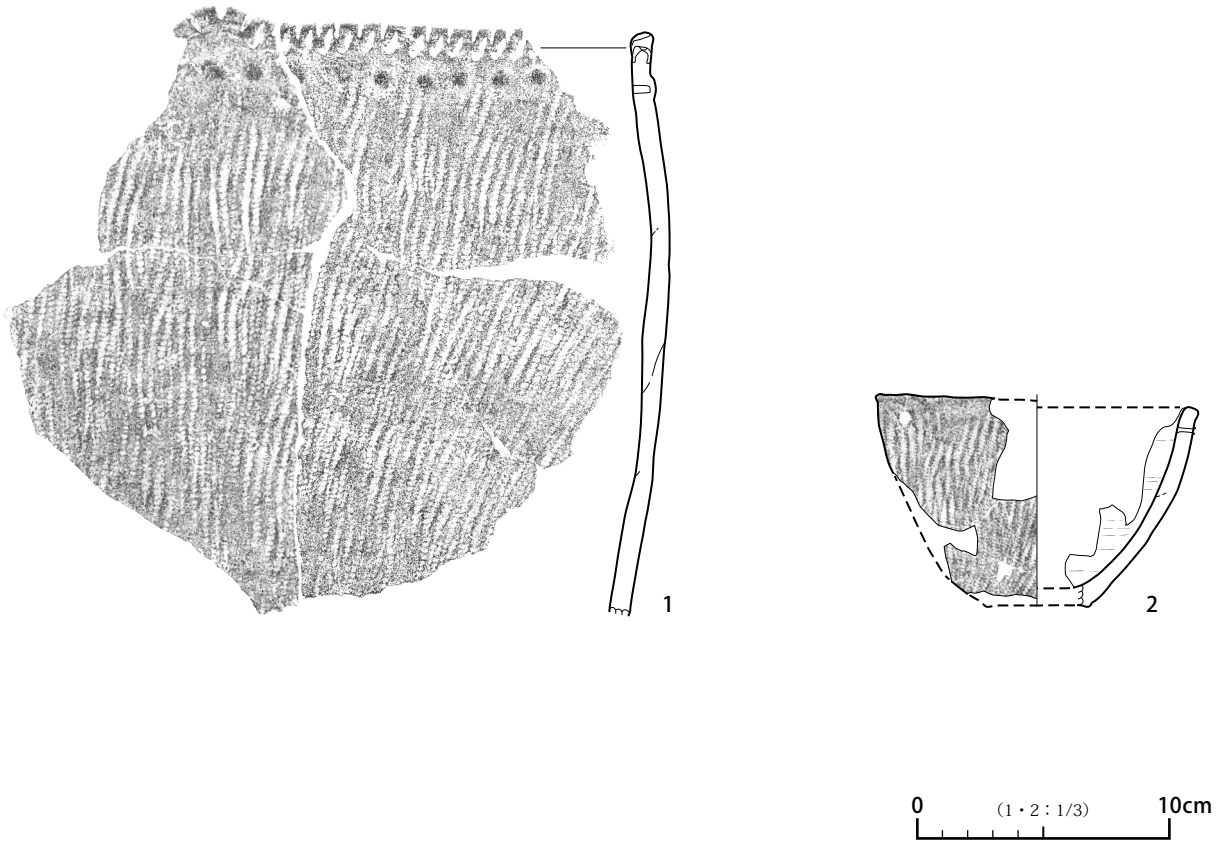
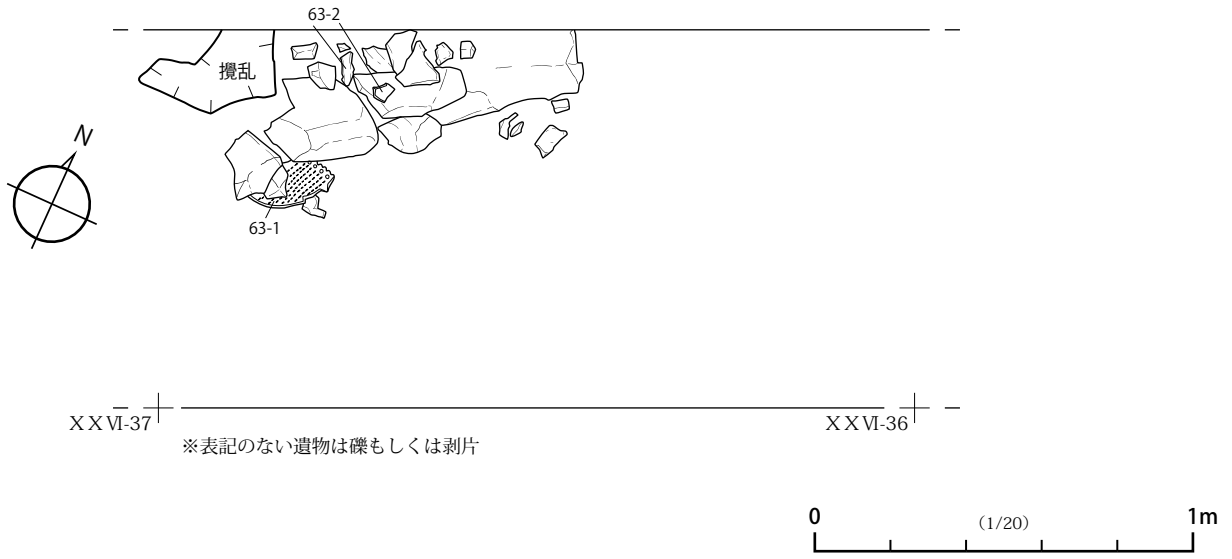


Fig. 63 Fトレンチ XXV (25) -36区 集石3および出土土器

遺物

Fig. 63-1・2 は集石に伴って出土した土器。1 は IO 突瘤文を有する土器で、口縁部には山形突起があり、口唇面の内縁と外縁には縄の側面圧痕による刻みが交互に付されている。宇津内 IIa 式にも近いが、口唇面の文様の特徴から元町 2 式と判断しておく。2 は鉢形土器。平縁で、口縁部に焼成前に開けられた IO の円孔文が 1ヶ所確認できる。おそらく対面にも円孔文が付されていて向かい合う 2 単位の文様構成であった可能性が高いが、対面側は欠損しており不明である。続縄文前半期（続縄文初頭を含む）の土器であろう。

小括

本遺構は掘り込みを伴わない集石遺構と考えられる。出土遺物からすると続縄文初頭に属する可能性が高い。他の集石遺構と比較すると、大型の礫を主体とする点が特徴的である。 (熊木俊朗)

3 その他の遺構

F トレンチ内では以上の遺構のほかにも、XXV (25) -32～33 区および 37 区～39 区 (Fig. 42) にかけての地点を中心に、基本層序 II 層の上面においてピットとみられる平面プランを多数検出している。しかしこれらの遺構については上面の検出のみで掘り下げをおこなっていないため、深さ・時期・性格等の詳細は不明である。さらに、XXV (25) -32 グリッド交点付近の II 層上面では、南北 80cm・東西 40cm の範囲で小規模な礫の集中も確認されているが (Fig. 42)、礫に伴う土器等は出土しておらず、帰属時期は不明である。 (熊木俊朗)

第七節 G トレンチの遺構各説

1 XXII (22) -17~20 区 オホーツク 13 号竪穴

調査の経緯

XXII (22) -17 区に設定した 1m×1m の深掘り区内の、地表下約 80cm のところで焼けたローム質土の土層面が確認された (Fig. 64・PL. 12-1)。焼土は深掘り区内全面に確認されたが、北部に特に集中していた (Fig. 64 の「焼土の集中箇所」)。焼けた面の状態・特徴、さらに地表面からの深さなどから、この面はオホーツク文化竪穴住居跡の焼けた床面の可能性が高いと判断した。深掘り区内の土層堆積は以下のとおりである (Fig. 64 の a-b 間)。1 層：耕作土。2 層：黒褐色土。しまりがやや弱く、径 2~3mm の礫、炭化物粒を少量含む。現代の遺物は認められないが、耕作土の可能性もある。G トレンチ土層図 (Fig. 47) の 16 層に対応。3 層：黄褐色ローム質土。G トレンチ土層図の 17 層に対応。4 層：黒褐色土。焼土粒を含む。G トレンチ土層図の 18 層に対応。5 層：赤褐色土。焼土を多く含む。G トレンチ土層図の 19 層に対応。

この 13 号竪穴床面の調査は前述の 1m×1m の深掘り区内でのみおこなったが、この範囲の中では柱穴や周溝は確認できなかった。また、壁材のような炭化材や、粘土の貼床に相当する粘土貼りの硬化面なども認められなかった。

13 号竪穴の拡がり (壁の立ち上がり) を確認するために、XXII-17 区から XXII-21 区にかけて G トレンチ内の南半分幅 50cm のサブトレンチを設定し、II 層上面相当の標高からさらに 30cm ほど掘り下げを行った。すると XXII-20 区内の地表下約 60cm で壁の立ち上がりとみられる土層の境界面 (G トレンチ土層図 (Fig. 47) の 3 層 (基本層序 II 層の暗褐色土) と 23 層 (黒褐色土や焼土粒などを含む暗褐色土) の層界) が検出され、さらに XXII-17 区の深掘り区内 (=竪穴内) に向かって黒褐色土が落ち込んでゆく堆積状況が確認された (Fig. 43, Fig. 47)。よってこの XXII-20 区内の土層境界面の位置が 13 号竪穴の壁に相当すると認定した。

遺構

XXII-20 区で確認された竪穴の壁とみられる位置から、深掘り区で確認された竪穴床面の距離はおよそ 5.9m であり、13 号竪穴の大きさは少なくともそれ以上になるとみられる。ただし周溝など竪穴の方向が推測できるような遺構は確認できなかったため、竪穴の向き・形状・大きさなどについては不明とせざるを得ない。また、前述のように柱穴などの付帯設備も確認されていない。 (熊木俊朗)

遺物

Fig. 64-1~6 は 13 号竪穴床面から出土した遺物。

1 は後北 C₂・D 式土器の口縁部破片。口唇部に刻み目を施し、口唇部の直下には刻み目のある貼付文が付されている。2 はオホーツク貼付文系土器の胴部破片。3 は後北 C₂・D 式土器の胴部破片。

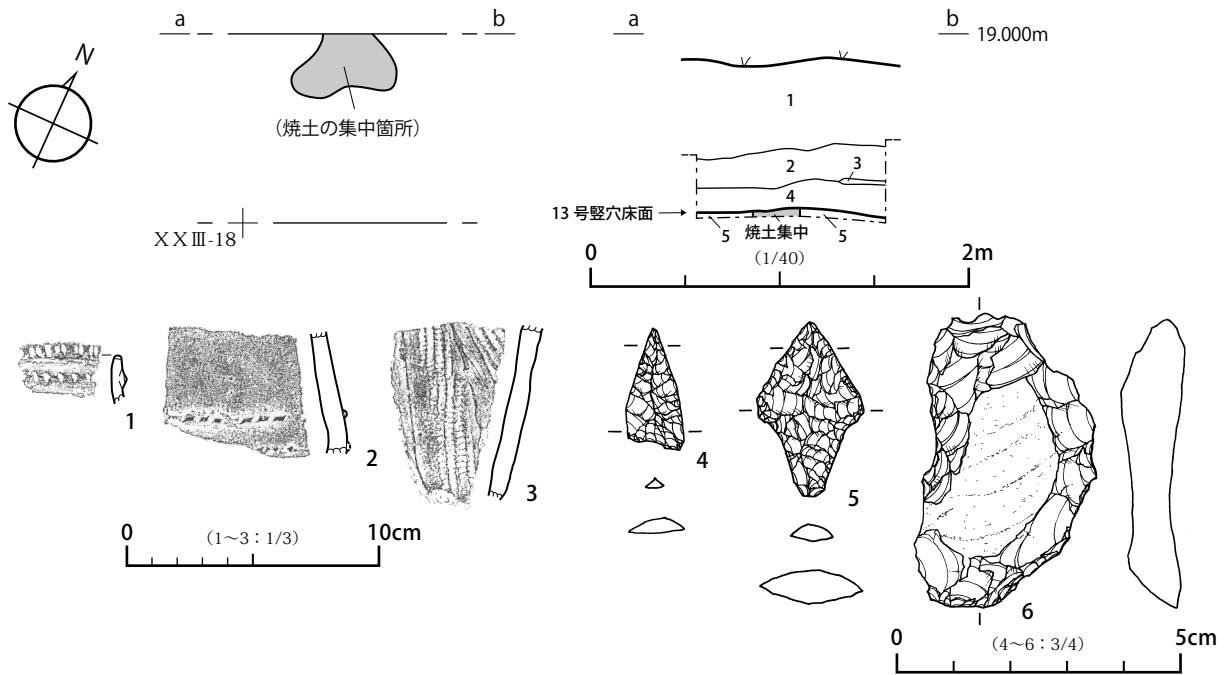


Fig. 64 G トレンチ XXII (22) -17~20 区 オホーツク 13 号竪穴および出土土器 (1~3)・石器 (4~6)

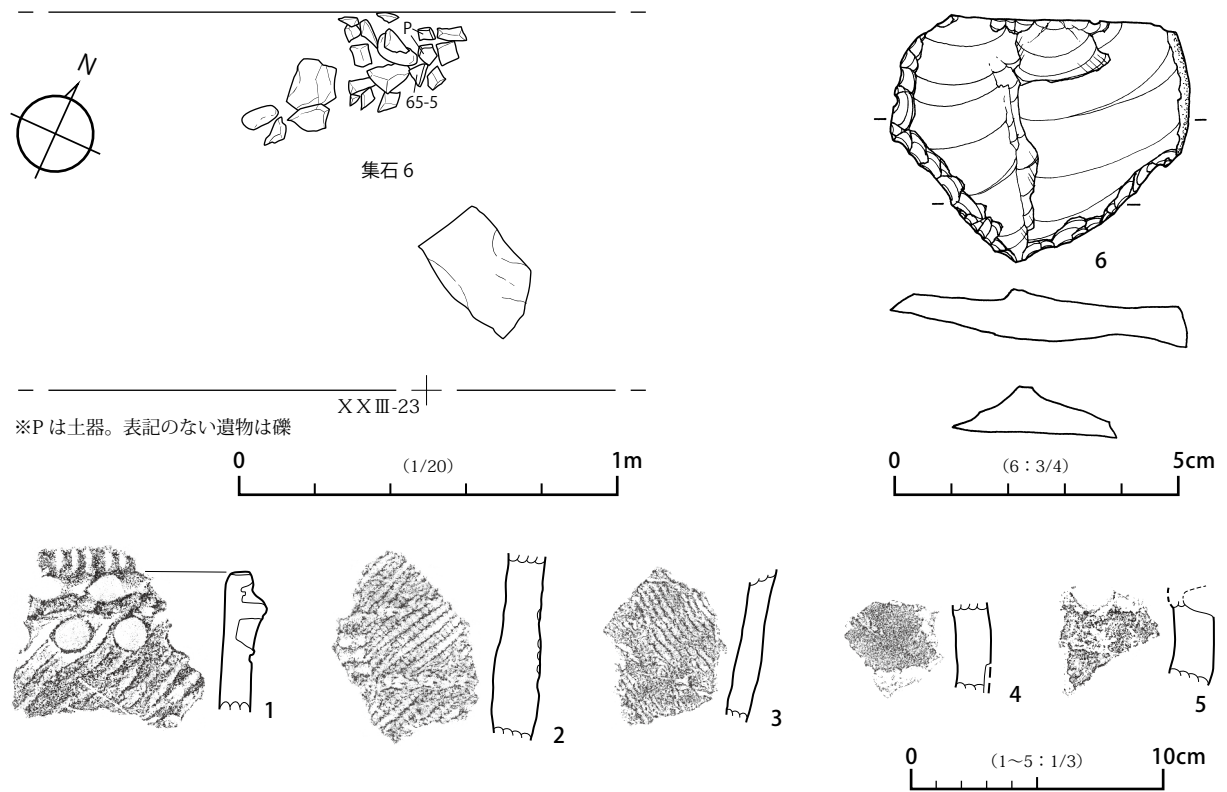


Fig. 65 G トレンチ XXII (22) -22~23 区 集石 6 および出土土器 (1~5)・石器 (6)

4・5は石鏃。すべて黒曜石製である。4は弱い抉りのある凹基かつ二等辺三角形を呈する小型の石鏃で、裏面は周縁加工で素材面を大きく残すため、横断面は略三角形である。5は基部が明瞭に区分される形態をなす有茎の石鏃である。6は搔器。黒曜石製で、背面の中央部に岩屑・角礫面を残す。表裏面ともに粗い周縁加工が施され、剥片端部にある搔器刃部のみが滑らかな弧状に整えられている。

(熊木俊朗・夏木大吾)

小括

出土遺物をみると13号竪穴は後北C₂・D式期の遺構である可能性も否定しきれないが、床面からはオホーツク貼付文系土器も出土しており、遺構の特徴から考えてもオホーツク文化貼付文期の焼失住居と考えられる。壁との位置関係や、貼床や周溝が検出されていない点からすると、今回、深掘り区内で確認されたのは竪穴の壁際よりやや内側の、貼床と壁に挟まれた部分の空間と推定されるが、確証はない。

(熊木俊朗)

2 XXII (22) -22~23区 集石6

調査の経緯

XXII (22) -22区とXXII-23区の境界の、G トレンチの北壁付近で砂岩の角礫・円礫が集中している箇所が検出された。精査の結果、やや小型の礫を中心とした礫の集中が確認された (Fig. 65・PL. 12-2)。礫の周囲や下部に掘り込みの痕跡は認められなかった。礫には被熱しているものも認められ、礫に伴って土器と石器も確認された。

遺構

やや小型の礫が南北約35cm、東西約65cmの範囲に集中し、その南東部にやや大型の礫が1点確認されている。

(熊木俊朗)

遺物

Fig. 65-1~6は集石6に伴って出土した遺物。

1は北筒式トコロ6類土器とみられる口縁部破片。幅が狭く突帯に近い肥厚帯を有し、肥厚帯上に円形刺突文を有する。口唇部には突引文に近い刻み目が施される。胎土には繊維が含まれる。2は北筒式とみられる胴部破片。突引文が縦方向に施されている。3は原体RLとみられる斜縄文が施された胴部破片。北筒式とみられるが確言はできない。胎土に繊維は含まれていない。4は厚手無文の土器の胴部破片で、胎土に繊維は含まれていない。被熱の痕跡が認められる。5は厚手の土器の胴部破片。上部に断面がV字形の円形刺突文が付されているようだが、欠損部分が多く判然としない。胎土に繊維は含まれていない。4と5はおそらく縄文前期の土器であり、網走式の可能性が高いとみられるが、確言はできない。

6は削器。黒曜石製で、側面に僅かな円礫面が残る。単剥離の平坦な打面から剥離された幅広の剥片を素材とし、やや鈍角に交叉・収斂する刃部が形成されている。

(熊木俊朗・夏木大吾)

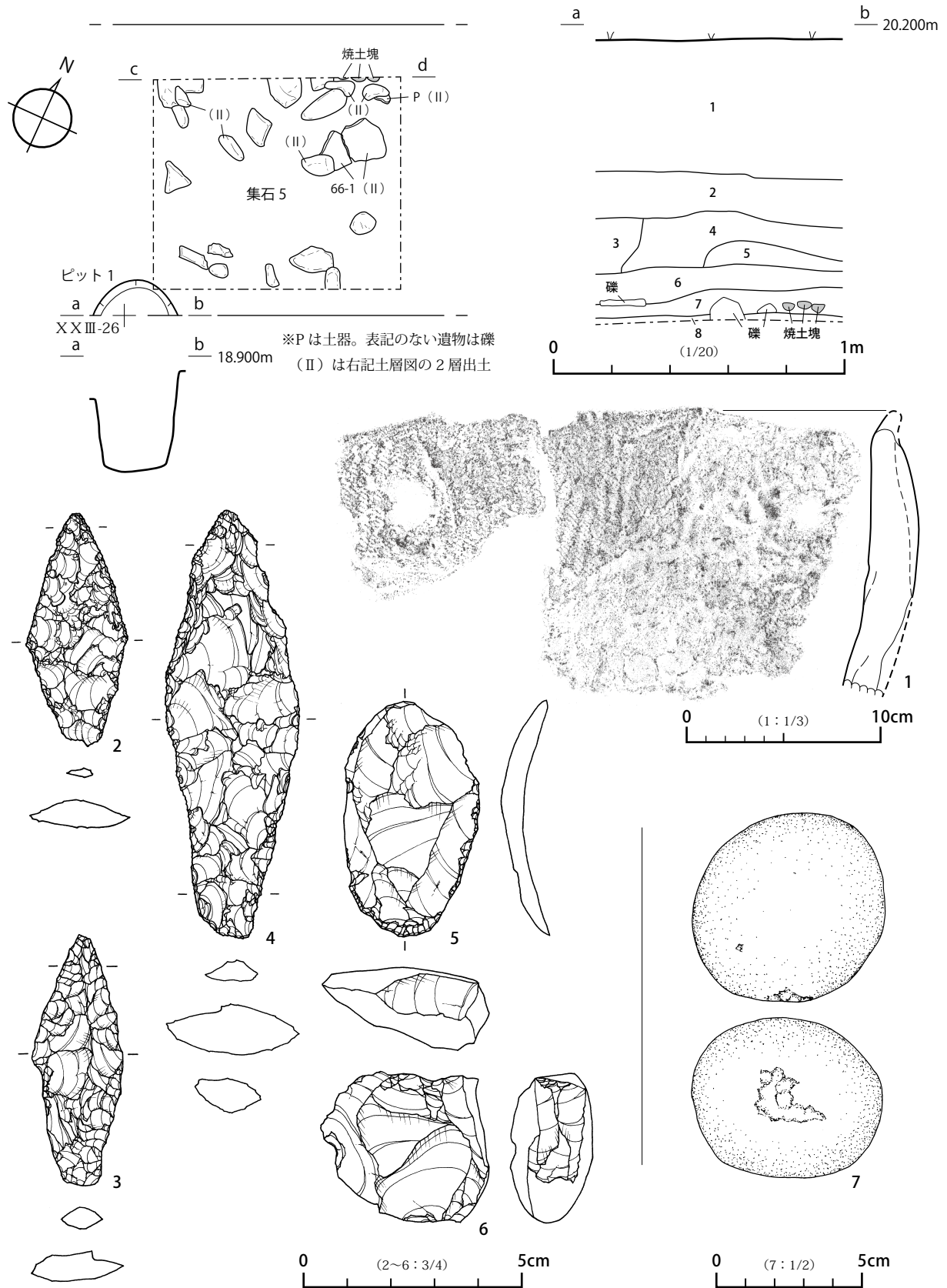


Fig. 66 Gトレンチ XXII (22) -25~26区 集石5・ピット1および出土土器(1)・石器(1~7) (1~6:集石5、7:ピット1)

小括

本遺構は下部に掘り込みを伴わない集石遺構と考えられる。出土遺物からすると縄文中期もしくは前期に形成された可能性が高いが、上面確認に止めたため詳細は不明である。 (熊木俊朗)

3 XXII (22) - 25 区 集石 5

調査の経緯

XXII-25 区の深掘り区において、基本層序の II 層上面から 15cm ほど掘り込んだところで縄文前期の土器と円礫が検出され (Fig. 66 で (II) と表記の遺物)、また茶褐色土が帯状に広がっている様子が確認された。さらに掘り下げを行ったところ、間に焼土や炭化物、獣骨などを含む層を挟んで、土器の検出面から 35cm ほど掘り込んだところで角礫や円礫がややまばらに集中している状況が確認された (Fig. 66)。下層の集石検出面までの土層堆積は以下のとおりである (Fig. 66 の a-b 間)。1 層：耕作土。2 層：暗褐色土。炭化物と焼土粒を少量含む。基本層序の II 層。3 層：茶褐色土。粘性ややあり。炭化物と焼土粒を少量含む。4 層：暗褐色土。粘性ややあり。炭化物のブロックや灰を含む。5 層：暗赤褐色土。4 層と似た様相を呈するが、焼土を多く含み、赤い色調を帯びる。6 層：暗褐色土。灰を非常に多く含み、炭化物・焼土粒・骨片を含む。7 層：暗赤褐色土。焼土を多く含み、炭化物・灰を少量含む。8 層：暗褐色土。粘性があり、炭化物をわずかに含む。Fig. 66 で (II) と表記の遺物 (土器など) は 2 層中で検出され、他の礫や石器は 8 層上面で検出されている。基本層序の III 層や IV 層に相当する土層は 8 層までの中では検出されておらず、いわゆる地山の層はより下位に位置しているとみられる。

遺構

遺物は主に Fig. 66 の 2 層中と 8 層上面で確認されているが、2 層から 7 層までの土層の堆積状況や遺物の出土状況から、二つの時期の遺構面が重なっているのではなく一連の堆積であると判断した。掘り込みを伴う遺構 (竪穴住居跡など) の埋土中に形成された遺物の集積と捉えるべきかもしれない。平面的には 1m×1m の深掘り区の範囲外まで広がっているとみられるが、拡がりの範囲は不明である。礫には被熱しているものが多く認められ、集石の周辺には焼土の塊も散見された。 (熊木俊朗)

遺物

Fig. 66-1 は Fig. 66 の 2 層中から出土した土器、Fig. 66-2~6 は 8 層上面から出土した石器。

1 は厚手の土器の口縁部破片。ボウル状に湾曲した器形で、口唇部には山形突起が 1ヶ所確認できる。外面には原体 LR の縄文が付されている。胎土には繊維が含まれており、焼成は悪く、非常に脆い。補修孔とみられる焼成後に穿たれた穴が 2ヶ所確認できる。縄文前期の繊維尖底土器群とみられる。

2・3 は石鏃。すべて黒曜石製で、2 は僅かに赤褐色が入る。2 は基部が区分される形態で、菱形に近い形状をなし、薄い剥離で器面と縁辺が平滑に整えられている。3 は基部の区分は不明瞭であるが、先端部は先鋭で、基部は平坦である。2 に比べると 3 の調整剥離はやや粗い。4 は尖頭器。黒曜石製で、梨肌である。基部の区分は明瞭でないが、先端部は先鋭で、平基である。基部付近に対し先端部付近の

側縁調整は粗く、鋸歯状を呈する。5 は搔器。黒曜石製で、僅かに赤褐色が入る。両面調整石器の調整剥片を素材とし、側縁に微細調整、端部に浅い角度の調整と微細調整が施される。6 は石核。黒曜石の小型円礫を素材とする。単剥離打面で、正面と側面において剥片が剥離されている。最終的には裏面の円礫面を打面として、正面の剥離作業面から 2 枚の小さな剥片を剥離している。（熊木俊朗・夏木大吾）

小括

集石 5 は II 層中で検出され、検出面から 35cm の深さまで礫などの遺物集中が続いていた。これら一連の遺物集中は全て II 層相当の土層中に形成されたもので、III 層や、いわゆる地山に相当する IV 層はこの集石 5 よりさらに下位に位置にするとみられる。しかし調査は集石が面的に検出された層までとしたため、III 層と IV 層の位置は不明である。いずれにしても本地点では II 層相当の堆積がかなりの厚さ（50cm 以上）で存在しており、この集石 5 を包含している土層は掘り込みを伴う遺構（竪穴住居跡など）の埋土である可能性もある。ただし周辺の調査を行っておらず詳細は不明なため、ここでは本遺構を「集石」として扱っておく。出土遺物からすると縄文前期もしくはそれ以前に形成されたものであろう。

（熊木俊朗）

4 XXII (22) -25～26 区 ピット 1

調査の経緯

XXIII (23) -26 グリッド交点付近において、基本層序 II 層の上面で平面プランを確認した (Fig. 66)。ピットの南半分に相当する部分がトレンチ外に拡がっていると推測されたが、トレンチの拡張はおこなわずピットの北半分の調査に止めた。ピットの埋土は Fig. 47 の 10 層（黒褐色土）であり、集石 5 の形成層を切って掘り込まれている。

遺構

ピットの南半分が未調査のため全体の形状は不明であるが、平面形は径 30cm 前後の円形もしくは楕円形とみられる。確認面からの深さは最大 33cm で円筒形を呈している。

（熊木俊朗）

遺物

Fig. 66-7 は敲石。石英の円礫が用いられている。直径約 7cm とテニスボール程度の大きさで、315.2g と重く、一端に敲打によって生じた表面の剥落が認められる。

（夏木大吾）

小括

本ピットは集石 5 の形成層を切って掘り込まれており、縄文前期以降に形成されたものと考えられるが、正確な時期や性格は不明である。

（熊木俊朗）

5 その他の遺構

G トレンチ内では以上の遺構のほかにも、基本層序 II 層の上面で 5ヶ所の焼土 (XXII (22) -21 区

内の3ヶ所と、XXII-27区・28区で各1ヶ所ずつ、) フレイク集中 (XXII-21区)、2ヶ所の灰集中 (XXII-23区と24区) が検出されている (Fig. 43)。遺構の詳細は省略するが、遺構に伴う土器や石器等の遺物は出土しなかった。これらの遺構は出土層位からするとオホーツク文化期以降のものと思われる。

また XXII (22) -20~21 区のサブトレンチ内や、XXII (22) -24 区から 28 区にかけての地点では、基本層序 II 層の上面においてピットとみられる平面プランが計 10 基検出されているが、これらの遺構については上面の検出のみで掘り下げをおこなっていないため、深さ・時期・性格等の詳細は不明である。

(熊木俊朗)

第八節 H トレンチの遺構各説

1 H-3～4 区 集石 7

調査の経緯

H-4 区を中心に H-3 区にかけて、基本層序の II 層上面にやや小型の角礫などが集中している箇所が発見された。精査の結果、角礫と円礫のほか、少数の土器片などが確認された (Fig. 67・PL. 13-1)。礫の周囲や下部に掘り込みの痕跡は認められなかった。

遺構

礫の集中範囲はトレンチと平行方向に約 2m、トレンチの直交方向に約 0.9m で、トレンチの西側にさらに広がっている可能性がある。礫に被熱の痕跡は認められなかった。 (熊木俊朗)

遺物

Fig. 67-1～7 は集石 7 に伴って出土した遺物。

1 は縄文前期の網走式土器の口縁部破片。口縁部に隆起帯をめぐらせ、隆起帯上に楕円形に近い幅広いの凹みを作り出している。胎土には繊維を含まない。被熱の痕跡が認められる。2 も 1 と同じ特徴を有する土器の口縁部破片で、網走式とみられる。3・4 は北筒式の胴部破片。3 は複節の縄文 (原体 RLR) が施されている。3・4 とともに胎土には繊維がわずかに含まれている。5 は厚手の土器の胴部破片。外面には原体が RL とみられる撚糸文が付されている。胎土には繊維が含まれており、被熱の痕跡が認められる。縄文前期の土器で、岐阜第二遺跡の「撚糸文土器」(藤本・宇田川編 1982: 141) に類似する (東大考古学研究室・常呂実習施設編 2001: 135)。

7 は石鏃。黒曜石製である。厚さ 0.36cm の薄手の剥片を素材とし、表裏面に素材面を残す、凹基の二等辺三角形形状を呈する石鏃である。 (熊木俊朗・夏木大吾)

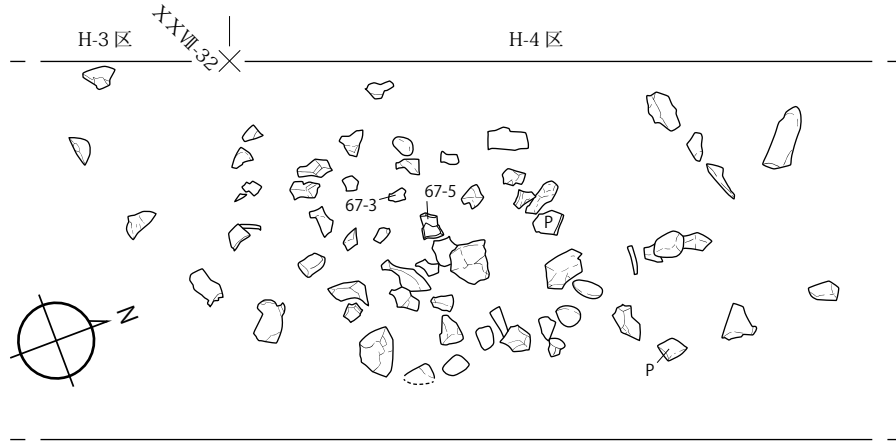
小括

本遺構は掘り込みを伴わない集石遺構と考えられる。出土遺物からすると縄文前期～縄文中期にかけてのいずれかの時期に属する可能性が高い。 (熊木俊朗)

2 H-1～2 区 骨集中および土器集中

調査の経緯

H-1 区を中心に、一部は H-2 区および H トレンチ南端の拡張区にかけて、I 層耕作土の直下で獣骨を中心とする遺物集中が確認された (Fig. 68)。この骨集中の中にはヒグマを主体とする獣骨のほかにオホーツク貼付文系土器、黒曜石製石器などが多数含まれており、最下面ではオホーツク貼付文系土器がまとまって出土した (Fig. 68 の濃い網掛け部分、PL. 13-2)。



※Pは土器。表記のない遺物は礫もしくは剥片

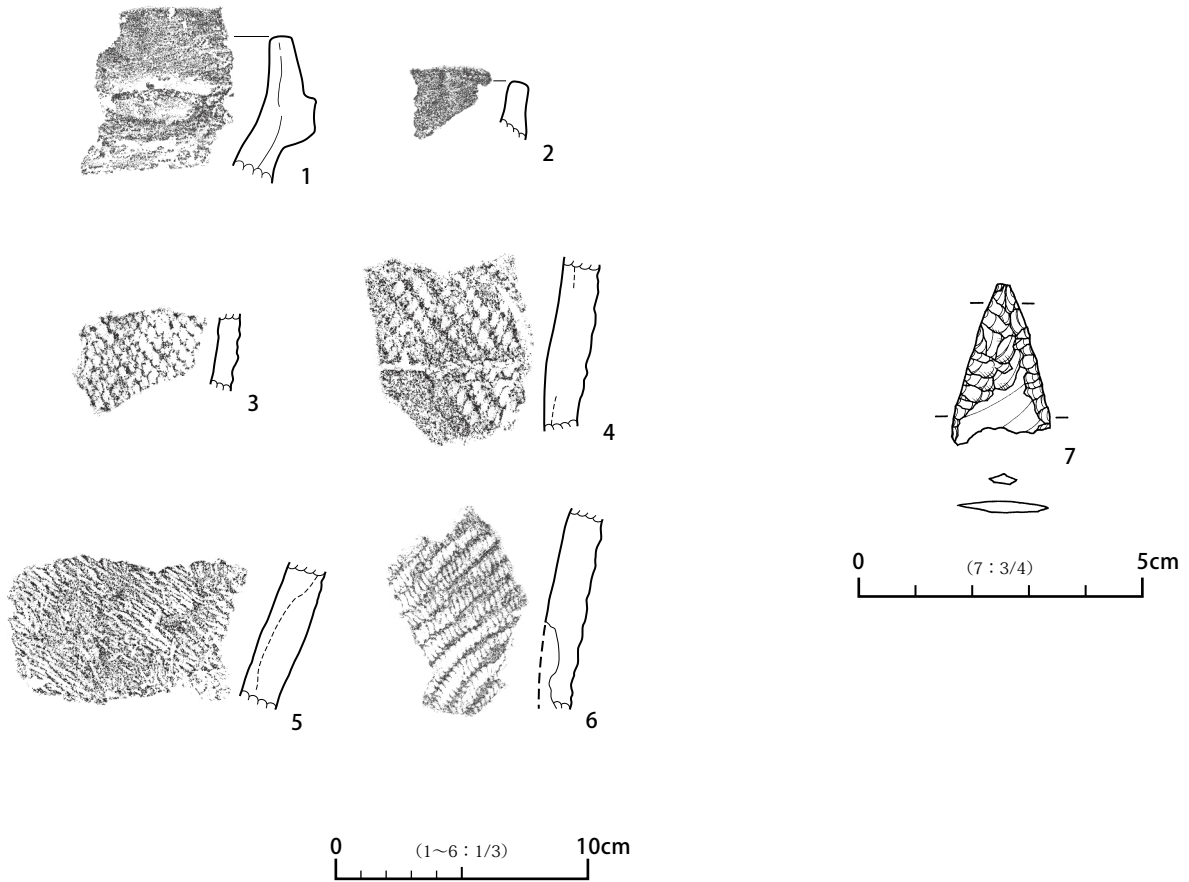
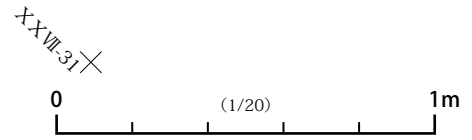


Fig. 67 Hトレンチ H-3~4区 集石7および出土土器(1~6)・石器(7)

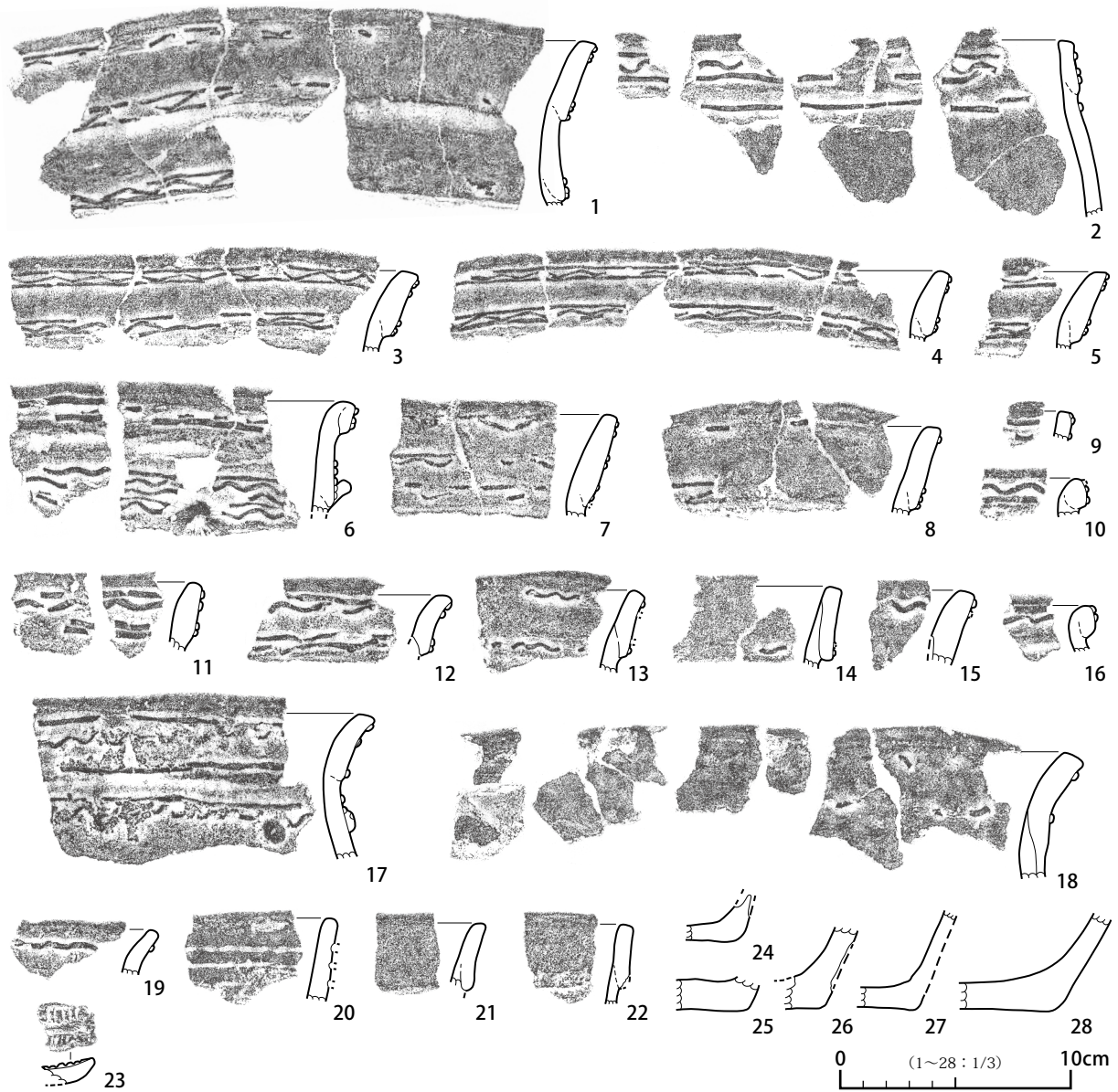
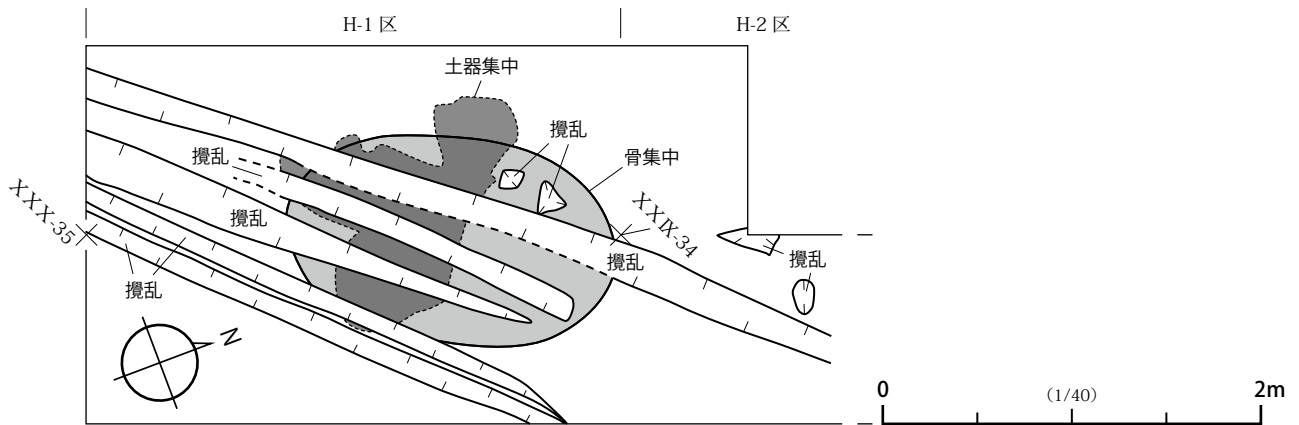


Fig. 68 H トレンチ H-1~2 区 骨集中・土器集中および出土土器 1

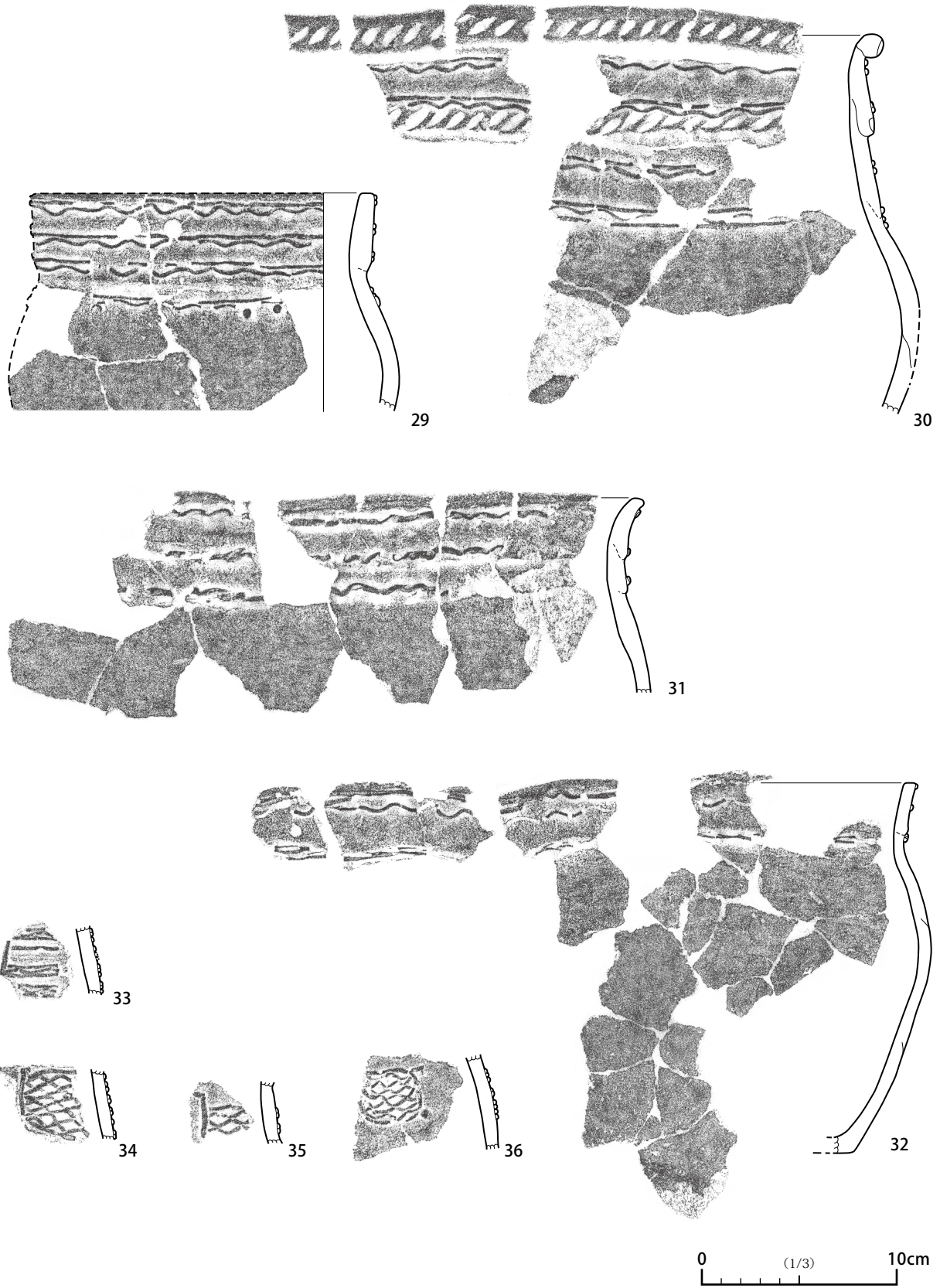


Fig. 69 Hトレンチ H-1~2区 骨集中・土器集中出土の土器2

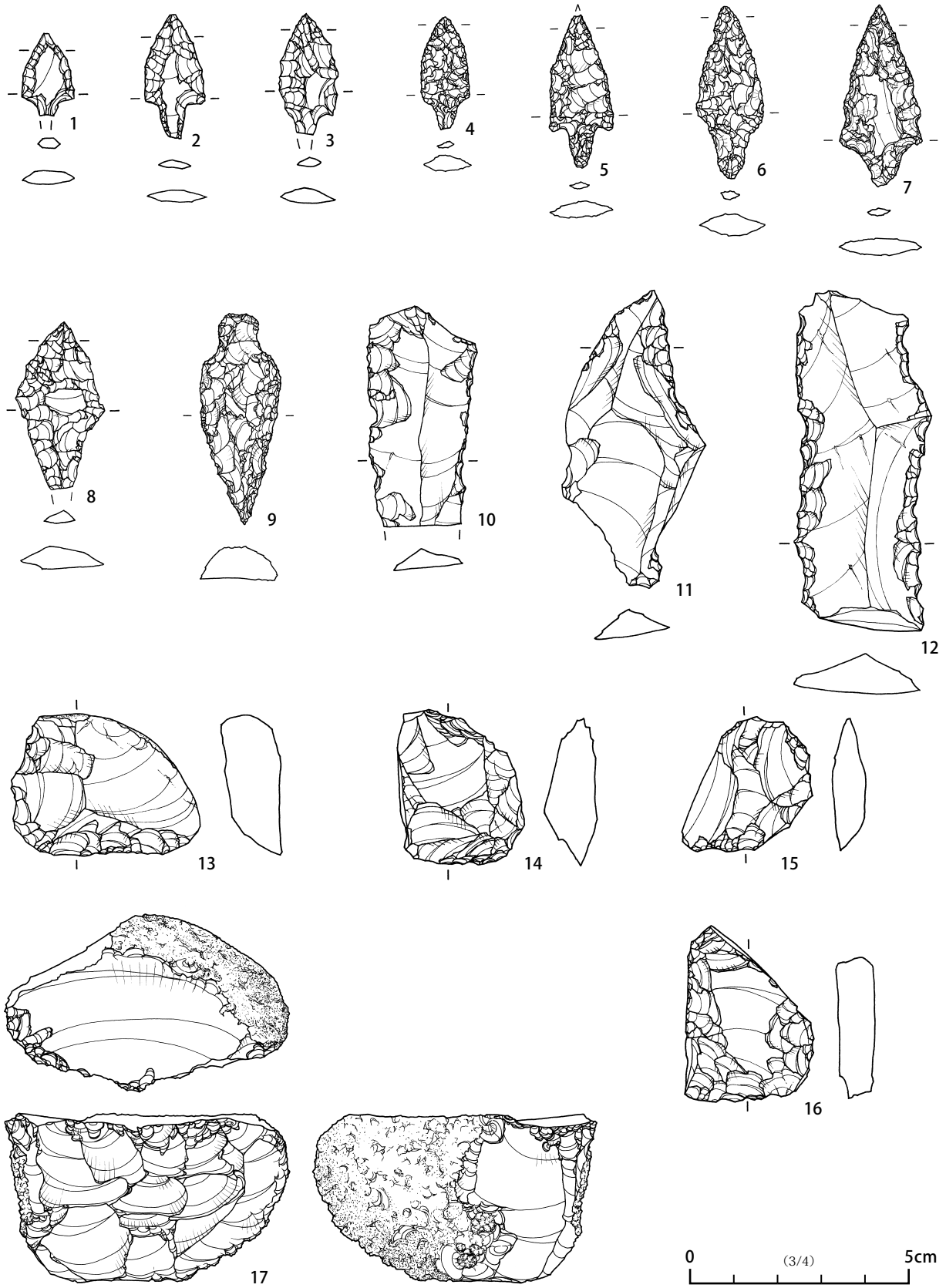


Fig. 70 H トレンチ H-1~2 区 骨集中・土器集中出土の石器 1

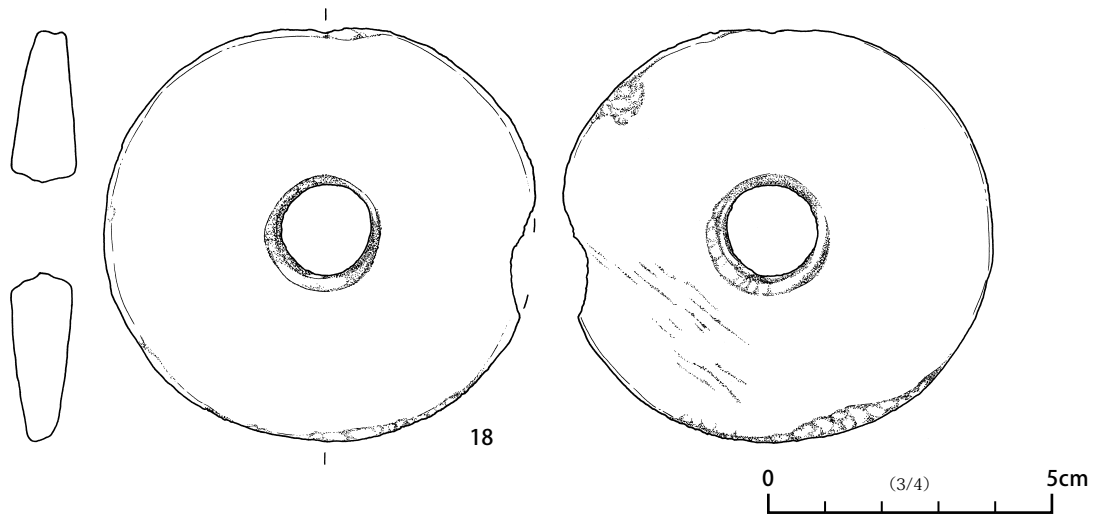


Fig. 71 H トレンチ H-1~2区 骨集中・土器集中出土の石器2

この骨集中及び土器集中は、Fig. 68 に示したように多くの部分で耕作による攪乱を被っていたほか、攪乱を直接的に受けていない部分でもその影響を全面的に被っていることが疑われるような、やや乱れた状態で確認された。ただし、どこか別の地点から土が投げ入れられたような痕跡はなく、上下の攪拌はあるにしても平面的には概ね原位置を保っているように思われた。層的にはⅠo層の上面からⅡ層の上面までの間に位置しており、Ⅱ層中にまでは及んでいない。また、遺構面の下面に掘り込みや柱穴などは確認できなかった。

遺構

骨集中の範囲は南北約 1.7m、東西約 1.1m で、厚さはもっとも厚い部分で 16cm に及んでいる。土器の集中は骨集中の最下面、平面上はやや西側に偏った部分で検出されている。出土した獣骨は攪乱を受けていることもあってか、ほぼ全てが細片になっており、頭骨等が集中している様子などは確認できなかった。また、大多数の骨が火を受けていた。

(熊木俊朗)

遺物

Fig. 68・Fig. 69・Fig. 70・Fig. 71・PL. 14・PL. 15 は骨集中および土器集中に伴って出土した遺物。

Fig. 68-1~19 はオホーツク貼付文系土器の口縁部破片。1~10 は 3 本一単位の貼付文を口縁部文様を含む例。1 (PL. 14-1) は 2 段の肥厚帯を有し、3 本一単位の貼付文が上部の肥厚帯上には 2 単位、下部の肥厚帯上には 1 単位確認できる。2 (PL. 14-2) は 1 段の肥厚帯を有し、肥厚帯上には 3 本一単位の貼付文が 1 単位、その下部には貼付文が 1 条確認できる。3 (PL. 14-3)・4・5 は接合しないが同一個体とみられる。肥厚帯を有し、肥厚帯上には 3 本一単位の貼付文が 2 単位施されている。6 (PL. 14-4) は突帯状の肥厚帯と幅広の肥厚帯を有し、突帯状の肥厚帯上には 3 本一単位の貼付文、下段の肥厚帯には 5 本一単位の貼付文が施されている。下段の肥厚帯の下縁には小さい吊耳状の粘土が付加されている。7 は肥厚帯を有し、肥厚帯上に 2 本一単位の貼付文を 2 単位、3 本一単位の貼付文（一部は剥落している）を 1 単位施している。8 は肥厚帯を有し、大部分が剥落しているが肥厚帯上に 2 本一単

位と 3 本一単位の貼付文を各 1 単位ずつ施している。9 は口唇部の破片で、3 本一単位の貼付文が施されていたとみられる。10 は突帯状の肥厚帯の破片で、一部は剥落しているが 3 本一単位の貼付文が確認できる。11～16 は 2 本一単位の貼付文を口縁部文様に含む例。11～14 は肥厚帯を有しており、11 と 12 は 2 本一単位の貼付文が 2 単位施されている。13 もかなりの部分が剥落しているが 2 本一単位の貼付文が 2 単位施されているとみられる。14 もかなりの部分が剥落しており詳細は不明だが、2 本一単位の貼付文が確認できる。15 は口唇部の破片で肥厚帯の有無は不明、16 は突帯状の肥厚帯を有しており、それぞれ 2 本一単位の貼付文が確認できる。以上の 1～16 の貼付文には波状のモチーフはあるが、ひねりのある貼付文は含まれていない。17～19 は 1 本単位の貼付文を口縁部文様に含む例。17 (PL. 14-5) は肥厚帯を有し、肥厚帯上に貼付文を 3 条（直線、ひねりあり、直線）、頸部に 2 本一単位の貼付文（直線＋ひねりあり）とボタン状の貼付文が付される。18 はおそらく肥厚帯を有さない口縁部破片で、2 条の貼付文（波状）が付されている。19 は口唇部の破片でひねりのある貼付文が 1 条施されている。20～22 はオホーツク土器の口縁部破片。20 は沈線文のようにもみえるが、1 本単位の貼付文が 4 条付されていたものが剥落した痕跡であろう。肥厚帯の有無は不明である。21 と 22 は肥厚帯を有する無文の土器。22 は肥厚帯の下縁に付されていた貼付文が剥落したのもののようにもみえるが、詳細は不明である。23 は後北 C₂・D 式の注口土器の注口部とみられる。刻み目のある貼付文が付されている。24～28 はオホーツク土器の底部。以上の土器のうち、1～16・18・19・21～27 には被熱した痕跡が認められる。

Fig. 69-29～32 はオホーツク貼付文系土器で、全て被熱の痕跡が認められる。29 (PL. 14-6) はごく薄い肥厚帯を有し、肥厚帯上には 2 本一単位の貼付文が 3 単位、頸部には 2 本一単位の貼付文と粒状の貼付文が付される。30 (PL. 14-7) は突帯状の肥厚帯と幅広の肥厚帯を有し、突帯状の肥厚帯上と幅広の肥厚帯の下縁には斜位の刻文、幅広の肥厚帯上には 2 本一単位の貼付文が 2 単位、頸部には 2 本一単位と 3 本一単位の貼付文が 1 単位ずつ施されている。1・2 の貼付文にひねりのあるものは含まれていない。31 (PL. 14-8) はごく薄い肥厚帯を 2 段有しており、肥厚帯上に 1 本単位の貼付文（全てひねりあり）が 3 条施されている。32 は肥厚帯を有する土器で、肥厚帯上には 2 本一単位（直線＋波状）と、刺突によって鎖状を呈する貼付文が 1 条施されている。Fig. 69-33～36 は縦方向の区画の意匠となる貼付文が付された胴部破片で、いずれも被熱の痕跡が認められる。33 は 3 本一単位の貼付文（直線＋波線＋直線）が 4 単位付され、拓図の左側にあたる位置には縦方向の貼付文が 1 条付されている。34 は直線の貼付文で三方が区画され、内部に波線の貼付文が頂部を接するように 8 本充填されている。35 は上部と左側が直線の貼付文で区画され、内部に波状の貼付文が 3 本充填されているのが確認できる。36 は四方を直線の貼付文で区画され、内部に波状の貼付文が頂部を接するように 7 本充填されている。区画文の右隅には粒状の貼付文が付加されている。34～36 にみられるような貼付文による方形の区画と充填の文様は、トビニタイ土器に特徴的に認められるものである。その点からするとこれらの土器はトビニタイ土器の可能性もあるが、貼付文による方形の区画自体は、本例とはやや異なるものの本遺跡群出土のオホーツク土器にも認められる（東大考古学研究室・常呂実習施設編 2012：Fig. 117-133・Fig. 153-65）。本遺構からはトビニタイ土器の口縁部は全く出土していないことを考慮し、これら 34～

36 についてはトビニタイ土器ではなく、オホーツク貼付文系土器と考えておきたい。

Fig. 70-1~8 (PL. 15-1~8) は石鏃。すべて黒曜石製で、1 と 5 は梨肌である。すべてが茎部をもち、5 はかえし状に整形する調整がある。1~4 は 3cm より小さい小型品で、5~8 は 3cm より大きい。ほとんどは両面調整で横断面がレンズ状に近いが、8 は両面調整でありながら横断面カマボコ状である。9 (PL. 15-9) は石匙。黒曜石製である。多段階表面変化が認められ、片面調整尖頭器を転用し、腹面側を剥離し、つまみ部を作出している。10~12 (PL. 15-10~12) は削器。すべて黒曜石製である。いずれも縦長剥片を素材とし、長軸に並行する側縁を加工している。10 と 12 は両側縁に鋸歯状の刃部が形成された削器である。11 は末端付近の二側縁加工によって尖鋭な刃部が形成され、打点付近の右側縁に抉り状の加工が施され、石匙ナイフ様の形態をなす。13 (PL. 15-13) は搔器。黒曜石で、梨肌である。黒曜石の円礫から剥離された幅広な剥片を素材とし、端部に直線的な刃部を形成している。14~16 (PL. 15-14~16) は楔形石器。すべて黒曜石製である。両極打撃による縁辺の潰れが明瞭に観察される。17 (PL. 15-17) は石核。素材は黒曜石の円礫であり、1cm 以上の大きな球顆が含まれる。僅かな打面縁辺調整のある平坦な単剥離打面で、裏面には自然面が大きく残存し、膨らみの小さい平らな剥片剥離作業面をもつ。Fig. 71-18 (PL. 15-18) は有孔円板。砂岩製であり、径 1.5mm の孔がある有孔円板である。擦痕等の調整は明瞭でない。

骨集中の骨はヒグマを主体とする獣骨からなり、魚骨や貝は認められなかった。詳細は第六章第三節を参照されたい。

(熊木俊朗・夏木大吾)

小括

本遺構はオホーツク文化貼付文期の骨集中遺構であり、火を受けている点、ヒグマの骨・歯牙が主体となる点、魚骨が認められない点、石鏃や復元可能な土器の個体が出土している点などからみて、オホーツク文化の竪穴住居内に形成される「骨塚」とほぼ同じ特徴を有しているとみることができ、本遺構の周囲では竪穴住居の痕跡は全く確認できなかった。すなわち、本遺構は住居外に形成された「骨塚」と判断できるが、これはやや特異な事例といえる。住居内に形成された骨塚との性格や機能の違い、近接するオホーツク 9 号竪穴や 10 号竪穴との関係などが問題となろう。

(熊木俊朗)

3 その他の遺構

上記のほかに、H トレンチでは竪穴状遺構、焼土、ピットが検出されている。いずれも上面の検出のみで掘り下げはおこなっておらず、伴う遺物も確認されていないため規模や時期、性格等は不明である。

竪穴状遺構は H トレンチの北端、H-7 区のサブトレンチ内の南部において確認された (Fig. 42)。地表下約 80cm で遺構の埋土とみられる暗褐色土が 60cm×30cm の範囲で検出され、トレンチの西側に向かってさらに広がっている様子が確認された。この遺構は北部の部分が攪乱を受けていたため掘り込み面の特定は困難であったが、周辺の土層堆積から推測すると基本層序の II 層中から掘り込まれたものと判断された。確認面の平面形から判断すると竪穴住居跡の可能性が考えられるが、出土遺物はなく、調査

第三章 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点 A～H トレンチの調査（2006 年度－ 2007 年度）

もサブトレンチ内の上面確認に止めたため、遺構の時期・性格ともに詳細は不明である。

焼土は竪穴状遺構の北側、H-7 区のサブトレンチ内の北端近くの地点で確認された（Fig. 42）。検出面は基本層序の II 層中である。確認面での拡がりは 80cm×25cm で、トレンチの西側に向かってさらに拡がっている様子が確認された。

ピットは H-5 区および H-6 区で計 3 基が検出されている（Fig. 42）。検出面は II 層の上面である。

（熊木俊朗）

第四章 トコロチャシ跡遺跡 チャシ壕関連の調査（2008年度－2009年度）

第一節 調査の経過

1 調査に至る経緯と調査目的

トコロチャシ跡遺跡の主要な遺構であるチャシの壕については、1997年度までの調査で今回の発掘区周辺以外のほぼ全面が発掘されている（東大考古学研究室・常呂実習施設編2001）。それらの調査によって判明していた壕の様相は以下のとおりである。壕は常呂川右岸の河岸段丘の縁に接した部分にL字形に掘り込まれており、壕を含めたチャシ全体の規模は南北方向が約37m、東西が約50mである。壕は二回にわたって掘削されたことが判明しており、古い壕（旧壕）のわずかに外側に新しい壕（新壕）が掘り直されている。ただし両者は大部分が重なっており、壕の中心線（底部）のずれは最大でも2mほどである。また新旧の壕はそれほど時間的な間隔を開けずに掘られていたことも判明しており、どちらの壕も Ta-a 火山灰の降下（1739年）以前に掘り込まれている。

このようにチャシの壕については、1998年に史跡整備計画の検討が開始された際にはすでに必要な情報が整いつつあったのだが、壕の一部（北東側端部付近）とその周辺は旧土地所有者の建物等のため未発掘となっており、特に壕が主に旧土地所有者の廃棄物と埋土によって不自然に途切れていたため、復元整備には望ましくない景観となっていた。そこで2008年度～2009年度の史跡整備計画では、チャシの壕及び景観の適切な復元整備を進めるとともに、その周辺区域の状況を把握することを目的として、チャシの北東側端部に残る壕の未発掘部分を対象として調査を実施することとした。またこの調査とあわせて、旧土地所有者の建物等の周辺ではそれまで分布調査を実施していなかったため、調査可能な地点にトレンチを設定して遺構等の分布調査をおこなうことにした。（熊木俊朗）

2 2008年度調査の経過

発掘区の設定

2008年度は、チャシの壕の延長部分の調査と、旧土地所有者の建物等の周辺でのトレンチ調査を実施した。壕については、以前の調査区（1997年度調査区）の北東側に隣接した地点に壕の延長方向に沿った発掘区を設定して実施した¹⁾。この地点には1960年に調査された「Sトレンチ」が存在しており、今回の調査ではこの旧Sトレンチの再発掘もあわせて行っている。なお、2008年度の調査当初は、1960年調査の報告書の図（駒井編1964：Fig.6）に基づいて7ラインと8ラインの間に旧Sトレンチの位置

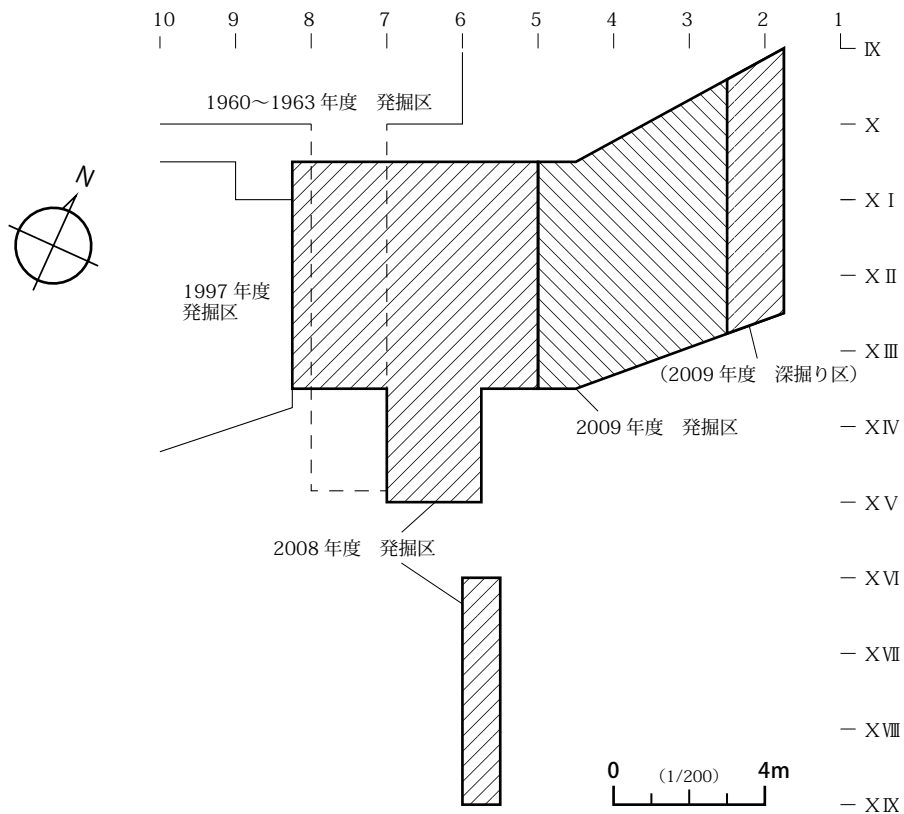


Fig. 72 2008年度・2009年度発掘区の位置

を想定し、発掘区を設定したが、実際には後述のように旧Sトレンチは約2m東側にずれた位置にあったことが判明したため、Fig. 72のように6ラインから50cm東側のラインと7ラインとの間にSトレンチの再発掘区を設定し直している。

旧土地所有者の建物等の周辺に関しては、XVI～XVIII-5区にFig. 72に示したような1m×6mのトレンチを設定し（「XVI～XVIII-5区トレンチ」、土層堆積や遺構・遺物分布などの確認を行った。以下、壕の延長部分の発掘区とトレンチ調査のそれぞれについて調査の経過を述べる。

壕の延長部分の発掘区の調査経過

壕の延長部分の発掘区ではまず全域の表土・二次堆積土を除去しながら、旧Sトレンチの位置を確認した。すると以前の報告書で示された位置よりも約2m東側の位置で、同トレンチの痕跡とみられるラインが平面及び発掘区の北壁（Xラインより1m南側のライン上）で確認された。一方、報告書に示された位置には痕跡が全く確認できなかったため、何らかの原因で報告書との間にずれが生じたと想定し、現場で確認されたトレンチの痕跡を旧Sトレンチと判断して調査を進めることとした。旧Sトレンチの位置がずれたことにあわせて発掘区も一部を変更し、新たに6ラインから50cm東側のラインと7ラインに挟まれた部分を南側に延長することにした。この延長も当初は2m（XIVラインから1m南）分だったが、旧Sトレンチの位置が南北方向にもずれていたことが判明したため、さらに1m、すなわ

ち XV ラインまで延長している (Fig. 72 が最終的な発掘区)。

発掘は、現代の堆積土であるチャシ壕内のゴミ層と、旧 S トレンチ内の埋め戻し土を除去する作業から開始した。旧 S トレンチ内の埋め戻し土の除去は比較的容易と考えていたが、過去の調査終了後に作業小屋の建築等による攪乱が入っていたことや、過去の調査では旧壕の壁を破壊して任意の位置まで深く掘り下げていたことなどがあって、トレンチの壁や底面の再確認がやや難しく、再発掘には時間を要した。特に旧 S トレンチ内のチャシ壕部分については確認作業が難航したが、旧壕の底に相当する部分だけは約 60cm の幅で壊されずに残っていることが確認された。一方、過去の旧 S トレンチ調査ではオホーツク 6 号竪穴も確認されていたが、これについては焼けた貼床面や床面に接する礫群がそのままの状態でも遺されていたため再発掘は比較的容易であった。しかし、S トレンチの南端が発掘区内では確認できなかったため、旧 S トレンチの位置は南北方向にもずれていると判断し、前述のとおり発掘区の再拡張を行った。最終的に旧 S トレンチ南端の壁面の立ち上がりは XV ライン付近で確認された。以上、今回確認された S トレンチの位置についてまとめると、以前の報告書 (駒井編 1964) に示された位置よりも東に約 2.2~2.6m、南に約 1.8m ずれていたことになる²⁾。旧 S トレンチの再発掘については、旧調査の埋め戻し土を全て除去して平面図・写真撮影等の記録をおこなった後、発掘を停止した。

発掘区内の旧 S トレンチ部分以外では、チャシ壕内上部のゴミ層を除去した後、壕内に堆積している Ta-a 火山灰層の上面を検出する作業を行った。Ta-a 火山灰は、新壕がある程度埋まって出来た凹みの底に幅 1m 前後、厚さ 10cm 前後で堆積している様子が以前の調査で確認されており、今回の調査区内でも新壕の凹みに沿って Ta-a 火山灰層が確認された。火山灰の堆積状況を写真撮影した後、火山灰より下層の壕内埋土の掘り下げにかかったところ、火山灰の直下となる壕の中央部付近でカワシンジュガイなどからなる貝や骨の堆積が確認された。この堆積については「壕内埋土火山灰下貝集中」と呼称することとし、旧 S トレンチを境として西側と東側に分けて堆積の全量を土嚢袋に回収した。

「壕内埋土火山灰下貝集中」の調査終了後、壕内埋土をさらに掘り下げた。1997 年度までの調査や旧 S トレンチの壁面の土層堆積の観察によって、新壕と旧壕の平面的な位置はほぼ上下に重なっていることが予想されたため、発掘区の 5 ラインと 8 ラインから西に 0.5m のラインにグリッドの南北方向に沿ったサブトレンチを設定し、新壕底と旧壕底の関係を再確認した。その結果、両者が概ね平面的に重なることがほぼ確実と判明したため、これらのトレンチ壁面の土層堆積を参考にしながら、新壕の壁ないし底まで壕内埋土を掘り下げ、新壕を検出していった。新壕は XI-7 区周辺では攪乱のため壕の肩が壊されていたが、それ以外の部分では壕の壁と底が確認された。なお、発掘区 5 ラインに沿ったサブトレンチの断面を観察したところ、壕の両側、XI-5 区と XIII-5 区付近の表土下 50~80cm のところで、壕の掘りあげ土と見られるロームを多量に含んだ褐色土を厚さ 10~20cm の規模で確認した (Fig. 78 a-b 間の 10 層と 21 層)。この掘りあげ土と見られるローム混じりの土層は、特に XIII-5 区付近においては平面的にも明瞭に確認されており、当初この層はいわゆる地山層と誤認されたほどであった。ただしこれらの掘りあげ土がいつ形成されたのか (旧壕掘削時?・新壕掘削時?等々) については、旧壕掘削時である可能性は高いものの確証は得られなかった。なお、掘りあげ土の調査と関連して、発掘区の全

体で壕に沿う柵列のピットの検出を試みたが、本年度の発掘区内では検出されなかった。

新壕底面の検出終了後は、それより下部の旧壕埋土の掘り下げに着手した。すると7ラインより西側の壕の北側壁面（XII-7区周辺）においてオホーツク貼付文系土器を主体とする土器集中が約1.1m×0.3mの範囲で確認され、さらにその下部及び西側で焼土面が旧壕に切られている様子が確認された（Fig. 75の「土器集中」と「遺構断面（6号竪穴?）」）。また、壕底を挟んで反対側の壕南側壁面においては、やはり7ラインより西側で焼けた粘土の貼床が旧壕に切られている様子が確認された（Fig. 75の「貼床断面」）。これらの貼床と焼土の断面はどちらも、その平面的位置および標高から、6号竪穴の床面が壕によって切られた痕跡と推定された。土器集中もおそらくもともとは6号竪穴内に遺されていたものが、旧壕による破壊によって壕壁面に流れ込んだものと考えられる。この土器集中の土器については壕壁面上に浮いていた分を回収している。土器集中は壕壁のさらに奥の焼土面上にも連続していたが、壕より奥に食い込んでいた分については回収しなかった。

旧壕の埋土を掘り下げていたところ、旧Sトレンチの西側の壕底部付近でやはりカワシンジュガイを主体とする貝や骨の堆積が検出された。この堆積は「旧壕埋土貝集中」と呼称し、やはり全量を回収して分析することとした。

以上の作業終了後は埋め戻しを行い、壕の凹みを残しつつ新壕の位置よりもさらに上層にあたる位置（1997年度調査区の埋め戻しと同レベルの位置）まで埋めて遺構面を保護する措置をとり、調査を終了した。

XVI～XVIII-5区トレンチの調査経過

XVI～XVIII-5区トレンチの調査は、まず調査区内の表土・二次堆積土の掘り下げから着手したが、特にトレンチ南端ではバラスが硬く敷き詰められており発掘は難航した。トレンチ全体を地表下30cmまで掘り下げても二次堆積土が引き続き認められたため、トレンチ北端（XVI-5区）と南端（XVIII-5区）に各々約1m×1mの深掘り区を設定し、それらの部分を先に掘り下げて土層堆積等を確認することとした。

XVI-5区の深掘り区では、地表下約60～70cmのレベルで二次堆積土がなくなり、現代の攪乱を受けていないと見られる暗褐色土層が検出された（Fig. 83の7層）。さらにその暗褐色土層を30cmほど掘り下げると、深掘り区の北西角付近に半径40cmほどの黒色土の落ち込み（Fig. 83の8層部分）が確認されたので、ピットとみられる遺構が存在すると判断し、その遺構の上面を確認して発掘を停止した。

XVIII-5区の深掘り区では、二次堆積土と見られる黒褐色土（Fig. 83の4層）が地表下約1.1mのレベルまで続いており、その下層の黒褐色土（Fig. 83の9層）も現代のゴミは含まれないものの比較的最近の二次堆積土層である可能性が高いと判断された。さらに掘り下げて地表下約2.4mのところまで掘り下げて、本遺跡群の基本層序II層に対応すると見られる暗褐色土（Fig. 83の10層）が確認されたため、その上面を検出して発掘を停止した。

これら二つの深掘り区以外の部分では、地表下約60cmの二次堆積土中で発掘を停止している。この二次堆積土中ではXVII-5区周辺で角礫の集中が認められたが、これは隣接する旧土地所有者の地下室の壁（石垣）に用いられている角礫と形状が酷似しており、おそらくそれらと関連するものと考えら

れた。本トレンチについてはここまでの段階で作業を停止し、埋め戻しを行って調査を終了した。

(熊木俊朗)

3 2009年度調査の経過

2009年度は、2008年度に引き続きチャシの北東側端部に残る壕の未発掘部分を対象として調査を実施した。発掘区は、2008年度の発掘区の北東側に隣接した区域に、予想される壕の延長方向に沿うように設定している (Fig. 72)。

発掘区全域で表土・攪乱土を除去したところ、前年度検出された壕に連続するように現代の廃棄物が高密度で埋没する部分が観察されたので、この部分が壕内埋土に相当すると想定して発掘を進めた。壕内部の発掘は迅速に進行したが、壕の外部では混入する廃棄物が比較的少なく、また、主体部側（壕の北西側）ではかつての発掘調査によると思われる排土、外側（壕の南東側）では旧土地所有者の整地によると思われる盛土が厚く堆積し、自然の堆積層やプライマリーな遺物包含層との識別がやや難しい部分もあったため、発掘に若干の時間を要した。結局この区域では現地表から0.3~0.5m下位から排土・盛土に被われる前の旧表土（腐植土）が確認された (Fig. 78 g-h 間の3層)。旧表土の下位の黒褐色土を掘り進めると主にオホーツク文化の遺物が多く含まれていたことから、黒褐色土の上部で発掘を停止した。発掘区の南西側（前年度発掘区寄り）では黒褐色土上部にローム粒子の混入がやや目立ち、壕構築時の掘りあげ土の可能性があるが、北東側（壕端部寄り）ではそうした状況はほとんど観察されなかった。

壕内部には現代の廃棄物が厚く堆積し、最深部では1mに達した。この廃棄物層の除去後に Ta-a 火山灰層を検出する作業を行なったが、両者の間層は薄く、直に接するかのような部分も見受けられた。Ta-a 火山灰は、これまでの調査で新壕がある程度埋まってできた凹みの底を中心として堆積していることが確認されている。今回の発掘区でも、新壕の凹みの底付近幅1m前後に濃密に堆積する (Fig. 74・PL. 18-2) が、壕斜面の上部ほど希薄になり壕外部の平坦面ではほとんど分布しない状況が観察された。火山灰の堆積が希薄な範囲の一部では貝や骨が露出しており、2008年度調査で確認された「壕内埋土火山灰下貝集中」に相当すると考えられた。

以上の Ta-a 火山灰およびその相当層が検出された状態で発掘を停止し、その後さらに北東端幅1.5mの区域（深掘り区）では Ta-a 火山灰下位の壕内埋土の掘り下げを進めた。前年度までの調査によって新壕と旧壕がごく近接して切りあうことが予想されたため慎重に発掘を行なったところ、火山灰の0.4mほど下で新壕の底部が旧壕の斜面を切る様子が観察されたので、まず新壕の底面を丁寧に検出しそれを上方に追跡するように壕斜面の埋土を剥ぎ取っていった。新壕の形状の検出後、旧壕埋土の掘り下げに着手した。旧壕の底は新壕底の約0.3m下位で検出され、外側（南東側）の斜面は新壕に切られてほとんど残っていないが、主体部側（北西側）の斜面では上部を除いて若干の埋土が残存している状況が把握された。なお、壕に付随する柵列の柱穴は検出されなかった。

最後に、掘りあげ土の埋め戻しによって壕の形状を残しながら遺構面を養生・保護する措置をとり、調査を終了した。

（山田 哲・熊木俊朗）

註

- 1) 2008年度の壕部分の発掘区については、発掘調査の際には「北側発掘区」という名称で台帳等に記録している。
- 2) 2001年刊行の報告書（東大考古学研究室・常呂実習施設編2001）では、旧Sトレンチの南端は1964年の報告書（駒井編1964）とは異なり、本報告の位置まで南方向に下げられて記載されているが、これは1997年度までの調査で確認されたチャシの壕の位置と旧報告書の図とを壕底部の位置ですり合わせた結果導き出されたものであった。今回の調査結果によって、旧Sトレンチの位置はグリッドの東西方向にも修正が必要であることが判明した。なおこの調査結果を受けて、常呂実習施設に保管されている過去の旧Sトレンチ調査時の現場図面を再度確認したところ、調査時点ではこのSトレンチの調査区は「6-X・XI・XII・XIII区」と認識されていたことがわかった（同トレンチの「西壁セクション」図による）。すなわち1960年の発掘調査の時点では、旧Sトレンチは概ね今回確認された位置にあったものと認識されていたようである。おそらく、1960年に発掘作業が終了した後から1964年に報告書が刊行されるまでの期間に、何らかの誤認が生じたと考えられる。

第二節 チャシ壕および関連する調査区の土層堆積

1 基本層序

過去の調査によって確認されたトコロチャシ跡遺跡の基本層序は以下のとおりである（東大考古学研究室・常呂実習施設編 2001）。壕部分に設定した発掘区内の層位区分はこの基本層序に準拠して行った。

I 層：表土層と現代の廃棄物層

Ia 層：現代の廃棄物層

Ib 層：Ia 層と Ta-a 火山灰に挟まれた位置の壕内埋土

樽前 a (Ta-a) 降下火山灰層。1739 年噴出

II 層：アイヌ文化期を主体とした遺物包含層

(IIA 層：チャシ主体部内 [今回の調査区域内には存在しない])

IIb 層：Ta-a 火山灰下層の壕内埋土。新壕埋土と旧壕埋土に細別できる

(III 層：オホーツク文化期を中心とした遺物包含層 [今回の調査区域内には存在しない])

一方、チャシ跡部分を除く遺跡群全体の基本層序は前章までに示したとおり、以下のように確認されている。

I 層：表土もしくは耕作土

Io 層：黒褐色土（オホーツク文化期の包含層）

II 層：暗褐色土（I 層と III 層の漸移層）

III 層：茶褐色粘土（いわゆるローム層）

IV 層：黄褐色粘土（いわゆるローム層）

XVI～XVIII-5 区トレンチの層位区分はこの基本層序に準拠して行った。

(熊木俊朗)

2 チャシ壕内の土層堆積

2008 年度および 2009 年度調査で確認されたチャシ壕内の土層堆積 (PL. 16) は、Fig. 78 の土層図および Table 3・Table 4 の土層注記のとおりである。

(熊木俊朗)

第三節 アイヌ文化期の遺構各説

1 壕内埋土火山灰下 貝集中

遺構

壕内に堆積した Ta-a 火山灰の直下で、カワシンジュガイを主体とする貝類・魚骨・海獣骨等の遺物集中が確認された。2008年度調査区では、旧 S トレンチ部分を除き、壕の窪み内の全面に認められ（Fig. 73・巻頭写真 Front2-1・PL. 17-1）、2009年度調査区でも発掘区南西端（前年度発掘区側）からおおよそ 2.2m の範囲まで、火山灰の希薄な部分で確認されている（Fig. 74）。2009年度発掘区北東端の深掘り区では新壕埋土にわずかに貝殻が含まれるのみであったので、この貝集中は深掘り区までは延びていないとみられる。旧 S トレンチの部分については、報告書（駒井編 1964）には記録されていないが、状況から見ておそらくこの部分にも堆積していたのであろう。

2008年度調査区での所見によれば、検出面での堆積の幅（壕に直交する方向）は約 10～50cm、堆積の厚さは 5～25cm で、旧 S トレンチの西側付近では他よりやや厚く堆積していた（Fig. 76 の c-d ラインエレベーション図）。2009年度調査区については火山灰の上面までの確認に止めたため、この区内での堆積の詳細は不明である。

貝集中の堆積状況を壕の凹みの形状との関係で見ると、2008年度調査区では凹みの中央部よりもやや北側（壕の主体部側）に偏って堆積しており（Fig. 76）、2009年度調査区の検出面でも同様の傾向が確認された（Fig. 74）。この傾向から見ると、貝集中は壕の内側（チャシの主体部側）から壕内へと廃棄され、堆積したものとみられる。この貝集中の形成時期については、新壕の底の直上にあり（Fig. 76）、また Ta-a 火山灰の直下（一部は火山灰と混在している）であることからすると、新壕が機能していた期間もしくは廃絶直後から Ta-a 火山灰が降下する直前までの間に形成されたと考えられる。

（熊木俊朗）

遺物

Fig. 79-1 は石製の白玉。蛇紋岩製とみられ、外径は 3.1mm、穴の直径は 1.0mm で、上下面および側面は平らである。後北 C₂・D 式～北大式期の遺物である可能性が考えられる。

Fig. 79-2（PL. 20-1）は装飾とみられる金属板である。青銅製とみられ、非常に薄い。現存する部分の大きさは 25.5mm×14.5mm で、図で下と右側に相当する部分が欠損しており、本来は中央部に縦長の穴を持つ刀の鏢のような形をしていたと推測できる。図で下部に相当する位置に径 2.3mm の穴が一ヶ所確認できる。形状からすると、厚真町オニキシベ 2 遺跡 1 号土壙墓（ⅢGP-01）などから出土している鏢形銅製品（天方編 2011：図Ⅱ-18-12、乾 2011）や、せたな町南川 2 遺跡第 7 号墓出土の、白銅製の鏢の表板（田部・田村ほか 1985：第 17 図 1）との関連も考えられるが、本製品は前者の鏢形銅製品と比較すると非常に薄く、また後者の表板とも形状がやや異なっており、これらと同一のカテゴリー

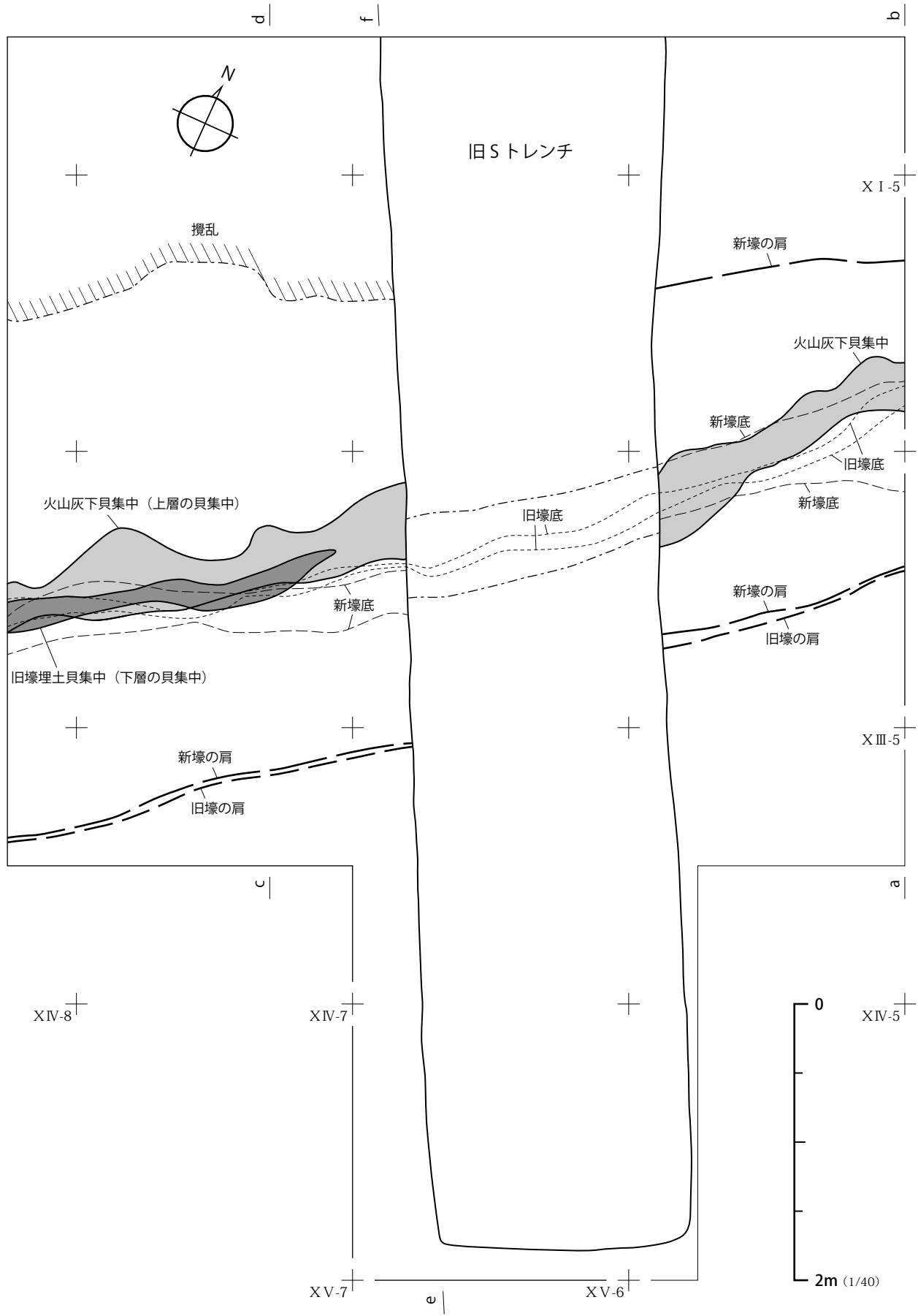


Fig. 73 2008年度北側発掘区 チャシム塚内埋土中の遺構

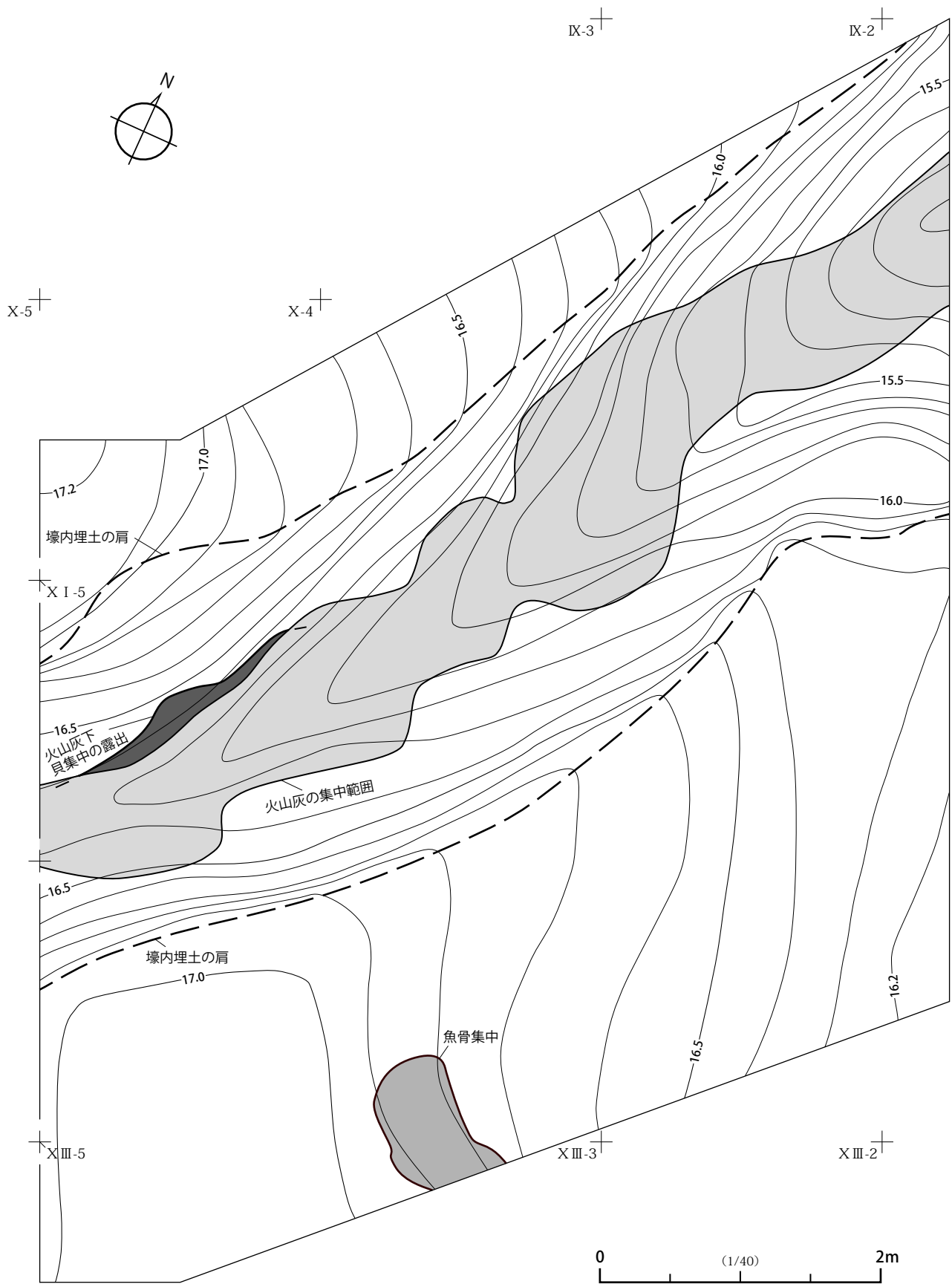


Fig. 74 2009年度発掘区 火山灰検出面でのチャシ壕の形状と壕内埋土中などの遺構

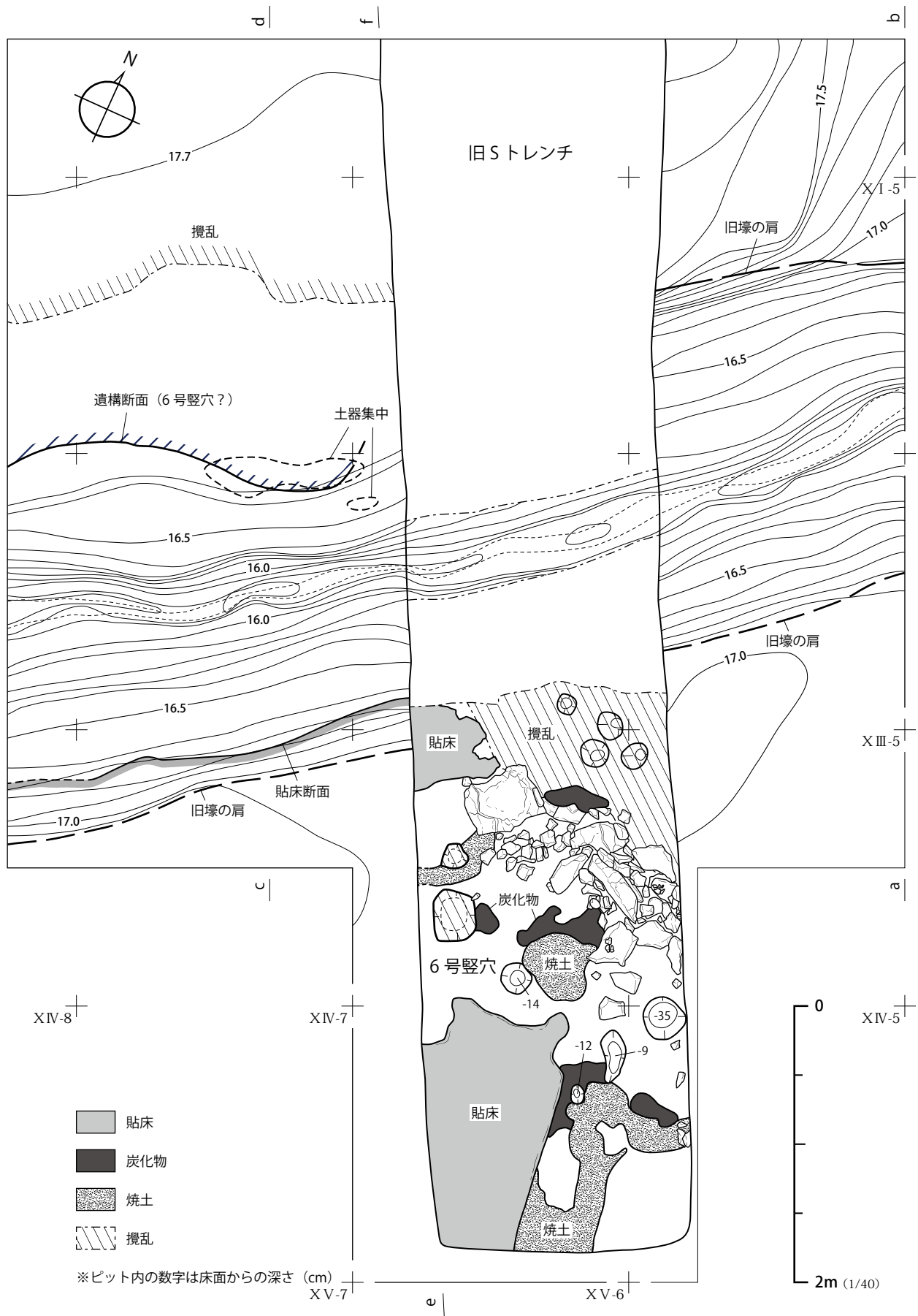


Fig. 75 2008年度北側発掘区 チャシ壕の形状と旧Sトレンチ内6号竪穴

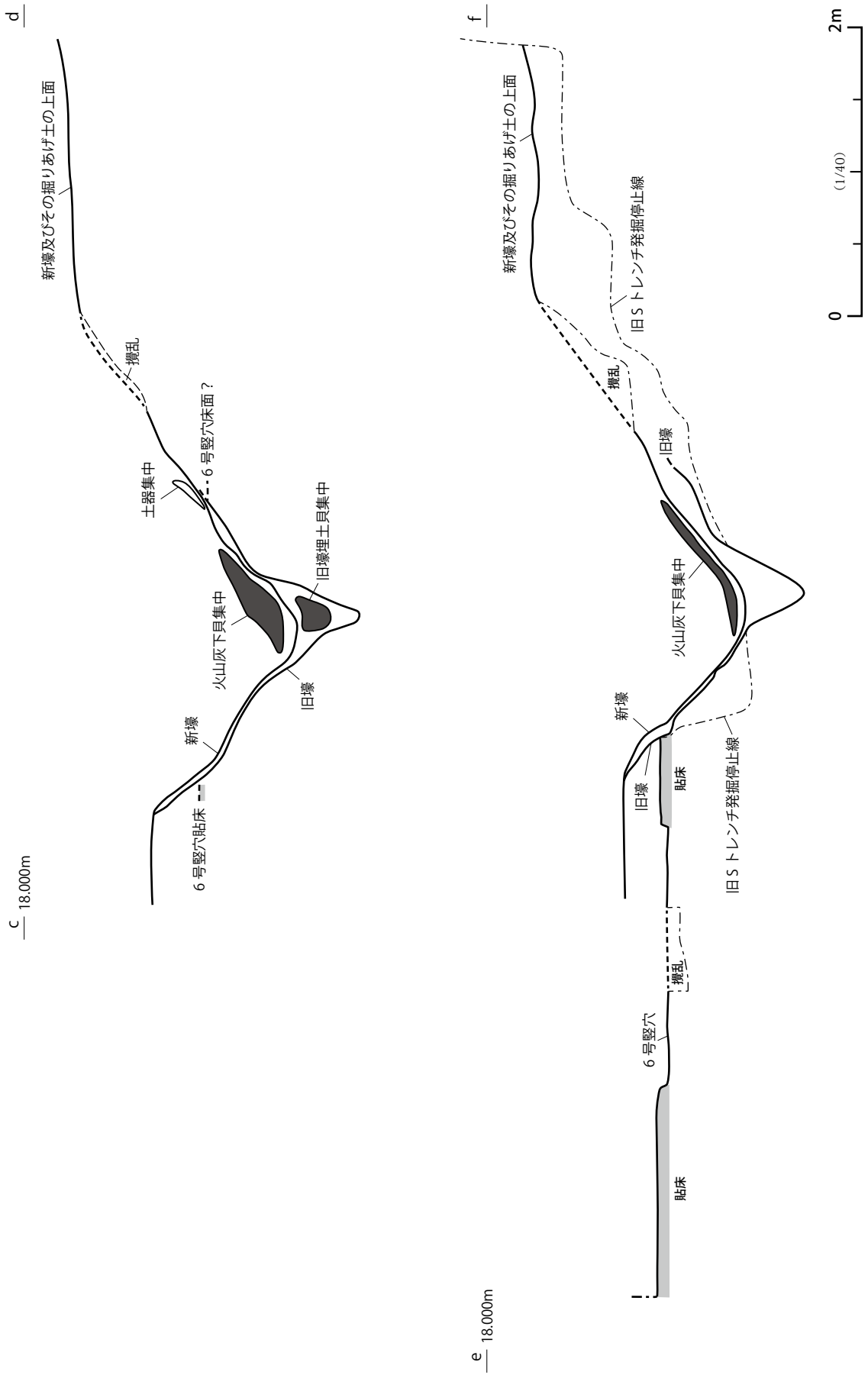


Fig. 76 2008 年度北側発掘区 エレベーション図

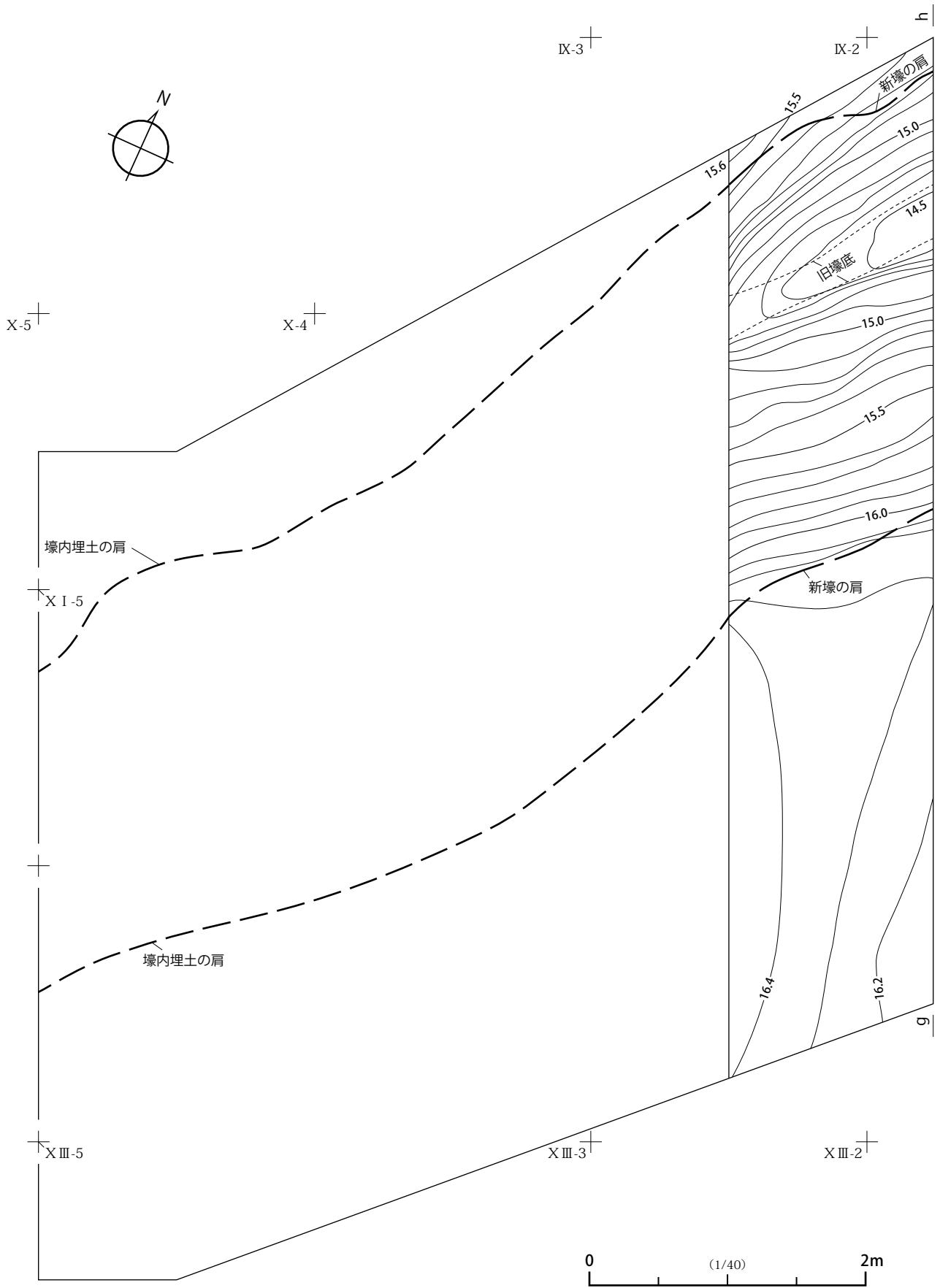


Fig. 77 2009年度発掘区 深掘り区内におけるチャシ塚の形状

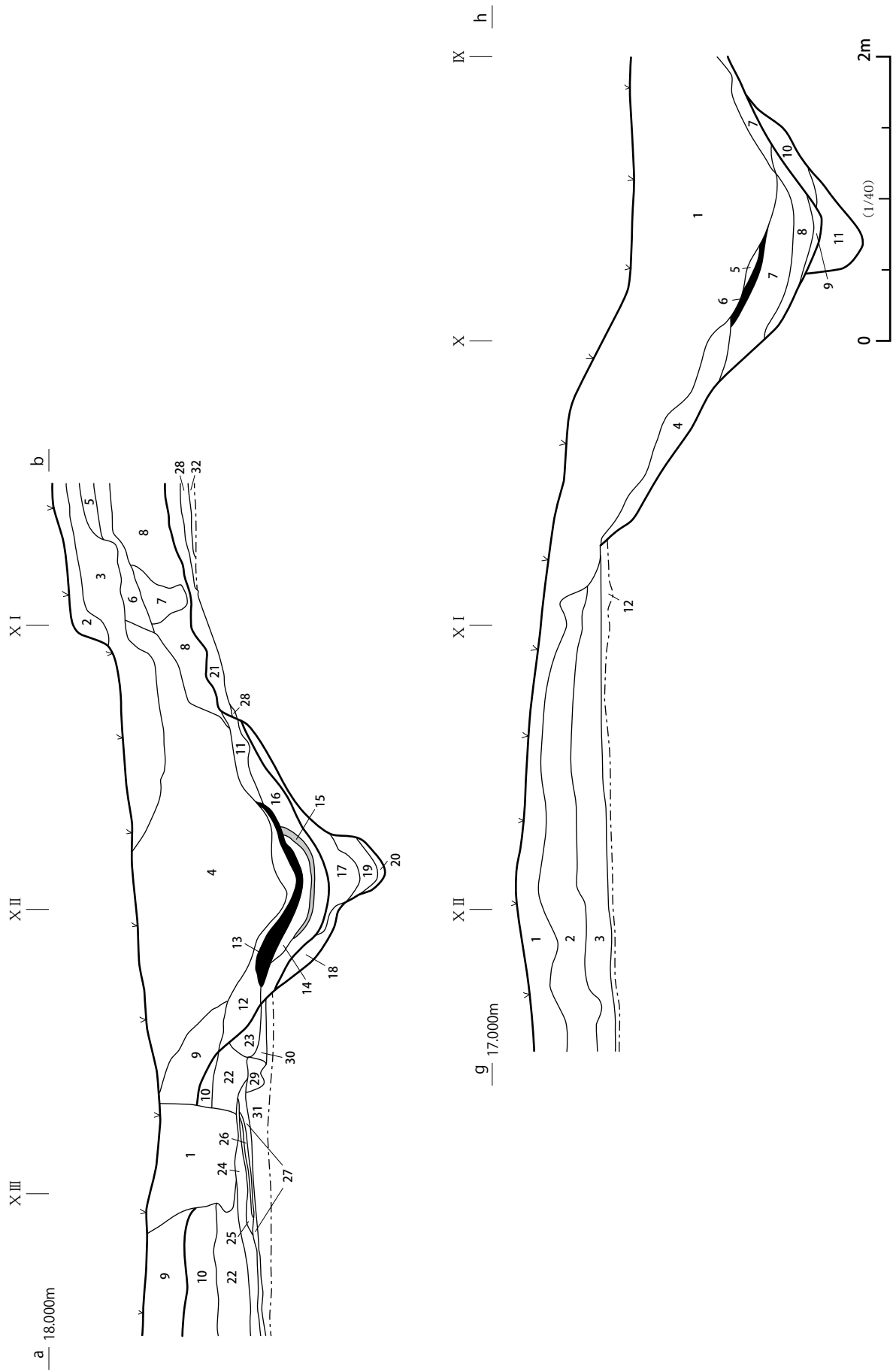


Fig. 78 2008 年度北側発掘区・2009 年度発掘区 土層図

Table 3 2008 年度北側発掘区 土層注記 (Fig. 78 a-b 間)

土層番号	土層区分	色調	内容	2001 年度報告書との対応
1	攪乱土	黒褐色土	しまり中。粘性やや弱。土の特徴は9層とほぼ同じだが、径2cm以下のロームブロックがやや目立つ	Ia2層に類似か
2	表土	黒褐色土	しまり弱。粘性やや弱。草の根が大量に入り込む芝土	基本層序I層
3	表土・攪乱?	暗褐色土	しまり弱。粘性やや弱。径8cm以下のロームブロック・ローム粒を多く含むため、2層よりも明るい色調を呈する。10層と比較すると現代のゴミは少ない	Ia3層
4	壕内埋土火山灰上層	黒褐色土	しまりやや弱。粘性やや弱。礫・木片・鉄片・ガラス片・貝殻など、現代のゴミを大量に含む	Ia4層
5	壕外の掘りあげ土と表土との間層	黒褐色土	しまり弱。粘性やや弱	
6	壕外の掘りあげ土と表土との間層	黒褐色土	しまり中。粘性やや弱。3層・5層と比較して、細粒・均質	
7	壕外の掘りあげ土と表土との間層	黒褐色土	しまり弱。粘性やや弱。植物の根が多量に入り込む	
8	壕外の掘りあげ土と表土との間層	暗褐色土	しまりやや弱。粘性中。森林褐色土に似る	
9	表土・攪乱	黒褐色土	しまりやや強。礫・焼土・現代のゴミを多量に含む	
10	壕の掘りあげ土	暗褐色土	しまり中。粘性やや弱。径3cm以下のロームブロック・ローム粒を多量に含むため、9層よりも明るい色調を呈する。礫・炭化物を含み、現代の攪乱や堆積の可能性もある	Ia3層
11	壕内埋土火山灰上層	暗褐色土	しまり弱。粘性やや弱。現代のゴミを含まない。Ta-a火山灰を少量含む	
12	壕内埋土火山灰上層	暗褐色土	しまり弱。粘性やや弱。現代のゴミを含まない。Ta-a火山灰を少量含む。11層と同じ	Ib2層
13	Ta-a火山灰層	白色火山灰を多量に含む暗褐色土	しまりやや弱。粘性弱。ブロック状のTa-a火山灰を多量に含む	Ta-a層
14	壕内埋土火山灰下層	暗褐色土	しまりやや弱。粘性やや弱	IIB層
15	壕内埋土火山灰下貝集中	黒褐色土	しまりやや弱。粘性やや弱。カワシンジュガイ等の貝殻を多く含む。	IIB層
16	壕内埋土火山灰下層	黒褐色土	しまりやや弱。粘性やや弱。15層と同様の貝類をわずかに含む。径1cm以下の焼土ブロック、炭化物をわずかに含む	IIB層
17	旧壕埋土	黒褐色土	しまり中。粘性中。径1cm以下の焼土ブロック、炭化物を少量含む	IIB6層
18	旧壕埋土	暗褐色土	しまり弱。粘性中。径5cm以下の角礫・円礫を少量含む。焼土粒をわずかに含む	IIB層
19	旧壕埋土	黒褐色土	しまりやや強。粘性中。径1cm以下の焼土ブロック、炭化物を少量含む	IIB6層
20	旧壕埋土	黒褐色土	しまりやや弱。粘性中。ローム粒を含み、19層よりも明るい色調を呈する	IIB9層
21	壕の掘りあげ土	褐色土	しまりやや強。粘性中。比較的均質なロームで、壕の掘りあげ土と考えられる	
22	壕の掘りあげ土?	暗褐色土	しまり中。粘性中。径10cm以下のロームブロックを多量に含む、壕の掘りあげ土の可能性が高い	
23	壕の掘りあげ土より下層	暗褐色土	しまりやや弱。粘性やや弱。ローム粒を含み、やや明るい色調を呈する	
24	壕の掘りあげ土	褐色土	しまり中。粘性中。黒色土がやや混じるローム	
25	壕の掘りあげ土と基本層序II層との間層	暗褐色土	しまりやや弱。粘性中。径2cm以下のロームブロック・ローム粒を含む	
26	壕の掘りあげ土と基本層序II層との間層	赤褐色土(焼土)	しまりやや弱。粘性やや弱	
27	壕の掘りあげ土と基本層序II層との間層	黒色土(炭化物層)	しまり弱。粘性やや弱。炭化物を多量に含む。26層(焼土)の直下にあたる部分では、厚さ1cm以下の炭化物のラインが明瞭に形成されている。	
28	壕の掘りあげ土と基本層序II層との間層	黒色土(炭化物層)	しまりやや弱。粘性やや弱。炭化物を多量に含む。27層に対応か	
29	壕の掘りあげ土より下層	黒褐色土	しまりやや弱。粘性やや弱	
30	壕の掘りあげ土より下層	暗褐色土	しまりやや弱。粘性やや弱。	
31	基本層序II層	暗褐色土	しまり中。粘性中。トコロチャシ跡遺跡群の基本層序II層に相当すると考えられる。森林褐色土に似る。アイヌ期以前の遺物を少量含む。	9ライン6層
32	基本層序II層	暗褐色土	しまり中。粘性中。トコロチャシ跡遺跡群の基本層序II層に相当すると考えられる。森林褐色土に似る。31層と同じ	9ライン6層

Table 4 2009年度発掘区 土層注記（Fig. 78 g-h間）

土層番号	土層区分	色調	内容	2001年度報告書との対応
1	表土・壕内埋土	黒褐色土	しまり弱。粘性やや弱。礫、木片、鉄片、ガラス片、貝殻などの現代の廃棄物を多量に含む	基本層序 I 層 および Ia 層
2	壕外堆積土	暗褐色土	しまり中。粘性中。礫、炭化物が少量混じる。現代の盛土と考えられる	Ia 層
3	壕外堆積土	黒褐色土	しまりやや弱。粘性やや弱。旧表土と考えられる	
4	新壕埋土	黒褐色土	しまりやや弱。粘性やや弱。現代の廃棄物を含まない。火山灰を少量含む	
5	新壕埋土	黒褐色土	しまり弱。粘性やや弱。4層とほぼ同様	
6	Ta-a 火山灰包含層	黒褐色土	しまりやや弱。粘性弱。主に Ta-a と考えられる火山灰をブロック状に多量に含む	Ta-a 層
7	新壕埋土	暗褐色土	しまりやや弱。粘性やや弱。カワシンジュガイ等の貝殻をわずかに含む	IIB 層
8	新壕埋土	暗褐色土	しまりやや弱。粘性やや弱。基質は 7 層と同様だがローム粒を含む	IIB 層
9	新壕埋土	暗褐色土	しまり中。粘性中。ローム粒が比較的少ない	IIB 層
10	旧壕埋土	暗褐色土	しまり中。粘性中。ローム粒を多く含む	IIB 層
11	旧壕埋土	暗褐色土	しまり中。粘性やや弱。ローム粒および砂粒を多く含む。上部にカワシンジュガイなどの貝殻をごくわずかに含む	IIB 層
12	壕外堆積土	黒褐色土	しまり中。粘性中。土器、石器、骨、礫等を含み、特にオホーツク文化の遺物が多い	基本層序 Io 層

に属する製品とみるには疑問もある。ここでは、アイヌの行器（シントコ）に付けられた金具の可能性を考えておきたい¹⁾。

Fig. 79-3・4 は火山灰下貝集中出土の鉄器。3（PL. 20-3）は完形の刀子で、木製の柄の一部が残存している。全長が 14.2cm で刃部の長さが 9.7cm である。鋒がやや反り、棟区を持たず、刃区は撫角である。4（PL. 20-2）は小札を 90 度に折り曲げた再加工品である。両端を欠くものの、2×5 列の孔が確認できる。鉄鍋の補強あるいは補修などに使われた可能性が考えられる。

Fig. 79-5～9 は火山灰下貝集中出土の骨角器等である。5（PL. 20-4）はヤス状刺突具ないし中柄の未成品。粗く面取りした段階である。6 は刺突痕のあるホタテ貝殻である。7 は小型で細身の刺突具。8 は刺突具先端の破片である。9 は鯨骨製掘具の破片だと考えられる。

火山灰下貝集中に含まれていた動物遺体の内容については第六章第三節を参照されたい。

（笹田朋孝・高橋 健）

小括

本遺構は、チャシ壕内に人為的に廃棄されたとみられる貝類遺体や魚骨を主体とする遺物集中であり、形成時期はチャシ新壕の掘削後～Ta-a 火山灰降下（1739 年）直前である。1997 年度までの調査では確認されていなかったことからすると、今回確認された地点にのみ形成されたものとみられる²⁾。チャシと同時期もしくは廃絶直後に形成されたものであり、チャシ主体部の側から廃棄されているとみられることから、チャシの機能と関連づけて考えるべき遺構といえよう。

（熊木俊朗）

2 旧壕埋土 貝集中

遺構

新壕の底より下部の、旧壕の埋土中でカワシンジュガイを主体とする貝類等の遺物集中が検出された（Fig. 73・PL. 17-2）。2008 年度調査区の S トレンチより西側のみで検出されており³⁾、同調査区の東側

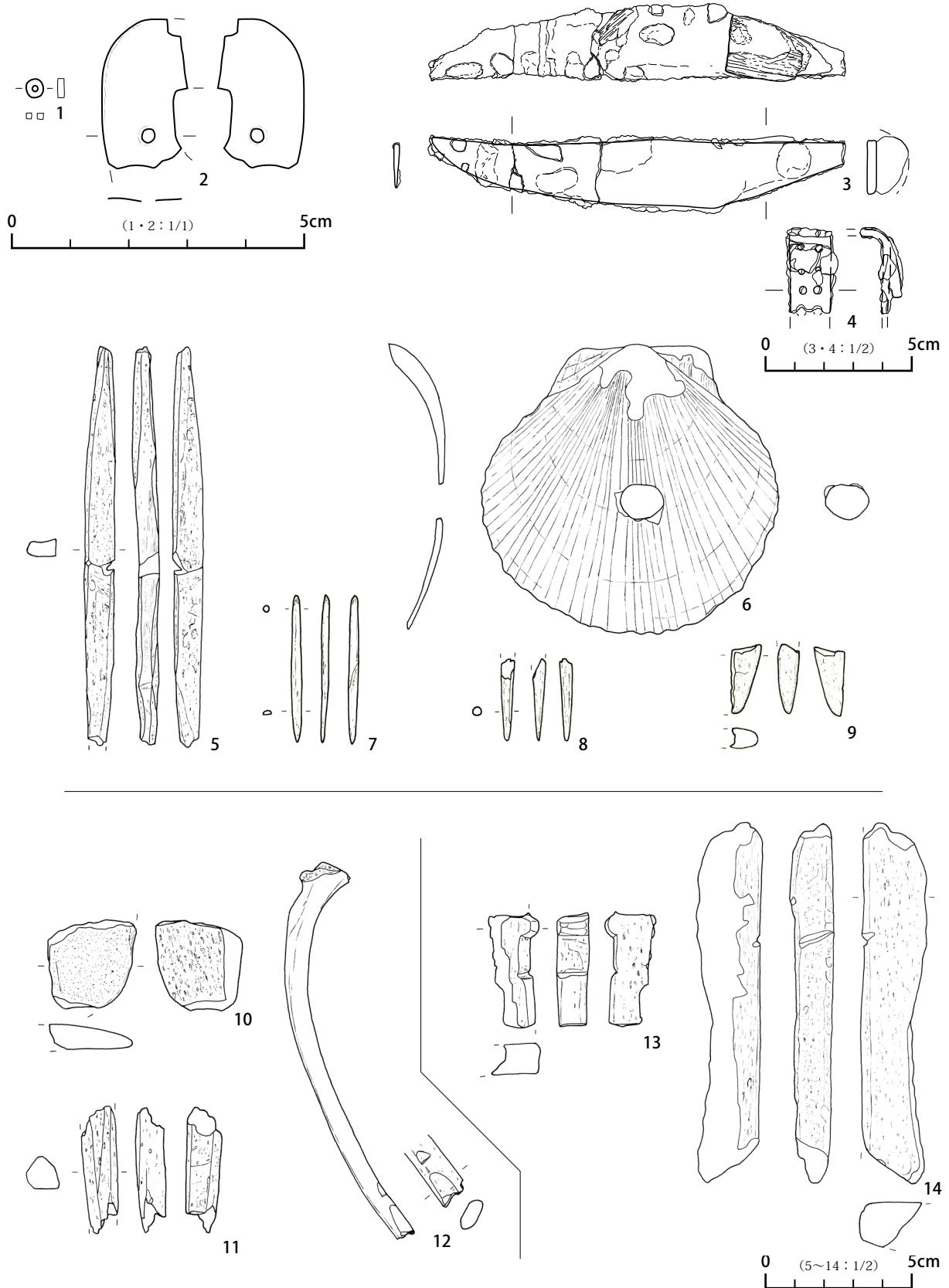


Fig. 79 壕内埋土 (Ta-a 火山灰より下層) 出土の石器 (1)・金属器 (2~4)・骨角器等 (5~14)
 (1~9: 火山灰下貝集中、10~12: 火山灰下の新壕埋土、13・14: 旧壕埋土)

および2009年度調査区では確認できなかった。検出面での規模は幅（壕に直交する方向）が約20cmで、厚さも約20cmであり（Fig. 76のc-d間）、新壕埋土内の貝集中よりも遺物量は少なかった。旧壕の凹みの形状との関係で見ると、底の直上のほぼ中央部からやや北側に偏って分布する傾向が認められた。やはり壕の内側から壕内へと廃棄されたものとみられる。形成された時期は、層位からみて旧壕が機能していた期間から新壕が掘り直されるまでの間と考えられる。

遺物

旧壕埋土貝集中では、動物遺体以外にアイヌ期の遺物は検出されていない。旧壕埋土貝集中に含まれていた動物遺体については第六章第三節を参照されたい。

小括

本遺構もチャシ壕内に人為的に廃棄されたとみられる貝類を主体とする遺物集中であり、形成時期はチャシ旧壕の掘削後～新壕の掘削前の間となる。カワシンジュガイを主体とする点や、壕の主体部側から廃棄されている点などは上層の火山灰下貝集中と共通しており、同じ性格の遺構とみられる。上層の貝集中よりも規模が小さく分布範囲も限られている点については、新壕の掘削による破壊を疑うこともできなくはないが、旧壕埋土貝集中が確認できなかった地点でも旧壕の埋土は十分に遺存しており、新壕による破壊によって全てが消失したとは考えにくい。すなわち、旧壕埋土貝集中は元々規模が小さく、分布範囲も限られていたものであったと考えられる。（熊木俊朗）

3 チャシ新壕

遺構

発掘前は現代の土地改変の影響で地表から壕の方向を知ることができなかったが、調査の結果、2008年度調査区では北東方向にやや幅を狭めつつ直線的な形状で延び（Fig. 75）、2009年度調査区では北に向かって緩やかに湾曲していくことが明らかとなった（Fig. 74・Fig. 77）。2009年度発掘区域外の北東側2m程度先で沢に沿うような細長い平坦面があるため、当初はこの平坦面はチャシと関連する構築物なのか、壕とどのような関係にあるのか、さらには壕の末端はどのようになっているのかが注意されていた。しかし、発掘調査と並行して行なった旧土地所有者への細かな聞き取りで、この平坦面は旧土地所有者が常呂川本流沿いの低地と段丘上の居住地を結ぶためにかなり以前に開削した道路の跡であることが判明した。したがって、おそらく壕の末端は今回発掘区の壕の延長線上で北方向に緩やかに湾曲しながら沢に繋がっている可能性が高いが、旧土地所有者が沢沿いに開削した道路跡に切られてしまっていると思われる。

2008年度調査区での新壕の形状は以下のとおりである（Fig. 75・Fig. 76）。壕の肩部分がXI-7区周辺では攪乱を受けて破壊されていたためその部分の正確な形状は不明であるが、壕の幅は2008年度発掘区西端部分で約3.8m、2008年度発掘区東端で約2.3mで、平面的には前述のとおり東側に向かって幅を狭めつつ直線的に延びている。壕の深さは5ライン上で旧地表面（掘りあげ土上面）からの深さが約0.8mで、断面形は底部がやや丸みを帯びたV字形、斜面の傾斜は30°～40°である。

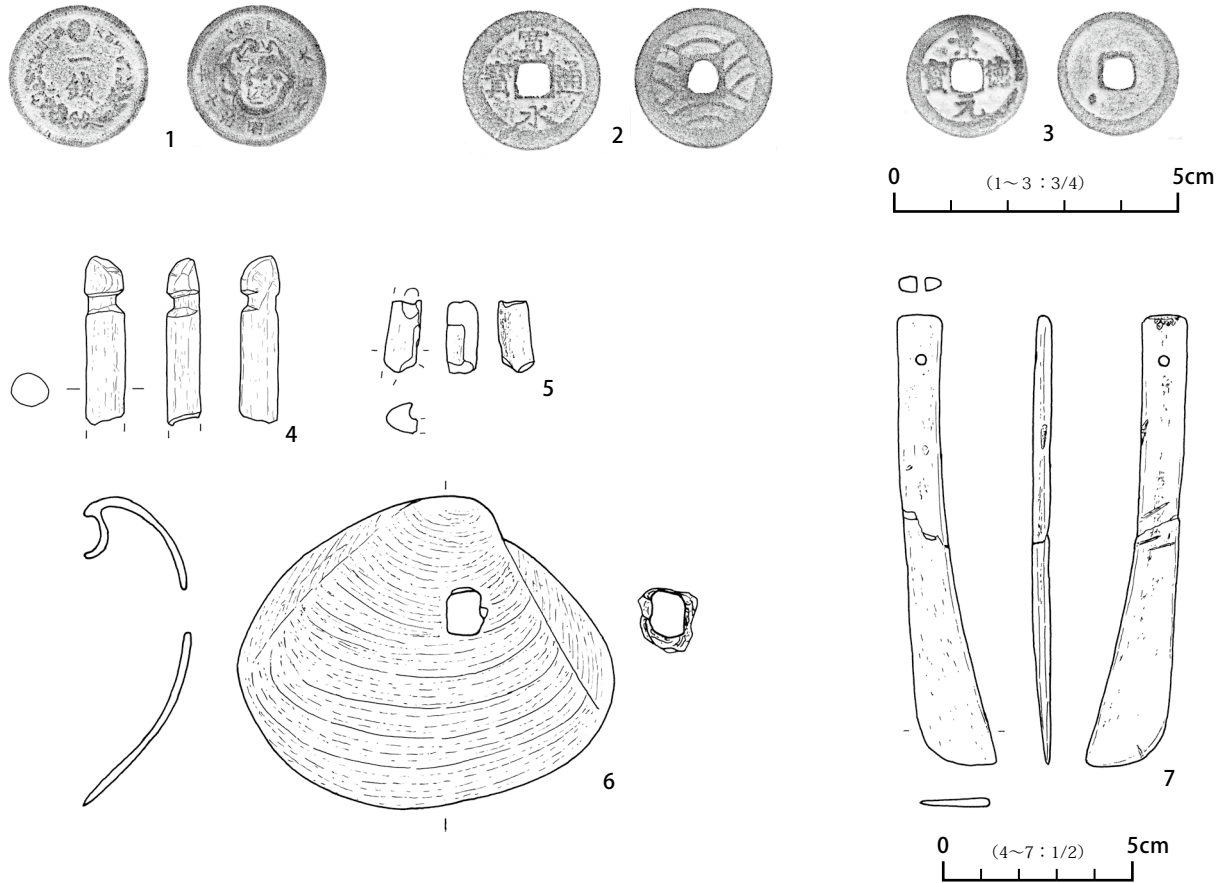


Fig. 80 壕内埋土 (Ta-a 火山灰より上層) 等出土の金属製品 (1~3)・骨角器等 (4~7)
 (1~3・5~7: 壕内埋土 (火山灰より上層)、4: S トレンチ (再発掘) の埋土)

続く 2009 年度調査区での新壕の形状は以下のようなになる (Fig. 74・Fig. 77)。幅は 2009 年度発掘区南西端で約 2.5m、北東端で約 2.9m である。壕構築時の地表からの深さは深掘り区で約 1.6m あるので、2008 年度発掘区 (5 ライン: 0.8m) よりも深い。すなわち、5 ライン付近で壕の幅は一旦狭まるが、北側の沢に面した末端に向かって再び広がる、かつ深くなる様子が窺われる。2009 年度調査区での新壕の断面形は緩やかな V 字形で、斜面の傾斜は 35° 程度である。(熊木俊朗)

遺物

新壕の埋土からは現代から縄文文化期までの様々な遺物が出土している。ここでは骨角器等と金属製品の主なものを記載しておく。

Ta-a 火山灰より下層の新壕の埋土からは Fig. 79-10~12 の骨角器が出土している。前述の壕内埋土火山灰下貝集中の遺物と近い時期に廃棄されたものとみることができる。

Fig. 79-10 は板状製品破片。11 は周囲が面取りされた棒状製品で、何らかの未成品の可能性がある。12 は海獣肋骨の端部を斜めに削いで面を作っている。

表土および Ta-a 火山灰より上層の壕内埋土からは Fig. 80-1~3 の金属製品、および 5~7 の骨角器等が出土している。Fig. 80-4 は旧 S トレンチの埋土出土の骨角器である。

Fig. 80-1 は明治十年鑄造の一銭硬貨である。外径 2.8cm、重量 6.95g。2 (PL. 20-5) は寛永通寶で

ある。背面に青海波が鋳出される波銭で、明和5年（1768年）初鋳の真鍮四文銭である。外径2.7cm、内孔0.65cm×0.6cm、重量5.05g。3（PL. 20-6）は景德元寶で、景德元年（1004年）初鋳の北宋銭である。外径2.4cm、内孔0.6cm×0.6cm、重量3.36g。

Fig. 80-4はオホーツク文化期の釣針軸の頭部である。5はアイヌ文化期の銚頭の破片である。鹿角製で、索孔とソケットの一部を残している。モヨロ貝塚の報告でIV類としたタイプに相当する（米村編2009）。索孔が中心軸からずれていることから、斜位2索孔をもつ銚頭だったと考えられる。6は刺突痕のあるウバガイ貝殻である。おそらく壕に伴う時期のものであろう。刺突痕は9mm×12mm程度の長方形を呈しており、ヤスの先端の形状を反映したものだと考えられる。7（PL. 20-7）はヘラ状製品である。先端は薄く幅広で、丁寧に磨いて仕上げられている。基部には直径3mmの孔が設けられている。（高橋 健・笹田朋孝）

4 チャシ旧壕

遺構

2008年度調査区での旧壕の形状は以下のとおりである（Fig. 75・Fig. 76）。新壕と同様、XI-7区周辺の攪乱のためその周辺の正確な形状は不明であるが、壕の幅（いわゆる肩の部分）は新壕とほぼ重なっていると判断された。旧壕の深さは5ライン上で旧地表面（掘りあげ土上面）からの深さが約1.2mで、断面形は傾斜が30°～40°のV字形で、最低部が樋状に深く落ち込んでいる。新壕との高低差は、旧壕が樋状に落ち込む最低部では約40cmあるが、それ以外の部分ではほぼ重なっており差は概ね10cm以下であった。

2009年度の深掘り区（Fig. 77）での所見は、壕構築時の地表からの深さが約1.9mで、断面形は2008年度調査区と同様に底部が樋状に落ち込む形態のようであったが、外側（南東側）の斜面は新壕に切られてほとんど残っていなかった。斜面の傾斜は、主体部側（北西側）で35°程度、外側（南東側）の残存部分（樋状底部？）で70°前後、また、新壕との高低差は、最低部では約0.3m、主体部側（北西側）斜面で0.1m程度である。2008年度発掘区（5ライン）の壕構築時の地表からの深さは約1.2mなので、新壕と同じく沢側の末端に向かって深くなるようである。

新壕と旧壕の位置関係について述べておく。これまでの調査で、旧壕のわずかに外側に新壕が掘り直されている状況が明らかになっていたが、2008年度の調査区に隣接する1997年度調査区の東側の部分では、旧壕の位置に新壕がより接近している様子が確認されていた。2008年度および2009年度の調査区では、新壕の中心線（底）が全体として旧壕よりもわずかに外側に位置する傾向が認められ（Fig. 73の壕底ライン参照）、また壕の壁も、南壁（外側の壁）では旧壕の壁と新壕のそれとがほぼ一致する一方で、北壁では新壕の壁の方がやや内側に位置する（Fig. 76のe-f間エレベーション図およびFig. 78のg-h間土層図参照）など、新壕は旧壕のラインよりもわずかに外側を意識して掘削されている状況が認められた。ただしこの二本の壕のずれはごくわずかであり、今回の調査区においては、新旧の壕は平面的にはほぼ重なっていると評価できるであろう。（熊木俊朗）

遺物

旧壕埋土、すなわち新壕の底面と旧壕の底面の間に堆積していた土層からは土器、石器、骨角器、動物遺体等の遺物が出土している。ここでは骨角器の主なものを記載しておく (Fig. 79-13・14)。

13は鯨骨製掘具の破片。強く熱を受けている。側縁にコの字状の抉りをいれて、突起を作り出している。オホーツク文化の掘具であり、チャシの壕によって破壊されたオホーツク文化の竪穴住居に属していたものだと考えられる。14は鯨骨製の大形板状製品の破片である。 (高橋 健)

5 チャシ壕の掘りあげ土

チャシの掘りあげ土に関する所見について、各年度の調査区別に述べる。

2008年度調査区においては、壕の掘りあげ土とみられるロームを主体とする褐色土が、壕の両脇で確認されている。ただし確認されたのは旧Sトレンチより東側の部分のみで、同トレンチの西側部分では攪乱などもあって確認されていない。5ラインの土層図 (Fig. 78のa-b間) でみると21と24の土層がそれに対応し、10層および22層も掘りあげ土の可能性が高い。掘りあげ土の高さは、土層図の31層・32層を旧表土と考えた場合、そこから10~50cmほど盛られたこととなる。土塁とみるには低く、そのような構造・機能は意識されていなかったとみてよいだろう。過去の調査でも、同様の掘りあげ土は部分的に検出されている (駒井編 1964、東大考古学研究室・常呂実習施設編 2001:156)。

これらの掘りあげ土のうち、特に壕の外側 (南側) で確認された土層図の21層は、発掘当初はいわゆる地山と誤認されたくらい均質なロームで構成されていた。この外側の掘りあげ土については、壕を掘る際に排出された土の中からロームを意図的に選択して貼っていた可能性が考えられる。また、掘りあげ土が均質なロームで構成されていた点からすると、この掘りあげ土は新壕の再掘削時ではなく、最初に旧壕を掘削したときの排土を用いた可能性が高い (駒井編 1964:98)。そのように考えるならば、この掘りあげ土は旧壕の構築時に形成されたものとみることができよう。

2009年度調査区では、壕の外部の旧表土 (Fig. 78のg-h間土層図の3層。腐植土で、上位に現代の排土・盛土が堆積する) の下位は、基本的に黒褐色土である。発掘区の南西側 (2008年度発掘区寄りの部分) ではその上部にローム粒子の混入がやや目立ち、壕構築時の掘りあげ土の可能性が考えられたものの、他の区域ではそうした状況はほとんど観察されず、オホーツク文化の遺物包含層となっていた。

なお、2008年度調査区・2009年度調査区とも、壕外において壕に沿った柵列に相当する柱穴は確認されなかった。 (熊木俊朗)

註

- 1) アイヌの行器 (シントコ) とその金具に関しては豊原熙司氏よりご教示をいただいた。
- 2) 火山灰下貝集中については、1997年度調査区では確認できなかったが、同調査区と2008年度調査区の境界に相当する位置 (8ラインから西に0.5mのライン) の土層図 (Fig. 78 a-b間) では確認されている。こ

第四章 トコロチャシ跡遺跡チャシ壕関連の調査（2008年度－2009年度）

のことからすると、1997年度調査の際には貝集中の存在を見落としていた可能性がある。ただしこの土層図の位置における火山灰下貝集中の堆積は、その東側での堆積よりもかなり薄く、仮にこの貝集中が1997年度の調査区まで広がっていたとしても、その範囲はごく限られたものであった可能性が高い。

一方、旧壕埋土貝集中については、平面的には土層図（8ラインから西に0.5mのライン）の位置まで検出されているが、土層図（Fig. 78 a-b間）では確認されていない。土層図作成の際に見落としていた可能性も考えられるが、ここでは旧壕埋土貝集中の平面分布はこの土層図のライン際までであったと考えておくことにする。

3) 前註2) 参照。

第四節 オホーツク文化期の遺構各説

1 旧Sトレンチ内6号竪穴（再発掘）

調査の経緯

オホーツク6号竪穴は、過去の調査で旧Sトレンチ内の、壕の南側で検出されており、壕に切られていることが判明している。今回の再発掘では、過去の調査で検出された貼床や柱穴等がほぼそのままの状態に残されていることを確認した（Fig. 75・PL. 19-1）。詳細は以下のとおりである。

竪穴床面には2ヶ所で粘土の貼床が検出された。北側の貼床はその北側を壕によって切断されている。どちらの貼床も熱を受けて硬化し、赤色を呈していた。おそらく、住居の廃絶時に火を受けたものとみられる。貼床の周辺、床面とみられるレベルでは焼土や炭化物の集中が認められたが、これらの焼土や炭化物も火を受けた際に形成されたものであろう。

ピットが竪穴床面とみられる面で4箇所検出されている¹⁾。柱穴とみられるが不整形のものもあり、住居に伴う柱穴か否かは確言できない。

XIII（13）-6区付近では比較的大型の角礫の集中が東-西方向に列をなすように検出されている。角礫の大半は火を受けて赤色を帯びていた。角礫の南側部分の土層堆積を精査したところ、角礫の直下では住居の床面上に形成されている焼土が角礫に接している一方で、角礫の外側（北側）（Fig. 75の斜線（攪乱）部分）では焼土が全く認められなかった。ちなみにこの角礫の外側では竪穴床面と認識できるような面は確認されず、またXIII-6区にXIIIから1m南のラインに沿って設定したサブトレンチで確認したところ、角礫列の東隣は現代の二次堆積土層で埋められていることが判明した。これらのことからすると、角礫列は少なくとも住居の廃絶時には住居の床面に接して存在していたと判断される一方、角礫の外側（北側）部分では住居の床面は破壊されており、現代の二次堆積土で埋められていると推定された。その点からすると、この二次堆積土の部分で確認された4箇所のピットも、本来はこの竪穴に伴っていたものであったとしても、現代の攪乱による影響を受けている可能性が高い²⁾。

なお6号竪穴については、以上の旧Sトレンチ内のほか、旧Sトレンチ西側の、壕の南側の壁で検出された貼床の断面（Fig. 75の「貼床断面」と、壕の北側の壁で検出された焼土の断面（Fig. 75の「遺構断面（6号竪穴？）」も、同じ6号竪穴に由来するものと判断された。これらについてもここに述べておく。

旧Sトレンチの西側の、壕の南側の壁で確認された貼床断面は、旧Sトレンチで確認された貼床面とまさに連続することが確認されており、6号竪穴の貼床であることは疑いない。この貼床の延長は、8ライン付近までおよそ2.3mの長さで確認された。それより西側では痕跡は不明瞭となるが、竪穴床面とみられる面の痕跡が不明瞭ながら残っており（Fig. 75「貼床断面」の点線部分）、これはおそらく1997年度調査区で同様の位置（壕の南側壁面）に確認された遺構断面の痕跡と連続するとみられる。この1997年度調査区で検出された竪穴床面の痕跡の延長は約4.5mであり、それと今回の貼床断面、さ

らに旧Sトレンチ内検出の貼床とを合計すると約8.0mとなる。旧Sトレンチ検出の貼床よりも竪穴の壁はさらに東側に位置しているから、実際の竪穴の長さは8mより大きいことは確実であり、少なくとも9m以上になるとみられる。一方、旧Sトレンチより西側の壕の北側の壁で検出された焼土の断面については、6号竪穴の床面と断言できる確実な証拠はない。しかし壕を挟んだ南壁の6号竪穴貼床面と標高が概ね一致する点からすると、同じ6号竪穴の床面である可能性が高いと判断される。焼土の断面にオホーツク文化貼付文期の土器集中が伴う点もこの想定と矛盾しないし、北側に存在する1号竪穴との位置関係からみても、この焼土断面は1号竪穴側ではなく6号竪穴側から広がる遺構の延長とみた方が矛盾がない。また、この焼土断面も先の貼床の断面と同様に本年度発掘区の西端まで延長が確認されており、位置関係からみてやはり1997年度調査区と同様の位置（壕の北側壁面）で確認された遺構断面の痕跡とおそらくは連続するとみられる。そのように考えた場合、本年度検出の焼土断面と1997年度検出分とを合計した遺構断面の総延長は約6.3mとなる。

遺構

以上に述べた、6号竪穴の一部とみられる各遺構の状況から、6号竪穴全体の方向や規模について推察してみよう。まず6号竪穴の方向であるが、旧Sトレンチ内で検出された貼床の形状からみて、東西方向に長軸があるとみられる。壕の南側の壁の断面の痕跡から推定すると、長軸の長さは最低でも9m以上となる。長軸に直交する竪穴の幅については、壕の北側の壁の断面の位置と、旧Sトレンチ内の貼床の位置から推測すると、おそらく8m程度になるものと考えられる。また旧Sトレンチ内で検出された貼床は、その形状から判断すると「コ」の字状の貼床の開口部側の縁に相当するとみられる。このように考えると、6号竪穴は1号竪穴と向きを同じくしつつ、ほぼ並列する位置に存在したものと推定できよう。

小括

旧トレンチ内で確認されていた6号竪穴について再調査をおこなった結果、この竪穴がいわゆる焼失住居であることを再確認するとともに、竪穴の規模や向きについてある程度の見通しを得ることができた。6号竪穴に伴う遺物については、旧Sトレンチ内の再調査では確認できなかったが、後述するXII(12)－7区の土器集中で出土したオホーツク貼付文系土器がこの竪穴に伴うものと推定された。すなわち、6号竪穴はオホーツク文化貼付文期の住居跡とみることができよう。 (熊木俊朗)

2 XII(12)－7区 壕の北側壁面 土器集中

調査の経緯

7ラインより西側の壕の北側壁面（XII－7区周辺）において確認された土器集中である。確認面での大きさは約1.1m×0.3mで、壕内に流れ込むような状況で検出された（Fig. 75（PL. 19－2）の「土器集中」。エレベーション図はFig. 76のc－d間を参照）。この土器集中の下部及び西側では、前述のようにオホーツク6号竪穴の床面とみられる焼土面が旧壕に切られている状況で確認されており、その状況から考え

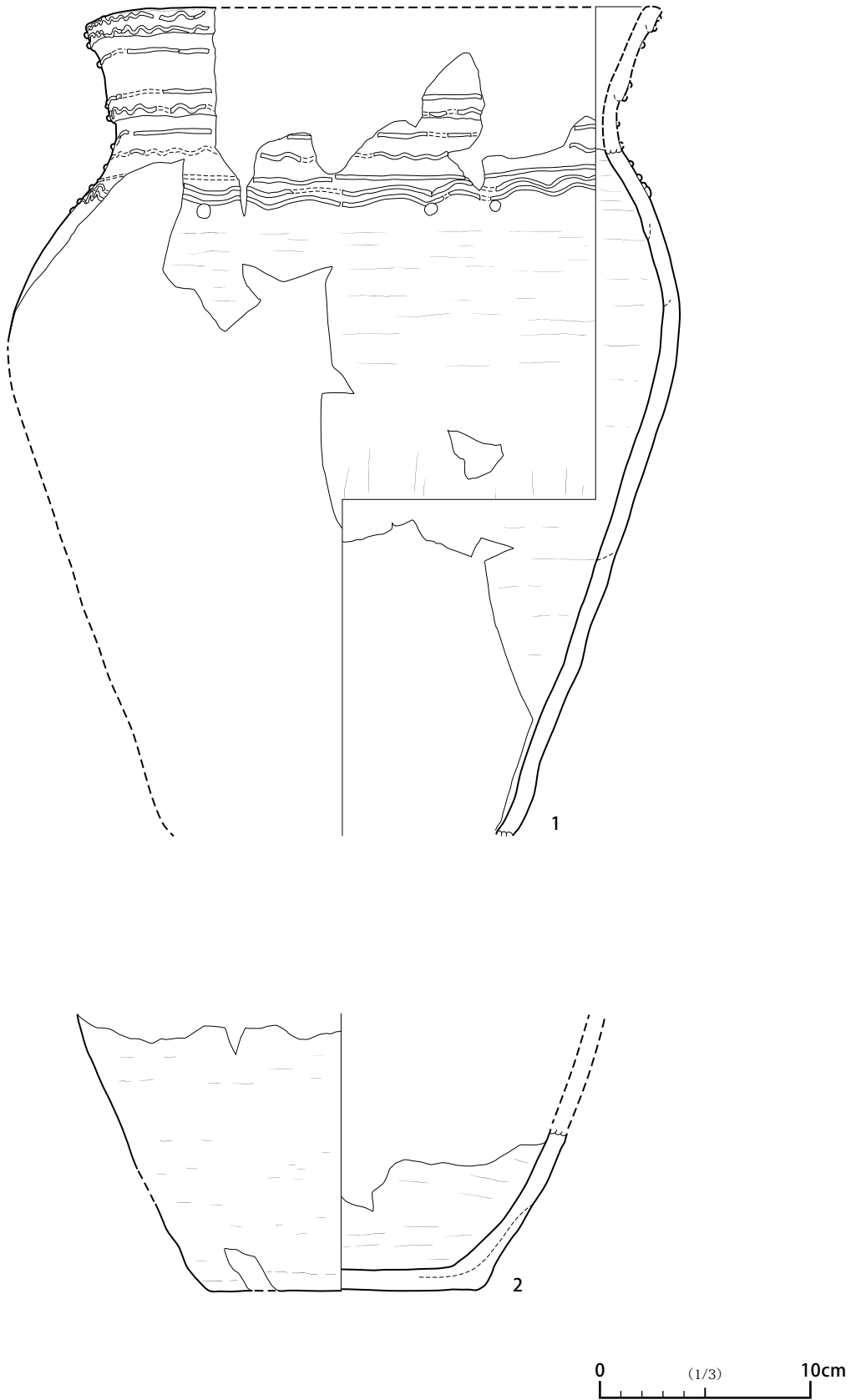


Fig. 81 XII (12) -7区 チャシ壕北側壁面 土器集中出土の土器 1

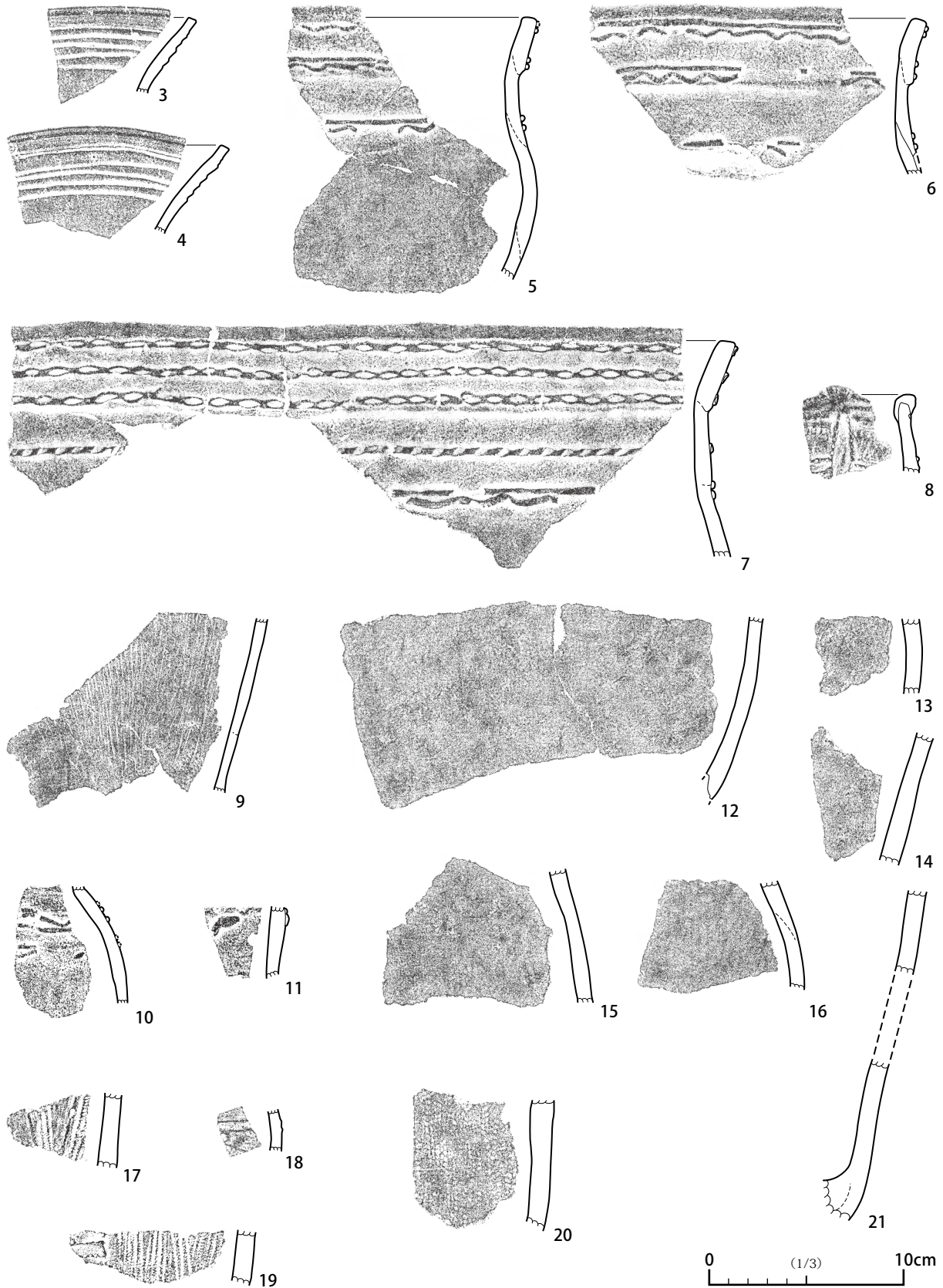


Fig. 82 XII (12) -7区 チャシ壕北側壁面 土器集中出土の土器2

て、この土器集中はもともと6号竪穴に伴っていた土器が旧壕による攪乱を受けて壕内に流れ込んだことによって形成されたものとみられる。

遺物

Fig. 81・Fig. 82がこの土器集中に含まれていた土器である。Fig. 81-1 (PL. 20-8)はオホーツク貼付文系土器。極度の被熱によって極端にゆがんでいるため復元された器形には不正確な部分もあると思われるが、胴部下半が縦に長くなるやや特異な器形である。肥厚帯は薄くて幅広のものが一段とみてよいが、口唇部付近で外反する部分は肥厚帯と同じつくりとなっており、2段の肥厚帯とみることも可能である。口縁部文様はすべて1本単位で、上からひねりありが2条、直線が2条、ひねりありが1条となっている。頸部以下の文様は上の3条が1本単位(直線、ひねりあり、直線)で、その下部が2本一単位(波線)となっている。文様の最下部には粒状の貼付文が2ヶ一組で付される。2はオホーツク土器の底部。著しく被熱している。Fig. 82-3 (PL. 20-9)・4 (PL. 20-10)・9は初期段階の擦文土器。3・4は接合しないが同一個体とみられる口縁部。薄手で非常に堅緻であり、口唇部は角張っている。口唇の下部には沈線文が5~6条施されており、頸部は無文である。口唇部に刻みは確認できず、外面のハケ調整の有無も判然とししない。9は1・2と同一の型式とみられる胴部下半の破片。外面には縦方向のハケ調整、内面には横方向のハケ調整が確認できる。3・4・9の土器は本遺跡群のオホーツク1号・2号竪穴埋土や7b号竪穴床面で出土した擦文土器(塚本2012)と類似しており、同時期の土器とみられる。5~7・10~16・21はオホーツク土器。5~7は貼付文系土器の口縁部で、5と6は接合しないが同一個体とみられる。5・6は1段の肥厚帯を有し、肥厚帯上に2本一単位の貼付文(直線+波線)を2単位、その下部にも同じ意匠の貼付文を1単位施している。7は一段の肥厚帯を有し、肥厚帯上に1本単位の貼付文(鎖状)を3条、その下部に1本単位の貼付文(刻みあり)を1条と2本一単位の貼付文(直線+波線)を1単位施している。10・11は貼付文系土器の胴部で、10には3本一単位の貼付文(直線+波線+直線)と2本一単位の貼付文(直線+波線)、11にはひねりのある貼付文が1条とその下部に「へ」の字状の貼付文を付加している。12~16はオホーツク土器の無文の胴部破片、21は底部を含む無文の胴部破片である。8は宇津内IIIb式の口縁部破片。山形突起を有し、山形突起の下部から垂下する貼付文と口唇直下をめぐる貼付文を有する。17は後北C₂・D式土器の胴部破片。18・19は宇津内II式の胴部破片で、18は8と同一個体の可能性がある。20は続縄文前半期とみられる土器の胴部破片。以上のFig. 81の土器は、8・10・11・13・18~20以外の個体は全て著しく被熱している。

小括

この土器集中はチャシの旧壕に切られた遺構に伴うもので、その遺構はオホーツク6号竪穴であると判断できる。6号竪穴は前述のとおり焼失住居であるが、Fig. 81-1など土器集中の主体となるオホーツク土器が激しく被熱していたことも、この想定と矛盾しない。初期段階の擦文土器が伴っている点にも注目しておきたい。

(熊木俊朗)

3 XII（12）－3区周辺 魚骨集中

2009年度発掘区の南東縁、XII（12）－3区周辺で1m×0.6m（発掘区域外へ続く）、厚さ5cmほどの魚骨集中が検出された（Fig. 74）。この魚骨集中は特に東部で現代の攪乱の影響を被っており、当初は帰属時期の判断が難しかったため全て採取したが、遺構の様相から判断するとオホーツク文化期に形成されたものである可能性が高い。遺構からは魚骨のほかに石器の細片が出土している。

（山田 哲・熊木俊朗）

註

- 1) 1964年の報告では、6号竪穴の柱穴は「大小15個」確認されたと記録されている（駒井編1964：79）。掲載されている図（前掲書：Fig. 6）が小さいために詳細には不明な点が多く、今回の再発掘では15基全てを確認することはできなかった。なお、今回、攪乱を受けていた5基のピット（Fig.75の斜線部分）のうち、最も北側に位置する1基を除いた4基のピットは1964年報告に記載されていたものに相当するとみられるため、本来、竪穴に伴う柱穴であった可能性が高い。
- 2) 前註1) 参照。

第五節 続縄文文化期の遺構各説

1 XVI (16)～XVIII (18) -5区トレンチ内 XVI-5区のピット

調査の経緯

XVI (16)～XVIII (18) -5区トレンチ全体の調査経過については本章第一節で述べたとおりである。トレンチ内の土層堆積は以下のとおりである (Fig. 83)。1層：表土・攪乱。礫 (いわゆるバラス) を多量に含み、堅くしまっている。現代の廃棄物を多量に含む。2層：明灰色火山灰。堅くしまっており、黒褐色土をブロック状に含む。現代の盛土。3層：明灰色火山灰。堅くしまっている。現代の盛土。4層：黒褐色土。角礫と現代の廃棄物を含む。現代の二次堆積土。5層：黒褐色土。現代の廃棄物は含まない。6層：黒褐色土。径2cm以下のローム粒を多量に含み、黄色みを帯びた色調を呈する。7層：暗褐色土。ローム粒、炭化物、焼土粒を少量含む。8層：黒色土。しまりがやや弱く、粘性がやや強い。炭化物を少量含む。9層：黒褐色土。粘性がやや強い。10層の粒子が混在する。角礫を少量含むが、現代の廃棄物は含まない。10層：暗褐色土。5層は、4層の二次堆積土が堆積する前の旧表土とも考えられたが、はっきりしなかった。7層は後北C₂・D式などが含まれる遺物包含層で、住居跡などの遺構の埋土のような様相を呈しているが、掘り下げを7層中で停止したため下位に後述のピット以外の遺構が存在するか否かは不明である。8層は後述のピットの埋土と判断された。10層は基本層序のII層に相当する可能性が高いと考えられた。

ピットはXIV-5区の深掘り区の7層中に確認された (Fig. 83)。半径約40cmの不整形を呈しており、埋土には8層の黒色土が確認された。

遺物

Fig. 83-5・7～10はFig. 82土層図の5～8層、Fig. 83-1～4・6・11～17は同土層図の9層から出土した土器。

1～5はオホーツク貼付文系土器。1は肥厚帯を有し、肥厚帯上に1本単位の貼付文 (刻みあり) を2条、頸部にも1本単位の貼付文 (刻みあり) を1条と、斜めの貼付文 (刻みありを2本1単位で施し、上部に粒状の貼付文を付加する) を施している。2・3・5も肥厚帯を有し、2は1本単位の貼付文 (ひねりあり) を2条とその中間に斜めの貼付文を1条、3は1本単位の貼付文 (刻みあり) を2条、5も1本単位の貼付文 (刻みあり) を1条施している。4は口唇部の破片で、1本単位の貼付文 (鎖状) が2条確認できる。6は後北C₂・D式もしくは北大式とみられる口唇部破片。口唇面が平らになでつけられている。文様は確認できない。7は口唇部に刻み目のある破片で、口縁部には微隆起線とみられる文様が付されているようだが、細片のため不明である。後北C₂・D式であろうか。8・9は後北C₂・D式の口縁部破片で、8は口唇部がやや尖り、刻みが施されている。9は口唇面が平らになでつけられており、口唇部外縁に刻み目がある。8・9とも口縁部には刻み目付きの貼付文が2条付されている。10は後北

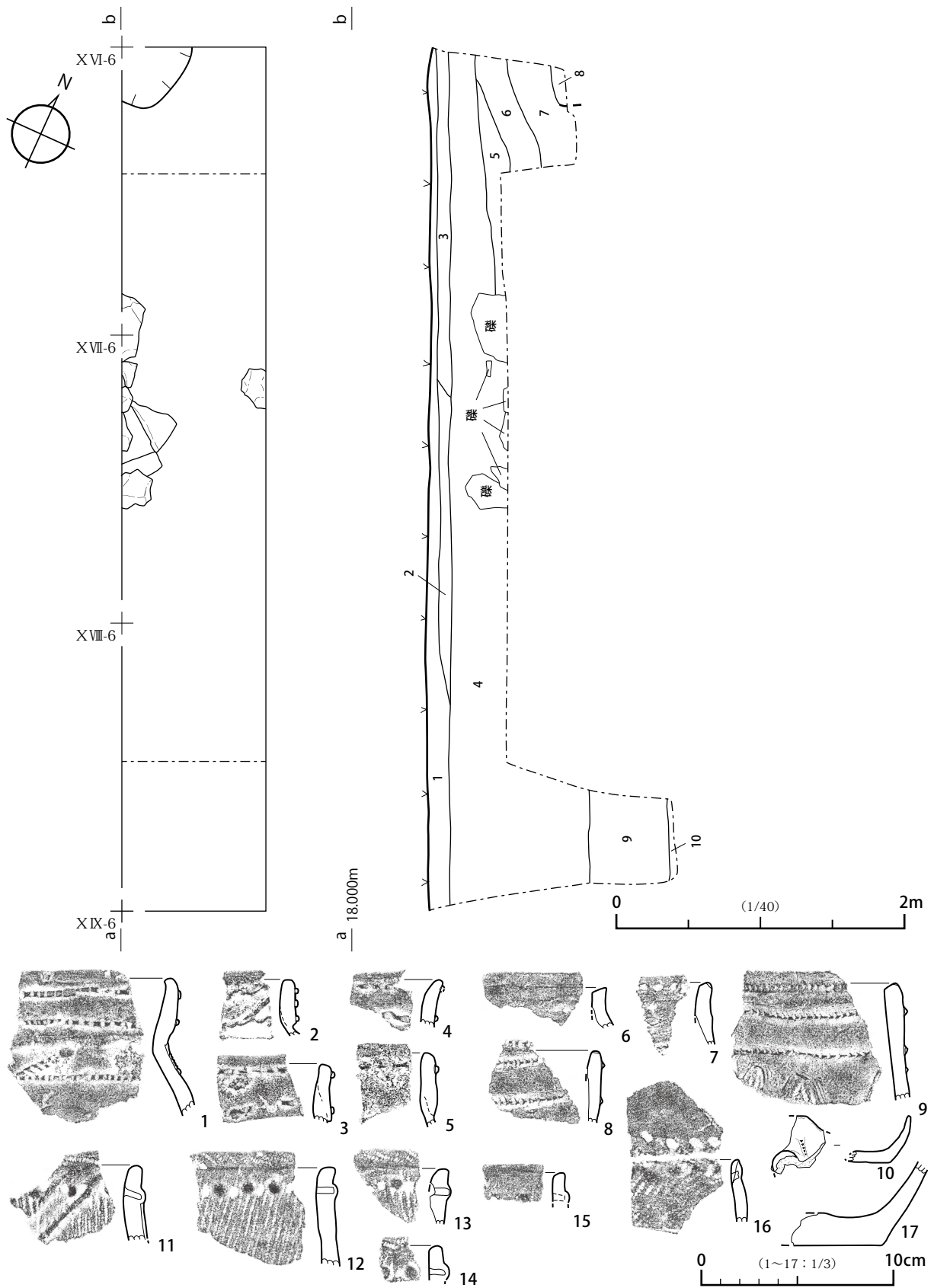


Fig. 83 XVI (16)～XVIII (18) -5区トレンチの遺構および出土土器

C₂・D 式の注口土器の、注口部の破片である。11～14 は宇津内 IIa 式土器で、接合しないが同一個体の可能性がある。いずれも IO の突瘤文と縄端による刺突文が交互に施されており、11 には貼付文が斜めに付されている。15 は IO 突瘤文のある口縁部破片で、小片のため詳細不明である。縄文晩期末～続縄文前半期の土器であろう。16 は斜め方向からえぐったような IO 突瘤文が付された口縁部破片で、口唇面には刻みが施されている。縄文晩期前半の土器であろう。17 はオホーツク土器の底部。

小括

上面のみの確認に止めて掘り下げておらず、また本ピットの大半は発掘区外に拡がっているため、ピットの形状や深さなどの詳細は不明である。本ピットの上部に堆積していた厚さ30cmほどの暗褐色土層 (Fig. 83 の7層) にはローム粒や炭化物・焼土粒が含まれていたほか、後北 C₂・D 式土器と黒曜石製の剥片石器も比較的多く検出されており、この層は後北 C₂・D 式期の竪穴住居等の遺構の埋土である可能性も考えられた。その場合、本ピットもその遺構の一部である可能性が考えられるが、いずれにしても未調査のため詳細は不明とせざるを得ない。

(熊木俊朗)

第五章 トコロチャシ跡遺跡群における遺構と遺物について

第一節 本調査で確認された遺構に関する考察

1 遺跡群全体における遺構と遺物の分布

今回の調査では、トコロチャシ跡遺跡群の史跡整備計画推進を目的として、遺跡群全体に10m間隔で試掘坑を設定して遺構と遺物の分布調査をおこなうとともに、要所にトレンチを設定して遺構を詳細に確認した。ここでは調査で得られた情報を整理し、遺跡群の内容についてあらたに判明したことをまとめてみたい。

まずは遺跡群全体における遺構と遺物の分布について、以下の二点、すなわち①遺跡群全体における遺構・遺物の分布傾向、②既知の遺構密集地点（トコロチャシ跡遺跡、同オホーツク地点、トコロチャシ南尾根遺跡）の範囲はどこまで広がるか、という観点からまとめてみる。

遺跡群全体における遺構の分布傾向であるが、今回あらたに検出された遺構の所在地点をみると、ほとんどが既知の遺構密集地点（上記の三ヶ所）に隣接した場所で確認されている。ほぼ唯一の例外といえるのがL(50)－95区周辺で確認された石刃鍬文化の遺物集中であるが、この遺物集中にも竪穴やピット等の遺構は伴っておらず、周囲に他の遺構や遺物集中が連続して広がっているような状況も確認できなかった。その意味では、既知の三ヶ所の遺構密集地点以外に、本遺跡群の中に遺構が集中する地点はほぼ存在しないことが、今回の詳細な分布調査によって判明したといえる。すなわち、トコロチャシ跡遺跡群の概要の項（第一章第一節2）で述べたとおり、本遺跡群は上記の三ヶ所の遺跡を核とした遺跡群であるという従来の理解に、変更の必要はないであろう。

その一方で、遺跡群全体における遺物の分布（Table 7）をみると、第二章第一節にも述べたとおり、既知の遺構密集地点周辺での出土点数が多い一方で、遺跡群の南東端では分布密度がやや低い傾向にあるものの、遺跡群全体から遺物の出土が確認された。耕作による攪拌によって遺物が移動した可能性を考慮する必要があるものの、遺跡群全体にわたって比較的高い密度で遺物が分布するという状況は、資料の広範な分布が確認された縄文～続縄文文化期においては特に、上記の三遺跡を核としながら遺跡群全体を行動範囲とする活動が恒常的におこなわれていたことを示唆するといえよう。すなわち、三ヶ所の遺跡を「トコロチャシ跡遺跡群」として一体化してとらえる考え方には一定の裏付けがあることが、今回の分布調査によってより明確になったといえよう。

次に既知の三ヶ所の遺構密集地点の範囲であるが、これは調査の結果、三地点ともこれまで把握されていた範囲を越えて遺構が連続して広がっていることが明らかになった。トコロチャシ跡遺跡について

は、XVI (16)～XVIII (18) -5区トレンチの調査によって、チャシ壕の外側の南東部に続縄文文化期とみられる遺物包含層とピットが確認された。この区域は旧土地所有者の宅地等があつて分布調査は困難であつたため、遺構や遺物の分布には現状でもなお不明な点が多いが、トレンチ調査の結果を見る限りチャシの南東側にも遺構が存在している可能性は高いとみられる。後述するオホーツク13号竪穴も、この区域に隣接して確認されている。

トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点については、従来はこの地点の範囲をオホーツク文化の住居跡とみられる竪穴の窪みが分布する区域に限つてとらえていたが、この範囲を越えて遺構が広がっていたことが判明した。まず竪穴群の南西側では、間に沢状の落ち込みを挟んで1号墓・2号墓を含むオホーツク文化期の墓域が確認された。また、竪穴群の南東側から東側でも、Hトレンチ内の骨集中・土器集中やGトレンチ内のオホーツク13号竪穴といったオホーツク文化期の遺構が確認されている。さらにこれまで存在があまり想定されていなかった縄文前期～中期の遺構についても、竪穴がCトレンチ内で、また集石や遺物集中がD・E・F・Gの各トレンチやXXV (25) -24区周辺で検出されるなど、この時期の遺構が竪穴の窪みの南東側から東側にかけて高い密度で分布することが判明した。

トコロチャシ南尾根遺跡に関しては、竪穴の窪みが分布する区域よりわずかに北側の地点で、XCV (95) -55区の縄文早期竪穴とC (100) -60区周辺の縄文中期竪穴が確認されている。このことは、南尾根遺跡の範囲が竪穴の窪み群の北側まで広がっていることを示唆しているが、周辺の他の試掘坑では遺構が確認されていないところからすると、竪穴の窪み群の範囲を大きく越えて遺構の分布が広がっている可能性は低いとみられる。

以上、今回の分布調査によって、トコロチャシ跡遺跡群内の三つの遺跡（遺構密集地点）の範囲や内容がより正確に把握され、そのことによって、各遺跡間の関係性を含めた遺跡群全体の構造をより明瞭に復元することが可能となつてきた。今後の史跡整備計画策定に資する成果といえよう。

2 アイヌ文化期の遺構

次に調査で確認された遺構について時期毎に情報を整理し、遺跡群を構成する各時期の遺構に対して個別的・具体的な評価を試みてみよう。

アイヌ文化期の遺構としては、トコロチャシ跡遺跡の2008～2009年度調査区内において、チャシ壕の未発掘部分（北東側端部付近）の調査がおこなわれた。チャシ壕関連の調査成果をまとめると以下のようになる。

①調査対象とした壕の北東側端部付近においても、他の部分と同様、壕は二回にわたつて掘削されたことが確認された。新壕と旧壕の関係は、層位的には旧壕が下位にあり、平面的にはほぼ重なる位置関係となつていた。

②新壕・旧壕の延長方向をみると、北側に緩やかに湾曲しながら北東方向へと延び、沢に面した末端に向かつて幅と深度を増す傾向が確認された。壕の末端部は旧土地所有者が沢沿いに開削した小径の跡

に切られていた。

③壕に沿って柵列を形成したとみられる柱穴は確認されなかった。

④ 2008 年度調査区では、旧壕掘削時のものとみられる掘りあげ土が、壕の両側で薄く堆積している様子が確認された。

⑤旧壕および新壕の埋土中に、壕の内部から人為的に廃棄されたとみられるカワシンジュガイを中心とする動物遺体の堆積（火山灰下貝集中・旧壕埋土貝集中）が確認された。

①については 1997 年度の調査結果から予想されたとおりであった。②については、発掘前の壕の窪みの状態から予想された形状（東大考古学研究室・常呂実習施設編 2001：Fig.69）とは少々異なり、やや北側へと湾曲することが確認されたものの、当初の予想と大きく食い違うものではなかった。③については、壕に沿った柵列（用の柱穴）がチャシ跡の西半分では確認されていたが、東半分ではこれまでも確認されておらず、今回の調査区内でも検出できなかった。④の掘りあげ土についてはこれまでの調査でも一部で確認されていたが、2008 年度の調査区内ではより明瞭に確認された。特に壕の南側、XIII-5 区付近で確認されたロームを多く含む掘りあげ土は、人為的にロームが貼られたとみることも不可能ではないほど均質なロームで構成されていた。

⑤の壕内埋土中の貝集中については、壕内にアイヌ期の遺物が集中して廃棄された例はこれまでの調査では確認されておらず、初の発見となった。これらの貝集中が廃棄された年代や状況であるが、旧壕埋土中の方は旧壕掘削後～新壕掘削以前、新壕埋土中の方は新壕掘削後～Ta-a 火山灰降灰（1739 年）直前で、前者はチャシが機能していた期間中であり、後者はチャシが機能していた期間ないしは廃絶直後とみられる。どちらも 18 世紀前葉以前といえよう。また、どちらの遺構も壕の内側の斜面にかかるように堆積しており、壕の内部（チャシ主体部）の方向から廃棄されたとみられる。

貝集中の遺物内容であるが、新壕埋土中の方（火山灰下貝集中）はカワシンジュガイを主体としながらも魚骨や鳥獣骨を含み、遺物の総量もやや多い。一方で旧壕埋土中の方（旧壕埋土貝集中）はカワシンジュガイを主体とし、その他の遺物は少なかった。遺物の総量も旧壕埋土の方が少なく、2009 年度の調査区内では旧壕埋土中の貝集中は確認されていない。火山灰下貝集中では動物遺存体（第六章第三節参照）以外の人工遺物として青銅製装飾板、刀子、小札の再加工品、骨角器等が確認されたが、旧壕埋土貝集中では人工遺物は確認されていない。

トコロチャシ跡遺跡においてこれらの貝集中と関連する遺構としては、1 号竪穴上層の遺構があり（駒井編 1964）、竪穴の埋土中で上下に 2 層のアイヌ期の包含層ないし遺構面が確認されている。上部の層では厚さが中央で 18cm、範囲が 5.5m×7m の獣骨層（淡水産の貝類を含む）があり、その獣骨層を含む「暗灰色砂質土層」からは埋葬人骨も出土している。下部の層では腐蝕木材や炉跡、灰集中が 8m 四方ほどのすり鉢状の面をなし、その面からは漆器、鉄針、鉄小札、鉄鍋片、鉄刀などが出土している。これらの 1 号竪穴上層遺構と壕内埋土中の貝集中との層位的関係は、1 号竪穴埋土中に Ta-a 火山灰を認めるのが難しいこともあって¹⁾ 正確な対比は困難である。後者の貝集中についてはチャシが機能していた時期のものであることはほぼ確実であるから、問題は 1 号竪穴上層遺構の年代である。宇田川洋は漆

器の年代などからこれらを17世紀以降のアイヌのもの送り場としている（宇田川 2001：309-310）が、年代の下限についてより詳細な検討が必要となる。

1号竪穴上層遺構と壕内埋土の貝集中とで遺物の内容を比較すると、前者では道具類が含まれているのに対し、後者では道具類がやや少ないという違いがあり、遺構の性格も異なっていた可能性が高い。カワシンジュガイの集中という点について言えば、知里真志保による以下の記述が注目されよう。「pipa（中略）貝は一定の所にすて、その内の大きいものだけ保存しておいて粟の穂を切るのに用いた」（知里 1962：121）。宇田川はこれをカワシンジュガイの送り場があったことを示すものととらえたが（宇田川 1980）、本遺跡の壕内埋土貝集中も、知里が記したような状況で堆積したものとみることが可能かもしれない。また最近、豊原熙司は塘路湖岸や釧路川中流域のチャシ跡に残るヌマガイ伝承を紹介し、アイヌが貝殻を鳴子として使って敵の侵入を防いだという伝承や、その際に用いられた貝の種類などに関して考察を加えている（豊原ほか 2013・豊原ほか 2014）。この考察で取り上げられている鳴子としての用途や、食料としての適性の問題なども、本遺跡の貝集中の機能や性格を考える上で非常に興味深いといえる。

3 オホーツク文化期の遺構

概要

オホーツク文化期に属することが確実な遺構としては、以下のものが確認されている²⁾。まず竪穴としては、XVII（17）-51区のおホーツク11号竪穴、XXIV（24）-51区のおホーツク12号竪穴、Gトレンチ内のオホーツク13号竪穴が新たに確認され、ほかに旧Sトレンチ内の6号竪穴が再発掘されている。またXII（12）-7区のチャシ壕の壁面上で確認された土器集中は、この6号竪穴に伴うものと考えられた。墓については、XXIII（24）-61区周辺のおホーツク1号墓と、XXIII（23）-58~59区のおホーツク2号墓の2基が検出されている。竪穴と墓以外の遺構としては、Cトレンチ内のピット7、Eトレンチ内の集石1、Hトレンチ内の骨集中および土器集中が確認された。以上の遺構のうち、11号竪穴の時期は不明確だが³⁾、他は全て貼付文期に形成されたもので、刻文期などより古い時期のおホーツク文化や、トビニタイ文化の遺構は確認されていない。以上の遺構について、竪穴、墓域、Hトレンチ内の骨集中にわけてまとめておく。

竪穴について

11号竪穴と12号竪穴は、1964年の報告（駒井編 1964）において竪穴の窪みが記録されていた地点で検出されており、これらの窪みがオホーツク文化期の竪穴住居跡とする従来の考えを裏付ける結果となった。13号竪穴はトコロチャシ跡遺跡の南東側、同オホーツク地点の東側で検出されたが、この地点では従来、オホーツク文化の竪穴の存在は想定されておらず、この地点までオホーツク文化の集落が広がっていたことが今回の調査によって判明した。

6号竪穴については、1964年の報告に、焼失住居であること、検出した箇所がコの字形の貼床の開口

部の部分に相当すること、貼床の間には平石が積み上げられていたことが記載されていた（駒井編 1964：79）。今回の再発掘ではそれらの内容を全て再確認するとともに、チャシの塚に切られた断面の観察の結果、竪穴の大きさや方向についても見通しを得ることができた。すなわち、6号竪穴は1号竪穴と向きを同じくしつつ、ほぼ並列する位置に存在しており、規模は長軸が9m以上、長軸と直交方向が8m程度と推測された。竪穴に伴うとみられる貼付文系土器や擦文土器片の資料も得ることができた。

本遺跡群のオホーツク文化の竪穴住居跡の特徴の一つとして、焼失住居の割合が極めて高いことがあげられる。今回新たに確認された住居でも、12号・13号竪穴は焼失住居である可能性が考えられた。これも従来の理解を補強する結果となった。

墓域について

オホーツク文化の墓域については、墓域の位置と規模、さらに住居跡と墓域の区画の有無、という二つの観点からまとめてみる。

まずは墓域の位置である。かつて筆者は2003年刊行の調査概報の中で、本遺跡群におけるオホーツク文化の墓域の位置について、①オホーツク地点の1号墓・2号墓付近、②オホーツク地点7号竪穴・8号竪穴の北西部に隣接する崖際、の2箇所を指摘するとともに、聞き取り調査や採集資料の内容からするとまだ未発見の墓が存在することや、それらの中には貼付文期以前の墓が含まれている可能性を示唆した（宇田川・熊木編 2003：29-30）。その後、2006～2007年度の調査では、オホーツク地点の南側～東側を囲むようにA～Gの各トレンチを設定して墓域の有無を確認したが、本文に記したとおりオホーツク墓は確認されなかった。この調査結果から推測する限り、A～Gの各トレンチを越えてさらに南側から東側へと墓域が広がっている可能性はきわめて少ないと判断できる。また、常呂町教育委員会による1998年度の分布調査ではオホーツク地点の中央部、竪穴の窪みに囲まれた区域に試掘坑が設定されて遺構の確認がおこなわれているが、ここでも墓は検出されていない。オホーツク文化の墓域は住居跡に近接してつくられるのが一般的であり（熊木 2002）、そのことと以上の分布調査結果とをあわせて考えるならば、本遺跡群におけるオホーツク文化の墓域は、前述の①と②、すなわちオホーツク地点の南西部から北西部にかけての崖からやや内陸に入った地点、もしくは崖の部分にのみ限定して存在していたと考えざるを得ない。

墓域の位置をそのように捉えた場合、問題となるのは墓域の規模である。1号墓・2号墓付近については本文に示したとおり、1999～2001年度の分布調査においてかなりの密度でトレンチ調査をおこなったが、他に墓は発見されなかった。すなわちこの地点に墓域は確認されたものの、その規模は小さいものであったことがほぼ確実になった。隣接するオホーツク地点の北西部の崖際に多数の墓が残されている可能性は皆無ではないが⁴⁾、あまり大規模なものを想定するのはやや無理であろう。すなわち現状において本遺跡群で確認された竪穴住居跡の数と墓のそれとを比較すると、明らかに墓の数が少なく、数量的にはバランスを欠いた状況にある。2003年の概報で指摘した、貼付文期以前の墓が存在する可能性などもあわせて考えると、上記で検討した地点以外の未確認の地点に墓域が存在する可能性は皆無とはいえない。しかしここでは分布調査の結果に従い、墓域は上記①・②の限られた地点に存在し、住居

跡の数と比較するときわめて墓の数が少ないというやや不自然な状況にある、という結論で一応の決着としたい。

次に住居跡と墓域の区画についてであるが、この問題はすでに2003年の概報で検討しており、その後も結論は変わっていないので要点を引用しておく（宇田川・熊木編2003：29）。オホーツク文化の遺跡における住居跡と墓域の区分をみると、住居等の日常生活空間と墓域が全く重複する例（栄浦第二遺跡（武田編1995）等）と、住居跡から分離される例（目梨泊遺跡（佐藤編1994）等）との両方があり、現状では当時の空間認識において住居跡と墓域の区画が意識されていたか否か判断は難しい。本遺跡群においては1号墓・2号墓と住居跡群の間に沢状の落ち込みの存在が確認されており（第二章第三節1参照）、この沢状の落ち込みを挟んで住居跡群と墓が対置されているという様相は、住居跡群と墓域の区画が意識されていた可能性を示唆している。北西部の崖際に存在が想定されている墓域との間には今のところ区画の存在を確認できないので、本遺跡群において住居跡と墓域の区画が厳密であったか否かはなお検討を要するが、ここでは少なくとも1号墓・2号墓付近の墓域との間には区画が存在していた可能性を指摘しておく。

Hトレンチ内の骨集中について

Hトレンチ内の骨集中については、住居外のいわゆる「骨塚」である可能性が高いと判断された。本遺跡群では、かつてXI-20区周辺においてもオホーツク文化貼付文期の「住居址外骨塚」が確認されている（東大考古学研究室・常呂実習施設編2001）。その「住居址外骨塚」と本年度確認されたHトレンチ内の骨集中とを比較すると、前者が最大幅5.9mに対し後者が1.7mと、まず堆積の規模が大きく異なる。さらに出土内容をみると、前者では魚骨が大量に出土し、狩猟漁労具としての骨角器が多く含まれていたのに対し、後者ではそれらが含まれていない。また前者では剥片以外の石器がほとんど出土しておらず、土器の出土も比較的少なかったのに対し、後者ではかなりの個体数の土器が伴い、さらに石鏃や削器、有孔円板などの石器が出土している。また、後者出土の骨はほぼ全て火を受けている。以上の点を一般的な住居内の骨塚と比較すると、前者が住居内の骨塚とはやや異なる様相を呈するのに対し、後者の方は住居内の骨塚により近いと評価できよう。住居内の骨塚が居住者の祭祀行為に関わる遺構であることは異論のないところであろうが、屋外でも同様の祭祀が執り行われていたと考えるのであれば、その担い手や意味、さらには住居内骨塚との関係が問題となってくるであろう。また同一遺跡群内の住居外に残された「骨塚」の性格・内容が一様ではない点は、オホーツク文化貼付文期における本遺跡の居住形態や集落構造を考える上で、注目すべきデータとなる。

4 続縄文～縄文文化期の遺構

概要

今回の調査で確認された続縄文～縄文文化期の遺構に属するとみられる遺構のうち、帰属時期や内容がある程度明確なものを時期別にまとめると、以下のようになる。

続縄文文化期：F トレンチ内 集石 3 (続縄文初頭)。

縄文前期～中期：XXV (25) -24 区周辺 縄文前期～中期集石、C (100) -60 区周辺 縄文中期竪穴、XXV (25) ライントレンチ内ピット 2、C トレンチ内 縄文前期～中期の竪穴 (および埋土中の遺物集中)、D トレンチ内 縄文中期遺物集中 1、D トレンチ内 縄文中期遺物集中 2、E トレンチ内 集石 4、F トレンチ内 集石 2、G トレンチ内 集石 6、G トレンチ内 集石 5、H トレンチ内 集石 7。

縄文早期：L (50) -95 区周辺 石刃鍬文化の遺物集中、XCV (95) -55 区 縄文早期竪穴。

以上の遺構のうち、ここでは縄文前期から中期の集石ないし遺物集中と、縄文中期の竪穴についてまとめてみたい。なお、L (50) -95 区周辺 石刃鍬文化の遺物集中については第六章第一節の考察を参照されたい。

縄文前期～中期の集石ないし遺物集中について

縄文前期～中期の「集石」ないし「遺物集中」に相当する遺構⁵⁾を Table 5 にまとめた。この表をみると、D トレンチ内の縄文中期遺物集中 2 以外は角礫の集中を伴うという点で共通していることがわかる。また、それらの角礫を含む遺物集中には以下のような傾向が認められる。①オホーツク地点の南東～東側の区域で確認される一方、同地点の東側 (50 ラインより東) では検出されていない。②多くの例ではピットや下面の掘り込みなどの付帯する遺構は確認されておらず、また角礫の比高差が少なく平面的に散在するような分布となる例が多い。ただし、竪穴などの遺構の埋土中に形成された例もある。③含まれる遺物の大半は角礫であり、土器や石器も含まれるが量や密度はそれほど高くない。④被熱した角礫を含む例が多い。⑤含まれる土器は北筒式が多く、それに加えて縄文前期の土器、特に岐阜第二遺跡で多く出土した縄文前期の無文厚手土器や縄文・撚糸文土器等の土器群 (藤本・宇田川編 1982 : 137-141) を含む例が目立つ。以上の①～⑤の特徴からこの集石ないし遺物集中の具体的な機能や堆積の背景を推定するのは難しいが、④の特徴などから考えると、少なくとも人為的に形成されたものであるとはいえよう。オホーツク地点においては、縄文前期～中期の活動はこれまでほとんど知られていなかったが、これらの遺構によって、かなりの密度でその痕跡が残されていることが明らかになった。

本遺跡群では上記の遺物集中に類似した遺構として、トコロチャシ南尾根遺跡の 2 号・5 号・6 号・12 号竪穴において「床面放棄後やや時期をおいて床面に堆積」した「角礫混りの黄褐色土」が確認されている (藤本編 1976:121)。この「角礫混りの黄褐色土」は、層位的、すなわち竪穴どうしの切り合い関係から判断して縄文中期北筒式トコロ 6 類以降・縄文後期中葉エリモ B 式以前のもものと想定されている。この堆積について藤本は、南尾根遺跡付近にある尾根の斜面では至る所に同じ堆積があることから、「一時的な山津波」によるものと判断している。確かに南尾根遺跡のように斜面で確認された例ではそのような原因が第一に考えられるのだが、Table 6 に示したような台地の中央部の平坦な地点で確認された角礫の集中については、前述したように人為的なものと判断せざるを得ない。しかしながら、上記のような差が認められるとしても、Table 6 にあげた角礫の集中と南尾根遺跡のそれとが比較的近い時期であるのは偶然ではないとみることも可能であろう。すなわち大量の角礫集中は、堆積の原因や背景にはいくつかの要因があるようだが、本遺跡群では縄文中期を中心に前期から後期にかけて特徴的

Table 5 縄文前期～中期「集石」ないし「遺物集中」遺構一覧

図版番号	出土区	遺構名	平面の大きさ(最大径)	伴う遺構等	礫の被熱	出土土器	備考
Fig. 14	25-23~24区	縄文前期～中期集石	1.4m以上	なし	一部の礫が被熱	北筒式トコロ6類、モコト式、縄文前期「合捺」の土器、網文式	
Fig. 50	Cトレンチ30-39~43区	縄文前期～中期の竪穴(埋土中の遺物集中)	4.6m	竪穴の埋土中	一部の礫が被熱	北筒式、網走式?	
Fig. 53	Dトレンチ32-35~36区	縄文中期遺物集中1	2.5m以上	なし	大多数が被熱	北筒式トコロ6類	
Fig. 54	Dトレンチ33-40区	縄文中期遺物集中2	0.3m	なし	(礫なし)	北筒式トコロ6類	角礫を含まない遺物集中
Fig. 60	Eトレンチ27-38~39区	集石4	2.5m	下面に径2mの掘り込みあり	一部の礫が被熱	北筒式、縄文前期(無文の底部)	
Fig. 62	Fトレンチ25-34~35区	集石2	3m	なし	被熱なし	北筒式トコロ6類	
Fig. 65	Gトレンチ22-22~23区	集石6	0.8m	なし	一部の礫が被熱	北筒式トコロ6類、網走式?	
Fig. 66	Gトレンチ22-25区	集石5	1m以上	遺構の埋土中?	多くが被熱	縄文前期繊維尖底土器群	
Fig. 67	HトレンチH-3~4区	集石7	2m	なし	被熱なし	北筒式、網走式、縄文前期「捺糸文土器」	

に認められるものと言うことができる。

縄文中期の竪穴について

本遺跡群における縄文中期の遺構としては今回確認されたもののほかに、トコロチャシ跡遺跡2号竪穴北西部遺構(北筒式トコロ6類期、駒井編1964)、トコロチャシ南尾根遺跡1号竪穴(北筒式トコロ5類期、東大文学部考古学研究室編1972)・2号竪穴(北筒式トコロ6類期、藤本編1976)・14B号竪穴(北筒式トコロ5類期、藤本編前掲)がある。絶対数は少ないものの、周辺地域の中では比較的多くの遺構が確認されており、前述の集石ないし遺物集中の遺構とあわせて遺跡群の構造を検討する必要がある。また周辺の遺跡の状況を見ると、本遺跡群の南方約800m、同じ常呂川の右岸段丘面に位置するトコロ貝塚(駒井編1963)は北筒式トコロ6類期の貝塚であるが、同時期の住居跡は確認されていない。本遺跡の西部の段丘下、常呂川右岸の河岸に位置する常呂川河口遺跡では第VIII層中に北筒式のまとまった遺物包含層が確認されており、同時期の遺構として2基の竪穴と数基のピットが確認されている(武田編2000)。本遺跡群の縄文中期の様相に関しては、これらの遺跡群全体を視野に入れた居住形態の研究も今後必要となつてこよう。

もう一つ興味深いのは、Cトレンチ内の前期～中期の竪穴住居跡と、オホーツク地点10号竪穴の関係である。このCトレンチ内の竪穴住居跡の壁のラインを延長して住居跡全体のプランを想定復元してみると、その中心はCトレンチの北西側にあることになり、そうであるならばその一部はオホーツク地点の10号竪穴と接するか、それに切られている可能性が高くなる(Fig. 42)。ここで興味深いのは10c号竪穴に伴う骨塚に残されていたほぼ完形の北筒式トコロ5類土器である(東大考古学研究室・常呂実習施設編2012: Fig. 157-144)。第一に考えられるのは、このトコロ5類土器はこのCトレンチ内竪穴に伴っていたもので、10号竪穴構築時に掘り出されたのではないかという仮説である。しかしこのように考えた場合、10c号は10号のなかでも最も新しい時期に構築された竪穴であるから(10号は

10b号→10a号→10c号と立て替えられている)、このトコロ5類土器が本年度調査の竪穴から掘り出されたものとするならば、掘り出された時期(10b号)と骨塚に残された時期(10c号)との間にギャップが生じることになる。いずれにせよこの仮説を証明することは難しく、「ギャップ」の問題を含めて検討すべき点は多いのであるが、全体の状況から考えると仮説のような事態は十分に想定されるといえよう。ただし、10号竪穴の調査時には、同竪穴が古い時期の遺構を切っている様子は確認されていない。

以上、今後に残された課題も一部残っているが、本報告書によってトコロチャシ跡遺跡群(史跡常呂遺跡)整備事業の実施に必要な基本データはほぼ整ったといえよう。これらの成果に基づいて史跡整備の基本構想と基本計画の策定がすすめられる予定である。(熊木俊朗)

註

- 1) 1号竪穴内の竪穴上層遺構より下層で検出された「白色火山灰層」については、Ta-a火山灰より古い時期のものとする見方が一般的である(大井1970、宇田川2001など)。
- 2) 本文中にあげた遺構のほかに、XX(20)－23区の試掘坑でオホーツク文化の竪穴の埋土の可能性のある土層堆積が確認されているが、掘り下げを途中で止めたため床面は検出しておらず、竪穴とする確証は得られていない。また、XII(12)－3区周辺で確認された魚骨集中もオホーツク文化期に属する可能性が高いが、魚骨以外に伴う遺物がほとんどなかったため、帰属時期は確言できない。
- 3) 11号竪穴については伴う遺物が検出されておらず、時期は確言できないが、上層の耕作土中からは貼付文期の土器が確認されており、この時期の竪穴の可能性が高いと考えられる。
- 4) オホーツク文化期の時点では現在ほど崖の崩落が進んでおらず、崖際にはもう少し広い空間が残されていたものと考えられる(宇田川・熊木編2003:26)。
- 5) 「集石」と「遺物集中」の違いについては、角礫に混じって土器や石器の遺物がやや目立つ遺構に対して後者の名称を用いるようにしたが、あくまで調査時の感覚的な印象に基づくもので、両者の間に明確な違いがあるわけではない。報告に際し名称を統一することも考えたが、調査時の記録との整合性を考え、調査時の名称を変更せずに用いることとした。ただし集石については、調査時の「配石」という名称から変更している。

第二節 出土遺物一覧

Table 6 試掘坑出土遺物一覧表（1998年度 常呂町教育委員会調査分）

南北 グリッド	東西 グリッド	土器 点数	土器内訳	剥片石器 点数	礫石器 点数	剥片・細片・ 石核の点数	その他	備考
V	34	19	オホーツク、続縄文、縄文					
V	34			1				
V	34					3		
VII	34	2	続縄文、縄文					
VII	34				1			
IX	34	2	オホーツク、縄文					
IX	34			1				
IX	34			1		6		
IX	40	5	続縄文					
IX	40			3				
IX	40	1		6				
XI	34	19	オホーツク、続縄文					
XI	34			3		10	礫 1	
XI	40	15	オホーツク、続縄文、縄文					
XI	40			1				
XI	40			2		6		
XI	42	17	オホーツク、続縄文					
XI	42			3		15	礫 2	
XII	34	64	オホーツク、続縄文、縄文					
XII	34			2				
XII	34			5	4	22		礫石器は接合により 1 個体
XIII	40				1			
XIII	40			4	2	8	礫 6	
XIII	40				1			
XIII	40	21	オホーツク、続縄文、縄文					
XIII	40						骨 1	
XIII	42	15	オホーツク、続縄文					
XIII	42				2			
XIII	42			1	1	7		
XIII	42			2				
XV	34	3	続縄文					
XV	34			2				
XV	34					11		
XV	40	9	オホーツク、続縄文、縄文					
XV	40			1				
XV	40			3		13	礫 1	
XV	42	19	続縄文					
XV	42			3				
XV	42	1		1		11	黒曜石原礫 1	
XVII	34	13	続縄文、縄文					
XVII	34			7	4			
XVII	34			2		7	鉄滓？ 1	

第五章 トコロチャシ跡遺跡群における遺構と遺物について

南北 グリッド	東西 グリッド	土器 点数	土器内訳	剥片石器 点数	礫石器 点数	剥片・細片・ 石核の点数	その他	備考
XVII	40	13	オホーツク、続縄文					
XVII	40				1			
XVII	40			2	1	9		
XVII	40	21	オホーツク、続縄文					
XVII	40			1	2	6		
XVIII	42	1	続縄文					
XVIII	42				2			石錘①（石錘②と接合）
XVIII	42					1		
XVIII	42	30	オホーツク、続縄文		2			
XVIII	42			1	2			石錘②
XVIII	42			2		8		
XVIII	44	19	トビニタイ、オホーツク、続縄文、 縄文					
XVIII	44				2	2		
XX	33	4	オホーツク、続縄文					
XX	33			1				
XX	33					10		
XX	35	3	続縄文					
XX	35			5		4	礫 1	
XX	37	5	続縄文、縄文					
XX	37			2				
XX	37			2		13	礫 1	
XX	39	28	オホーツク、続縄文					
XX	39			1	4			礫石器は接合して1個体の石錘となる
XX	39			5		15		
XX	41	14	続縄文					
XX	41			1	1			
XX	41			2		10		
XX	43	4	続縄文					
XX	43			2				
XX	43			1		1		
XX	45	4	オホーツク、縄文					
XX	45						礫 1	
XXII	33	18	オホーツク、擦文	2				
XXII	33			1	1	8		
XXII	35	4	オホーツク、縄文					
XXII	35				1			
XXII	35			2	1	9		
XXII	37	9	オホーツク、続縄文					
XXII	37			1	1			
XXII	37			3	1	9		
XXII	39	6	オホーツク					
XXII	39					6	礫 3	
XXII	41	7	続縄文、縄文					
XXII	41			2				
XXII	41				1	4		
XXII	43			2	1		礫 1	
XXII	43	3	続縄文、縄文					

第二節 出土遺物一覧

南北 グリッド	東西 グリッド	土器 点数	土器内訳	剥片石器 点数	礫石器 点数	剥片・細片・ 石核の点数	その他	備考
XXII	63			1				
XXII	63	12	擦文、続縄文					
XXII	63			1		1		
XXII	67				1			
XXII	67					1	礫 1	
XXIV	33	8	続縄文、縄文				礫 1	
XXIV	33			3				
XXIV	33			2		9		
XXIV	35	47	続縄文		2			
XXIV	35			7	1			
XXIV	35			2	4	19		
XXIV	67	5	続縄文、縄文					
XXIV	67			2		2		
XXIV	67	8	続縄文					
XXIV	67				1			
XXIV	71	5	オホーツク、続縄文					
XXIV	73	1	続縄文					
XXIV	73			1			礫 1	
XXVI	71	5	続縄文					
XXVI	71			1	1			
XXVI	71			3	2			
XXVI	73	4	続縄文					
XXVI	73			1				
XXVI	75	3	続縄文					
XXVI	75			1				
XXVI	75			2		1		

第五章 トコロチャシ跡遺跡群における遺構と遺物について

Table 7 試掘坑出土遺物一覧表（1999～2001年度調査分） ※本文に掲載した試掘坑とトレンチは省いている

南北 グリッド	東西 グリッド	層位	土器 点数	土器内訳	剥片石器 点数	礫石器 点数	剥片・細片・ 石核の点数	その他
XVII	51	竪穴埋土	10	オホーツク、続縄文				2:動物骨 1
XXIII	17	耕作土	20	オホーツク、続縄文、縄文後期?、 縄文中期、縄文前期?、不明	8	1	12	
XXIII	17	耕作土	38	オホーツク、続縄文、縄文晩期、 縄文後期、縄文中期、不明	6		65	骨片 3、骨斧片? 1
XXIII	30	耕作土～茶褐色土層	1	オホーツク	12		40	
XXIII	30	暗褐色ローム質土	1	縄文前期?				
XXV	36	耕作土～漸移層	21	オホーツク、後北、不明	7		49	
XXV	36	漸移層	1	不明				
XXV	36	暗褐色土層	1	縄文前期				
XXV	36	茶褐色土層	3	オホーツク、縄文中期、不明				
XXV	36	耕作土～漸移層	7	オホーツク、後北、不明	1		36	
XXVIII	42	2次堆積土（混土ゴミ層）	23	不明	2		12	骨 1
XXIX	19	耕作土	27	オホーツク、続縄文、不明	3		21	
XXIX	19	暗褐色土	2	続縄文、縄文中期	2		7	
XXIX	32	耕作土	2	不明			12	
XXIX	32	包含層	2	不明	1		27	
XXIX	32	暗褐色土	6	オホーツク、不明	2		69	
XXIX	32	漸移層上部			1			
XXIX	55	耕作土	3	不明	3		6	
XXIX	60	耕作土					1	
XXXI	25	耕作土～黒色土	3	続縄文、縄文前期?、不明	1		4	骨斧片? 1
XXXI	25	漸移層上部（軟質土）	2	不明	4		23	骨片 1
XXXIII	51	耕作土			1		4	
XXXIV	33	耕作土～黒色土～暗褐色土	23	続縄文、縄文中期、縄文前期?、 不明	2		37	
XXXIV	65	耕作土			2		8	
XXXIV	70	耕作土	2	不明			2	
XXXIV	76	耕作土			1		3	
XXXV	85	耕作土	7	不明				
XXXVI	47	耕作土					3	
XXXVI	58	耕作土					4	
XXXVII	39	耕作土～黒色土	11	縄文中期?	1		6	
XXXIX	47	耕作土					2	
XXXIX	54	耕作土			2			
XXXIX	65	耕作土			1		5	
XXXIX	90	耕作土			1		1	
XL	17	耕作土			1		2	
XL	76	耕作土			1		4	
XL	80	耕作土	4	不明	3		4	炭 1
XL	85	耕作土			1		3	陶磁器 1
XLII	26 拡張区	漸移層					1	
XLII	26 拡張区	旧表土	20	不明			1	
XLV	14	耕作土	1	不明	1		3	
XLV	14	黒色土（旧表土及びその下層）	17	続縄文、縄文後期、不明	10	1	19	
XLV	61	耕作土					1	
XLV	71	耕作土			1			
XLV	76	耕作土	2	不明	4		76	
XLV	80	耕作土	1	不明	1		2	
XLV	85	耕作土	8	不明	1		6	
XLV	90	耕作土	4	不明	2		2	
XLV	100	耕作土					2	
XLVI	30	耕作土	5	縄文中期、不明	1		3	
XLVIII	34	旧表土～包含層、漸移層	1	不明	2		73	
XLIX	95	耕作土	3	不明	3		11	

第二節 出土遺物一覧

南北 グリッド	東西 グリッド	層位	土器 点数	土器内訳	剥片石器 点数	礫石器 点数	剥片・細片・ 石核の点数	その他
XLVIII ~XLIX	33~34	耕作土					19	炭化木片 1
XLIX	33~34	旧表土~包含層、漸移層	2	不明	8		162	炭化木片 1
L	45	耕作土						動物骨 1
L	76	耕作土					1	
L	80	耕作土	6	縄文中期、不明	2		58	
L	85	耕作土	1	不明	1		3	
L	100	耕作土					1	
LI	12	耕作土	1	不明	3		7	
LI	61	耕作土					3	
LI	66	耕作土	1	不明	1		1	
LII	45	耕作土	1	不明	1			
LIV	50	耕作土					1	
LIV	105	耕作土					3	陶磁器 1
LV	-20	耕作土	1	不明	2		5	
LV	-15	耕作土	2	不明	1		5	
LV	0	耕作土			1		3	
LV	5	耕作土					2	
LV	5	耕作土					5	
LV	10	耕作土					2	
LV	20	耕作土					2	
LV	40	耕作土	7	不明	4		7	
LV	71	耕作土					2	
LV	76	耕作土					2	
LV	80	耕作土			1		2	
LV	85	耕作土					2	
LV	90	耕作土					1	
LV	95	耕作土					1	
LV	100	耕作土			1		7	
LVI	55	耕作土	1	不明			2	
LIX	20	耕作土	1	不明				
LIX	24	耕作土	1	不明		1		
LIX	29	耕作土						
LIX	110	耕作土	1	縄文中期			1	
LX	-20	耕作土					1	
LX	-10	耕作土			1		1	
LX	-5	耕作土					1	
LX	0	耕作土					1	
LX	15	耕作土			2			
LX	65	耕作土					3	
LX	76	耕作土			1		5	
LX	80	耕作土			3		12	
LX	85	耕作土			1		1	
LX	95	耕作土					1	
LX	100	耕作土					4	
LX	105	耕作土	4	不明	1		5	
LXI	-10	耕作土			1			
LXIV	125	耕作土					1	
LXV	0	耕作土			1		2	
LXV	10	耕作土					1	
LXV	20	耕作土					1	
LXV	80	耕作土			2		1	
LXV	90	耕作土			2	1	4	
LXV	95	耕作土			1		2	
LXV	100	耕作土					3	
LXV	105	耕作土	1	縄文中期	1		6	

第五章 トコロチャシ跡遺跡群における遺構と遺物について

南北 グリッド	東西 グリッド	層位	土器 点数	土器内訳	剥片石器 点数	礫石器 点数	剥片・細片・ 石核の点数	その他
LXV	110	耕作土					2	
LXV	115	耕作土					1	
LXX	10	耕作土				1	2	
LXX	60	耕作土	1	不明	2			
LXX	65	耕作土						
LXX	76	耕作土					3	
LXX	80	包含層 (黒色土層)			4		25	
LXX	80	耕作土	3	不明	2	1	21	
LXX	85	耕作土			1		1	
LXX	90	耕作土			2		5	
LXX	95	黒褐色土 (包含層)				1		
LXX	95	耕作土	6	不明	1		20	
LXX	100	耕作土			2		7	
LXX	105	耕作土					6	
LXX	110	耕作土					1	
LXX	115	耕作土			1		4	
LXX	124	黒褐色土 (包含層)	2	縄文中期				
LXXIV	85	耕作土			1		1	
LXXV	-20	耕作土					1	
LXXV	25	耕作土					1	
LXXV	30	耕作土					6	
LXXV	35	耕作土				1		
LXXV	40	耕作土					3	
LXXV	60	耕作土			1		5	
LXXV	65	耕作土					3	
LXXV	70	耕作土			1	1	3	
LXXV	75	耕作土					1	
LXXV	90	耕作土中			2		3	
LXXV	95	耕作土					1	
LXXV	100	上部			2		7	
LXXV	100	下部			1		4	
LXXV	115	耕作土					2	
LXXV	124	耕作土	3	不明				
LXXVI	45	耕作土			1			
LXXVII	50	耕作土					1	
LXXX	-25	耕作土			1			
LXXX	-10	耕作土					1	
LXXX	10	耕作土	2	不明			2	
LXXX	25	耕作土					2	
LXXX	30	耕作土					1	
LXXX	35	耕作土			2		7	
LXXX	40	耕作土	1	不明			1	
LXXX	55	耕作土			1		6	現代の釘 1
LXXX	60	耕作土	1	不明	3		15	
LXXX	70	耕作土			1	1		
LXXX	76	耕作土			2		4	
LXXX	80	耕作土					6	
LXXX	85	耕作土			6		6	貝 1
LXXX	90	耕作土					7	
LXXX	95	耕作土			1		5	
LXXX	100	耕作土					5	
LXXX	105	耕作土			1		1	
LXXX	110	耕作土			1		1	
LXXXI	45	耕作土			1		1	
LXXXII	50	耕作土	1	不明	2		9	
LXXXIV	76	耕作土			1	1	3	

第二節 出土遺物一覧

南北グリッド	東西グリッド	層位	土器 点数	土器内訳	剥片石器 点数	礫石器 点数	剥片・細片・ 石核の点数	その他
LXXXV	25	耕作土			1		5	
LXXXV	30	耕作土			3		4	
LXXXV	35	耕作土	1	不明			1	
LXXXV	40	耕作土	3	不明			8	
LXXXV	55	耕作土			1		2	
LXXXV	60	耕作土			2		2	
LXXXV	65	耕作土	1	不明	1		13	
LXXXV	70	耕作土					3	
LXXXV	80	耕作土			1		1	
LXXXV	85	耕作土			2		6	
LXXXV	90	耕作土					4	
LXXXV	105	耕作土					1	
LXXXVI	45	耕作土			4		4	
LXXXVII	50	耕作土	2	縄文中期	2		8	
LXXXVIII	55	耕作土					1	
XC	-20	耕作土					2	
XC	-5	耕作土	1	不明			4	
XC	10	耕作土					1	
XC	10	耕作土			1			
XC	25	耕作土	1	不明	1			
XC	30	耕作土			2		7	
XC	35	耕作土	2	続縄文、不明	2		5	
XC	40	耕作土	2	続縄文前半、不明			12	
XC	60	耕作土	1	不明	1	1	5	
XC	65	耕作土	1	不明			7	
XCI	45	耕作土	2	縄文中期、不明			15	
XCII	50	耕作土			1		2	
XCV	-9	耕作土				1		
XCV	-9	耕作土	1	擦文				
XCV	35	耕作土	1	縄文中期	1		6	
XCV	40	耕作土			2		5	
XCV	45	耕作土	1	不明			3	
XCV	50	耕作土	1	縄文中期	2		5	
XCV	60	耕作土	2	続縄文?	2		4	
XCV	70	耕作土			1		1	
XCV	75	耕作土					2	
XCV	85	耕作土			1		3	
C	50	耕作土			2		2	
C	55	耕作土					12	
C	65	耕作土下黒色土層中(包含層)	3	続縄文、縄文中期			3	
C	65	耕作土	2	不明	2		6	
C	70	耕作土	1	縄文~続縄文			6	
CI	10	耕作土	4	縄文~続縄文、不明			7	
CI	15	地山直上包含層	2	不明	1		24	
CI	20	耕作土	3	擦文、不明	1		6	
CIV	60	耕作土	5	続縄文	2		1	
CV	10	耕作土			1		1	
CV	15	耕作土	3	縄文早期、不明			2	
CV	20	耕作土					1	
CV	25	耕作土	1	擦文			5	
CX	15	耕作土	1	不明	1		10	
CX	20	耕作土			1			
CX	25	耕作土	8	続縄文、縄文~続縄文、縄文中期、不明	2		5	

第五章 トコロチャシ跡遺跡群における遺構と遺物について

Table 8-1 出土石器一覧表 (1)

器種	25-24区周辺 縄文前期～中期 集石	100-60区周辺 縄文中期竪穴	17-51区 オホーツク11号 竪穴	24-51区 オホーツク12号 竪穴	20-23区 オホーツク竪穴 覆土?	101-30区 時期不明の ピット	23-54区 集石2周辺
石鏃	5						
尖頭器	8	3		1	2		
石匙	1				1		
石錐	2						
筒形石器		1					
削器	5	5	1	1	1	1	
搔器	6	1			2	1	1
楔形石器		1					
微細剥離痕付き剥片		1					
敲石							1
凹石	1						
石器破片		1					
石核		1					
総数	28	14	1	2	6	2	2

Table 8-2 出土石器一覧表 (2)

器種	23-54区 溝状遺構	オホーツク 2号墓	25ライン トレンチ ピット1	25ライン トレンチ ピット2	25ライン トレンチ ピット3
石鏃未成品	2				
尖頭器	3		1		
両面調整石器	1				
石匙	1			1	
石錐		1			
削器	2			1	1
搔器	1		1		
剥片		1			
総数	10	2	2	2	1

Table 8-3 出土石器一覧表 (3)

器種	Cトレンチ 30-39~43区 縄文前期~中期 竪穴	Cトレンチ 30-38区 ピット6	Cトレンチ 30-40区 ピット7	Dトレンチ 32-35~36区 縄文中期 遺物集中1	Dトレンチ 33-40区 縄文中期 遺物集中2	Dトレンチ 32-41区 ピット1	Eトレンチ 27-38~39区 集石4
石鏃	2	1	3		1		
石鏃未成品		1			3		
尖頭器	1			4	1		1
石匙			1				
石錐			1				
削器				1	1		
石斧			1	2			
砥石			2	3	1		
凹石	1						
石器破片				1			
剥片						1	
石核	1						
総数	5	2	8	11	7	1	1

Table 8-4 出土石器一覧表 (4)

器種	Fトレンチ 25-34~35区 集石2	Gトレンチ 22-17~20区 オホーツク13号 竪穴	Gトレンチ 22-22~23区 集石6	Gトレンチ 22-25区 集石5	Gトレンチ 22-25~26区 ピット1	Hトレンチ H-3~4区 集石7	Hトレンチ H-1~2区 骨集中
石鏃		3		2		1	12
石鏃未成品		2					2
尖頭器	1			1			5
石匙							1
削器		1	1	4			5
搔器		1		1			1
楔形石器							4
微細剥離痕付き剥片				1			
敲石					1		
有孔円板							1
石核				1			2
総数	1	7	1	14	1	1	33

Table 9 出土骨角器一覧表

図版 番号	写真 図版	発掘区	遺構	出土層位	器種	素材	被熱	重さ (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考
Fig. 23-3		24-51区	オホーツク12号竪穴	埋土	釣針軸	海獣骨	○	3.4	44	23	7	
Fig. 34-6		23-55区		黒色土	釣針軸	海獣骨	○	2.8	38	19	6	
Fig. 34-7		23-55区		黒色土	骨鏃	陸獣骨?	○	0.5	19	9	2	
Fig. 79-5	PL. 20-4	2008年度北側発掘区	貝集中(西側)	壕内埋土火山灰下	骨鏃	海獣骨		5.8	136	10	7	未成品
Fig. 79-6		2008年度北側発掘区	貝集中(東側)	壕内埋土火山灰下	貝殻(有孔)	ホタテ		37.1	98	102	19	
Fig. 79-7		2008年度北側発掘区	貝集中(西側)	壕内埋土火山灰下	刺突具	陸獣骨		0.4	52	3	3	
Fig. 79-8		2008年度北側発掘区	貝集中(西側)	壕内埋土火山灰下	刺突具	海獣骨	○	0.4	29	5	4	
Fig. 79-9		2008年度北側発掘区	貝集中(西側)	壕内埋土火山灰下	掘具	鯨骨	○	1.4	24	9	7	
Fig. 79-10		2008年度北側発掘区		壕内埋土火山灰下	板状製品	鯨骨?		3.3	30	31	8	
Fig. 79-11		2008年度北側発掘区		壕内埋土火山灰下	棒状製品	海獣骨		1.6	43	11	10	未成品?
Fig. 79-12		2008年度北側発掘区		壕内埋土火山灰下	へら状製品	海獣肋骨		8.5	130	12	16	未成品?
Fig. 79-13		2008年度北側発掘区		旧壕埋土	掘具	鯨骨	○	6.5	39	18	11	
Fig. 79-14		2009年度発掘区		旧壕埋土	板状製品	鯨骨		20.0	122	21	15	
Fig. 80-4		2008年度北側発掘区		埋土(旧Sトレンチ内)	釣針軸	海獣骨		4.7	44	10	9	
Fig. 80-5		2008年度北側発掘区		表土(壕内埋土)	銚頭	鹿角		0.8	20	10	8	IV類
Fig. 80-6		2008年度北側発掘区		表土(壕内埋土)	貝殻(有孔)	ウバガイ		62.4	82	99	28	
Fig. 80-7	PL. 20-7	2008年度北側発掘区		表土(壕内埋土)	へら	鹿角		8.6	118	18	5	

第六章 考察と分析

第一節 トコロチャシ跡遺跡群出土の石刃鍬石器群について

山田 哲・中村雄紀

ここでは、トコロチャシ跡遺跡群 L (50) -95 区周辺で出土した石刃鍬石器群について、石刃製作技術をはじめとする種々の特徴を整理し、若干の考察を加えたい。

1 石器群の特徴

(1) 石材・石質 (第二章 Fig. 4~Fig. 12)

トコロチャシ跡遺跡群 50-95 区周辺で出土した石刃鍬文化関連遺物である 121 点の石器類のうち黒曜石製は 102 点 (84.3%) を占める。さらに、非黒曜石製は、安山岩質溶岩の礫片 13 点、蛇紋岩製の磨製石斧 3 点、安山岩製の打製石斧 1 点、蛋白石 (オパール) 製の小形稜付石刃 1 点、頁岩製の細片 1 点であるから、礫片と磨製石斧以外の打製石器類 (105 点) では、ほとんど (97.1%) が黒曜石製のものである。このように打製石器類、とりわけ石刃製石器の生産が基本的に黒曜石に依存するのは、北海道における石刃鍬石器群の一般的な傾向といえる。

また、用いられている黒曜石の多くは、流紋岩質球顆に乏しい漆黒~透明の色調で、しばしば白色~灰白色の線状の流理構造を持つ。こうした石質は、概ね置戸所山産の黒曜石を示唆すると考えられる。これまでの石刃鍬石器群に関する理化学的な石材産地推定の事例では、湧別川流域以北 (明治大学古文化財研究所編 2009 等) では白滝産黒曜石が主体となる可能性があるが、湧別川流域以南 (宮編 1987、藁科 1994、長沼・鈴木編 2001、長沼他編 2002、鈴木他編 2004、北沢・山原編 2006、三浦他編 2008、阿部編 2012 等) では十勝・釧路地方や富良野地方、石狩低地帯南部地域を含む広い範囲で置戸所山産黒曜石が顕著である。置戸の一次産地を擁する常呂川流域に所在する本遺跡の石刃鍬石器群は、こうした状況に矛盾せず、置戸所山産黒曜石を主体とするのであろう。他方、赤褐色を呈して網目状や斑状の構造が入る黒曜石は 11 点 (12・15・16・17a~c・25・28・35・77a・b) ある。赤褐色を呈する黒曜石が必ずしも白滝産というわけではないが、両面加工の尖頭器 (17) や打製石斧 (28) 等の非石刃製石器や表面があまり新鮮ではない石刃 (35) は、白滝産の可能性が高いように思われる。なお、ごく小形の石刃の 4 点 (69・72~74) は光沢や透明感に乏しい灰色の黒曜石が用いられており、留辺蘂・丸瀬布産かもしれない。

上記の黒曜石製石器類のうち自然面が残るものは 13 点 (12.7%) で、非石刃製石器類 (21・22・27・28・77b・85) には少数ながら広く自然面が残るものが含まれるのに対し、石刃製石器 (19・34・38・39・41b・46・52)

の自然面の面積は僅かであるが、いずれも基本的に岩屑・角礫面からなる。北海道では、石刃鍬石器群の石刃生産に関わる原石材は黒曜石岩体付近の一次産地で採取される人頭大程度の岩屑・角礫によることが知られており（高倉 1998a、木村 2002）、本遺跡の石器群も同様であろう。すなわち、白滝産や留辺蘂・丸瀬布産の黒曜石を含む可能性があるものの、主に置戸所山産の岩屑・角礫に由来する黒曜石製石器類からなると推測される。

(2) 石器の製作と使用（第二章 Fig. 4～Fig. 12）

本資料の石刃鍬石器群は、そのほとんどが製品（ツール）であり、石器製作作業によって生じた石核や調整剥片といった残滓の類を基本的に欠いている。当該石器群の石刃製作技術に特徴的な石刃核やその打面再生・調整剥片だけでなく、ツールの二次加工等で生じる細片も非常に乏しい。また、14個体の接合資料が得られているが、礫片以外は折面接合によるものであり、剥離面接合は確認されていない。こうしたことから、この出土地点では、石器製作作業は行なわれず、他地点で製作された石器製品が搬入されたと考えられる。

これらの製品には、表面の線状痕、磨耗、縁辺の刃こぼれ状の微小剥離痕、先端側の衝撃損傷といった使用を窺わせる痕跡がしばしば観察されるが、それが著しいもの（28・76等）は少なく、特に石刃にはかなり新鮮な縁辺を保持するものが含まれる。そのため、こうした石器群の主な製作地点は出土地点からあまり離れていないと推測される。耕作・攪乱によって出土地点周辺の遺物や遺構の分布は不明確であるが、少なくともトコロチャシ跡遺跡群では他に石刃鍬石器群の集中は発見されていないので、当該石器群の石刃製作作業の痕跡が残るトコロ貝塚（駒井編 1963）のように、0.5～1km 程度の範囲にある遺跡は本資料の製作地点として有望であろう。

北海道の石刃鍬石器群では、石刃生産に基づく石器製作作業の痕跡が顕著な遺跡とそこから製品が搬入され石器製作作業の痕跡に乏しい遺跡に明瞭に二分される傾向が知られている（高倉 1998a）。前者の遺跡は、礫塊石器類や土器といった様々な遺物と竪穴住居址等の遺構も検出され、生業活動・居住生活の拠点としての様相が色濃く、十勝地方以外では基本的に縄文早期当時の海岸地域に立地する（高倉 1998b）。トコロ貝塚出土資料は前者（以下 I 類）の遺跡、トコロチャシ跡遺跡群出土資料は後者（以下 II 類）の遺跡とするのが妥当である。

(3) 石器の組成と形態

トコロチャシ跡遺跡群出土石器群の特徴を把握するために、II 類のうちある程度の数量の発掘調査出土遺物（ツール）を有する遺跡の組成を Table 10 にまとめた。I 類の遺跡によくみられる石錘に乏しいことを除いて各遺跡で組成のばらつきが大きく、今のところ類型化は難しいが、大まかにグルーピングしてみると、千歳市キウス 9 遺跡（三浦他編 2008）や北見市川東羽田遺跡（戸沢・鶴丸 1968・1971、宮編 1987）は、石刃鍬が大多数（50%以上）を占める遺跡である。主に表採資料からなる川東羽田遺跡の出土状況は不明瞭であるが、キウス 9 遺跡では広い面積から散漫に石刃鍬関連遺物が出土しており、

Table 10 主なⅡ類遺跡における石器製品（ツール）の組成

	石刃鍬	石鍬（広形石刃鍬含む）	尖頭器類	削器類	搔器	彫器	石刃類（部分加工含む）	その他の打製石器	打製石斧	磨製石斧	礫塊石器類	計（点数）	分布状況	備考
トコロチャシ跡遺跡群（50-95区）	13.3%	2.9%	4.8%	1.9%	1.9%	1.0%	52.4%	3.8%	2.9%	2.9%	12.4%	105	密集（約2㎡）	
川東羽田遺跡	69.0%	2.1%	1.0%	0.3%	1.0%	3.5%	22.0%	0.0%	0.0%	1.0%	0.0%	287	集中？（主に表採資料）	
キウス9遺跡	91.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	8.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	101	散漫（25,000㎡）	
西達布2遺跡	6.3%	0.0%	0.0%	28.1%	4.4%	18.8%	26.3%	2.5%	0.0%	6.9%	6.9%	160	比較的集中（約420㎡）	
上白滝6遺跡（Sb-5）	22.0%	12.0%	10.0%	24.0%	10.0%	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.0%	50	比較的集中（約130㎡）	
東山遺跡	4.2%	0.0%	0.0%	0.0%	2.4%	16.2%	66.5%	1.2%	0.0%	3.0%	6.6%	167	集中（約50㎡）	他に装身具1点
下幌呂1遺跡	7.3%	0.0%	0.0%	10.5%	2.9%	37.8%	38.8%	2.2%	0.0%	0.2%	0.2%	410	比較的集中（約1,400㎡）	

より小規模（10点以下）ながら同様に石刃鍬が散漫に出土する遺跡は多い。これらはやはり狩猟活動と深く結びついた遺跡と思われる。富良野市東山遺跡（斎藤他 1966）と鶴居村下幌呂1遺跡（阿部編 2012）は、石刃が最も多く（35%以上）、彫器がそれに次ぐ。富良野市西達布2遺跡（杉浦編 1989）と遠軽町上白滝6遺跡 Sb-5（鈴木他編 2004）は突出する器種を持たないが、前者では削器、石刃、彫器等の加工具類が比較的多い。

トコロチャシ跡遺跡群出土資料の組成は上記のいずれの遺跡とも様相を異にするが、石刃が多いという点では東山遺跡や下幌呂1遺跡に似る。両遺跡とも石刃製作作業の痕跡に乏しく石刃製石器の搬入を窺わせるものの、それぞれ1点ながら東山遺跡では石刃核原形、下幌呂1遺跡では石刃核破片が発見されており、トコロチャシ跡遺跡群出土資料と同じく近い地点で石刃製作が行なわれた可能性がある。湧別町湧別市川遺跡（木村編 1973 他）、北見市トコロ貝塚（駒井編 1963）、大空町豊里遺跡（大場・奥田 1960 他）、羅臼町オタフク岩遺跡第Ⅱ地点（涌坂編 1991）、帯広市大正7遺跡（北沢・山原編 2006）、浦幌町共栄B遺跡（後藤・大槻 1976）といった主要なⅠ類遺跡では一般的にツールにおける石刃の比率が高いこと（高倉（1998a）と北沢・山原編（2006）の集計に基づけば35%～75%）も考慮すると、Ⅰ類遺跡から比較的近くに位置するⅡ類遺跡では加工度の低い石刃が多くなる傾向があるのかもしれない。ただし、トコロチャシ跡遺跡群出土資料では石刃鍬石器群に特徴的な側刃形の彫器が稀であることは、東山遺跡や下幌呂1遺跡と大きく異なる。また、打製の斧形石器（打製石斧）がやや目立つのも本資料の特徴である。

なお、石刃鍬石器群に伴う幅広の石刃鍬として、川東羽田遺跡で「A形」と仮称された基部両側縁に抉りの入る形態のものが道内に散見される（戸沢・鶴丸 1968、木村編 1999、豊原・坂井 2002 等）。トコロチャシ跡遺跡群出土の広形石刃鍬は、川東羽田遺跡資料と幅（2～3cm）が一致するため同様の石刃を素材としていると推測されるが、A形石刃鍬（長さ5～6cm）よりも短寸（長さ3.3～4.6cm）で基部両側縁の抉りがなく明瞭な凹基をなす形態で、北海道では稀な遺物といえる。大正7遺跡（北沢・山原編 2006）の遺構外出土遺物等に僅かに類例がみられる。A形石刃鍬には使用痕分析によって軟らか

い物質（肉や生皮等）の cutting や sawing が推定された事例（岩瀬 2011）があるのに対し、本資料の広形石刃鋸が狩猟用刺突具であったことは間違いないであろうから、両者は機能的にも異なっていたと考えられる。

(4) まとめ

トコロチャシ跡遺跡群で出土した石刃鋸石器群の主体をなすのは、置戸所山産黒曜石（岩屑・角礫）を用いてトコロ貝塚のような比較的近い地点で製作された石刃を素材とした石器と考えられる。本資料の出土地点には石器製作作業の痕跡がなく、石器には多少の使用痕が観察される。

北海道における石刃鋸石器群の石刃剥離技法には、大形の道具・装置を要する槌子式も含みうるような極めて高度な押圧技法が想定される¹⁾。こうした石刃剥離技法は、滞在期間の短い地点における活動の中で展開するのは困難であり、狩猟採集民の自給自足的な社会経済では生業活動・居住生活の長期的な拠点で他の活動の時間の隙間に埋め込んで行なうのが最も効率的である（山田 2013）。結果として、当該石器群では、石刃核、打面再生剥片、稜付石刃をはじめとする石刃製作作業の痕跡を顕著に遺す遺跡（I 類）とそれ以外の遺跡（II 類）の対照性が明瞭になるのであろう。そうした意味で、石刃鋸石器群の石刃製作技術は、頻繁な居住地移動を伴う生活とは相性が悪く、ある程度定住的な居住システムの上で成り立つ技術である。一方、先にみたように II 類の遺跡はかなり多様な組成の変異を窺わせ、拠点的な遺跡（I 類）からの各種の兵站的な移動の発達を示唆するが、その中には非常に長距離に及ぶ移動が含まれていた可能性が高い（高倉 1998a）。多器種間での素材の共有や転用を可能とする石刃製石器はその供給源（素材製作地点）から離れた地点での携行・使用に優位性を発揮しやすく（佐藤 1995）、こうした長距離の兵站的移動にも有利であろう。

いまだ良好な資料は限られているものの、このようにある程度の定住的な拠点と長大な兵站線を有する居住・移動システムへの適合こそが、石刃鋸石器群の本質的な特徴なのではないかと予想される。それは、一般的な縄文石器群とも旧石器石器群とも異なる特徴であろう。そして、こうした居住・移動システムと、ことによると北海道の後期細石刃石器群以降の環日本海北部地域に継続された社会・集団の中間伝播的な様相²⁾が、広範な地域にわたる「石刃鋸文化」の伝播現象を読み解く鍵になるかもしれない。

トコロチャシ跡遺跡群では、石器製品が狭い範囲に集中して出土したことから墓址のような特殊な遺構の可能性も考慮したが、上述のような石刃鋸石器群の性質から石器組成（ほぼ製品のみが出土すること）による判断は難しく、周囲 3 方向に攪乱が及んでいるとはいえ土坑も検出されなかったため、現時点ではそのように考えていない。ただし、遺物分布の綿密な分析に基づいた他遺跡との比較検討は果たされておらず、今後の課題として残されている。また、トコロ貝塚出土資料とのより具体的な比較も興味深い課題である。

（山田 哲・中村雄紀）

2 石刃製作技術の分析

(1) 資料の概観

トコロチャシ跡遺跡群の石刃鍬石器群は当該石器群の例に漏れず石刃製作技術と関連する石器を主体とする。本稿ではトコロチャシ跡遺跡群出土石刃鍬石器群における石刃製作技術について分析するとともに、これを通して分かる石器群の特徴と性格について考察したい。対象となる石刃製作技術関連資料には石刃類 55 点 (43 個体)、石刃製石器 27 点 (21 個体) がある。この他石刃の一部の可能性のある資料が 4 点 (3 個体) (第二章 Fig. 12-81・84・86) あるが、細片のためここでは扱わない。

先述のとおり、本石器群は製品 (ツール) が多い一方で石核や調整剥片等に乏しく、主として他地点で製作された石器製品が搬入されたものと推測される。したがって本石器群から得られるのは石器製作工程の一部分を示す情報のみと考えられるので、以下では他の遺跡で出土した石器群と比較を行ないながら石刃製作技術について検討を行なう。

(2) 石刃の剥離工程

本石器群では石刃核や、石刃剥離過程を示す接合資料が存在しないことから、石刃製作技術を知る手がかりは個々の石刃にみられる属性に限定される。ここでは石刃の背面剥離痕構成と打面の種類について観察を行なった。

まず、石刃類 43 個体について背面構成を、高倉 (1997) に基づいて以下のように分類した。すなわち、背面に自然面のみられるものを I 類、自然面のみられないものを II 類と大別し、さらに表のように Ia~Ig、IIa~IIg 類に細分した (Table 11)。

本来は完形品を対象とすべきであるが、本石器群に含まれる石刃は大部分が欠損品である。高倉 (前掲) 同様に背面が十分に観察可能と判断される全長 4cm 以上のもの 26 個体を対象とすると、IIa 類が約 65% を占め、Ib 類と合わせて腹面と同一の加撃方向のみが観察されるものが 8 割を占める。その他、Ie・If・IIb・IId 類、さらに長さ 4cm 未満のものも含めると Ic 類に分類されるものが存在するが、これらに観察される腹面の剥離痕に対して横位、または逆方向の剥離痕は石刃剥離によるものではなく石核調整によるものの可能性が高い。こうした石核調整の剥離痕をもつ資料のうち、一次稜付石刃に分類さ

Table 11 石刃の背面剥離痕構成

		Ia	Ib	Ic	Id	Ie	If	Ig	IIa	IIb	IIc	IId	Ile	IIf	IIG	
背面の 分類	自然面	有	有	有	有	有	有	有	—	—	—	—	—	—	—	計
	背面剥離痕の 剥離方向 (腹面 に対して)	同一方向	—	有	—	—	有	有	有	有	有	有	—	—	—	
		横位方向	—	—	有	—	有	—	有	—	有	—	有	有	—	
逆方向		—	—	—	有	—	有	有	—	—	有	有	—	有	有	
石刃の 点数・ 割合	長さ 4cm 以上の資料		4			1	1		17	1		2				26
		0.0%	15.4%	0.0%	0.0%	3.8%	3.8%	0.0%	65.4%	3.8%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	全ての資料		4	1		1	1		32	2		2				43
		0.0%	9.3%	2.3%	0.0%	2.3%	2.3%	0.0%	74.4%	4.7%	0.0%	4.7%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%

れるものが1点(第二章 Fig.10-56)があるが、これは唯一蛋白石製の石刃で例外的な資料といえる。それ以外は全て二次稜付石刃である。

次に、石刃の打面については、打面が残っている石刃は17個体であり、全て複剥離打面であった。石刃鍬石器群における石刃剥離は、基本的に単設打面で、円錐形および円筒形の石刃核からなされることが知られている(木村1976、高倉1997・1998a、山原2000)。高倉(1997・1998a)によればこの石刃剥離工程は次のようにまとめられる。最初に原石材に対し横位の剥離によって稜形成を行ない、打面調整の後、稜付石刃を剥離し、以後連続的に石刃の剥離を行なう。石刃剥離の進行に伴い、打面調整や稜調整が加えられることがある。打面調整は頻繁に行なわれており、石刃の観察からも豊里、湧別市川、オタフク岩、共栄B、西達布2、東山の各遺跡の石器群に含まれる石刃について、複剥離打面が約93～100%を占めることが示されている(高倉1998a)。

本石器群の石刃類に観察される特徴は、上記の石刃鍬石器群の剥離工程に概ね合致するものであり、蛋白石製の稜付石刃1点を含むことや資料数が少ないことから単純な比較は難しいが、同様の剥離工程に位置づけられそうである。打面転移を伴う石刃剥離の痕跡は認められず、打面の状態が分かる資料から判断する限り打面調整の痕跡が高い頻度で認められる。石核調整の痕跡と考えられる剥離痕は第二章 Fig. 8-35・Fig. 9-40・41・48にみられるように腹面の剥離方向に対し横位のもが顕著である。第二章 Fig. 5-19の素材石刃は石核の下方に向かって収斂する円錐形に近い形態の石核から剥離された可能性が高く、一方第二章 Fig. 8-34のように末端に岩屑面のある石刃からは底部に岩屑面を残した円筒形の石核の存在が示唆される。

(3) 石刃のサイズ

石刃鍬石器群の石刃製作技術について、剥離工程とともに注目されてきたのが製作されている石刃のサイズである。

石刃鍬石器群の剥片石器には石刃素材のものとは不定形剥片素材のものがあるが、石刃素材のものについては器種によって異なるサイズの石刃が用いられていたことが知られており(駒井編1963:160-162、木村1976、藤本1992、高倉1997)、幅の狭い小形の石刃が石刃鍬、相対的に幅広の石刃が削器や彫器の素材となる傾向が指摘されている。そして、これに対応して石刃製作の段階で大小の石刃が別個の剥離工程で作分けられているとする説と、一連の石刃剥離工程の中で石核リダクションに伴って大小の石刃が製作されているという2つの説が唱えられてきた。前者の説は駒井編(1963:160-162)でトコロ貝塚Fトレンチ貝層下の石器群の分析から示唆されたのをはじめ、藤本(1992)ではノヴォペトロフカ遺跡の資料から大小の石刃がそれぞれ異なる石刃剥離技術により製作されていたと推測するとともに、複数の石器群の比較から相対的に小さい石刃の製作システムのみ石器群と大小2種類の石刃製作システムをもつ石器群が存在すると解釈している。これに対し、山原(2000)では、新吉野台遺跡出土石器群の分析から大小の石刃の存在は石刃核の消費に応じて異なる規格の石刃が剥離された結果であろうと述べており、大正7遺跡の石刃鍬石器群についても同様のことが指摘されている(北沢・山原編

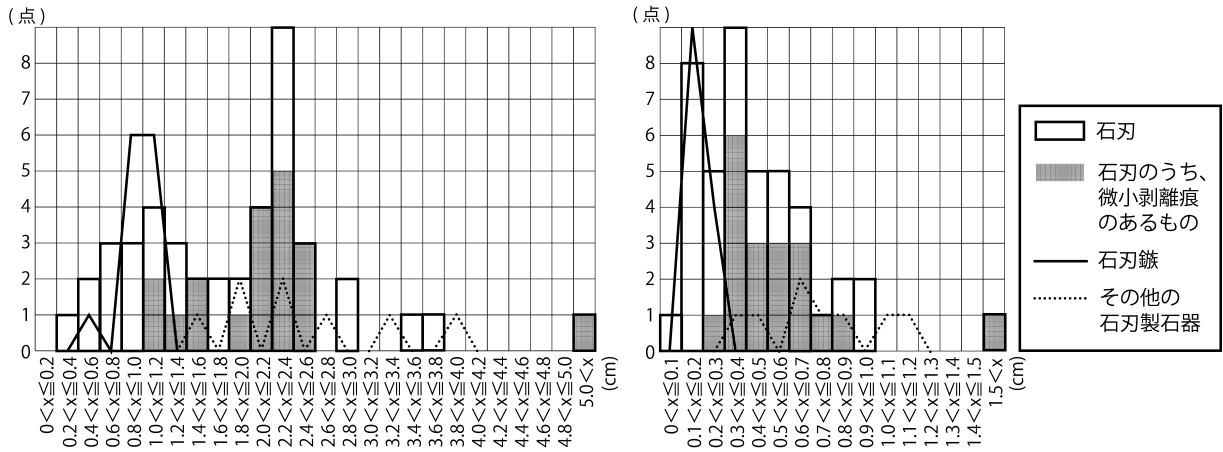


Fig. 84 トコロチャシ跡遺跡群出土石刃鋸石器群の石刃及び石刃製石器のサイズ（左：幅、右：厚さ）

2006)。

以下ではこうした観点を踏まえ、トコロチャシ跡遺跡群石刃鋸石器群の石刃のサイズ、および石刃製石器との関係について検討する。石刃のサイズの指標としては長さ・幅・厚さがあるが、欠損品が多いことから長さについては十分なデータが得にくいため幅・厚さが主たる検討対象となる。

参考までに石刃の長さについてまとめておくと、8割以上が残存していると推定されるもので最長が18.9cm、最短が5.0cmである。後者は幅1.1cmの石刃だが、破片には幅がその半分以下のものも存在するので、最小の石刃はさらに短かったと想定される。

次に幅について、石刃類43個体を対象として頻度分布図を作成すると、1.2cm前後に緩やかなピークがあり、続いて2.4cm前後により顕著なピークをもつ2モードの分布となる (Fig. 1左)。ほとんどの資料が1.0~3.0cmの範囲に収まり、最小で0.4cmである。最大では幅5.5cmと極端に幅広のものがある (第二章 Fig. 8-39) が、これは作業面調整に関わると考えられるもので例外的な事例といえるかもしれない。幅を基準とすると1.4cmまでの小形品、そこから2.6cm程度までの中形品があり、そしてそれを超える大きさの大形品が少数あるという構成となる。

また、厚さは最小0.1cm、最大1.8cmで、0.1cm台と0.4cm前後との2つにピークがあり以後漸減するという頻度分布となり (Fig. 84右)、幅の場合と同様のパターンが指摘できる。

これに対し、石刃素材の石器としては石刃鋸、広形石刃鋸、尖頭器、基部加工尖頭器、搔器、彫器、楔形石器の合計21個体がある。これら石刃製石器の幅を比較してみると、石刃鋸(13個体)は幅0.6cmが1点ある他は幅0.9cm~1.2cm、厚さ0.2~0.3cmであるのに対し、その他の石器では最小が幅1.5cmの搔器、最大が幅3.9cmの尖頭器で厚さが0.4~1.2cmである。石刃鋸については通例両側縁から二次加工が施されていることから素材石刃は一回り幅が広がったはずだが、厚さの違いも考慮すれば石刃鋸にはその他の石器より小形の石刃が利用されているとみなすことができる。石刃の幅の測定値では1.2cm前後と2.4cm前後とにピークがあったが、前者が石刃鋸、後者がその他の石器に対応するようにみえる。

また、本石器群の石刃43個体中19個体の側縁に微小剥離痕が観察される。こうした微小剥離痕のあ

る石刃について幅を検討すると、最小が 1.1cm、最大が 5.5cm であるが、概ね 2 つ目のピーク付近のものに集中する傾向があり、幅 1.8cm 超 2.6cm 以下の石刃の 7 割超に微小剥離痕が観察される。厚さでも概ね 2 つ目のピークである 0.4cm 付近のものが多く、石刃鏃に使用されている厚さ 0.2cm 前後のものに比べて厚身の傾向がある。これらの石刃に認められる微小剥離痕は使用に伴って生じたものか必ずしも定かでないが、ある程度相関があると推測されるので、道具として使用されている石刃は石刃鏃の素材より大形のものであるという傾向があるといえよう。

以上のことから、本石器群は石刃鏃とその素材に対応するサイズの小形の石刃、そしてその他の用途の石刃および石刃製石器に対応する相対的に大形の石刃の 2 群から構成されることが想定しうる。

(4) 石刃鏃石器群の石刃製作システムとトコロチャシ跡遺跡群出土の石器群

本石器群の石刃は打面調整を伴う単設打面の石刃核から剥離されたものと推測され、この点では高倉 (1998a) 等で分析されている北海道の石刃鏃石器群と共通の石刃製作技術をもつ。さらにこれら石刃は大小 2 群で構成されている可能性を指摘したが、本節冒頭でも触れたように素材製作の痕跡が乏しいことから、石刃鏃石器群の石器製作システムの中に位置づけるには他の石刃鏃石器群との対比検討が不可欠である。

Fig. 85・Fig. 86 は北海道の石刃鏃石器群に含まれる石刃の幅・厚さの構成を遺跡別に示したものである。幅は 0.2cm ごと、厚さは 0.1cm ごとに百分率で示されている。豊里遺跡、湧別市川遺跡、オタフク岩遺跡、共栄 B 遺跡、西達布 2 遺跡、東山遺跡は高倉 (1998a)、トコロ貝塚 F トレンチは駒井編 (1963) のデータに基づき、これにトコロチャシ跡遺跡群出土石器群のデータを重ねた。先に触れられているとおり北海道の石刃鏃石器群では、石刃生産に基づく石器製作作業の痕跡が顕著な遺跡と製品が搬入され石器製作作業の痕跡に乏しい遺跡に明瞭に二分されることが指摘されている (高倉 1998a) が、この類型区分にしたがえば、前者には豊里遺跡、湧別市川遺跡、オタフク岩遺跡、共栄 B 遺跡、トコロ貝塚、後者には西達布 2 遺跡、東山遺跡およびトコロチャシ跡遺跡群が該当する。

トコロチャシ跡遺跡群出土の石刃サイズは、先述のとおり石刃鏃に近いサイズの小形の石刃と、その他の石刃・石刃製石器に対応する大形の石刃との 2 つのピークをもつ構成を示す。この石刃サイズの割合を石刃の幅について他の石刃鏃石器群と比較した場合、トコロチャシ跡遺跡群の石器群はかなり特徴的な構成となっていることがわかる。幅 0.8cm 以下の石刃がやや多い傾向にはあるが、1.2cm 前後の石刃が多い点は他の石器群と類似する。しかし、その一方で他の石器群の石刃の多くの割合を占める 1.4～2.0cm の石刃が少なく、逆に他の石器群では相対的に少ない 2.4cm 前後の石刃がトコロチャシ跡遺跡群の石器群では最も多くなっている。なお、石刃の厚さの構成割合を比較した場合には幅の場合ほど極端なパターンの違いは見出せないが、トコロチャシ跡遺跡群の石器群では 2 つのピークが相対的に顕著なかたちで現れている。

ところで、石刃鏃石器群の石刃製作システムに関しては大小の石刃が作り分けられているとする説と、石核リダクションの過程で石刃サイズに変異が生じているとする説があることを紹介したが、前者の説

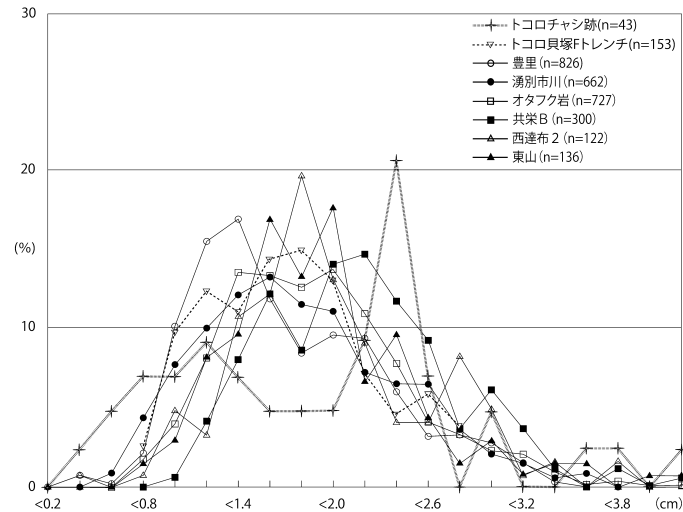


Fig. 85 石刃鋸石器群の石刃の幅³⁾

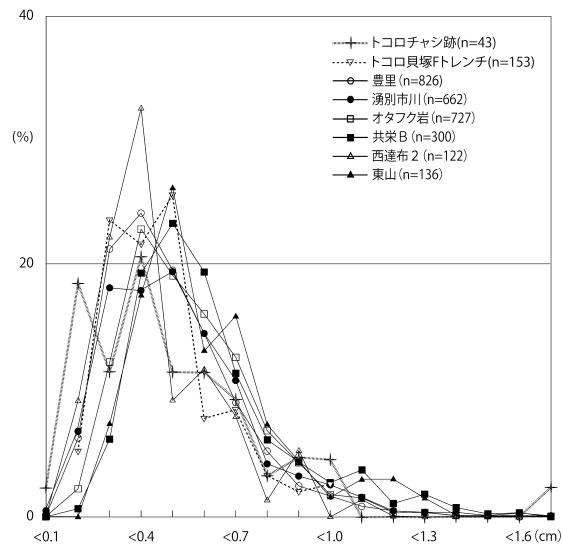


Fig. 86 石刃鋸石器群の石刃の厚さ⁴⁾

においては、石刃サイズが大小2モードの構成を示すことが根拠の1つとされていた（駒井編 1963、藤本 1992）。しかし、豊里遺跡、湧別市川遺跡、オタフク岩遺跡、共栄B遺跡、トコロ貝塚といった石刃の製作地と考えられる遺跡の石刃の計測データからはそれほど明瞭な大小の石刃の作り分けを看取することはできない。総じて幅 1.4~2.0cm 前後の石刃が多い一方で幅 1.0cm 以下から 3.0cm 以上のものまで石刃のサイズにかなり変異があるのは確かであるが、おそらくは1個の石刃核から製作される石刃のサイズに石核の消費に応じた変異があったのと同時に、石刃核のサイズ等にもある程度は幅があり、それに依りて石刃のサイズにばらつきがあった結果として解釈可能であろう。

こうした石刃製作システムが背景にあるとすると、トコロチャシ跡遺跡群の石器群に含まれる石刃は平均的な組成から外れた、偏った構成をもっているといえる。精製品といえるような石刃鋸が多く含まれ、石刃類に特定の範囲の幅のものが多くいることを考慮すると、この石器群は特定の目的をもって選別さ

れたものである可能性が高い。したがって、ここにみられる石刃のサイズの偏りは製作地で製作された石刃の内容ではなく、そこから意図的に選別された結果が大きく影響したと考えるほうが妥当であろう。なお、トコロチャシ跡遺跡群と同様に石器製作の痕跡が乏しいとされる西達布2遺跡、東山遺跡の石刃については、これほど顕著な2モードのパターンとはなっていない。西達布2遺跡、東山遺跡では石刃鏃に対応しそうな1.0cm台前半の石刃が少ない一方で、トコロチャシ跡遺跡群で僅かしか出土していない彫器が多く出土しているなど、石器群の組成に違いがあることを考慮すると、これらの遺跡では必要とする石刃の選別の基準や度合いがトコロチャシ跡遺跡群の場合とは異なっていた可能性がある。トコロチャシ跡遺跡群の石器群の目的や機能は今回の分析では明らかにしえないが、加工度の低い石刃類までもが特に選別された資料からなる、特殊な内容をもつ石器群であることが窺える。

(中村雄紀・山田 哲)

註

- 1) ペルグラン (2007a) によれば、黒曜石製石刃の押圧剥離について、梃子式の技法は概ね幅1.8cm以上の石刃に有効で、特に幅2.6cm以上では梃子を用いない押圧剥離が困難になることが示されている。北海道の石刃鏃石器群で主体となるのは幅2cm前後の石刃であるが、幅2.6cm以上の石刃も確実に含まれる。こうした梃子式押圧技法にはかなり大がかりな固定具や押圧具を組み合わせた装置が必要となる(ペルグラン 2007a・b)。
- 2) 文化の伝播現象について、異なる文化を有する集団および地域の間での伝播を「外的伝播(外的移住伝播・外的接触伝播)」、基本的に同じ文化を有する集団および地域内での伝播を「内的伝播」、内的伝播の枠組みで理解されるような同様の文化を持っていた集団が外的伝播の枠組みで理解される異なる複数の集団へと分化する移行期のような中間的な状態での伝播を「中間伝播」と呼んだ(山田 2008)。なお、ここでいう文化とは、「ヒトからヒトへ後天的に伝達される情報」のことである。
- 3) Fig. 85のトコロチャシ跡は本報告、トコロ貝塚は駒井編 1963、その他は高倉 1998aによる。トコロ貝塚のデータは0.8cm以下、2.6cm以上については0.2cm単位で区分したデータがないため、仮にそれぞれのデータを0.6~0.8cm、2.6~2.8cmの位置に示している。
- 4) Fig. 86のトコロチャシ跡は本報告、トコロ貝塚は駒井編 1963、その他は高倉 1998aによる。トコロ貝塚のデータは0.2cm以下、0.9cm以上については0.1cm単位で区分したデータがないため、仮にそれぞれのデータを0.1~0.2cm、0.9~1.0cmの位置に示している。

引用文献

- 阿部明義編 2012 『鶴居村 下幌呂1遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 岩瀬 彬 2011 「石刃鏃石器群を対象とした石器使用痕分析—北海道川東羽田遺跡を対象に—」『明治大学博物館研究報告』16:1-19
- 大場利夫・奥田 寛 1960 『女満別遺跡』女満別町

- 北沢 実・山原敏朗編 2006 『帯広・大正遺跡群 2』帯広市教育委員会
- 木村英明 1976 「石刃鍬文化について」『江上波夫教授古稀記念論集 考古・美術編』
- 木村英明 2002 「北海道地域における黒曜石研究の展望―特に白滝黒曜石原産地を中心に―」『黒曜石文化研究』
創刊号：69-82
- 木村英明編 1973 『湧別市川遺跡』湧別市川遺跡調査団・湧別町教育委員会
- 木村英明編 1999 『北東アジアにおける石刃鍬文化』平成10年度文部省科学研究費補助金特定領域研究（A1）
研究課題番号 09208103 研究成果報告書
- 後藤秀彦・大槻日出男 1976 『共栄 B 遺跡』浦幌町教育委員会
- 駒井和愛編 1963 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 上巻』東京大学文学部
- 斎藤武一・有沢一則・岩谷朝吉・松下 亘 1966 『富良野東山―北海道富良野町の石刃鍬文化の遺跡―』富良野町教育委員会・富良野町東山地区郷土研究会
- 佐藤宏之 1995 「技術的組織・変形論・石材受給―下総台地後期旧石器時代の社会生態学的考察―」『考古学研究』42-1：27-53
- 杉浦重信編 1989 『西達布 2 遺跡』富良野市教育委員会
- 鈴木宏行・直江康雄・長沼 孝編 2004 『白滝遺跡群 IV』北海道埋蔵文化財センター
- 高倉 純 1997 「石刃鍬石器群における石刃剥離技術―オタフク岩遺跡第 II 地点出土石器群の分析から―」『北海道考古学』33：1-17
- 高倉 純 1998a 「北海道における石刃鍬石器群の研究―移動・居住形態の検討を中心に―」『考古学研究』44-4：55-78
- 高倉 純 1998b 「石刃鍬石器群の遺跡立地とその背景―北海道東部の状況から―」『北大史学』38：1-23
- 戸沢充則・鶴丸俊明 1968 「北海道川東羽田発見の石刃鍬とその遺跡」『考古学集刊』4-2：1-18
- 戸沢充則・鶴丸俊明 1971 「北海道川東羽田発見の石刃鍬とその遺跡（第二次報告）」『考古学集刊』4-4：29-36
- 豊原熙司・坂井通子 2002 「石刃鍬とかかわりをもつ遺跡―釧路川中流域（標茶町）―」『北方探究』4：16-37
- 長沼 孝・鈴木宏行編 2001 『白滝遺跡群 II』北海道埋蔵文化財センター
- 長沼 孝・鈴木宏行・直江康雄編 2002 『白滝遺跡群 III』北海道埋蔵文化財センター
- 藤本 強 1992 「アムール河流域、ノヴォペトロフカ遺跡の石刃鍬と石刃」『平井尚志先生古稀記念考古学論攷』第 I 集：139-157
- ペルグラン、ジャック・山中一郎（翻訳）2007a 「押圧剥片剥離の実験研究―最小から最大へ―」『古代文化』58-4：1-16
- ペルグラン、ジャック・高橋章司（翻訳）2007b 「旧世界の石刃製作技術―中米の黒曜石製石器製作技術への見通しと適用―」『古代文化』58-4：110-130
- 三浦正人・広田良成・愛場和人編 2008 『千歳市 キウス 9 遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 宮 宏明編 1987 『川東羽田遺跡』北見市

第六章 考察と分析

- 明治大学古文化財研究所編 2009 『蛍光 X 線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定－基礎データ集 1－』
- 山田 哲 2008 「北海道の細石刃石器群をめぐる伝播現象」『伝播を巡る構造変動－国府石器群と細石刃石器群－』東京大学公開シンポジウム予稿集：60-77
- 山田 哲 2013 「石材資源調達の経済学－石器インダストリーの空間配置と技術に関する考察－」『考古学研究』60-3：56-76
- 山原敏朗 2000 「浦幌町新吉野台細石器遺跡の石器資料について」『帯広百年記念館紀要』18：57-72
- 涌坂周一編 1991 『オタフク岩遺跡』羅臼町教育委員会
- 藁科哲男 1994 「東山遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析」『富良野市郷土館研究報告』2：23-40

第二節 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点出土鉄器の金属学的調査

大澤正己

オホーツク文化貼付文期に属するトコロチャシ跡遺跡オホーツク地点（東大考古学研究室・常呂実習施設編 2012）出土の3点の鉄器（曲手刀子（前掲書：Fig. 58-6）、片区刀子（同：Fig. 128-8）、鉤状鉄製品（同：Fig. 128-1））を調査して、次の点が明らかになった。

<1>

3点の鉄器は、低温還元直接製鋼法にもとづく塊錬鉄素材である。材質は軟鋼で、いわゆる低炭素鋼（ $<0.20\% C$ ）クラスである。製鉄原料は鉄中の非金属介在物（鉄鋼中に介在する固形体の非金属性不純物、つまり鉄やマンガン、珪素および燐などの酸化物、硫化物、珪酸塩などを総称した物質）に酸化第1鉄（FeO）のウスタイトとウルボスピネル（Ulvöspinel： $2FeO \cdot TiO_2$ ）などを含有するところから砂鉄系が想定される。ただし曲手刀子からはチタン（Ti）分は検出できなかった。砂鉄系廃材からのリサイクル品の可能性をもつ。

<2>

曲手刀子：造りは粗く、折り返し鍛接線は消化しきれずに残し心金フェライト（Ferrite：純鉄）は粗大化で、皮金側はパーライト（Pearlite：フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織）を少量検出する。材質強化の浸炭処理の可能性が窺われる。ただし、皮金の大部分は腐食を受けて断定は出来ない。

<3>

片区刀子：造りは丁寧で、折り返し鍛接線はよく密着し、心金はフェライト、皮金側は炭素量0.20%前後が推定される。合せ鍛えた後に焼なましが施されている。

<4>

鉤状鉄製品：折り返し鍛接線をもつ板からコの字状に曲げ加工が施されて棒状素材が造られる。これを弯曲させて鉤とした製品。折り返し時には酸化防止の粘土汁の塗布はなく鉄肌に酸化第1鉄（FeO）のウスタイトを大量に発生させる。軟質材（ $<0.1\% C$ ）の強度向上を図った意図的な狙いであれば興味深い製品となる。断面の流線状重層模様は過去に類例のない製品。

以上3点の鉄製品は青森・秋田県方面からの搬入品と考えられる。

引用文献

東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設編 2012 『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』東京大学大学院人文社会系研究科

Table 12 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物 No.	遺物名称	推定年代	磁着度	メタル度	調査項目							備考	
								マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度		カロリー
TCO-1	トコロチャシ跡遺跡 オホーツク地点	7号竪穴 エオ区 4層	No.3 (230)	曲手刀子	8世紀後半～ 9世紀前半			○	○	○		○				
TCO-2	トコロチャシ跡遺跡 オホーツク地点	9号竪穴 ウ区 4層	No.7238	片区刀子				○	○	○		○				
TCO-3	トコロチャシ跡遺跡 オホーツク地点	9 c号竪穴 ウ区 床面	No.9019	鉤状鉄製品				○	○	○		○				

Table 13 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	所見
TCO-1	トコロチャシ跡遺跡 オホーツク地点	曲手刀子	8世紀後半～ 9世紀前半	介在物：W 主体、Fe+Pe、鍛接密着度悪い	低温還元直接製鋼法、介在物から Ti 未検出、廃材転用の浸炭の可能性
TCO-2		片区刀子		介在物：U 系 +W、Fe+Pe、鍛接良好	低温還元直接製鋼法、砂鉄原料、心金：フェライト単相、皮金 0.2% C、合せ鍛え
TCO-3		鉤状鉄製品		介在物：U 系 +W、Fe+Pe、鉄肌に W 大量晶出、鍛接加工粗雑	低温還元直接製鋼法、砂鉄原料、鍛接材をコの字状に曲げ加工した棒が素材

W : Wüstite(FeO) U : Ulvöspinel(2FeO·TiO₂) Fe : Ferrite (純鉄もしくはα鉄)
 Pe : Pearlite (フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織)

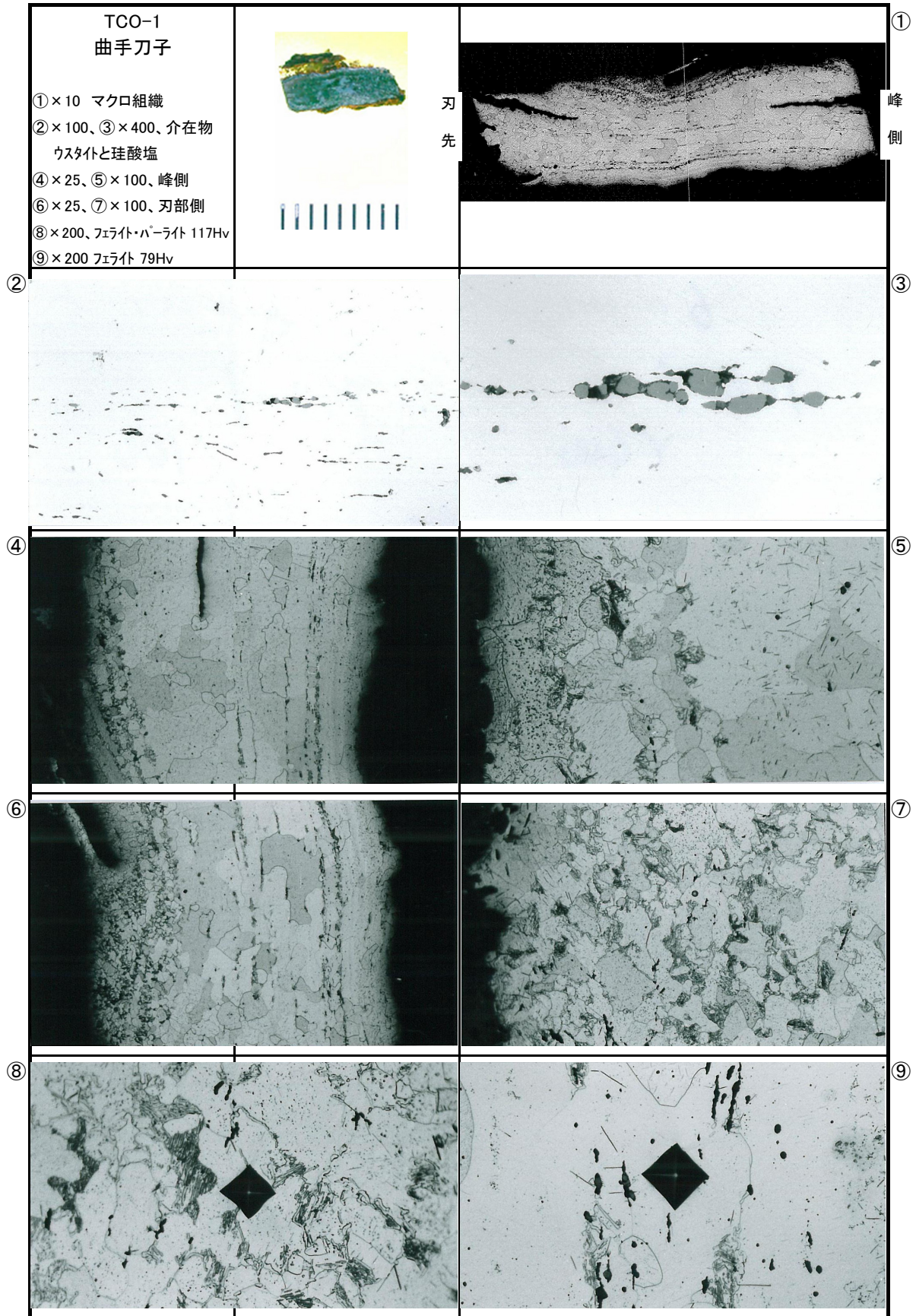


Fig. 87 曲手刀子の顕微鏡組織

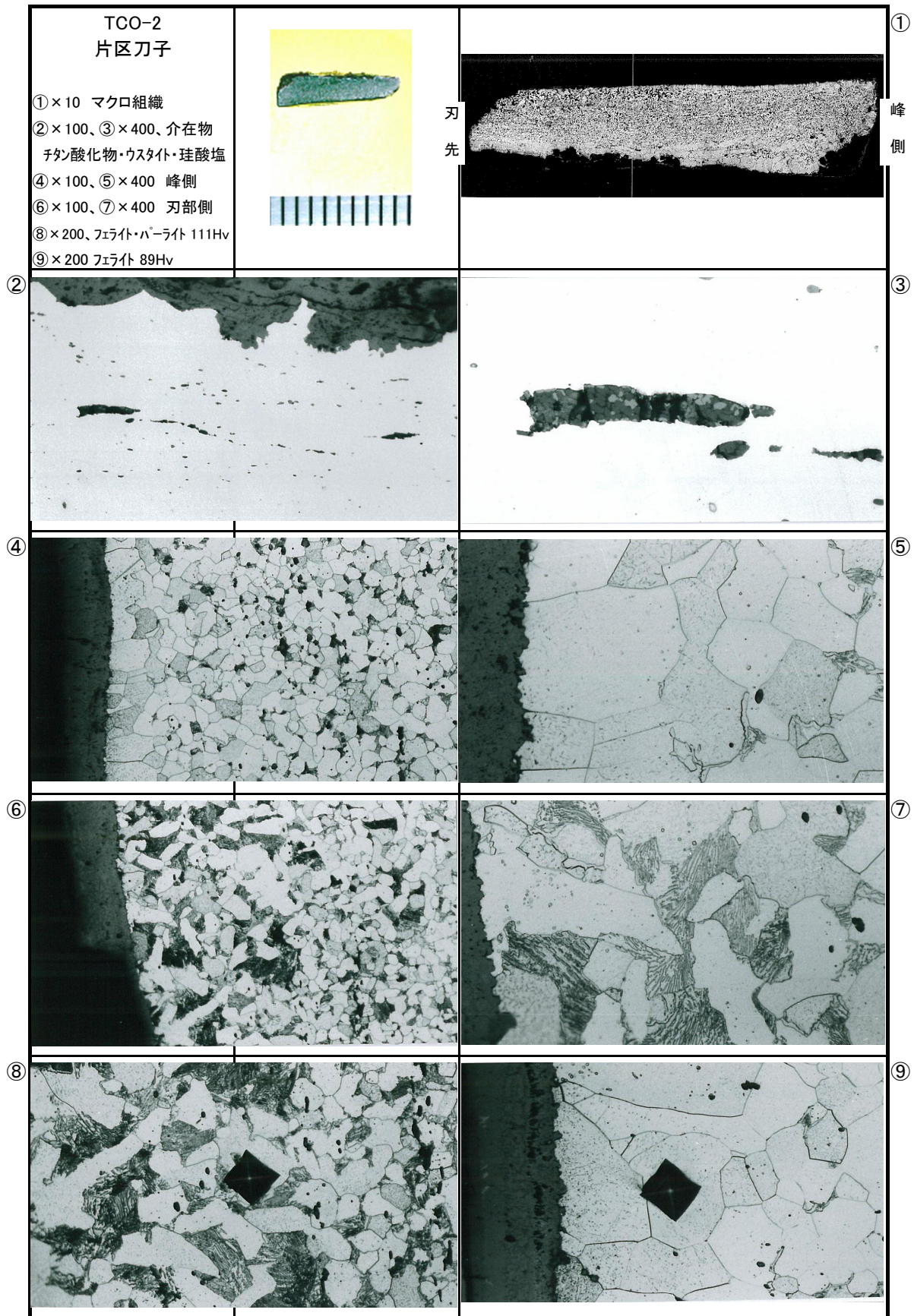


Fig. 88 片区刀子の顕微鏡組織

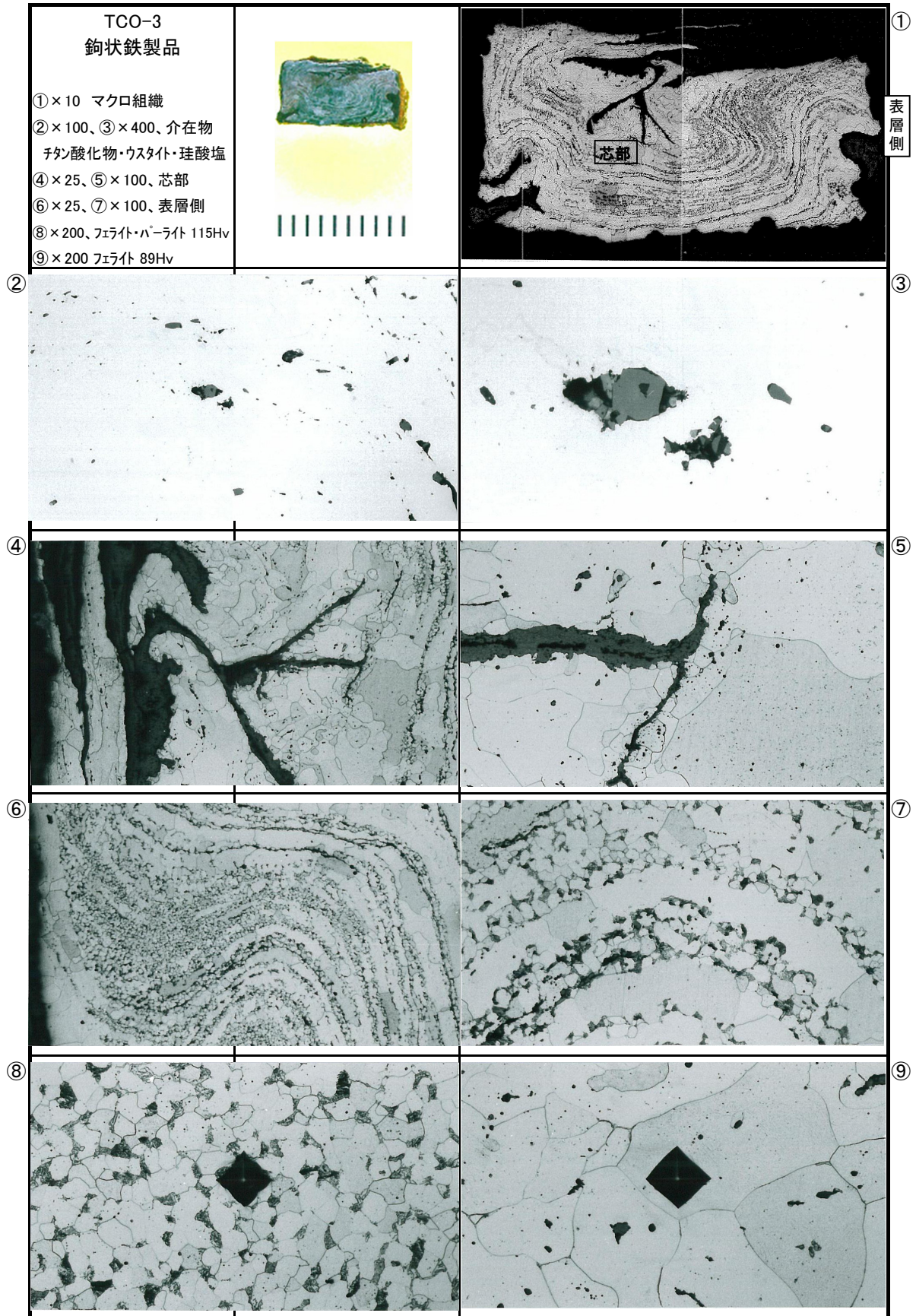


Fig. 89 鉤状鉄製品の顕微鏡組織

第三節 トコロチャシ跡遺跡の動物遺体

佐藤孝雄・吉永亜紀子

1 はじめに

縄文時代早期からアイヌ文化期にかけての複合遺跡たるトコロチャシ跡からは、これまでに膨大な量の動物遺体が発掘されている。筆者の一人である佐藤は、既にそのうちオホーツク地点の7号、9号、10号竪穴に伴う脊椎動物遺体について概要を報告した（佐藤 2012）。本稿では、その折扱えなかったオホーツク地点の8号竪穴・Hトレンチ、竪穴群南側に位置するチャシ壕内・同外縁の出土資料について報告する。前二者は、それぞれ2000年・2007年に発掘された主にオホーツク文化期に帰属する遺体群。後二者は2008年および2009年の調査時に出土したアイヌ文化期の遺体群に当たる。

2 資料と方法

上記遺体群のうち、Hトレンチはすべて発掘時目視によって発見された資料である。一方、8号竪穴およびチャシ壕内の資料については、目視による発見に加え2mm目のフルイによって採集された資料も含み、魚骨の場合、特に篩別資料が多数を占める。慶應義塾大学民族学考古学研究所蔵の現生骨格標本コレクションと照合、目視に加え一部デジタルマイクロスコープ（Dino-Lite Premier）も併用して同定・観察を進めた結果、それらには、貝類8種類、鳥類7種類、魚類12種類、哺乳類19種類からなる計44分類群の遺体が含まれていることを確認するに至った。

同分類群の内容と出土コンテキスト別に集計・算出した同定標本数（NISP）・最小個体数（MNI）・最小動物単位数（MAU）はTable 14～16に示した通りとなる。表中に示した各分類群の最小個体数（MNI）・最小動物単位数（MAU）は、残存状況に加え可能な限りサイズや成長段階の違いも考慮の上算出し、その際、二枚貝・脊椎動物遺体の場合、左右の違いも区別した。

同定・観察に当たり、鳥類・哺乳類の四肢長骨については、近位部・骨幹部・遠位部といった残存箇所、また哺乳類の上・下顎骨の場合、残存する歯槽や植立歯の記録にも努めた。加えて性的二型の顕著なヒグマ、オットセイの犬歯に関しては、デジタルノギス（NTO12P-15PMX, Mitsutoyo）で歯冠基部の近遠心径（CW）・頬舌径（CT）も計測した。Table 17～44には、各同定標本の内訳と、それら観察所見・計測結果を纏めた。同表中「点数」欄にトーンをかけた標本は被熱資料。「破片」と付記した標本は、欠損が著しく、それぞれ同定部位・箇所を7割以上欠く資料に当たる。以下、各表の内容を踏まえ、順次各動物遺体群の概要を記しておく。

3 8号竪穴出土動物遺体

8号竪穴の出土遺体群は、(1)「奥壁部骨塚」と(2)「開口部骨塚」を構成する資料、(3)床面および周溝ほか住居内遺構から発見された資料、(4)住居内覆土の出土資料に大別される。覆土出土資料に一部アイヌ文化期の資料も含まれている可能性があるが、前三者はいずれもオホーツク文化期の所産とみてよい。

(1) 奥壁部骨塚出土遺体群

「骨塚」を構成する遺体として取り上げられていた資料は4,186点。いずれも全体もしくは一部に被熱痕をもつそれらには、著しく収縮を来した資料も含まれていた。そのうち4,151点までを占めたのは哺乳類の遺体にほかならない。哺乳類種としては、ヒグマ、エゾタヌキ、キタキツネ、オットセイ、ワモンアザラシの5種を同定することができ、特にヒグマとエゾタヌキにそれぞれ7個体分、8個体分の下顎骨を認めることができた。エゾタヌキの遺体については、出土部位が頭骨へ著しい偏りを示した点が注目に値しよう。同種の場合、左下顎骨に8個体分の資料が得られていたにもかかわらず、四肢骨・体幹骨にはそれぞれ1個体分の資料を見出せたのみであった。一方、ヒグマについては、左寛骨に頭骨をしのぐ9個体分の資料が得られた。もっとも、同種についても四肢長骨は少なく、体幹骨も1個体分しか得られていないため、やはり頭骨を中心とする集積が行われていた様子が窺える。

オットセイについては、犬歯の形状とサイズからいずれも雄成獣の資料とみてよい。陸獣骨・海獣骨を問わずカットマーク等の解体痕をもつ資料も多数認められたが、破損が激しいことも手伝ってか、いずれの種に関しても穿孔もつ頭蓋骨は確認できなかった。獣骨のほか鳥類の骨も31点採集されていたものの、破損が著しく種の特定に至らなかった。なお、魚骨についてはイトウの椎体2点とサケ属の椎体1点を見出せたにすぎない。

(2) 開口部骨塚出土遺体群

開口部の骨塚および同周辺の出土遺体として採集されていた資料は164点。それらもすべて被熱痕をもつ資料であった。アザラシ科の尾椎等も少量含まれていたが、資料の大多数はヒグマの四肢・体幹骨とみてよい。

(3) 床面および付属遺構出土遺体群

骨塚以外の床面出土資料は611点、うち576点が哺乳類遺体に当たる。陸獣骨の主体をやはりヒグマ、エゾタヌキの資料が占める点は、それらの一部に元来「骨塚」を構成していた遺体群が含まれている可能性を窺わせる。もっとも、床面および付属遺構の出土遺体群には、鱈脚類により多くの資料が得られている点など、骨塚のそれと異なる特徴も認められる。特にオットセイには雄成獣の頭骨、四肢骨にそれぞれ6個体、7個体分に由来する資料を確認することができた。

鳥類遺体の総数は32点。イ区からウ属2個体分を含む9点の資料が採集されていた点に鑑みれば、同区にも鳥類を主体とする小規模な骨塚が形成されていた可能性を考慮する必要がある。なお、魚骨に関しては、イトウの椎骨3点が含まれていた。

(4) 覆土出土遺体群

覆土出土遺体群は592点。うち103点は1層、余す489点が2層下部からの出土資料に当たる。2層下部の資料は被熱したヒグマ、鱈脚類の頭骨、四肢骨の破片であり、元来床面もしくは骨塚に帰属させるべき資料かもしれない。一方、1層の資料にはヒグマ四肢骨を中心とする被熱資料9点、エゾシカの上顎左前臼歯1点も含まれていたものの、その多くが被熱痕をもたない鱈脚類遺体によって占められていた。23点を確認したアザラシ科の遺体には、ゴマフアザラシに加え、ワモンアザラシ、アゴヒゲアザラシの資料も含まれていた。またオットセイの遺体に関しては37点を数え、左右の下顎骨に4個体分の資料を見出した。犬歯の形状と歯冠計測値から、同下顎骨が性成熟した雄の資料であることは疑う余地がない。なお、1層の出土資料にはこのほかブリ属の骨を含む魚骨6点、鳥骨1点も含まれていた。

4 H トレンチの動物遺体群

竪穴群の南側に位置するHトレンチから採集された遺体群は総計1,270点。それらは、いずれも発掘時目視で発見されたオホーツク文化後期（貼付文期）の「住居外骨塚」を構成する資料に当たる。ほぼ一様に被熱・破損した状態にあった同遺体群は大多数がヒグマの骨・歯牙によって占められていた。ヒグマ以外にウミガラス、ウ属、エゾタヌキ、オットセイ、アザラシ類の遺体も確認できたものの、それらの標本数はそれぞれ1点もしくは数点とごく少量にすぎない。

ヒグマ遺体については、右下顎骨と後頭顆に成獣2個体分に由来する資料が得られ、頭骨以外にも手先・足先を主体とした四肢骨が含まれていた。同様に右下顎骨に2個体分の資料を見出したタヌキも含め、哺乳類遺体の部位組成がほぼ一様に頭骨と手先・足先の骨に限られていた点は注目に値しよう。

5 壕内および壕外縁の動物遺体群

アイヌ期に構築されたチャシ壕内から採集された遺体群は総計2,997点。同遺体群の殆どは、ほぼ同一位置に掘削された新旧二条の壕のうち新壕内 Ta-a 火山灰層（1739年降灰）の下層より出土した資料に当たる。旧壕内から採集された資料は僅かに22点（貝殻14点、獣骨8点）を数えるにすぎない。総体積約0.49m³、乾燥総重量にして549kgのブロックサンプルを2mm目のフルイで篩別し、採集されるに至った同遺体群は、8号竪穴およびHトレンチのそれと異なり、貝殻と魚骨の多さに特徴づけられる。

(1) 貝類遺体

新壕から出土した貝殻については、巻貝・二枚貝あわせ計 8 種を同定。海水棲種たるウバガイ、ホタテガイにもそれぞれ、20 個体、13 個体分の資料を確認できたが、淡水棲種のカワシンジュガイの殻はそれらをはるかに凌ぐ 248 個体分を数えた。旧壕から発見された貝殻 14 点も全てカワシンジュガイにほかならない。元来殻厚の薄い同種には、総じて遺存状況が不良で、細片化した貝殻や殻皮のみ残存しているものも多々認められた。その遺存状態にも鑑みれば、壕内に投棄されたカワシンジュガイの実数は更に多かったとみてよからう。

周知の通り、近現代の北海道アイヌはカワシンジュガイ (pipa) をひえ、あわ、きび、むぎ等の穀類の穂摘み具に用いたことが知られる (e.g. アイヌ文化保存対策協議会編 1970:386-387, 萱野 1978: 201-203)。しかしながら、新旧問わず本チャシの壕内から出土したそれらの殻頂部に、穂詰み具として使用されたことを示す紐通しの孔をもつ資料は確認できなかった。よって、それらについては主に食用に採集された個体に由来するとみておきたい。なお、壕内から出土した貝殻のうち被熱資料は新壕から出土したウバガイ 1 点のみであった。

(2) 魚類遺体

総計 1,699 点を数えた魚骨についてはいずれも新壕からの採集資料に当たる。出土魚種は計 12 分類群を数え、特にウグイ属に最小 13 個体分、ニシン亜科、カレイ科に 6 個体分、サケ属、ボラ、ブリ属に 5 個体分と比較的纏まった量の資料を確認することができた。ウグイ属については体長 250mm の原生標本と同等もしくはそれ以下の個体に由来する資料、さらに 300mm を優に超える個体のそれとおぼしき資料の双方が認められ、ウグイ *Tribolodon hakonensis* とマルタ *Tribolodon brandtii* の双方が含まれている可能性がある。サケ属の骨については、おそらくその多くがシロザケ *Oncorhynchus keta* かカラフトマス *Oncorhynchus gorbuscha* に由来しよう。遊離歯には犬歯状歯が見られ、繁殖期接岸・河川を遡上した個体が漁獲されていたことが窺える。なお、ボラ、ブリ属を除く、上記主体種の魚骨には、被熱資料も少なからず含まれていた。

(3) 鳥獣類遺体

鳥類遺体もすべて新壕から採集された資料に当たる。資料点数は総計 34 点を数え、うち 5 点に被熱痕を認めることができた。同定に至った分類群はウミガラス、ウ属、カモ亜科にすぎないが、カモ亜科の遺体群には少なくとも 2 種以上に由来する資料が含まれていると考えてよい。原生標本群と照合した結果、それぞれオシドリ *Aix galericulata* の雄と同等のサイズを示す右大腿骨、同種雌と近似するサイズの左手根中手骨、オシドリの雄より大きくマガモ *Anas platyrhynchos* より小さい種の左橈骨を認めることができた。

哺乳類遺体については、新壕から 686 点、旧壕から 8 点採集されていた。新壕の出土資料には特に鱈脚類の遺体が目立ち、わけてもオットセイに性成熟した雄に由来する 7 個体分の資料も見出せた。同種

の頭蓋骨には、頭頂部に鋭利な刃物による切削痕をもつ資料も認められた (Fig. 97)。ゴマフアザラシに2個体、アゴヒゲアザラシにもそれぞれ3個体分とアザラシ科にも少なからぬ量の資料が得られたが、ネズミ科を除き陸獣各種に算定された最小個体数は僅かであった。なお、新塚出土資料のうち被熱・変色痕をもつ資料は166点を数えた。なお、チャシ壕外の出土遺体としては、XⅡ・XⅢ-3区付近からオットセイの遺体2点が採集されているにすぎない。

6 むすび

以上、オホーツク地点8号竪穴・Hトレンチ、竪穴群南側に位置するチャシ壕内・同外縁の出土資料の概要を報告した。

8号竪穴に伴う動物遺体群に関しては、奥壁部骨塚からヒグマ、エゾタヌキの頭骨、開口部骨塚よりヒグマの四肢・体幹骨、さらにI区壁際から鳥骨が主体的に出土し、動物種や部位ごとに異地性をもたせて集積が行われていた様子を確認できた。「奥壁部」の骨塚に、ヒグマ、タヌキ、キツネなどの陸棲の食肉目頭骨が主体的に出土することは、時期を問わず北海道東部のオホーツク文化集団の竪穴住居においてごく一般的な特徴といえる。また、北海道東部地方に展開したオホーツク文化集団の竪穴住居の場合、貼付文期以降、「奥壁部」に加え「入口部 (開口部)」や「側壁部」にも骨塚が発見されることも決して珍しい事例と言えない (cf. 佐藤 2004)。事実、本遺跡においても、やはり貼付文期に比定される1号外側および2号竪穴で「奥壁部」と「入口部」の二箇所にも骨塚が確認されたという (駒井編 1964)。

もともと、本遺跡には、7b号、9a号、9c号、10a号、10c号など同じ貼付文期に構築されながら「奥壁部」にのみしか骨塚をもたない竪穴群も確認されている (東京大学人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設編 2012)。加えて、等しく貼付文期に属する竪穴であっても、本遺跡の竪穴群の骨塚を構成する遺体の内容・量には少なからぬ相違も指摘し得る。「奥壁部」の骨塚のみを比較しても、既に別稿で指摘した通り、道内最大級の骨塚といえる本遺跡7a号の骨塚にはそれぞれ110個体、30個体、26個体分を数えたヒグマ、エゾタヌキ、キタキツネなど食肉目の頭骨に加え、69個体分にも及ぶエゾシカの頭骨も伴っていた (佐藤 2012)。ところが今回同定・観察した8号竪穴の骨塚出土資料にはエゾシカの遺体が一点も含まれていなかった。また、7b号、9a号、9c号、10a号、10c号竪穴の骨塚についても、エゾシカの遺体が伴わない点にこそ共通点を確認できるものの、その動物遺体の組成は8号竪穴と少なからず異なる。7b号、10c号竪穴の骨塚の場合、タヌキにそれぞれ20個体、8個体分の頭骨を確認できたにもかかわらず、ヒグマのそれは2個体・1個体分を数えるにすぎず、10a号の骨塚はほぼヒグマの四肢・体幹骨のみで構成されていた。さらに9a号、9c号竪穴の骨塚に至っては、それぞれアシカ雄成獣の寛骨、大型クジラ類の手根骨以外めぼしい資料が確認されていない。こうした相違には、無論、各竪穴の居住者達を取り巻く社会・経済的状況の差異が反映されている可能性があるだろう。それだけに、8号竪穴の骨塚および同構成遺体の内容を確認し、貼付文期に構築された竪穴にみる骨塚の構築数や規模、同構成遺体の組成に一層の多様性を示せた意義は大きい。

Hトレンチで発見された屋外の骨塚を構成する遺体群の内容を明らかにし得たことも、オホーツク文化集団の動物儀礼を論じる上から重要な成果といえる。屋外の骨塚はこれまで、北見枝幸以北の北海道北部にのみ発見・報告されていたにすぎなかった。それゆえ、本遺跡を形成したオホーツク文化後期の集団が、屋内のみならず屋外にも骨塚に築き、主にヒグマの頭骨と手足・足先の骨を積していたことを明らかにし得たことは極めて大きな意義をもつ。後続するトビニタイ期には屋外にヒグマの四肢骨を安置された事例がウトロ神社岬下B遺跡で確認されており（加藤ほか 2006）、ヒグマの頭蓋骨群の屋外安置例も、擦文終末期のオタフク岩洞窟に知られている（涌坂編 1991）。いずれも遺体の屋外安置を基本とする、オホーツク文化集団の後裔や彼らと接触・交流した擦文文化集団、後世のアイヌのヒグマ儀礼の発達過程を考える上からも、Hトレンチの屋外骨塚の有り様は注目に値しよう。

さらに、チャシ壕内から出土したアイヌ文化期の動物骨についても、従来、フルイを用い微細資料まで回収が図られたアイヌ文化期の遺体群が北見市以北のオホーツク海沿岸域にほとんど得られていなかった状況下、高い学術価値をもつ。

未文ながら上記遺体群の発掘・採集・基礎整理作業に尽力された方々に敬意を表すとともに、貴重な資料を分析する機会を与えてくださった熊木俊朗先生に深甚なる感謝を申し述べ、小稿のむすびとしたい。

引用文献

- アイヌ文化保存対策協議会（編） 1970 『アイヌ民族誌』第一法規出版株式会社
- 加藤博文・内山幸子・木山克彦・布施和洋・松田 功・マーク・ハドソン 2006 「知床半島チャシコツ岬下B遺跡で確認したオホーツク文化終末期のヒグマ祭祀遺構について」『北海道考古学』42:129-134
- 萱野 茂 1978 『アイヌの民具』すずさわ書店
- 駒井和愛（編） 1964 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下巻』東京大学文学部
- 佐藤孝雄 2004 「オホーツク文化の動物儀礼—その地域的・時期的特徴—」宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会（編）『アイヌ文化の成立』北海道出版企画センター、pp.245-262
- 佐藤孝雄 2012 「トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点7号、9号、10号竪穴の脊椎動物遺体」東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設（編）『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』東京大学大学院人文社会系研究科、pp.312-359
- 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設（編） 2012 『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』東京大学大学院人文社会系研究科
- 涌坂周一（編） 1991 『オタフク岩遺跡（第I地点・第II地点・洞窟）』羅臼町教育委員会

Table 14 出土動物種と同等標本数 (NISP)・最小個体数数 (MNI)

分類群	8号竪穴					壕内		壕外 XII・ XIII-3区 付近	Hトレンチ			
	骨塚		床面および 付属遺構	覆土		新壕	旧壕					
	奥壁部	開口部		2層下部	1層							
	NISP	MNI	NISP	MNI	NISP	MNI	NISP			MNI		
軟体動物門	Mollusca											
腹足綱	Gastropoda											
エソチヂミボラ	<i>Nucella freycineti</i>					2	2					
二枚貝綱	Bivalvia											
カワシンジュガイ	<i>Margaritifera laevis</i>					440	237	14	11			
ホタテガイ	<i>Mizuhopecten yessoensis</i>					25	13					
イガイ	<i>Mytilus coruscus</i>					8	5					
ウバガイ	<i>Pseudocardium sachalinense</i>					34	20					
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>					4	2					
ピノスガイ	<i>Mercenaria stimpsoni</i>					13	8					
エソタマキガイ	<i>Glycymeris yessoensis</i>					1	1					
種不明巻貝						4	4					
種不明二枚貝						1	1					
脊椎動物門	Vertebrata											
軟骨魚綱	Chondrichthyes											
サメ類	Selachii gen indet.					1	1					
硬骨魚綱	Osteichyes											
ニシン亜科	Clupeinae fam.indet.					164	3					
ウダイ属	<i>Tribolodon</i> sp.		1	1	3	1	279	11				
メバル属 (ソイ類)	<i>Sebastes</i> sp.					3	1					
アイナメ科	<i>Hexagrammos</i> sp.					4	2					
ボラ	<i>Mugil cephalus</i>					7	5					
イトウ	<i>Hucho perryi</i>	2	1	3	1	38	1					
サケ属	<i>Oncorhynchus</i> sp.	1	1	10	1	2	1	741	5			
ブリ属	<i>Seriola</i> sp.							51	4			
ヒラメ科	Paralichthyidae fam indet.							1	1			
カレイ科	Pleuronectidae fam indet.							43	3			
フグ科	Tetraodontidae fam indet.							29	2			
種不明魚類						4	364					
鳥綱	Aves											
ウミガラス	<i>Uria aalge</i>				1	1	1	1	1			
ウ属	<i>Phalacrocorax</i> sp.			7	2	4	1	1	1			
ウ属?	<i>Phalacrocorax</i> sp.?			2	2							
カモ亜科	Anatinae gen. indet					4	2					
カモ亜科?	Anatinae gen. indet?					1	1					
種不明鳥類		32	2	23	2	10	2	1	1			
哺乳綱	Mammalia											
ネズミ科	Muridae fam. indet.					28	10					
エソユキウサギ	<i>Lepus timidus ainu</i>					2	1					
ヒゲマ	<i>Ursus arctos</i>		20	2	22	2	9	2	143	3		
エソタヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides albus</i>	68	8	2	1	4	1	5	1	4	2	
キタキツネ	<i>Vulpes vulpes schrencki</i>	2	1					7	2			
イタチ属	Mustela fam. indet.							1	1			
エゾシカ	<i>Cervus nippon yessoensis</i>						1	1	2	1		
トド	<i>Eumetopias jubatus</i>			4	1	11	1	1	1	9	1	
オットセイ	<i>Callorhinus ursinus</i>	1	1	9	2	14	2	37	4	66	4	
アシカ科	Otariidae fam. indet.	3	1	4	1	12	1	13	1			
ゴマフアザラシ	<i>Phoca largha</i>					1	1	2	1	8	2	
ワモンアザラシ	<i>Phoca hispida</i>							1	1	1	1	
ワモンアザラシ?	<i>Phoca hispida?</i>	1	1									
アゴヒゲアザラシ	<i>Erignathus barbatus</i>						2	1	7	3	1	1
アザラシ科	Phocidae fam. indet.	1	1	5	1	7	1	8	3	18	4	
マイルカ科 (イルカ類)	Delphinidae gen. indet.									2	1	
クジラ目 (クジラ類)	Cetacea fam. indet.			1	1					14		
種不明哺乳類		3255	128	526	401	25	517	5			1112	
計		4186	164	611	489	103	2976	22	2		1268	

Table 15 8号竪穴出土鳥獣類遺体の同定標本数 (NISP)・最小動物単位数 (MAU)

分類群	骨塚								床面および付属遺構				覆土							
	奥壁部				開口部								2層下部				1層			
	頭骨	四肢骨	体幹骨	破片	頭骨	四肢骨	体幹骨	破片	頭骨	四肢骨	体幹骨	破片	頭骨	四肢骨	体幹骨	破片	頭骨	四肢骨	体幹骨	破片
	NISP MAU	NISP MAU	NISP MAU		NISP MAU	NISP MAU	NISP MAU		NISP MAU	NISP MAU	NISP MAU		NISP MNI	NISP MNI	NISP MNI		NISP MAU	NISP MAU	NISP MAU	
鳥類																				
ウミガラス														1	1					
ウ属									7	2										
ウ属?									2	2										
カモ亜科																				
カモ亜科?																				
種不明鳥類		31	2		1				15	2		8		8	2		2		1	1
陸獣類																				
ネズミ科																				
エゾキウサギ																				
ヒグマ	690	7	127	8	3	1		1	1	15	2	4	1	1	1	14	2	8	1	
エゾタヌキ	55	8	12	1	1	1									1	1	1	1		
キタキツネ	1	1	1	1																
イタチ属																				
エゾシカ																			1	1
海獣類																				
トド									1	1	2	1	1	1	1	2	1	8	1	1
オットセイ			1	1							3	1	6	2			2	1	10	2
アシカ科	1	1	2	1							4	1					10	1	2	1
ゴマフアザラシ														1	1					
ワモンアザラシ																				2
ワモンアザラシ?	1	1																		1
アゴヒゲアザラシ																				2
アザラシ科	1	1							5	1										12
マイルカ科																				4
クジラ目																				6
種不明哺乳類	28	162	251	2814		14	2	112	10	21	4	491		2	26	373	4	2	1	18
計	777	336	255	2815	1	29	11	112	14	72	23	499	19	55	35	375	47	31	1	18

Table 16 Hトレンチおよび壕内外出土鳥獣類遺体の同定標本数 (NISP)・最小動物単位数 (MAU)

分類群	Hトレンチ				壕内								壕外 X II・X III-3 区 付近魚骨集中							
					新塚埋土火山灰下貝集中				旧塚											
	頭蓋骨	四肢骨	体幹骨	破片	頭蓋骨	四肢骨	体幹骨	破片	頭蓋骨	四肢骨	体幹骨	破片	頭蓋骨	四肢骨	体幹骨	破片				
	NISP MAU	NISP MAU	NISP MAU		NISP MAU	NISP MAU	NISP MAU		NISP MAU	NISP MAU	NISP MAU		NISP MAU	NISP MAU	NISP MAU					
鳥類																				
ウミガラス			1	1						1	1									
ウ属			1	1						4	1									
ウ属?																				
カモ亜科										4	2									
カモ亜科?										1	1									
種不明鳥類			4	2						7	3	6	2	9						
陸獣類																				
ネズミ科									17	10	9	3	2	1						
エゾキウサギ									1	1	1	1								
ヒグマ	57	3	74	2	12	3				4	1	1	1							
エゾタヌキ	3	2	1	1					1	1	3	1	1	1						
キタキツネ									3	2	4	1								
イタチ属											1	1								
エゾシカ											2	1								
海獣類																				
トド									1	1	1	1	7	1						
オットセイ			2	1					15	2	22	4	29	1						
アシカ科									1	1			12	1						
ゴマフアザラシ									4	2	4	1								
ワモンアザラシ																				
ワモンアザラシ?																				
アゴヒゲアザラシ	1	1							6	3	1	1			1	1				
アザラシ科	1	1	1	1																
マイルカ科												2	1							
クジラ目 (クジラ類)														14						
種不明哺乳類					76	1036			11	27	76	403			2	3				
計	62	84	88	1036	60	96	136	426	3	2	3	1	1							

Table 17 8号竪穴出土魚類遺体

出土地点			No.	種名	部位	左右	点数
奥壁部骨塚	ア区		2787	イトウ	椎骨	-	1
				サケ属	椎骨	-	1
開口部骨塚	エ区	小骨塚 ふるい	2781	イトウ	椎骨	-	1
				サケ属	椎骨	-	4
床面および 付属遺構	エ区	フローテーション	F39	サケ属	椎骨	-	3
				ウグイ属	尾椎	-	1
床面および 付属遺構	イ区	貼床間 周溝内 炭化材周辺	2791	サケ属	椎骨	-	1
				ウグイ属	尾椎	-	1
	ウ区	フローテーション	F35	ウグイ属	尾椎	-	1
	エ区	貼床開口部ピット内 炭化材周辺	2801	イトウ	椎骨	-	2
				サケ属	椎骨	-	1
	ウグイ属		尾椎	-	2		
覆土	ア区	1層	2610	ブリ属	前鰓蓋骨	R	1
					主上顎骨	R	1
			2611	種不明	破片	-	1
				種不明	歯骨	R	1
	破片	-	2				
計							29

Table 18 8号竪穴出土鳥類遺体

出土位置			No.	種名	部位	左右	点数	備考	
骨塚	ア区		2812	鳥類	破片	-	1		
			2784	中大型鳥類	四肢骨	-	30	近位部	
床面 および 付属遺構	ア区	BM	2757	ウミガラス	尺骨	R	1	近位部	
				中大型鳥類	大指末節骨	R	1		
				鳥類	破片	-	1		
	イ区	床面	床面焼骨集中	2306	鳥類	尺骨?	-	1	骨幹部
					ウ属	上腕骨	L	1	骨幹部～遠位部、著しく収縮
						L	2	遠位部、著しく収縮	
						R	1	近位部～骨幹部、著しく収縮	
						R	1	遠位部、著しく収縮	
				2493	ウ属?	上腕骨	R	2	骨幹部、著しく収縮
			ウ属		尺骨	L	1	近位部～骨幹部、著しく収縮	
			鳥類		上腕骨破片	?	1	骨幹部、著しく収縮	
					尺骨	L	1	遠位部、著しく収縮	
						-	2	骨幹部、著しく収縮	
			貼床片集中	2516	鳥類	四肢骨破片	-	7	骨幹部
			炭化材列外側	2731	鳥類	大指末節骨	L	1	著しく収縮
			周溝内	2768	中大型鳥類	四肢骨破片	-	1	近位部
			貼床間周溝内	2791	中型鳥類	四肢骨	-	2	近位部
		四肢骨破片				-	2	近位部	
		手根中手骨				L	1	骨幹部	
ウ区	床面		2483	鳥類	尺骨	?	1	骨幹部	
			2486	鳥類	破片	-	8		
		床面 (東西ベルト内)	2478	中型鳥類	四肢骨 fr.	-	1	近位部	
エ区	床面		2721	ウ属	尺骨	L	1	遠位部、著しく収縮	
			2498	中大型鳥類	四肢骨破片	-	1	近位部	
			2771	鳥類	破片	-	1		
炉南側									
覆土	1層		2602	中型鳥類	手根中手骨破片	L	1	遠位部	

Table 19-1 8号竪穴奥壁部骨塚出土哺乳類遺体

No.	種名	部位	左右	点数	備考
2757	エゾタヌキ	前頭骨頬骨突起	L	1	
		側頭骨	R	2	
		頬骨	L	3	
		後頭顆	L	1	
			R	3	
		上顎骨	L	2	
			R	2	
		上顎骨破片	R	1	頬側
		下顎骨	L	7	
			R	4	
		下顎骨	R	1	若齢
		軸椎	-	1	
		桃骨	L	1	近位骨幹端
	踵骨	L	1		
	キタキツネ	下顎骨	L	1	
		脛骨	L	1	遠位骨幹端
	ヒグマ	頭頂骨	R	1	
		頭頂骨+後頭骨	-	1	
		頬骨	L	2	
		側頭骨	L	1	
		後頭顆	L	1	
			R	1	
		頭骨破片	-	66	
		上顎骨	L	4	
			R	7	
下顎骨		L	1	♀?	
		R	1	♀?	
		R	2		
下顎骨破片		-	2		
下顎歯		L	1		
犬歯破片		-	12		
白歯歯根部破片		-	21		
環椎		-	1		
軸椎	-	1			
アシカ科	頬骨	L	1		
	脛骨	R	1		
大型陸獣	頸椎破片	-	4	関節突起部	
		-	1	椎弓、椎体部	
	胸椎破片	-	1	椎体部	
	腰椎破片	-	4	関節突起部	
		-	1	椎体部	
	尾椎	-	1	未癒合椎頭、椎窩を欠く	
	椎骨破片	-	5	棘突起部	
	-	12	椎体部		
	-	9	未癒合椎頭または椎窩		
中型陸獣	側頭骨鼓室部	L	1		
		R	1		
	大腿骨頭破片	R	1		
	基節骨	-	1		
椎骨破片	-	1	椎体部		
陸獣	骨片	-	1		
2784 エゾタヌキ	前頭骨+側頭骨+後頭骨	-	1		
	頭頂骨+後頭骨	R	1		
	側頭骨頬骨突起	L	1		
		R	2		
	後頭顆	L	2		
		R	1		
	上顎骨	L	1		
		R	1		
	下顎骨	L	1		
		R	4		
	大腿骨	R	1	遠位骨端	
	脛骨	L	1	近位骨幹端	
	第2中足骨	L	1		
		R	1	近位部	
	第5中手骨	R	1		
	中手または中足骨	L	2	遠位部	
		R	1	遠位部	

Table 19-2 8号竪穴奥壁部骨塚出土哺乳類遺体

No.	種名	部位	左右	点数	備考
2784	ヒグマ	鼻骨	R	1	
		前頭骨+頬骨突起	L	1	
		頭頂骨	-	1	
		側頭骨	L	1	
			R	1	
		側頭骨+頬骨	L	4	
			R	7	
		口蓋骨	R	1	
		頭骨破片	-	63	
		上顎骨	L	1	
			R	3	
		上顎犬歯破片	-	3	歯根部
		下顎骨	L	2	
			R	8	
		下顎歯	L	1	
		下顎骨破片	-	5	
		歯破片	-	50	
		上腕骨	L	1	遠位骨端
			R	1	遠位骨端
			-	1	未癒合遠位骨端
		寛骨	L	1	
			R	1	
		踵骨	L	1	
		基節骨	-	1	
			-	2	近位部
			-	2	遠位部
		中節骨	-	3	
			-	1	遠位部
		尺側手根骨	L	1	
			R	1	
		中間橈側手根骨	R	2	
		第5中手骨	R	1	近位部
		第3足根骨	R	1	
	第4足根骨	L	1		
	手根または足根骨	-	1		
	中手または中足骨	-	1	未癒合遠位骨端	
	オットセイ	第1中手骨	L	1	近位部
	中型陸獣	歯根部破片	-	2	
	大型陸獣	四肢骨骨幹部破片	-	36	
		椎骨破片	-	19	椎体部
			-	16	棘、関節突起部
			-	15	未癒合椎頭または椎窩
		肋骨	L	1	近位部
		-	1	遠位部	
		-	36	骨幹部破片	
	海獣類	肋骨	-	2	
	大型哺乳類	破片	-	394	
2785 エゾタヌキ	エゾタヌキ	上顎骨	L	2	
			R	1	
		下顎骨	L	4	
		R	3		
	肩甲骨	R	1	頸+関節窩	
	距骨	L	1		
	ヒグマ	上顎歯	L	1	
			R	2	
		下顎歯	R	2	
		犬歯破片	-	4	
		白歯歯根部破片	-	26	
		歯根部破片	-	1	
		中手または中足骨	-	1	未癒合遠位骨端
	手根または足根骨	-	7		
	アシカ科	指骨	-	1	未癒合遠位骨端
		大型陸獣	骨片	-	893
	中型獣	下顎骨破片	R	1	
尾椎		-	2		
椎骨破片		-	4	椎体部	
脛骨		L	1	遠位部	
指骨		-	2		

Table 19-3 8号竪穴奥壁部骨塚出土哺乳類遺体

No.	種名	部位	左右	点数	備考			
2787	エゾタヌキ	下顎骨	R	1				
		ヒグマ	肩甲骨	L	3	関節窩		
				L	2			
				R	1	破片		
				-	27			
				L	2			
				L+R	2	恥骨結合部、坐骨		
				L	5	恥骨		
				L	1	坐骨		
				L	5	寛骨臼		
				R	1	腸骨		
				R	1	恥骨+坐骨		
				R	3	坐骨		
				R	1	坐骨+寛骨臼		
				R	2	寛骨臼		
				-	19	破片		
				R	1	近位骨端		
				L	1	遠位骨端		
				R	1	近位骨端		
				2787	大型陸獣	尾椎	-	7
尾椎破片						-	1	椎体部
四肢骨破片	-	122						
破片	-	12						
不明	破片	-	462					
2810	ワモンアザラシ?	前上顎骨+上顎骨	L	1	同一個体			
	アザラシ科	頬骨	L	1				
2811	ヒグマ	下顎骨	L	1				
		桃骨	L	1	未癒合近位骨端			
			R	1	未癒合遠位骨端			
2812	ヒグマ	鼻骨	R	1				
		頬骨	R	1				
		口蓋骨破片	-	3				
		上顎骨	L+R	1				
		L	1					
		R	1					
		上顎骨破片	-	3				
		下顎骨	L	1				
		R	1					
		犬歯破片	-	28	歯根部			
		-	8	歯根部				
		-	5	歯根部				
	頭骨破片	-	26					
大型陸獣	破片	-	11					
2813	ヒグマ	頭頂骨+後頭骨	-	1				
		後頭顆	L	1				
		頭骨破片	-	1				
2814	ヒグマ	大腿骨	L	1	遠位部			
		臼歯破片	-	1	歯根部			
2815	ヒグマ	上腕骨	L	1	近位部			
		椎骨破片	-	1	椎体部			
2816	ヒグマ	頭頂骨+側頭骨+頬骨+後頭骨	L+R	1	♀			
		側頭骨	L	2				
		後頭顆	L	1	♀			
		頭骨破片	-	114				
		上顎骨	L	1	眼窩下孔周辺			
		L	1					
		R	1					
		上顎犬歯	L	1				
		R	1					
		下顎骨	L	1				
		R	1					
		下顎犬歯	R	1				
		下顎骨破片	-	9				
		犬歯破片	-	14				
		歯冠部破片	-	1				
臼歯歯根部破片	-	24						
歯破片	-	18						

Table 19-4 8号竪穴奥壁部骨塚出土哺乳類遺体

No.	種名	部位	左右	点数	備考		
2817	No.8	ヒグマ	下顎骨	L	1		
		大型陸獣	頭骨破片	-	10		
2818	No.9	中型陸獣	軸椎	-	1		
		大型陸獣	頭骨破片	-	9		
2819	No.10	ヒグマ	上顎骨(切歯骨)	L	1		
		R	1				
		犬歯破片	-	1	歯根部		
2820	No.11	ヒグマ	下顎骨	R	1		
2821	No.12	ヒグマ	頬骨	R	1		
			頭頂骨	L+R	1		
			後頭骨+後頭顆	R	1		
			頭骨破片	-	9		
		基節骨	-	1			
2822	No.13	ヒグマ	前頭骨	L	1		
			R	1			
			側頭骨	L	1		
			頭頂骨	L+R	1		
			口蓋骨	L	1		
			R	1			
			犬歯破片	-	1		
頭骨破片	-	43					
2823	No.14	ヒグマ	頭頂骨	L+R	1		
			後頭顆	L	1		
		R	1				
2824	No.15	ヒグマ	側頭骨	L	1	若齢	
			頬骨	L	1	若齢	
			頭骨破片	-	3		
			下顎骨	L	1		
			R	1			
		下顎骨破片	-	6			
		犬歯破片	-	2			
		大型陸獣	肋骨骨幹部破片	-	2		
2827	ヒグマ	脛骨	R	1	遠位骨端		
2828	No.19	エゾタヌキ	下顎骨	L	1	幼若齢	
2835	No.7	ヒグマ	肩甲骨	R	1	関節窩	
			寛骨	L	1	恥骨+恥骨+寛骨臼	
2857	ヒグマ		桃骨	R	1	近位骨端	
			中間橈側手根骨	L	1		
			副手根骨	L	1		
			中手骨	-	1	遠位部	
			大腿骨	L	1	近位骨端	
			脛骨	R	1	遠位部	
			踵骨	R	1	近位部~遠位骨端	
			中手骨または中足骨	-	1	骨幹部	
			基節骨	-	1	近位部	
			肋骨	L	1	近位部	
			大型陸獣	肋骨破片	-	3	近位骨端
			-	90	骨幹部		
			-	3	遠位骨端		
			大型陸獣	破片	-	622	
			中型陸獣	破片	-	19	
F40の1 骨塚 フロン テーション	ヒグマ		歯根部破片	-	15		
			大型陸獣	椎骨破片	-	1	未癒合椎頭または椎窩
			中型哺乳類	肋骨骨幹部破片	-	3	
			不明	破片	-	294	
F45の2 骨塚 フロン テーション	エゾタヌキ	大型哺乳類	上顎骨	R	1		
			切歯破片	-	2	歯根部	
			椎骨破片	-	1	椎体部	
			中型哺乳類	椎骨破片	-	1	椎体部
			不明	破片	-	2	関節突起部
哺乳類	歯根部破片	-	104				

Table 20 8号竪穴開口部骨塚出土哺乳類遺体

No.	種名	部位	左右	点数	備考	
2762	ヒグマ	寛骨	L	2	寛骨臼	
		仙椎	-	3		
		尾椎	-	1	椎頭、椎窩未癒合・脱落	
	大型哺乳類	肋骨骨幹部破片	-	1		
		四肢骨骨幹部破片	-	12		
		破片	-	112		
2825	No.16	ヒグマ	下顎枝+関節+筋突起	R	1	
2826	No.17	ヒグマ	脛骨	R	1	近位部
2827	No.18	大型陸獣	四肢骨骨幹部破片	-	1	
2829	No.1	ヒグマ	大腿骨	R	1	遠位部
2830	No.2	ヒグマ	肩甲骨	R	1	関節窩
2831	No.3	ヒグマ	上腕骨	L	1	遠位骨端
2832	No.4	ヒグマ	上腕骨	L	1	骨幹部
2833	No.5	ヒグマ	寛骨	R	1	恥骨+坐骨+寛骨臼
		ヒグマ	四肢骨骨幹部破片	-	2	
2834	No.6	ヒグマ	上腕骨	R	1	遠位骨端
2836	No.8	ヒグマ	上腕骨	R	1	遠位骨端
2837	No.7	ヒグマ	上腕骨	R	1	近位部
2838	No.10	ヒグマ	上腕骨	R	1	近位部
2839	No.11	ヒグマ	寛骨	R	1	腸骨+寛骨臼
2781	アザラシ科	尾椎	-	5		
		四肢骨骨幹部破片	-	1		
	大型陸獣	椎骨破片	-	1	棘突起	

Table 21-1 8号竪穴床面および付属遺構出土哺乳類遺体

出土位置	No.	種名	部位	左右	点数	備考	
ア区 床面	2448	不明	破片	-	1		
	F42	炬の砂の1	大型哺乳類 四肢骨骨幹部破片	-	1		
イ区 床面焼骨集中トリ中心骨塚?	2493	不明	破片	-	14		
		炬の砂の2	不明	破片	-	6	
ウ区 床面	2493	不明	破片	-	6		
		オットセイ	尾椎	-	1		
			肋骨	R	1	遠位骨端を欠く	
			肋骨	R	1	遠位骨端を欠く	
			海獣類	破片	-	33	
			不明	破片	-	25	
		2487	不明	破片	-	25	
		2506	オットセイ	肩甲骨	R	1	
	アシカ科		指骨	-	3	骨幹部	
			大型哺乳類	椎骨破片	-	1	椎体部
			不明	破片	-	6	
		2687	海獣類	四肢骨骨幹部破片	-	5	
		2719	トド	側頭骨+鼓室部+頰骨突起	R	1	
	不明		破片	-	13		
		2756	ヒグマ	側頭骨	R	1	
	大型哺乳類		破片	-	4		
			四肢骨骨幹部破片	-	1		
		2778	大型哺乳類	破片	-	4	
		6098	クジラ類	耳骨	-	1	
		2773	大型哺乳類	破片	-	7	
エ区 炭化材周辺床面	2483	アシカ科	基節骨	-	1	遠位部	
		オットセイ	橈骨	R	1	近位部	
			第3中手骨	L	1		
		アザラシ科	尾椎	-	1		
		アザラシ科	大腿骨	L	1	近位骨幹部(未癒合近位骨端を欠く)	
		不明	破片	-	6		
		アザラシ科	側頭骨鼓室部	R	1		
		海獣類	破片	-	1		
		不明	破片	-	4		
		2720	オットセイ	肋骨	L	1	近位部
		2745	ヒグマ	大腿骨	R	1	近位骨幹部(未癒合近位骨端を欠く)
		2766	大型哺乳類	椎骨破片	-	1	椎体部
				関節突起部	-	1	
		2385	トド	尾椎	-	1	
		不明	破片	-	6		
		2478	トド	第5指骨	-	1	未癒合近位骨端
		不明	破片	-	13		
		2525	ヒグマ	上腕骨	L	1	遠位骨端
		不明	破片	-	8		
		2479	ヒグマ	中節骨	-	1	遠位部
アザラシ科	中節骨		L	2	遠位部		

Table 21-2 8号竪穴床面および付属遺構出土哺乳類遺体

出土位置	No.	種名	部位	左右	点数	備考	
エ区 床面	2428	大型陸獣	四肢骨骨幹部破片	-	1		
	2495	エゾタヌキ	大腿骨	R	1	近位部	
		ヒグマ	腰椎	-	1		
			尾椎	-	4		
			中手骨	-	1	遠位部	
			第5中足骨	L	1	近位骨端	
			基節骨	-	1	近位部	
			不明	破片	-	66	
			不明	破片	-	1	
			エゾタヌキ	軸椎	R	2	近位部
			ヒグマ	橈骨	L	1	近位部
			肋骨破片	-	1	骨幹部	
			基節骨	-	1		
		大型陸獣	歯冠部破片	-	1		
			歯根部破片	-	2		
		不明	破片	-	35		
	2512	ヒグマ	上腕骨	L	1	遠位骨端	
			寛骨	L	1	寛骨臼	
				恥骨	R	1	恥骨粗面
				仙椎	-	1	
			大型陸獣	破片	-	47	
				四肢骨骨幹部破片	-	9	
		2681	アザラシ科	椎骨破片	-	1	未癒合椎窩
		2722	トド	橈骨	R	1	骨幹部
		2723	大型哺乳類	四肢骨骨幹部破片	-	2	
		2721	不明	破片	-	17	
	2742	海獣類	破片	-	2		
	2764	オットセイ	軸椎	-	2		
		大型哺乳類	四肢骨骨幹部破片	-	1		
	F35	大型哺乳類	椎骨破片	-	1	未癒合椎頭または椎窩	
	F39	ヒグマ	手根骨	-	1		
	F40	大型哺乳類	歯根部破片	-	6		
		中型哺乳類	上顎骨破片	-	1		
		不明	破片	-	1		
		不明	破片	-	4		
	炬の砂	F44の3	不明	破片	-	4	
	焼土層(3層) 貼床集中	2515	アザラシ科	頸椎	-	1	
	焼土層(3層)	2521	中型哺乳類	下顎骨破片(下顎体)	R	1	
	小骨塚周辺 3層	2679	大型陸獣	骨片	-	31	
	小骨塚周辺	2682	大型陸獣	骨片	-	10	
貼床 内側 床面	2773	大型哺乳類	破片	-	1		
炬の中(住居中央の炬)	2758	不明	破片	-	118		
ベルト内3層炭化材列外側	2708	海獣類	破片	-	2		
炭化材列外側 3層(床面)	2733	不明	破片	-	5		
	2738	不明	破片	-	1		

第六章 考察と分析

Table 22-1 8号竪穴覆土2層下部出土哺乳類遺体

区	No.	出土位置	種名	部位	左右	点数	備考
ア区	2432	周溝内	不明	破片	-	3	
	2800	周溝内	アシカ科	指骨	-	1	遠位骨幹端（未癒合遠位骨端を欠く）
			大型哺乳類	椎骨破片	-	1	未癒合椎頭、椎窩を欠く
			破片	-	4		
	2783	主柱穴	エゾタヌキ	側頭骨頬骨突起	L	1	
				側頭骨鼓室部	R	1	
			ヒグマ	第3中手骨	L	1	近位部
				大腿骨頭	R	1	未癒合近位骨端
				腰椎破片	-	1	椎体部
	2805	ビット内（炭化材サンプルNo.10）	エゾタヌキ	下顎骨	L	1	
			不明	破片	-	1	
	2624	2層下層	ヒグマ	上顎骨	L	1	
				下顎骨	R	1	
				下顎骨破片（頰側）	L	1	
	2795	骨塚の下面の炭化材（板）のさらに下	ヒグマ	上顎歯	R	1	
				歯根部破片	-	3	
				末節骨	-	1	
			オットセイ	頰骨	L	1	
			大型哺乳類	肋骨骨幹部破片	-	3	
				椎骨破片	-	1	関節突起部
			不明	破片	-	4	未癒合椎頭または椎窩
	不明	破片	-	55			
イ区	2670	3層炭化材列外側	海獣類	破片	-	3	
			炭化材列外側	不明	破片	-	1
	2741	炭化材列外側	不明	破片	-	1	
	2768	周溝内	不明	破片	-	3	
	2791	貼床間周溝内	オットセイ	基節骨	R	1	遠位部
			トド	指骨	R	1	
アシカ科			指骨	-	3	遠位部	
	不明	破片	-	1	近位部		
	中型哺乳類	基節骨	-	1			
	不明	破片	-	8			
ウ区	2500	焼土内	トド	基節骨	L	1	遠位部
			海獣類	破片	-	6	
	2790	床面側周溝内	エゾタヌキ	軸椎	-	1	
	2804	貼床外暗褐色土	不明	破片	-	3	
	F35	焼土（マウンド状）	不明	破片	-	6	
エ区	2717	拡張部裏込め中	小型陸獣	四肢骨骨幹部破片	-	1	
			不明	破片	-	3	
	2732	周溝内	不明	破片	-	1	
	2746	貼床開口部間 黒褐色土	ヒグマ	側頭骨頬骨突起	L	1	
				頭椎破片	-	1	
				中手または中足骨	-	1	遠位部
				基節骨	-	1	
				中節骨	-	1	遠位部（近位骨幹端未癒合）
			オットセイ	橈骨	L	1	未癒合遠位骨端
			大型哺乳類	破片	-	2	
			トド	指骨	-	1	
	2776	貼床開口部 焼土内	オットセイ	橈骨	L	1	骨幹部
				L	1	未癒合近位骨端	
肩甲骨				L	1	後縁部	
			肋骨	L	1	近位部	
			R	1	近位部		
アザラシ科			指骨	-	1	遠位部	
			大型哺乳類	椎骨破片	-	6	関節突起部
	破片	-	79				

Table 22-2 8号竪穴覆土2層下部出土哺乳類遺体

区	No.	出土位置	種名	部位	左右	点数	備考	
エ区	2801	貼床開口部 ビット内	ヒグマ	上腕骨	R	1	骨幹部	
			オットセイ	脛骨	L	1	遠位骨端	
			アザラシ科	側頭骨鼓室部	L	1		
				指骨	-	1	遠位部	
			大型哺乳類	椎骨破片	-	1	関節突起部	
	2754	貼床左肩 ビット	オットセイ	手根骨	L	1		
				指骨	-	1	遠位部	
			アシカ科	中手または中足骨	-	1	遠位骨幹端（未癒合遠位骨端を欠く）	
		大型哺乳類	破片	-	20			
	2769	貼床左肩 ビット	トド	上腕骨	R	1		
	F36	炭化材周辺	大型哺乳類	肋骨骨幹破片	-	1		
			不明	破片	-	1	未癒合椎頭または椎窩	
	F37の1	炭化材周辺	不明	破片	-	11		
	F38	炭化材周辺	不明	破片	-	1		
	F39の3	炭化材周辺	不明	破片	-	12		
	F41	炭化材周辺	不明	破片	-	3		
	なし	炭化材周辺	小型哺乳類	尾椎	-	1		
		不明	不明	破片	-	1		
	不明	2712	周溝外掘り方際	アザラシ科	胸椎	-	1	
	2770	伊の北側	ヒグマ	中節骨	-	1		
末節骨				-	1			
アシカ科				指骨	-	1	未癒合近位骨端	
アザラシ科				側頭骨鼓室部破片	L	1		
				指骨	-	1	遠位部	
海獣類			肋骨	-	1	骨幹部		
大型哺乳類			指骨	-	1	未癒合遠位骨を欠く		
			椎骨破片	-	2	関節突起部		
			不明	破片	-	52		
2771			伊南側 (炭化材を挟んで)	ヒグマ	中間横側手根骨	R	1	
					中心足根骨	R	1	
					末節骨	-	1	
				トド	側頭骨鼓室部	L	1	
					後頭頰	R	1	
					寛骨	L	1	坐骨+寛骨白
	R	1			坐骨+寛骨白			
		中足骨		R	1			
		足根骨		L	3			
		椎骨破片		-	1	椎体部		
オットセイ	後頭頰	R	1					
アシカ科	頸椎破片	-	2	関節突起部				
	中手または中足骨	-	2	骨幹部				
	指骨	-	1	骨幹部（遠位骨幹端未癒合）				
ゴマフアザラシ	下顎骨	R	1	幼若				
アザラシ科	側頭骨鼓室部	L	1					
	上顎骨	R	1					
海獣類	肋骨	-	3	骨幹部				
大型哺乳類	破片	-	65					

Table 23 8号竪穴覆土1層出土哺乳類遺体

区	No.	種名	部位	左右	点数	備考	
ア区	2611	ヒグマ	尺側手根骨	R	1		
			第2手根骨	R	1		
			第1中手骨	R	1	近位部	
				R	1	近位骨幹端～遠位部（未癒合近位骨端を欠く）	
			中手骨	L	1	遠位部	
			大腿骨	L	1	未癒合遠位骨端	
			第2中足骨	L	1	近位部	
			中手または中足骨	L	1	遠位部	
			基節骨	-	1	近位部	
			大型陸獣	四肢骨骨幹部破片	-	1	
				椎骨破片	-	1	椎体部
				破片	-	18	
			2602	オットセイ	前頭骨	L	1
	R	1					
	側頭骨+頬骨突起	R			1		
	下顎骨	L			1	♂	
		R			2	♂	
	上腕骨	R			1	近位骨幹端～遠位部（未癒合近位骨端を欠く）	
	大腿骨	L			1	骨幹部（未癒合遠位骨幹部を欠く）	
		R			1	未癒合遠位骨端	
	アザラシ科	後頭類			R	1	
	大型哺乳類	四肢骨骨幹部破片			-	1	
	2603	オットセイ	下顎骨	L	1	♂	
	2604	オットセイ	前頭骨	R	1		
			下顎遊離犬歯	R	2		
			遊離臼歯	-	1		
			橈骨	L	2	近位部、カットマーク有	
				L	1	未癒合近位骨端	
			寛骨	R	1	坐骨、寛骨臼	
			上腕骨	L	1	♂近位骨幹端（未癒合近位骨端を欠く）、カットマーク有	
			ゴマフアザラシ	尺骨	L	1	近位骨幹端（未癒合近位骨端を欠く）
			アザラシ科	側頭骨鼓室部+頬骨突起	L	3	
				後頭類	L	2	
				上顎骨	L	1	
				遊離臼歯	L	1	
				腓骨	R	1	骨幹部
	海獣類	顎骨破片	-	4			
	2609	オットセイ	後頭類	R	1		
			上顎骨	L	1	♂同一個体	
				R	1		
				R	1		
			上顎遊離犬歯	R	1		
			下顎骨	L	1		
				R	2		
			下顎遊離犬歯	L	1		
			臼歯歯根部破片	-	2		
			アザラシ科	側頭骨鼓室部+頬骨突起	L	1	
R					1		
上顎骨	L	1					
2610	アザラシ科	大腿骨	R	1	遠位部		
		脛骨	L	2	骨幹部		
			R	1	近位骨幹端～遠位骨幹端（未癒合両骨端を欠く）		
2611	エゾシカ	上顎第3前臼歯	L	1			
		トド?	L	1	未癒合遠位骨端		
	オットセイ	下顎骨	L	1	♂		
	ワモンアザラシ?	側頭骨頬骨突起+鼓室部	R	1			
	アザラシ科	下顎骨	L	1			
		上腕骨	R	1	骨幹部		
2612	ゴマフアザラシ	大腿骨	R	1			
2614	オットセイ	下顎骨	L	1	♂		
		下顎犬歯	L	2	♂		
		臼歯	R	1			
		尺骨	L	1	近位部～遠位骨幹端		
		大腿骨	R	1	近位骨幹端～遠位骨幹端（未癒合両骨端を欠く）		
		アゴヒゲアザラシ?	側頭骨鼓室部	L	1		
			下顎骨	L	1		

Table 24 8号竪穴出土ヒグマ、エゾシカ上顎骨・上顎歯観察表

出土位置	種名	No.	部位	左右	年齢	残存部位																		
						I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2									
奥壁部骨塚	ヒグマ	2812 No.3	上顎骨	L	成	(× × × ×)																		
			R	成	(× × × ×)																			
		2784	上顎骨	L	成	(× × ×)																		
		2819 No.10	上顎骨	L	成	(× I2 × ×)																		
		2757	上顎骨	L	成	(× × × × ×)																		
		2816 No.7	上顎骨	L	成	(× × × - × × × × M1 M2)																		
		2757	上顎骨	L	成	(× × × × ×)																		
		2812 No.3	上顎骨	L	成	(× × × × × M1 M2)																		
		2757	上顎骨	L	成	(× × × × ×)																(× ×)		
		2757	上顎骨	L	成	(× × × × ×)																(× ×)		
		2816 No.7	上顎犬歯	L	成																			
		2785	上顎遊離歯	L	成																		M1	
		2757	上顎骨	R	成	(× × ×)																		
		2757	上顎骨	R	成	(× × ×)																		
		2784	上顎骨	R	成	(× × ×)																		
		2819 No.10	上顎骨	R	成	(I1 I2 I3 ×)																		
		2816 No.7	上顎骨	R	成	(× × × - - × × × M1 M2)																		
		2812 No.3	上顎骨	R	成	(× × × × ×)																		
		2784	上顎骨	R	成	(× × ×)																	(× × ×)	
		2757	上顎骨	R	成	(× × ×)																	(× ×)	
		2784	上顎骨	R	成	(× × ×)																	(× ×)	
		2757	上顎骨	R	成	(× × ×)																	(× M2)	
		2816 No.7	上顎遊離歯	R	成																			
		2785	上顎遊離歯	R	成																			P4
		2785	上顎遊離歯	R	成																			M1
		骨塚下面炭化材のさらに下		2795	上顎遊離歯	R																		P3
		1層	ヒグマ	2624	上顎骨	L	成																	(× M1 M2)
エゾシカ	2611		上顎骨	L	成																	P2		

註 「残存部位」欄のI・C・P・Mはそれぞれ切歯・犬歯・前臼歯・後臼歯を表し、I・P・Mに後続する数字は第何歯かを示す。×とはそれぞれ歯槽、観察不能な欠損箇所を意味する。なお、下線を引いた歯牙は、顎体内に歯根のみ残存していることを示す。

Table 25 8号竪穴出土ヒグマ下顎骨・下顎歯観察表

出土位置	No.	左右	年齢	残存部位													備考							
				I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	関	筋		窩						
奥壁部骨塚	2811 No.13	L	成	(× × × × × M1 ×)																				
	2817 No.8	L	成	(C × × × × × × M3)																				
	2824 No.15	L	成	(× - - - × M1 × ×)																				
	2812 No.3	L	成	(× - - × × × ×)																				
	2816 No.7	L	成	(× × × × × × ×)																				
	2757	L	成	(× × ×)																				♀ ?
	2784	L																						
	2757	L																						
	2784	L																						
	2784	L																						
	2784	L																						
	2784	R	成	(× × × ×)																				
	2757	R	成	(× × ×)																				頰側のみ残存
	2757	R	成	(× × × ×)																				頰側のみ残存
	2757	R	成	(× × × ×)																				頰側のみ残存
	2816 No.7	R	成	(× × × × × × ×)																				
	2812 No.3	R	成	(× × - - × × × ×)																				
	2820 No.11	R	成	(C - - - × × M2 M3)																				CW: 13.24mm, CT: 8.65mm
	2824 No.15	R	成	(× × × M3)																				
	2757	R	成	(M2 ×)																				♀ ?
	2816 No.7	R																						
	2785	R																						
	2785	R																						
	2785	R																						
	2757	R																						
	2784	R																						
	2784	R																						
2784	R																							
2784	R																							
2784	R																							
2784	R																							
2784	R																							
2784	R																							
1層	2624	L	成																				頰側のみ残存	
	2624	L	成																					
	2624	R	成																					

註 「残存部位」欄のうち「関」・「筋」・「窩」はそれぞれ「関節突起」・「筋突起」・「咬筋窩」を表し、○はそれらが残存していることを示す。その他の表記法はTable 24に準ずる。

Table 26 8号竪穴奥壁部骨塚出土エゾタヌキ上顎骨観察表

No.	左右	年齢	残存部位										備考			
			I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2				
2757	L	成	(× × ×)													
2757	L	成		(× × × ×)												
2785	L	成			(× × ×)											
2784	L	成							(× × ×)							
2785	L	成							(× × ×)							
2757	R	成			(× × ×)										頬側のみ残存	
2757	R	成			(× ×)											
2757	R	成			(× × ×)											
2784	R	成			(× × P3)											
2785	R	成							(P4 × ×)							
F45 の 2	R	成		(× ×)												

註 「残存部位」欄の表記法は Table 24 に準ずる。

Table 27 8号竪穴出土エゾタヌキ・キタキツネ下顎骨観察表

出土位置	種名	No.	左右	年齢	残存歯牙・歯槽													備考	
					I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	関	筋		窩
奥壁部骨塚	キタキツネ	2757	L	成					(× P3 P4 M1)										
	エゾタヌキ	2757	L	成	(× × × × × × × P4 ×)														
		2828 No.19	L	若	(× × C × P2 P3 P4 M1 M2 ×)														M3 未萌出
		2784	L	成	(× × × × × × ×)														
		2757	L	成					(× × ×)										
		2757	L	成						(×)									
		2757	L												○				
		2757	L												○				
		2757	L												○				
		2757	L												○				
		2785	L												○				
		2785	L												○				
		2785	L												○				
		2785	L												○				
		2757	R	成	(× × × × × × P3 P4 ×)														
		2757	R	成	(× × ×)														
		2787	R	成	(× × × ×)														
		2757	R	若	(× × × P3 P4 × ×)														M3 未萌出
		2785	R	成	(× × P2 P3)														
		2784	R	成	(P1 P2 × × ×)														
	2757	R	成						(× × ×)										
	2784	R	成						(× M2 ×)										
	2784	R	成						(× ×)										
	2757	R																	
	2784	R																	
	2785	R																	
	2785	R																	
ピット内 (炭化材サンプル No.10)	エゾタヌキ	2805	L	成								(M1 ×)							

註 「残存部位」欄の表記法は Table 25 に準ずる。

Table 28 8号竪穴1層出土オットセイ上顎骨・上顎犬歯観察表

No.	年齢	性別	左右	残存部位								備考		
				I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4		M1	M2
2609	成	♂	L	(×	×	×	×	×	×	×)		
			R	(×	×	×	×	×	×)			
2609	成	♂	R							(×	×)	
2609	成	♂	L											CW: 11.98mm, CT: 7.00mm
2609	成	♂	R											CW: 9.35mm, CT: 7.94mm

註 「残存部位」欄の表記は Table 24 に準ずる。

Table 29 8号竪穴1層出土オットセイ下顎骨・下顎犬歯観察表

No.	年齢	性別	左右	残存部位											備考		
				I1	I2	C	P1	P2	P3	P4	M1	関	筋	枝			
2603	成	♂	L			(C	×	×	×	P3	×	×)			CW: 12.44mm, CT: 7.34mm
2611	成	♂	L			(C	×	×	×	×	×	×)	○		CW: 13.24mm, C: T8.97mm
2614	成	♂	L							(P3	P4	P5)			
2614	成	♂	L														CW: 13.38mm, CT: 7.54mm
2614	成	♂	L														CW: 11.88mm, CT: 7.09mm
2602	成	♂	L												○		咬筋窩部分
2602	成	♂	R	(×	×	C	P1	P2	×	P4	P5)	○	○	○	CW: 11.63mm, CT: 8.02mm
2602	成	♂	R			(×	×	×	×	×	×)	○	○		
2604	成	♂	R														CW: 12.15mm, CT: 9.18mm
2604	成	♂	R														CW: 12.12mm, CT: 8.09mm

註 「残存部位」の表記法は Table 25 に準ずる。

Table 30 8号竪穴出土アザラシ科上顎骨観察表

出土位置	No.	年齢	左右	残存部位									
				I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	
炉南側 (炭化材を挟んで)	2771	成	R				(×	×	×)		
1層	2609	成	L	(×	×	×	C	×	×)		
	2604	成	L				(×	×	×	×	×)

註 「残存部位」欄の表記法は Table 24 に準ずる。

Table 31 8号竪穴出土アザラシ科下顎骨観察表

出土位置	No.	種名	年齢	左右	残存部位									
					I1	I2	C	P1	P2	P3	P4	M1		
炉南側 (炭化材を挟んで)	2771	ゴマフアザラシ	幼若	R	(×	×	C	×	P2	×	×	M1)
1層	2614	アゴヒゲアザラシ	成	L	(×	×	×	×	×	×	×)	
	2611	アザラシ科	成	L			(C	×	×	×	×)	

註 「残存部位」欄の表記法は Table 24 に準ずる。

Table 32 H トレンチ骨出土鳥類遺体

No.	種名	部位	左右	点数	備考
20188	ウミガラス	上腕骨	R	1	近位部～骨幹部
	大型鳥類	大腿骨	L	1	遠位部外側
	鳥類	鳥口骨破片	-	1	骨幹部
20199	ウ属	脛足根骨	R	1	遠位部
	大型鳥類	鳥口骨破片？	-	1	
	鳥類	大腿骨	L	1	近位部

Table 33-1 H トレンチ（住居外骨塚）出土哺乳類遺体

No.	種名	部位	左右	点数	備考
20158	大型哺乳類	破片	-	1	
20182	オットセイ	手根骨	-	1	
	海獣類	肋骨破片	-	1	
	大型哺乳類	骨片	-	1	
20188	ヒグマ	頬骨	L	1	
			R	1	
		側頭骨外耳孔 +鼓室部	L	1	
			R	1	
		側頭骨外耳孔周辺	L	1	
		側頭骨頬骨突起	R	1	
		後頭骨+頭頂骨	L+R	1	
		後頭顆	L	3	
			R	1	
		下顎骨	L	5	
			R	3	
		下顎骨（下顎体）	L	1	
			R	1	
		犬歯破片	-	8	
		白歯破片（歯根部）	-	14	
		軸椎	-	1	
		軸椎破片（歯突起）	-	1	
		頸椎破片	-	2	椎体部
		胸椎破片	-	4	椎体部
		腰椎破片	-	1	関節突起部
		尾椎	-	1	
			-	1	椎体部、未癒合椎頭または椎窩を欠く
		肋骨	R	1	近位部
		上腕骨	L	1	未癒合近位骨端
			L	1	遠位骨端
			L	1	内側上顆
			L	1	肘頭窩
			L	1	未癒合滑車
			R	1	未癒合近位骨端
		尺骨	L	1	骨幹部、カットマーク有
		寛骨	R	2	坐骨+寛骨臼
			R	1	恥骨
		大腿骨	L	1	未癒合遠位骨端
			L	1	骨幹部
			R	1	未癒合近位骨端
		大腿骨破片	R	1	転子窩
			-	1	大腿骨頭
		尺側手根骨	L	1	
		手根または足根骨	-	3	
		第4中手骨	-	1	近位部
			L	1	近位部
		踵骨	L	1	近位骨端
			L	1	遠位骨端
		距骨	R	1	
		第1足根骨	L	1	
			R	1	
		第4足根骨	R	1	
第2中足骨	R	1	近位部		
第3中足骨	L	1	近位骨幹部		
第4中足骨	L	1	近位部		
第5中足骨	R	1	近位部		

Table 33-2 H トレンチ（住居外骨塚）出土哺乳類遺体

No.	種名	部位	左右	点数	備考
20188	ヒグマ	中手骨または中足骨	-	8	遠位骨端
			-	1	遠位骨幹部
		基節骨	-	1	未癒合近位骨端
			-	1	近位骨幹部
			-	1	近位部
			-	4	
			-	5	遠位部
		中節骨	-	1	近位部
			-	3	
			-	2	未癒合近位骨端を欠く
		-	2	遠位部	
	末節骨	-	1		
	エゾタヌキ	下顎骨	R	1	
		第5中足骨	L	1	
	アゴヒゲアザラシ	側頭骨鼓室部	R	1	
	アザラシ科	側頭骨鼓室部破片	-	1	
		大腿骨	L	1	近位骨幹部（未癒合近位骨端を欠く）
	大型陸獣	椎骨破片	-	9	椎体部
			-	3	未癒合椎頭または椎窩を欠く
			-	1	棘突起部
		-	1	未癒合椎頭または椎窩	
	肋骨骨幹部破片	-	53		
	骨片	-	743		
20199	エゾタヌキ	上顎骨	R	1	
		下顎骨	R	1	
	ヒグマ	後頭骨+後頭顆	R	2	
		上顎骨（大口蓋孔部分）	R	1	
		下顎骨	L	1	
			R	3	
		下顎歯	R	1	
		犬歯破片	-	6	
		軸椎	-	1	
		中間腕側手根骨	L	1	
		第3中手骨	R	1	
		踵骨	L	1	近位部
	第4中足骨	L	1	近位部	
	第5中足骨	R	1	遠位部	
	中手または中足骨	-	1	未癒合遠位骨端	
	基節骨	-	2		
		-	1	遠位部	
	中節骨	-	1	未癒合近位骨端を欠く	
		-	1		
	末節骨	-	2		
大型陸獣	腰椎破片	-	2	関節突起	
	椎骨破片	-	4	椎体	
		-	2	棘突起	
	破片	-	291		
オットセイ	足根骨	R	1		

Table 34 H トレンチ (住居外骨塚) エゾタヌキ、ヒグマ上顎骨観察表

種名	No.	年齢	左右	残存部位								備考		
				I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4		M1	M2
エゾタヌキ	20199	成	R			(× × ×)								
ヒグマ	20199	成	R											大口蓋孔部

註 「残存部位」欄の表記法は Table 24 に準ずる。

Table 35 H トレンチ (住居外骨塚) エゾタヌキ、ヒグマ下顎骨・下顎歯観察表

種名	No.	左右	年齢	残存部位													備考
				I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	関	筋	
エゾタヌキ	20188	R				(× P1 P2 P3 × ×)											
		R				(× × × × ×)											
ヒグマ	20188	L	成									(×)					
		L	成											○			
		L	成												○		
		L	成												○		
		L	成												○		
		L	成												○		下顎体破片
	R	成										(× ×)					
	R	成												○			
	R	成												○			
	R	成												○		下顎体破片	
20199	L	成														○	
	R	成										(P3 P4)					
	R	成										(P4 × ×)					
	R	成												○			
R	成															M1	

註 「残存部位」欄の表記法は Table 25 に準ずる。

Table 36 壕内埋土火山灰下出土貝類遺体

出土位置		種名	左右	点数	MNI
新壕	西側	エゾチヂミボラ	-	2	2
		カワシンジュガイ	L	237	237
			R	123	
		ホタテガイ	L	12	13
			R	13	
		イガイ	L	3	5
			R	5	
		ウバガイ	L	19	20
			L	1	
			R	14	
		ヤマトシジミ	L	2	2
			R	2	
		ビノスガイ	L	5	8
R	8				
エゾタマキガイ	L	1	1		
	種不明巻貝	-	4	4	
種不明二枚貝	R	1	1		
	旧壕 No.6066	カワシンジュガイ	L	11	11
R			3		
計				466	304

Table 37-1 新壕内埋土火山灰下出土魚類遺体

種名	部位	左右	点数	備考
サメ類	椎骨	-	1	
ニシン亜科	第1椎骨	-	2	
	椎骨	-	132	
		-	30	
サケ属	前上顎骨	R	1	
	歯骨	R	1	
	顎骨破片	-	7	
	歯	-	24	
		-	10	
	犬歯状歯	-	40	
		-	3	
	主上顎骨	L	1	
		R	2	
	主鰓蓋骨	L	2	
	角骨	R	2	
	第1椎骨	-	2	
		-	1	
	椎骨	-	235	
		-	100	
	椎骨・破片	-	197	
	-	113		
イトウ	椎骨	-	27	
	-	11		
ウグイ属	前上顎骨	R	1	
	歯骨	L	3	
		R	2	体長 250mm 以上
	歯骨	R	1	体長 250mm 以下
	顎骨破片	-	1	
	咽頭骨	L	6	体長 250mm 以上
		R	3	
	舌顎骨	L	1	
	前鰓蓋骨	L	4	体長 250mm 以上
		R	5	
	主鰓蓋骨	L	4	体長 250mm 以上
		R	3	
	擬鎖骨	L	10	
		R	7	
	肩甲骨	L	1	
	方骨	R	1	
	第2椎骨	-	2	
	腹椎	-	49	体長 250mm 以上
		-	5	体長 250mm 以下
	-	59	体長 250mm 以上	
	-	5	体長 250mm 以下	
尾椎	-	64		
	-	32		
	-	2	体長 250mm 以下	
	-	4	体長 250mm 以下	
尾部棒状骨	-	4		
メバル属 (ソイ類)	前上顎骨	R	1	
	第1椎骨	-	1	
	尾椎	-	1	
アイナメ科	腹椎	-	1	
		-	1	体長 150mm 前後
	尾椎	-	2	
ボラ	主鰓蓋骨	L	5	
		R	2	
ブリ属	基底後頭骨	-	1	
	前上顎骨	L	1	
		R	1	
	歯骨	L	2	
	R	3		

Table 37-2 新壕内埋土火山灰下出土魚類遺体

種名	部位	左右	点数	備考
ブリ属	主上顎骨	L	1	
	舌顎骨	R	1	
	角骨	L	4	
		R	2	
	擬鎖骨	L	2	
	方骨	L	1	
		R	3	
	前鰓蓋骨	L	4	
		R	3	
	主鰓蓋骨	R	4	
	肩甲骨	L	1	
	鰓条骨	-	7	
	内臓骨部位 不明	-	3	
腹椎	-	4		
尾椎	-	2		
椎骨破片	-	1		
ヒラメ科	前上顎骨	R	1	
カレイ科	角骨	R	1	体長 200mm 以下
	第1椎骨	-	3	
	腹椎	-	4	
		-	1	
	尾椎	-	18	
		-	2	
	椎骨	-	13	
	-	1		
フゲ科	基底後頭骨	-	1	
	歯骨	L	1	
		R	1	
	前上顎骨	L	1	
		R	1	
	舌顎骨	L	2	
		R	1	
	主上顎骨	L	1	
		R	1	
	前鰓蓋骨	L	1	
		R	1	
	主鰓蓋骨	L	1	
		R	1	
方骨	L	1		
	R	1		
口蓋骨	R	1		
椎骨	-	3		
内臓骨部位 不明	-	9		
種不明	副蝶形骨	-	3	
	前上顎骨	L	3	
		R	1	
	歯骨	L	3	
		L	1	
		R	1	
	主上顎骨	L	1	
		R	1	
	顎骨破片	-	4	
	主鰓蓋骨	L	1	
		R	1	
	肩甲骨	L	1	
	椎骨	-	94	
	-	19		
椎骨・破片	-	91		
	-	76		
破片	-	63		

Table 38 壕内埋土火山灰下（貝集中）出土鳥類遺体

No.	種名	部位	左右	点数	備考
8	中型鳥類	四肢骨	-	2	近位部
17	カモ亜科	橈骨	L	1	マガモより小、オシドリ♂より大
	鳥類	破片	-	1	
22	カモ亜科	大指基節骨	L	1	
23	カモ亜科?	手根中手骨	L	1	遠位部
25	小型鳥類	脛足根骨	L	1	骨幹部～遠位部
26	中型鳥類	四肢骨	-	1	近位部
28	中大型鳥類	頸椎	-	1	完存
		橈骨	?	1	
32	中型鳥類	胸骨	-	1	烏口関節面
	鳥類	破片	-	2	
36	ウミガラス	方形骨	R	1	
37	鳥類	寛骨破片	-	1	
38	中型鳥類	頸椎	-	1	
47	ウ属	方形骨	L	1	著しく収縮
	中型鳥類	四肢骨	-	1	近位部
	鳥類	破片	-	1	
	鳥類?	椎骨破片	-	1	
48	中型鳥類	四肢骨破片	-	1	近位部
	鳥類	破片	-	1	
49	カモ亜科	手根中手骨	L	1	マガモより小、オシドリ♀とほぼ同大
50	中大型鳥類	烏口骨破片	-	1	近位部
	鳥類	肋骨	-	1	近位部
51	ウ属	上腕骨破片	L	1	遠位部外側
53	鳥類	破片	-	1	
54	鳥類	破片	-	1	
55	ウ属	方形骨	R	1	
	鳥類	四肢骨	-	1	骨幹部
56	鳥類?	破片	-	1	
57	カモ亜科	大腿骨	R	1	近位部、マガモより小、オシドリ♂とほぼ同大
64	ウ属	脛足根骨	R	1	近位部
	鳥類	四肢骨破片	-	1	骨幹部

Table 39-1 新壕内埋土火山灰下貝集中出土哺乳類遺体

種名	部位	左右	点数	備考
エゾキウサザギ	歯破片	-	1	
	距骨	L	1	
ヒクマ	寛骨	L	1	坐骨+寛骨白
	中節骨	-	1	
	手根または足根骨	-	1	
	第1足根骨	R	1	
	椎骨破片	-	1	椎弓部
エゾタヌキ	上顎歯	R	1	
	橈骨	R	1	遠位部
	尺骨	R	1	近位骨幹端
	大腿骨頭	L	1	
	尾椎	-	1	
キタキツネ	下顎歯	L	1	No.7025 (2009年度調査出土)
	下顎骨	L	1	M1 崩出途中
	上腕骨	L	1	遠位部
	尺骨	L	1	滑車切痕部
	脛骨	L	1	遠位部
	腓骨	R	1	近位骨幹端
イタチ属	距骨	L	1	
エゾシカ	上腕骨	L	1	遠位部
	基節骨	L	1	
アカネズミ類	下顎骨	R	2	
	下顎骨	R	1	
トガリネズミ類	下顎骨	R	1	
ドブネズミ類	下顎骨	L	3	
ハタネズミ類	頭蓋骨+頬骨+上顎骨	L+R	1	
	下顎骨	L	1	
	下顎骨	R	1	
	上顎骨	L	1	
	下顎骨	L	3	
	下顎骨	R	1	
ネズミ科	上腕骨	L	1	未癒合近位骨端を欠く
	尺骨	R	1	
	尺骨	R	2	未癒合近位骨端を欠く
	大腿骨	L	1	未癒合遠位骨端を欠く
	脛骨	L	1	遠位部骨幹端 (遠位部端未癒合)
	脛骨	R	1	近位部、ドブネズミより小
	脛骨	L	1	
	脛骨	L	1	近位骨幹端～遠位骨幹端
	腰椎	-	1	
	尾椎	-	1	
小型陸獣	頬骨?	R	1	
オットセイ	前頭骨～後頭骨	L+R	1	頭頂部を底面、咬合面を上面にして出土カットマーク有
	前頭骨	L+R	1	
	前頭骨	R	1	
	頭頂骨+後頭骨	L+R	1	カットマーク有
	蝶形骨	L+R	1	
	頬骨	L	1	
	頬骨	R	1	
	上顎骨	R	1	
	上顎歯	L	1	
	下顎骨	L	1	No.7027 壕外 XⅡ・XⅢ-3 区魚骨集中出土
	下顎骨	L	2	
	下顎歯	L	3	
	下顎歯	-	2	
	環椎	-	1	右半分を欠く、No.7025 (2009年度調査出土)
	頸椎	-	2	
	頸椎	-	1	椎体部 (未癒合椎頭、椎窩を欠く)
	胸椎	-	2	
	胸椎	-	5	椎体部 (未癒合椎頭、椎窩を欠く)
	腰椎	-	2	
	腰椎	-	2	椎体部 (未癒合椎頭、椎窩を欠く)
	腰椎	-	1	No.7025 (2009年度調査出土)
	椎骨破片	-	1	関節突起部
	舌骨	-	2	
	肩甲骨	L	1	関節窩
	肩甲骨	L	1	未癒合関節窩を欠く
	肩甲骨	L	1	後縁部
	肩甲骨	R	2	関節窩
	肩甲骨	R	1	後縁部
	上腕骨	L	1	未癒合近位骨端
	上腕骨	L	1	
	上腕骨	R	1	未癒合遠位骨端を欠く
	上腕骨	R	2	
	上腕骨	R	1	遠位骨端未癒合
	橈骨	L	1	未癒合近位骨端
	橈骨	R	1	未癒合近位骨端
	橈骨	R	1	骨幹部 (両骨幹端未癒合)
	脛骨	L	1	骨幹部、カットマーク有
	脛骨	R	1	近位部
	第5中手骨	R	1	遠位部
	中手骨	R	1	No.7025 (2009年度調査出土)
	基節骨	-	1	未癒合近位骨端を欠く
	指骨	R	1	未癒合遠位骨端を欠く
	指骨	-	1	未癒合近位骨端
	指骨	-	1	遠位部 (近位骨端未癒合欠く)、No.7028 壕外 XⅡ・XⅢ-3 区魚骨集中出土
	肋骨	L	1	近位部
	肋骨	L	1	
	肋骨	L	1	近位骨端、カットマーク有
	肋骨	L	1	骨幹部
	肋骨	R	1	近位骨端
	肋骨	R	1	近位骨幹端
	肋骨	R	1	骨幹部、カットマーク有
	肋骨	R	1	骨幹部
	肋骨	-	4	骨幹部
トド	頭頂骨	-	1	
	胸椎破片	-	1	関節突起部
	腰椎	-	3	
	仙骨	-	1	
	椎骨破片	-	1	椎弓部
	肋骨破片	-	1	骨幹部
	末節骨	L	1	

Table 39-2 新壕内埋土火山灰下貝集中出土哺乳類遺体

種名	部位	左右	点数	備考
アシカ科	頬骨	R	1	
	胸椎	-	1	
	椎体部	-	2	椎体部 (未癒合椎頭、椎窩を欠く)
	腰椎	-	1	
	椎骨破片	-	1	椎弓部
	未癒合椎頭または椎窩	-	1	
	上腕骨	R	1	近位骨幹端～遠位骨幹端 (未癒合両骨端を欠く)
	中節骨	-	1	遠位部
	指骨	-	4	未癒合近位骨端
	指骨	-	1	未癒合近位骨端
	指骨	-	1	近位部
	指骨	-	1	遠位部
	指骨	-	1	遠位部
	肋骨	-	6	骨幹部
ゴマフアザラシ	側頭骨鼓室部	L	1	
	側頭骨頬骨突起+鼓室部	L	1	
	後頭骨+後頭骨底部	L	1	カットマーク有
	後頭骨	R	1	
	上腕骨	L	1	No.7025 (2009年度調査出土)
	大腿骨	R	1	遠位部
	寛骨	L	1	
	寛骨	R	1	
アゴヒゲアザラシ	側頭骨	R	1	
	側頭骨頬骨突起+鼓室部	L	3	
	側頭骨鼓室部	R	1	
	頬骨	L	1	
ワモンアザラシ	大腿骨	R	1	骨幹部
アザラシ科	蝶形骨	-	1	
	上顎歯	L	3	
	上顎歯	R	2	
	上顎歯	R	2	No.7025 (2009年度調査出土)
	下顎歯	L	2	
	胸椎破片	-	3	椎体部 (未癒合椎頭、椎窩を欠く)
	椎骨破片	-	1	椎弓部
	椎骨破片	-	1	椎体部 (未癒合椎頭、椎窩を欠く)
	肩甲骨	L	1	咬痕あり
	肩甲骨	R	2	
	上腕骨	L	3	骨幹部、うち1点にカットマーク有
	上腕骨	L	1	骨幹部
	上腕骨	L	2	遠位骨幹端 (未癒合遠位骨端を欠く)
	尺骨 (滑車切痕部)	L	1	近位骨幹端
	尺骨	R	1	近位骨幹端
	寛骨	R	1	坐骨+恥骨
	大腿骨 (幼若)	L	1	未癒合両骨端を欠く
	大腿骨	R	1	骨幹部 (未癒合両骨端を欠く)
	腓骨	R	1	骨幹部
	中手骨	L	1	近位部
	中手骨	-	1	未癒合遠位端
	中足骨	L	2	近位部
	中足骨	R	1	
	末節骨	-	1	
	指骨 (前肢)	L	1	遠位部
	指骨 (後肢)	L	1	未癒合遠位骨端を欠く
	指骨 (幼若)	-	1	遠位骨端未癒合、未癒合近位骨端を欠く
	指骨	-	2	
	指骨	-	2	未癒合近位骨端を欠く
	指骨	-	1	近位骨幹端 (未癒合近位骨端を欠く)
	指骨	-	1	遠位部
	指骨	-	1	未癒合近位骨端を欠く
	指骨	-	1	遠位部
	肋骨	R	1	近位部
	肋骨	R	1	近位骨幹端～遠位骨幹端
マイルカ科	椎骨	-	1	
	椎骨	-	1	
クジラ類	破片	-	12	うち2点にカットマーク有
	破片	-	2	カットマーク有
海獣類	頭蓋骨破片	-	2	
	歯破片	-	4	
	指骨	-	2	未癒合近位骨端
	指骨	-	1	骨幹部
	肋骨	-	33	骨幹部、うち2点に咬痕有り
	肋骨	-	6	骨幹部
	未癒合椎頭または椎窩	-	8	
	椎骨破片 (椎体部)	-	1	
	破片	-	136	
	破片	-	67	
大型哺乳類	頭蓋骨破片	-	3	うち1点にカットマーク有
	四肢骨骨幹部破片	-	8	
	椎骨破片	-	1	
	未癒合椎頭または椎窩	-	7	
	椎骨破片	-	1	
	肋骨骨幹部破片	-	3	
	破片	-	3	
	破片	-	4	
中型哺乳類	下顎歯	-	1	
	大腿骨破片 (大腿骨頭)	L	1	
	中手または中足骨	-	1	未癒合遠位骨端
	胸椎	-	1	
	腰椎	-	2	
	腰椎破片	-	1	
	仙骨	-	2	
	尾椎	-	1	
	椎骨 (椎骨弓)	-	1	
	椎骨破片 (椎体部)	-	2	
	肋骨骨幹部破片	-	6	
	基節骨	-	2	近位部
	中節骨	-	3	
	末節骨	-	1	
	指骨	-	1	
	指骨	-	1	
	破片	-	1	
不明	破片	-	144	
	破片	-	48	

Table 40 旧壕内埋土火山灰下貝集中出土哺乳類遺体

No.	種名	部位	左右	点数
6066	オットセイ♂	上顎骨 (同一個体)	L	1
			R	1
	アゴヒゲアザラシ	側頭骨鼓室部+頬骨突起	R	1
	海獣類	椎体破片	-	1
			-	1
-			3	

Table 41 新壕内埋土火山灰下出土ネズミ科上顎骨観察表

種名	No.	左右	残存部位				備考
			I	M1	M2	M3	
ハタネズミ類	23	L+R	(× M1 M2 ×)	頭蓋骨+頬骨+上顎骨			
	19	L	(× × M2 ×) (M1 M2 M3)				

註 「残存部位」欄の表記法は Table 24 に準ずる。

Table 42 新壕内埋土火山灰下出土ネズミ科下顎骨観察表

種名	No.	左右	残存部位				関	筋	窩
			I	M1	M2	M3			
アカネズミ類	7	L	(I M1 M2 M3)						
	53	R	(I × × ×)						
ドブネズミ類	7	L	(I M1 M2 M3)						
	27	L	(I × × ×)						
ハタネズミ類	20	L	(I M1 M2 M3)						
	37	L	(I M1 M2 M3)						
	50	L	(× M1 M2 M3)						
	23	L	(I M1 M2 M3)						
		R	(I M1 M2 M3)						
14	R	(× × × ×)							
ドブネズミ類	57	L	(I × × ×)						
アカネズミ類	61	L	(I M1 M2 M3)						
トガリネズミ類	61	R	(I M1 M2 M3)	○	○	○			

註 「残存部位」欄の表記法は Table 25 に準ずる。

Table 43 新壕内埋土火山灰下出土エゾタヌキ上顎歯、キタキツネ下顎骨・下顎歯観察表

種名	No.	部位	左右	残存部位										備考
				I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	
エゾタヌキ	9	上顎歯	R											
キタキツネ	49	下顎歯	L	P2										
	6044	下顎骨	L	(P3 P4 M1)										M1 崩出途中
	7025	下顎歯	L	M1										

註 「残存部位」欄の表記法は Table 24 に準ずる。

Table 44 壕内・壕外出土齧脚類上・下顎骨、歯牙観察表

出土位置	種名	No.	部位	左右	残存部位										備考
					I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	関	
新壕埋土火山灰下	オットセイ♂	なし	前顎骨 ~後頭骨	L+R	(I1 I2 I3 C P1 P2 P3 P4 M1 ×)										CW: 12.18mm, CT: 9.64mm
		6044	上顎骨	R	(C P1 P2 P3 P4 M1 ×)										CW: 12.15mm, CT: 9.74mm
		10	上顎歯	L	I3										
		3	下顎骨	L	(× × × C × × × × ×)										○ ○ CW: 12.33mm, CT: 8.14mm
		3	下顎骨	L	(× × C × × × × ×)										CW: 12.58mm, CT: 8.53mm
		15	下顎歯	L	P1										
	アザラシ科	17	上顎歯	L	I3										
		36		L	I3										
		42		L	P1										
		11		R	P1										
		8		R	P2										
	64	下顎歯	L	C											
	28		-	P4											
壕外 XII・XIII-3 区付近	オットセイ♂	7027	下顎骨	L	(× ×)										
旧壕埋土貝集中	オットセイ♂	6066	上顎骨	L+R	(C × × × × × ×)										
					(C × × × × × ×)										

註 「残存部位」欄の表記法は Table 25 に準ずる。

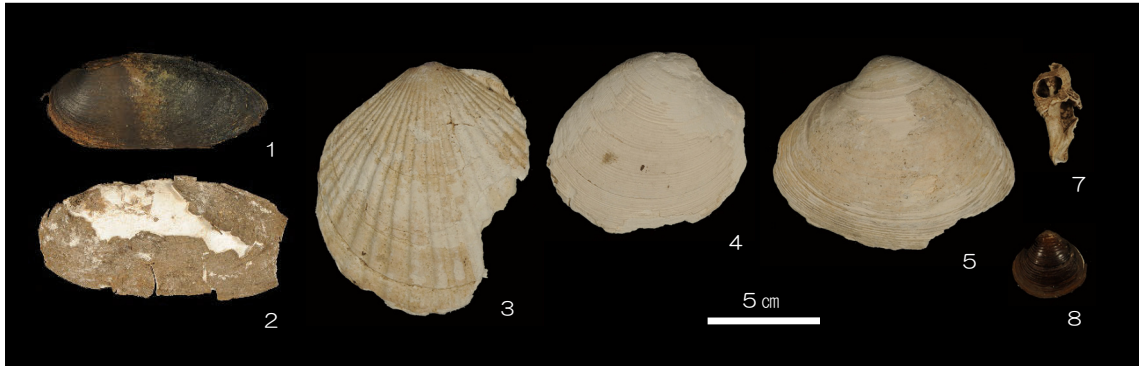


Fig. 90 貝類遺体

1. カワシンジュガイ現生標本左殻、2. カワシンジュガイ左殻、3. ホタテガイ右殻、4. ビノスガイ右殻、5. ウバガイ左殻、6. エゾチヂミボラ、7. ヤマトシジミ左殻



Fig. 91 鳥類遺体

1. ウ属左上腕骨、2. ウミガラス左上腕骨、3. ウ属右脛足根骨、4. ウ属右脛骨、5. ウ属左上腕骨、6. カモ亜科左橈骨、7. ウ属左尺骨、8. ウミガラス右方形骨、9. カモ亜科左大腿骨、10. カモ亜科左手根中手骨、11. 中型鳥類胸骨



Fig. 92 魚類遺体

- 1・2. サケ属遊離歯、3. サケ属第1椎体、4. サケ属椎骨、5. ニシン亜目椎骨、6. ウグイ属第2椎骨、7. ウグイ属腹椎、8. ウグイ属尾椎、9. ウグイ属尾柄部椎体、10. カレイ科椎骨



Fig. 93 魚類遺体

1. ヒラメ科右上顎骨、2. サケ属左前上顎骨、3. ソイ類右前上顎骨、4. フグ科左主上顎骨、5. サケ属右歯骨、6. ブリ属右主上顎骨、7. ウグイ属右歯骨、8. フグ科左前上顎骨、9. ブリ属右歯骨、10. ブリ属右舌顎骨、11. ウグイ属左舌顎骨、12. フグ科左歯骨、13. ブリ属右角骨、14. ウグイ属右角骨、15. サケ属右角骨、16. ウグイ属左咽頭骨、17. フグ科左方骨、18. ブリ属右方骨、19. ウグイ属左方骨、20. ウグイ属右前鰓蓋骨、21. ウグイ属左擬鎖骨、22. フグ科口蓋骨、23. フグ科左主鰓蓋骨、24. ボラ左主鰓蓋骨、25. ウグイ属右主鰓蓋骨、26. フグ科椎骨、27. イトウ椎骨、28. ブリ属椎骨、29. フグ科右前鰓蓋骨、30. ブリ属右前鰓蓋骨



Fig. 94 小型陸獣遺体

1. エゾタヌキ左下顎骨、2. キタキツネ左下顎骨、3. エゾタヌキ頭蓋骨、4. エゾタヌキ軸椎、
5. エゾタヌキ右大腿骨、6. エゾタヌキ右橈骨、7. エゾタヌキ右脛骨、8. エゾシカ左上腕骨、
9. エゾシカ基節骨、10. キタキツネ左上腕骨、11. キタキツネ左脛骨

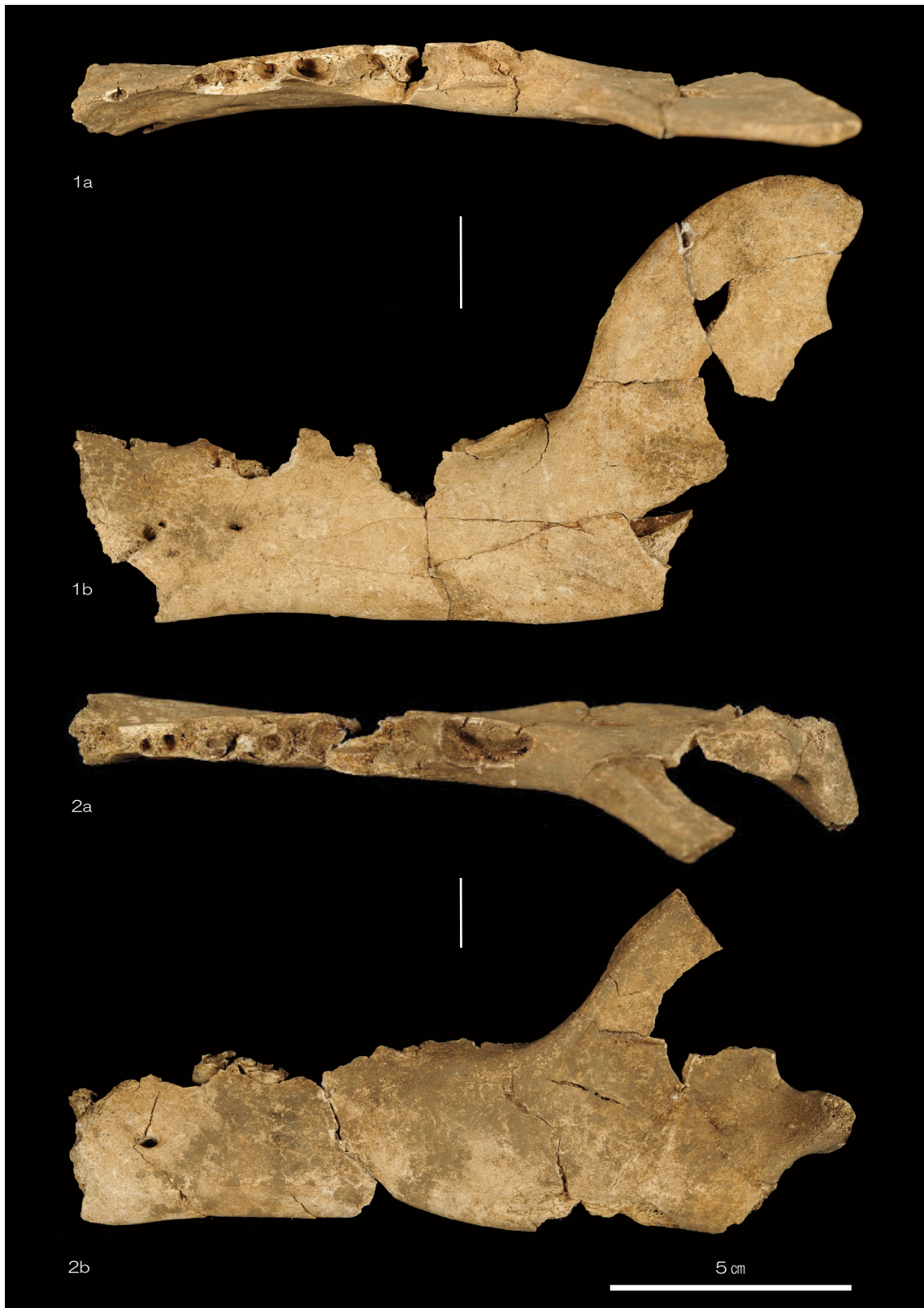


Fig. 95 ヒグマ左下顎骨 (8号竪穴奥壁部骨塚出土)
a: 咬合面、b: 頬側



Fig. 96 ヒグマ頭蓋骨・四肢骨
1. 頭蓋骨、2. 左肩甲骨、3. 左脛骨、4. 基節骨、5. 左脛骨、6. 右上腕骨、7. 左橈骨、8. 左寛骨



Fig. 97 オットセイ雄頭蓋骨

1. 現生標本：点線で囲った部分は出土資料の切削箇所を示す。
2. 新塚・壕内埋土火山灰下出土資料（a: 上面観、2b.: 左側面観、2c.: 底面観）



Fig. 98 鰭脚類上・下顎骨

1. オットセイ雄上顎骨 (a: 上面観、b: 咬合面観)、2. オットセイ雄下顎骨 (a: 咬合面観、b: 頬側観)、
3. アゴヒゲアザラシ下顎骨 (a: 咬合面観、b: 頬側観)、4. ゴマフアザラシ下顎骨 (a: 咬合面観、b: 頬側観)



Fig. 99 アシカ科四肢・体幹骨

1. オットセイ環椎、2. オットセイ頸椎、3. オットセイ肋骨、4. オットセイ右上腕骨、
5. オットセイ右肩甲骨、6. トド雌仙椎



Fig. 100 アザラシ科・マイルカ科遺体

1. ゴマフアザラシ左後頭顆、2. アゴヒゲアザラシ左鼓室部、3. ゴマフアザラシ右鼓室部、
4. ゴマフアザラシ左上腕骨、5. ゴマフアザラシ右尺骨、6. ゴマフアザラシ右大腿骨、7. アザラシ科右腓骨、
8. アザラシ科右脛骨、9. アザラシ科肋骨、10. アザラシ科右肩甲骨、11. ゴマフアザラシ左寛骨、
12. マイルカ科椎骨



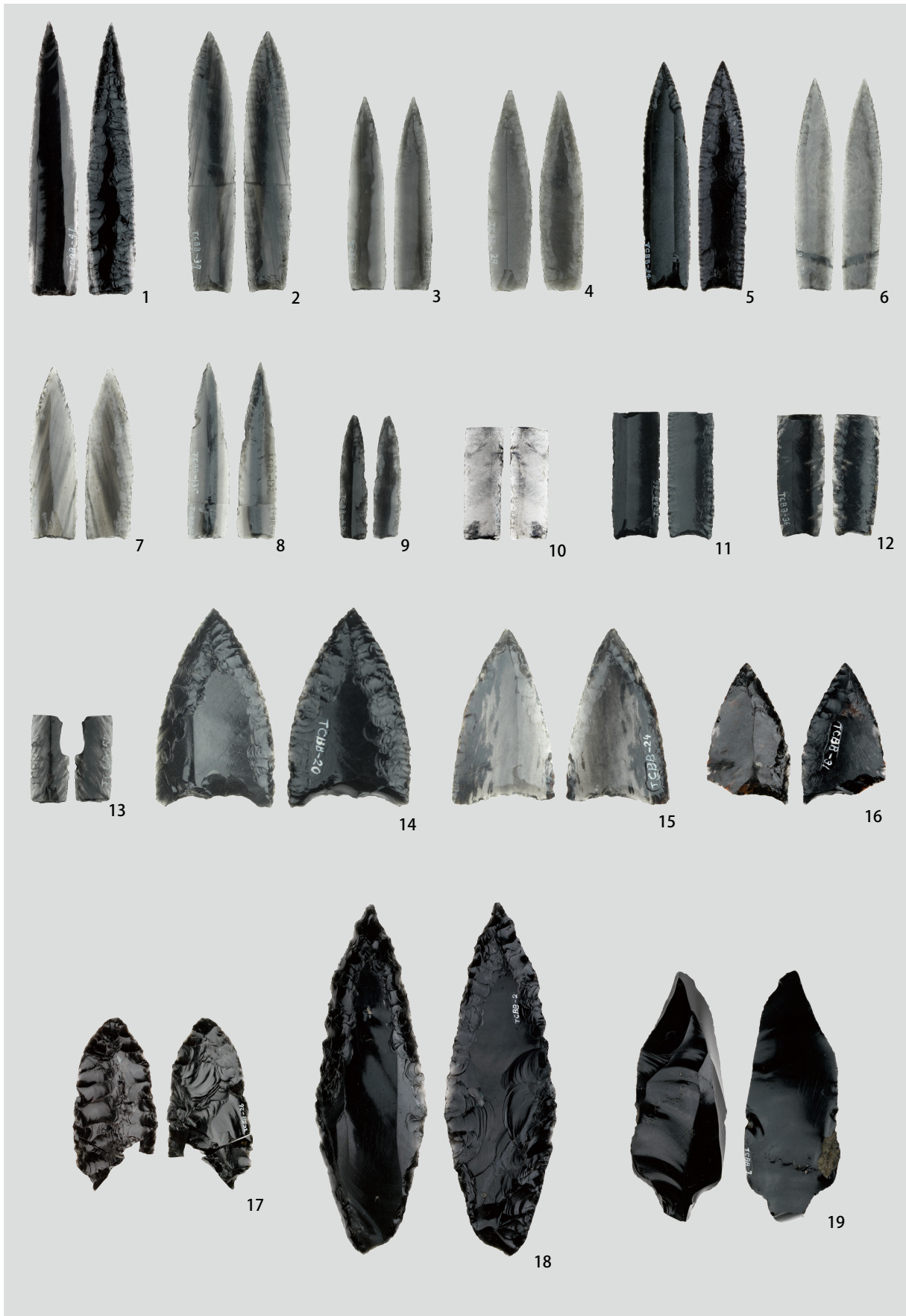
Fig. 101 解体痕をもつ鰭脚類遺体
1. オットセイ頭頂骨、2. ゴマフアザラシ後頭顆、3. 鰭脚類頭蓋骨破片、4. オットセイ肋骨、
5. ゴマフアザラシ右大腿骨、6. オットセイ左脛骨

引用文献（第一章～第五章掲載分）

- 浅川滋男・大給友樹 2010 「オホーツク文化の船形住居 ―トコロチャシ跡遺跡9号住居跡の復元―」『鳥取環境大学紀要』8：69-86
- 天方博章編 2011 『オニキシベ2遺跡』厚真町教育委員会
- 乾 哲也編 2011 「厚真の遺跡を支えたもの」『アイヌ史を問い直す（アジア遊学139）』勉誠出版：57-80
- 右代啓視 1990 「北海道常呂町出土のオホーツク式土器―加藤正コレクション―」『北海道開拓記念館調査報告』29：1-16
- 宇田川洋 1980 「物送り場としての竪穴上層遺構について」『ライトコロ川口遺跡』東京大学文学部：98-106
- 宇田川洋 2001 『アイヌ考古学研究・序論』北海道出版企画センター
- 宇田川洋・熊木俊朗編 2003 『居住形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究』東京大学常呂実習施設
- 大井晴男 1970 「擦文文化とオホーツク文化の関係について」『北方文化研究』4：21-70
- 熊木俊朗 1997 「宇津内式土器の編年」『東京大学考古学研究室研究紀要』15：1-38
- 熊木俊朗 2002 「オホーツク人と死」『北の異界 古代オホーツクと氷民文化』東京大学総合研究博物館：121-129
- 駒井和愛編 1963 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 上巻』東京大学文学部
- 駒井和愛編 1964 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下巻』東京大学文学部
- 佐藤隆広編 1994 『目梨泊遺跡』枝幸町教育委員会
- 武田 修編 1986 『トコロチャシ南尾根遺跡―1985年度―』常呂町教育委員会
- 武田 修編 1995 『栄浦第二・第一遺跡』常呂町教育委員会
- 武田 修編 2000 『常呂川河口遺跡（2）』常呂町教育委員会
- 田部 淳・田村リラコほか 1985 『南川2遺跡』瀬棚町教育委員会
- 知里真志保 1962 『分類アイヌ語辞典 第二巻動物篇』日本常民文化研究所
- 塚本浩司 2012 「トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点7号竪穴出土の擦文土器（土師器）について」『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』東京大学大学院人文社会系研究科：253-270
- 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設編 2001 『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科
- 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設編 2012 『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』東京大学大学院人文社会系研究科
- 東京大学文学部考古学研究室編 1972 『常呂』東京大学文学部
- 豊原熙司 1996 「北筒式土器の型式認識について」『北海道考古学』32：35-46

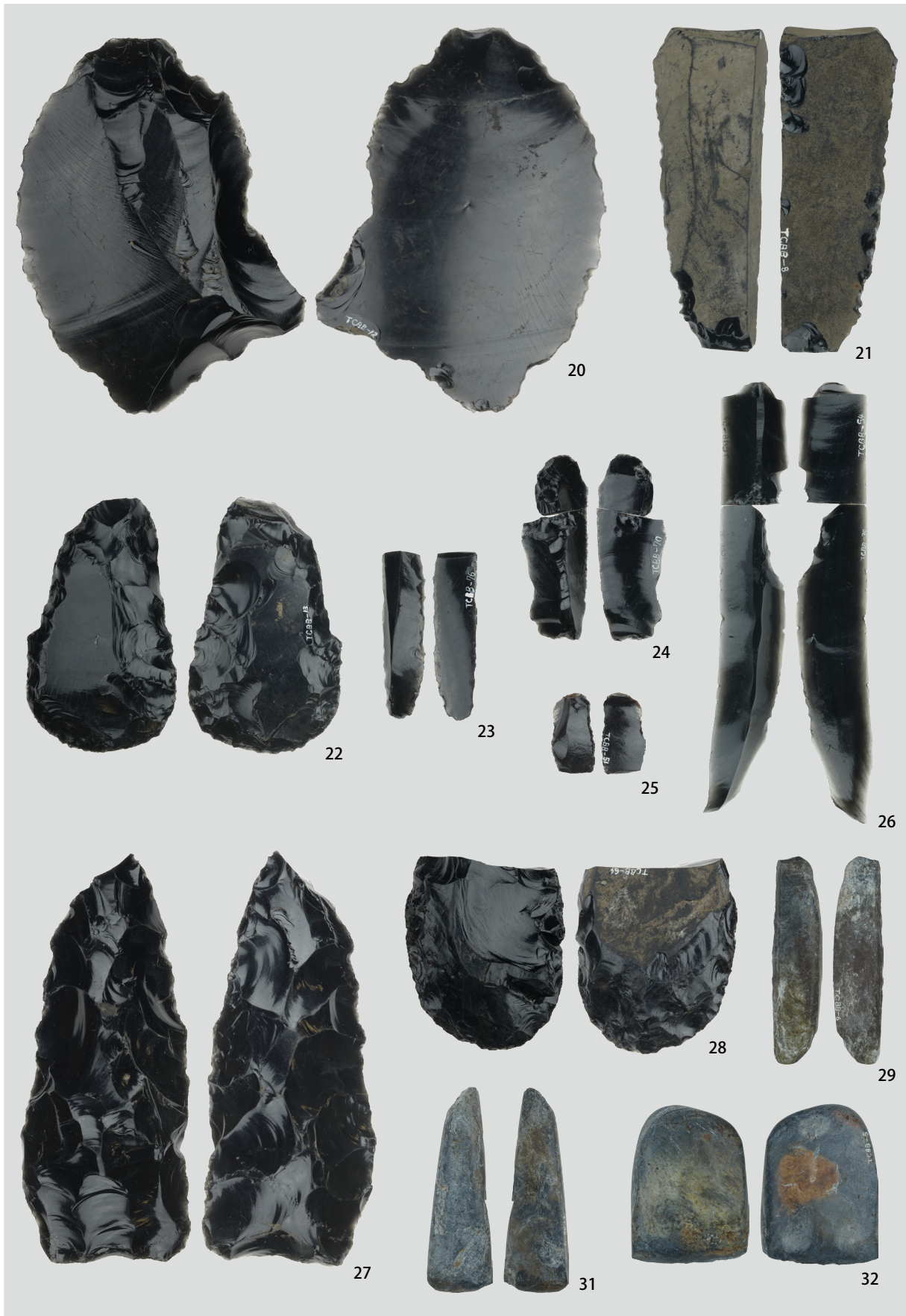
- 豊原熙司・川口克紀・諏訪良光・瀬下直人・角達之助 2013 「ヌマガイ伝承の残るウエンエカシチャシ跡（標茶町）－釧路川中流域－」『釧路川』37：1-12
- 豊原熙司・川口克紀・諏訪良光・阿部信行 2014 「ウエンエカシチャシ跡に残るヌマガイ伝承の再検討－釧路川中流域－」『釧路川』53：1-15
- 畠山三郎太 1969 「考古ニュース・常呂町から鉄銼発見」『考古学ジャーナル』33：35
- 福田正宏編 2015 『日本列島北辺域における新石器／縄文化のプロセスに関する考古学的研究』東京大学大学院新領域創成科学研究科・人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
- 藤本 強 2001 「第一章第三節 トコロチャシ跡遺跡における国土座標系」『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科：17-19
- 藤本 強編 1976 『トコロチャシ南尾根遺跡』北海道常呂町
- 藤本 強・宇田川洋 1989 「第1章第4節 遺跡・遺物からみた常呂」『常呂町百年史』北海道常呂町：122-143
- 藤本 強・宇田川洋編 1982 『岐阜第二遺跡 －1981年度－』北海道常呂町
- 米村喜男衛 1950 『モヨロ貝塚資料集』網走郷土博物館・野村書店
- 米村 衛・梅田広大編 2009 『史跡最寄貝塚』網走市教育委員会

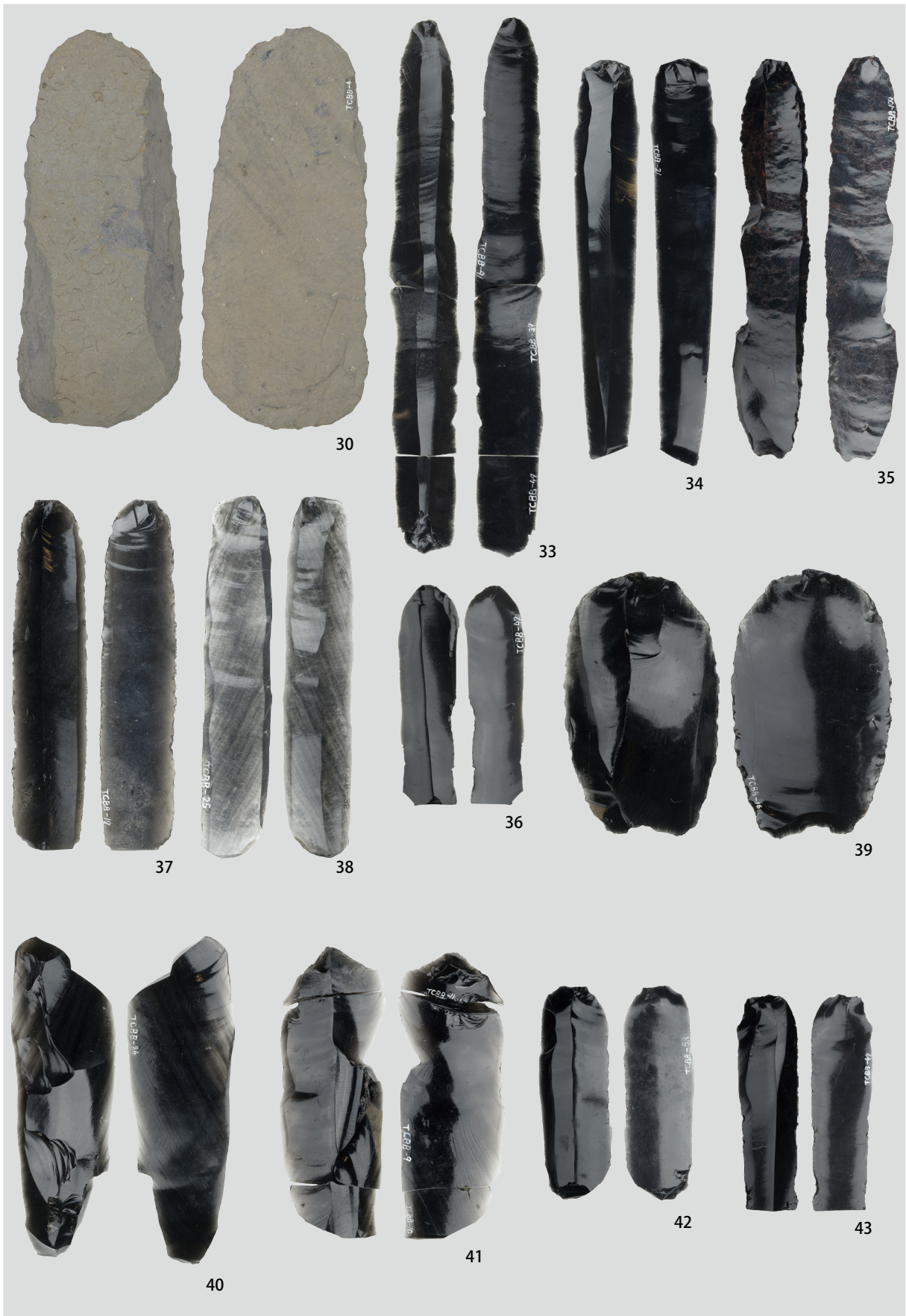
PLATES



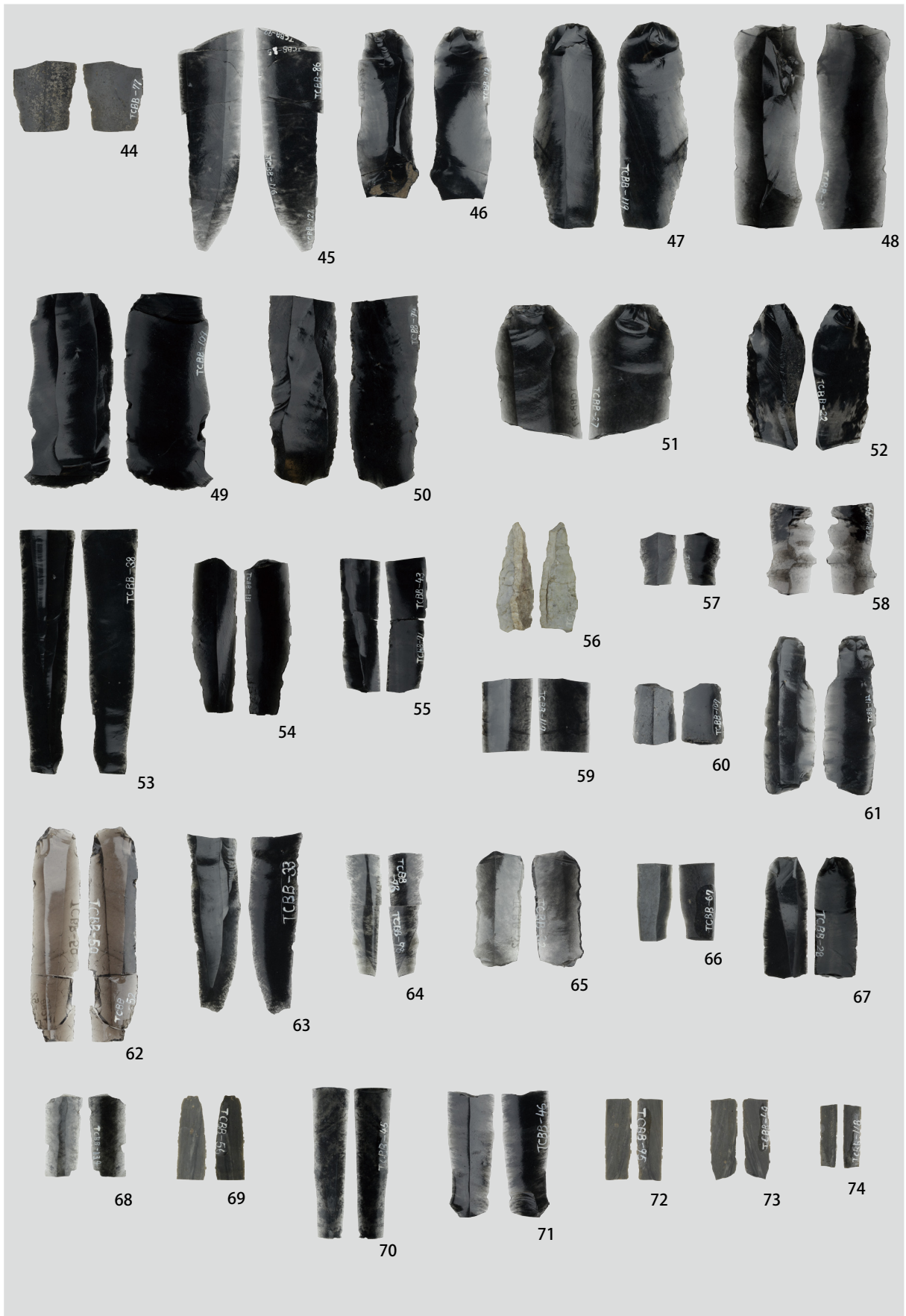
(1~16 : 3/4, 17~19 : 1/2)

PL. 2 石刃鏃石器群 (2)

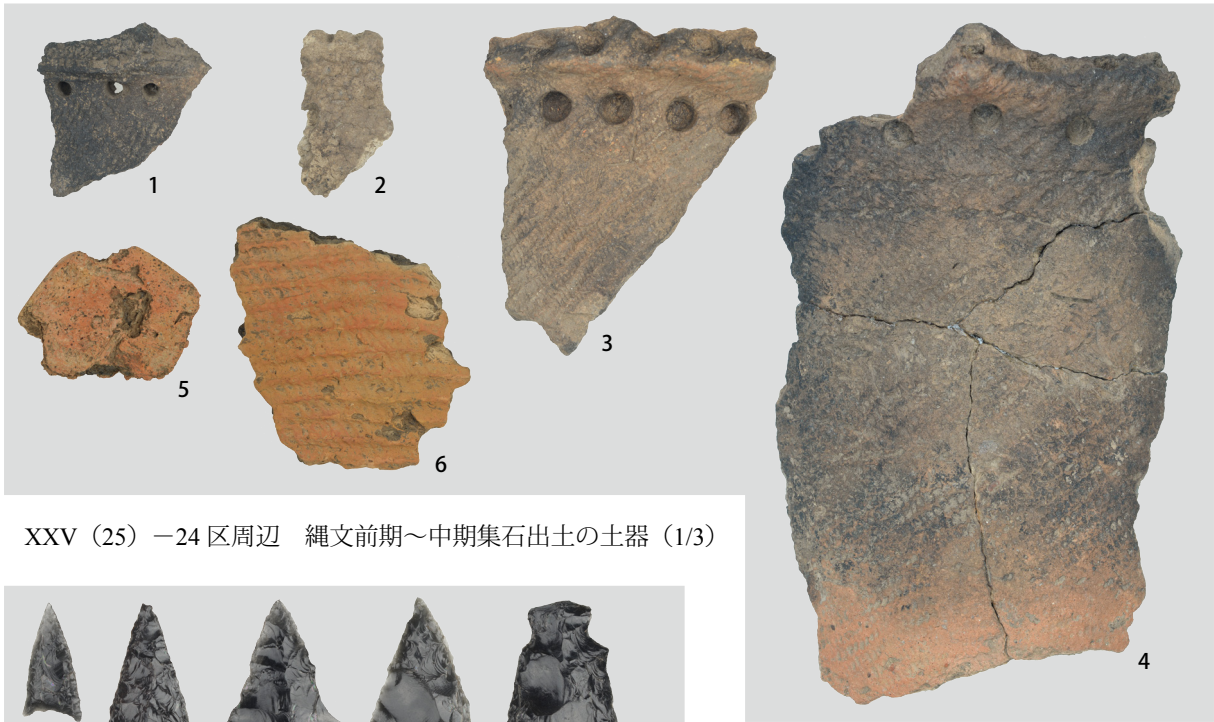




PL. 4 石刃鏃石器群 (4)



(44~61 : 1/2、62~74 : 3/4)



XXV (25) -24 区周辺 縄文前期～中期集石出土の土器 (1/3)



C (100) -60 区周辺
縄文中期竪穴出土の石器 (3/4)

XXV (25) -24 区周辺
縄文前期～中期集石出土の石器 (3/4)

PL. 6 オホーツク 2 号墓



XXIII (23) -58~59 区周辺 オホーツク 2 号墓 (北東側から撮影)



XXIII (23) -58~59 区周辺 オホーツク 2 号墓出土の土器 (1/3)・鉄器 (1/2)



XXIV (24) -61 区周辺 オホーツク 1号墓出土の土器 (1/3)



XXIV (24) -61 区周辺 オホーツク 1号墓出土の土製品 (1/2)



XXIV (24) -61 区周辺 オホーツク 1号墓出土の鉄器 (1/3)

PL. 8 Cトレンチの遺構



1 Cトレンチ XXX (30) -39~43区 縄文前期~中期竪穴 (XXX-41区周辺を南東側から撮影)



2 Cトレンチ XXX (30) -40区 ピット7 (北東側から撮影)



1 D トレンチ XXXII (32) -35~36 区 縄文中期遺物集中1 (南東側から撮影)



2 D トレンチ XXXIII (33) -40 区 縄文中期遺物集中2 (西側から撮影)

PL. 10 E トレンチの遺構



1 E トレンチ XXVII (27) -34 区 集石 1 (北東側から撮影)



2 E トレンチ XXVII (27) -38~39 区 集石 4 (南東側から撮影)



1 Fトレンチ XXV (25) -34~35区 集石2 (北西側から撮影)



2 Fトレンチ XXV (25) -36区 集石3 (南東側から撮影)

PL. 12 G トレンチの遺構



1 G トレンチ XXII (22) -17~20 区 オホーツク 13 号竖穴 (XXII-17 区を南東側から撮影)



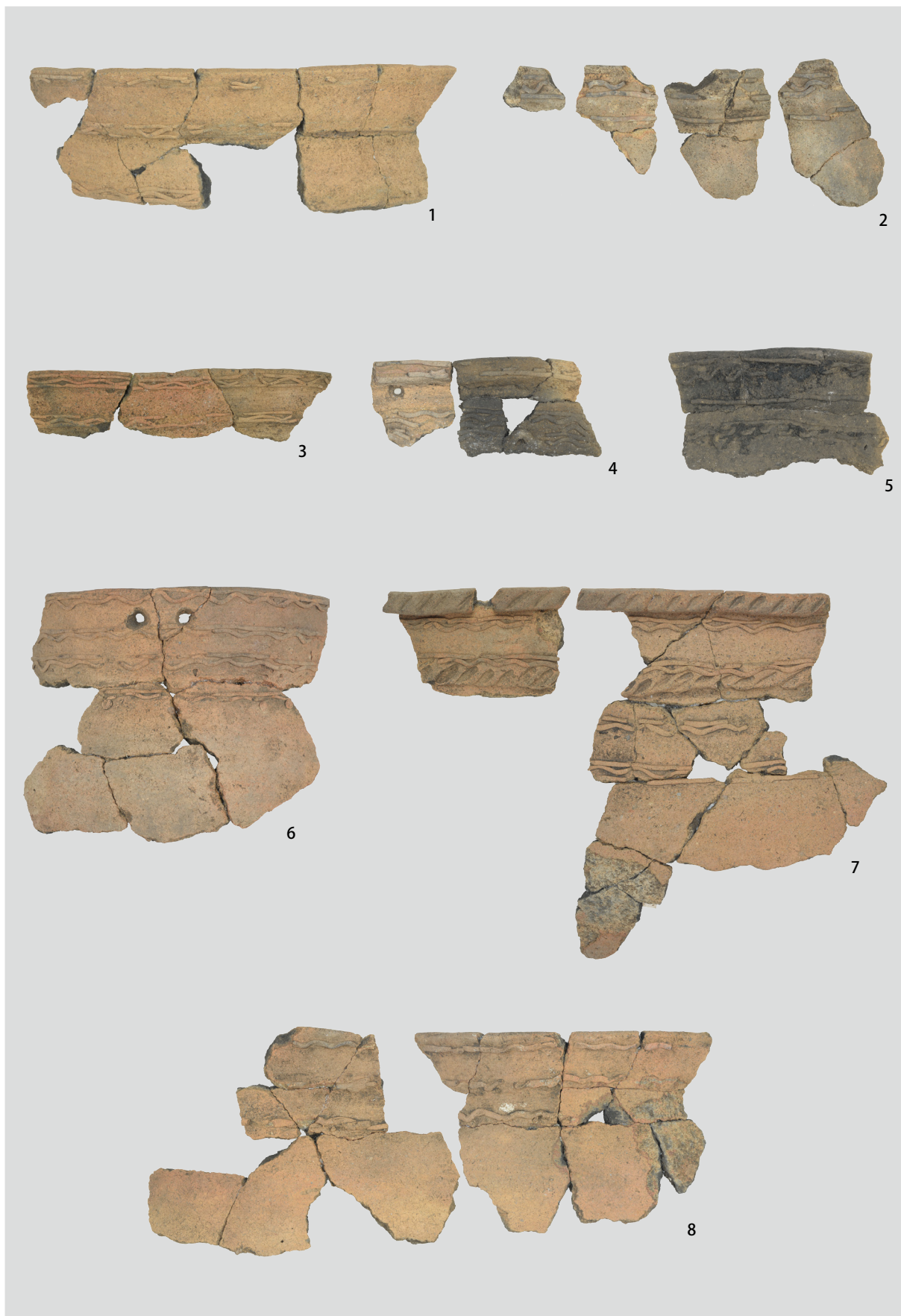
2 G トレンチ XXII (22) -22~23 区 集石 6 (南東側から撮影)

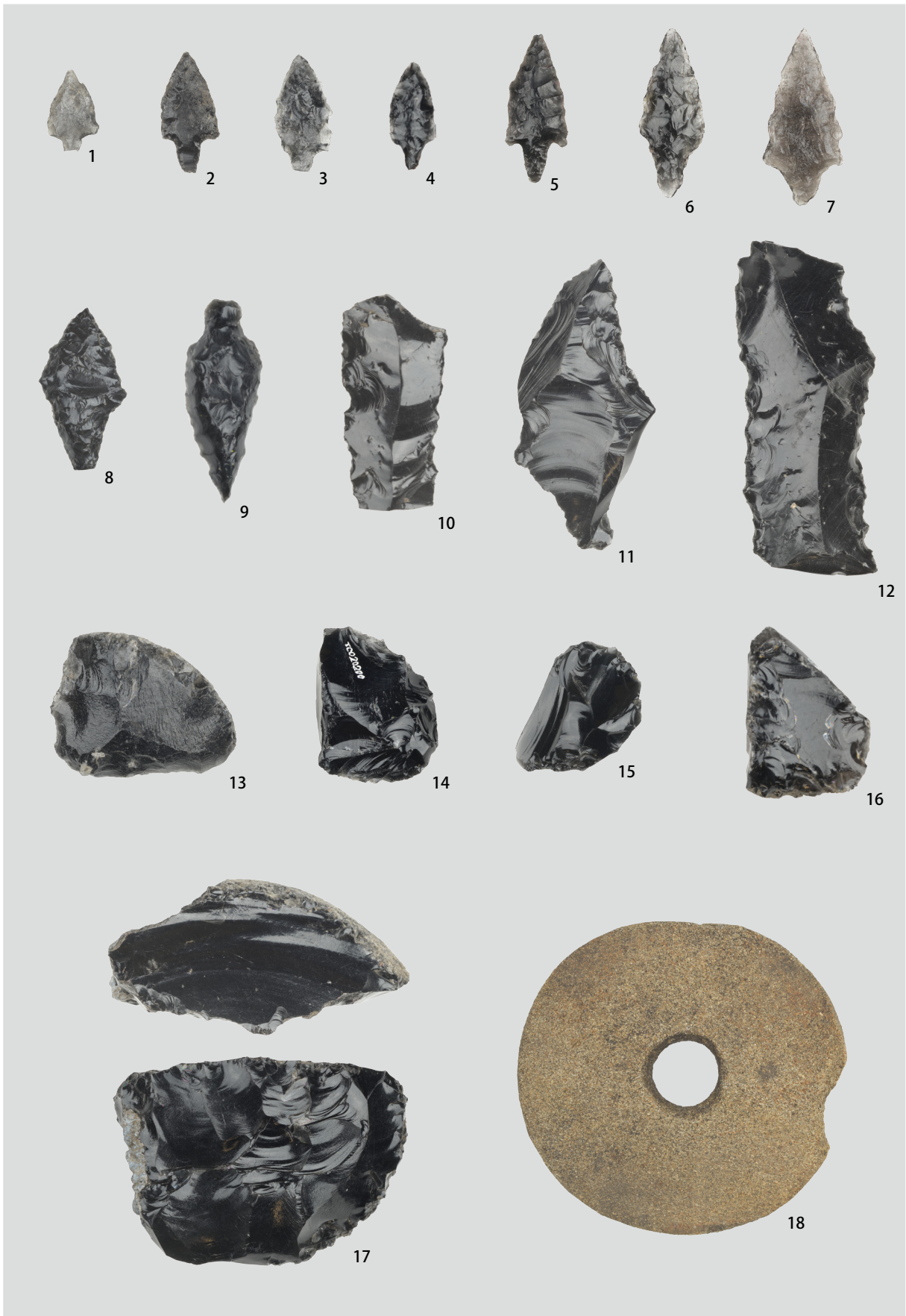


1 Hトレンチ H-3~4区 集石7 (西側から撮影)



2 Hトレンチ H-1~2区 土器集中 (東側から撮影)





PL. 16 チャシ壕内の土層堆積



1 2008年度発掘区 5ライン チャシ壕内の土層堆積状況（北東側から撮影）



2 2009年度発掘区 2ラインの50cm東側 チャシ壕内の土層堆積状況（南西側から撮影）



1 壕内埋土火山灰下貝集中 検出状況 (XII (12) -7 区周辺、南側から撮影)

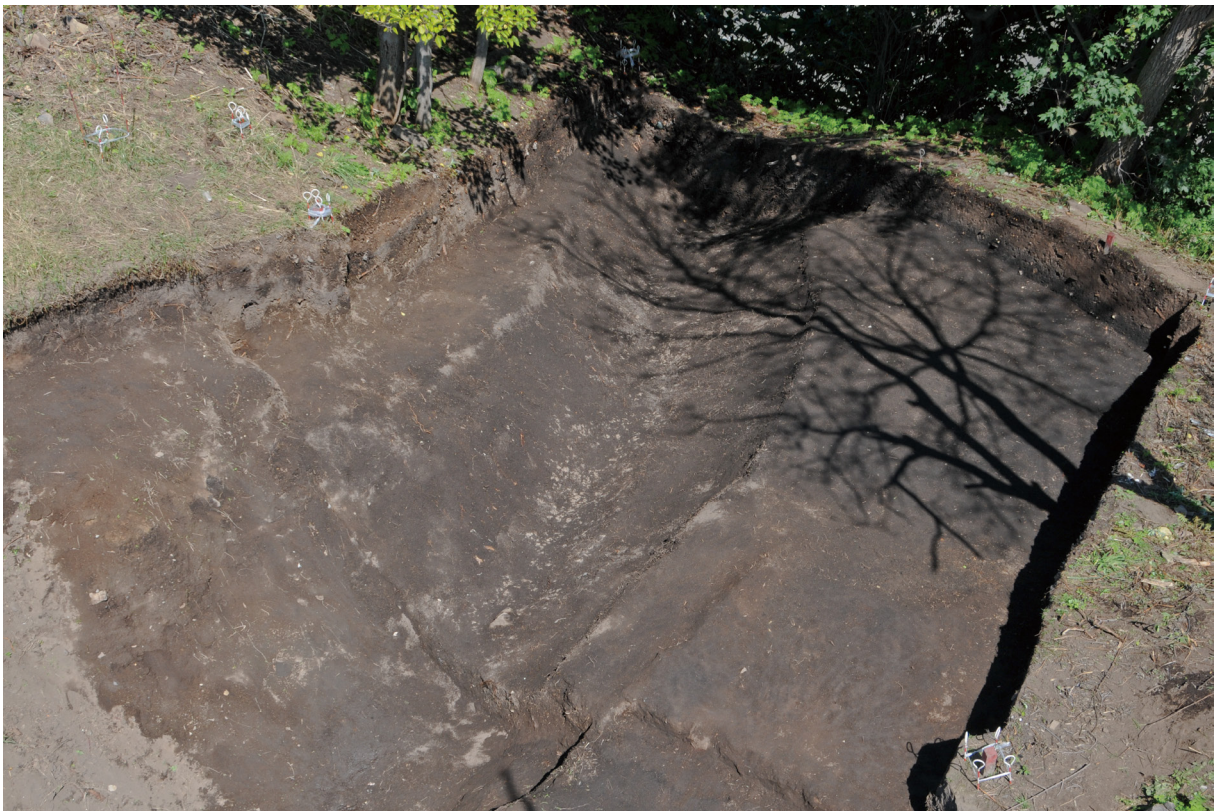


2 旧壕埋土貝集中 検出状況 (XII (12) -7 区周辺、南側から撮影)

PL. 18 チャシ壕



1 2008年度発掘区 チャシ壕完掘状況（6号竪穴は埋め戻し済み、南東側から撮影）



2 2009年度発掘区 壕内埋土中の火山灰検出状況（南西側から撮影）



1 旧Sトレンチ内 オホーツク6号竪穴（再発掘、南東側から撮影）



2 XII-7区 チャシ壕北側壁面 土器集中（南西側から撮影）

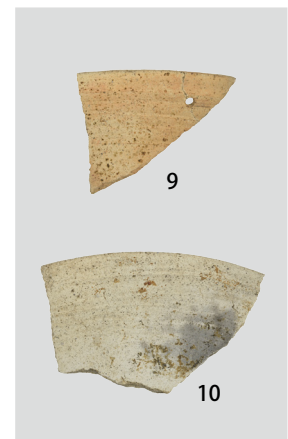
PL. 20 チャシ壕内出土遺物



壕内埋土 火山灰下貝集中出土の
金属器・骨角器 (1: 1/1、2~4: 1/2)



壕内埋土 火山灰上層出土の
金属器 (3/4)・骨角器 (1/2)



XII (12) -7区 壕北側壁面土器集中出土の土器 (1/3)

報告書抄録

ふりがな	ところちゃしあといせきぐん（しせきところいせき） せいびにともなうはくつちょうさほうこくしょ							
書名	トコロチャシ跡遺跡群（史跡常呂遺跡） 整備に伴う発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
著者名	宇田川洋 大澤正己 熊木俊朗 笹田朋孝 佐藤孝雄 佐藤宣秀 高橋 健 中村雄紀 夏木大吾 福田正宏 山田 哲 吉永亜紀子							
編集機関	東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設							
所在地	東京都文京区本郷7-3-1 〒113-0033 TEL 03-5841-3793			北海道北見市常呂町字栄浦376 〒093-0216 TEL 0152-54-2387				
発行年月日	2015/3/31							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
史跡常呂遺跡 （トコロチャシ跡遺跡群）	北海道北見市常呂町 字常呂106番2、106番3、 108番1～3、109番1、109番 2、109番4、110番、111番 1、111番2、112番1、112番 3、113番、116番1、116番 2、117番1、118番1	01208	I-02-335	44° 07' 09"	144° 04' 39"	1999/11/4～ 2001/10/29 2006/8/21～ 2007/9/13 2008/8/21～ 2009/9/13	約28,911m ²	学術調査・ 史跡保存整備 における発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記
史跡常呂遺跡 （トコロチャシ跡遺跡群）	集落跡 チャシ跡	縄文時代		竪穴（早期・中期） 集石ないし遺物集中 （前期～中期）		土器（早期・前期・中期・後 期・晩期）・石器		石刃鍬文化の 遺物集中を検出
		続縄文時代		集石		土器（早期・宇津内式・ 後北C ₂ ・D式）		
		オホーツク文化期		竪穴 墓 骨集中		土器・石器・骨角器・ 鉄器・動物遺体		貼付文期の墓を2基 検出 住居外の骨集中
		擦文時代				土器		
		アイヌ文化期		チャシ跡		骨角器・鉄器・動物遺体		チャシ壕内に 貝集中を検出

トコロチャシ跡遺跡群（史跡常呂遺跡）
整備に伴う発掘調査報告書

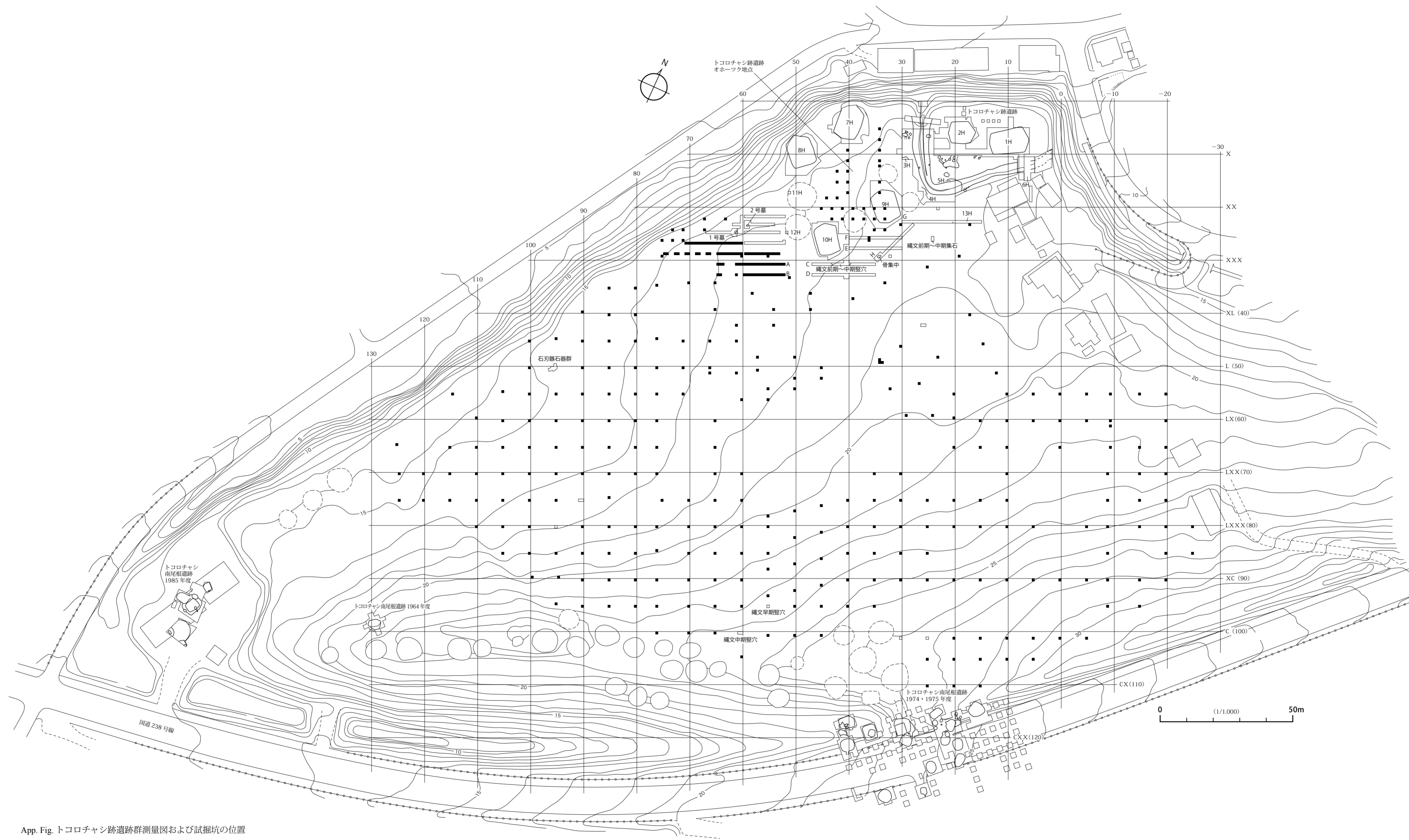
2015年3月31日

編 集 東京大学大学院人文社会系研究科
考古学研究室・常呂実習施設

発 行 東京大学大学院人文社会系研究科
東京都文京区本郷7-3-1

北見市教育委員会
北見市端野町二区471番地1

印 刷 株式会社イセブ
茨城県つくば市天久保2-11-20



App. Fig. トコロチャシ跡遺跡群測量図および試掘坑の位置